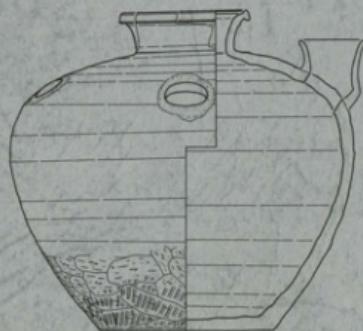


須江窯跡群

# 関ノ入遺跡

——陸奥海道地方最大の須恵器生産地——



48号住居跡出土

平成5年3月

宮城県 河南町教育委員会

河南町文化財調査報告書第7集 正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
凡例	2	内容を列記して	内容を列記して	104	8	(佐藤敏幸:1983.3)	(佐藤敏幸:1993.3)
62	8	第38図6は	第39図6は	106	3	壺B類	鉢A類
66	回	第44図 住居跡遺構配置図(2)	第44図 住居跡配置図(2)	13		底いものである。	低いものである。
78	27	〔底面〕 層からなり	〔底面〕 N層からなり	108	表 3	土師器壺	3 土師器壺
79	2	(P.37、第21回)	(P.37、第22回)	113	表 3	土師器瓶	3 土師器瓶
	13	(P.68・69、第44回)	(P.68・69、第45回)		表 5	須忠器追	5 須忠器杯
82	2	(P.53、第32回)	(P.53、第33回)	118	25	第6群上器の偏年の位置	第6群上器の偏年の位置
84	9	(P.68・69、第44回)	(P.68・69、第45回)	26	S E K 28 から	S E K 28 焼から	
86	3	括愛した。	括愛し、写真を掲載した。	121	29	(第82回)。	(第83回)。
87	表 3	土師器壺	3 土師器壺	125	2	粘土と共に	粘土と共に
	4	土師器壺	4 土師器瓶		9	(第83回)。	(第84回)
88	10	第67図3は	第66図3は	126	28	(第84~86回)	(第85~87回)
89	23	内溝する器のもの	内溝する器形のもの	127	1	第16表	第15表
94	24	第15表である。	第14表である。		6	第16表	第15表

真	行	説	正	真	行	説	正
132	6	(第87図)	(第88図)	135	24	(第101図)	(第102図)
134	12	(第88～第90図)	(第89～91図)	137	15	(第102図)	(第103図)
139	9	(第91図)	(第92図)	159	22	(第103図)	(第104図)
	27	(第92図)	(第93図)	162	7	(第104図)	(第105図)
143	3	(第93図1～8)	(第94図1～8)	19	器高もやや高く	器高もやや低く	
	16	(第93図9～18)	(第94図9～18)	25	形式的なものとなつていり	形式的なものとなつてお	
144	20	断面「～」形の	断面「～」形の	163	11	灰原形成後に	灰原形成前に
	22	(第94図)	(第95図)	12	(第105図1～3)	(第106図1～3)	
146	24	(第95図)	(第96図)	164	11	(第105図4)	(第106図4)
148	14	(第96図)	(第97図)	19	灰灰色火山灰	灰白色火山灰	
149	11	平面形は	平面形は焼成部	20	26	第106～109図、第18図	第107～110図、第17表
	12						
150	1	(第97図)	(第98図)	167	4	その全薙は	その全容は
	16	(第98図)	(第99図)	189	16	松真山沼はか	真山沼はか
152	15	窯跡群内へ変遷過程	窯跡群内の変遷過程	31	「陸奥宮窯跡群」	「陸奥官窯跡群」	
	28	(第99図)	(第100図)	38	松山教育委員会	松山町教育委員会	
153	6	(第100図)	(第101図)				

須江塚跡群  
関ノ入遺跡



須江窯跡群

関ノ入遺跡

## 発刊の辞

石巻市の西方にあたる河南町は、米どころとして知られ、広大な田園が広がっています。その中にあって、鹿又と矢本町赤井の中間に横たわる丘陵は、須江(旧村)の大部分で、標高40~50mの山というより丘に近いものです。昔の人々も眺望の良い丘陵を第1の住所としたらしく、山の大部分が遺跡として知られていました。

石巻地方広域水道企業団が、事業所その他の施設を須江山に求め、数年前既に建設、供用を開始しておりましたが、再び施設の拡張が計画され、拡張地開発計画の協議申し入れがありました。当該地は長者館跡と称する平安末期(金堀古次の長者屋敷)から中世期にかけての館跡のあるところ、及び奈良時代からの遺跡所在地でもあるところから、遺跡保存の必要性を協議し、石巻地方広域水道企業団の経費負担に於て、記録保存を目的とする埋蔵文化発掘調査を実施することになったものです。

発掘調査は当町教委の佐藤敏幸主事が当たり、夏休みの時期に一時、河南高校の応援を得たり、地元民の協力を得て、2年有余かけて行われました。館跡については、中心部や周辺から離れ、延長線部分の調査であったので、館の遺構、遺物は該当せず、専ら閑ノ入遺跡の発掘となりました。調査面積12,050m<sup>2</sup>。調査日数420日。作業員延1,136人。結果は、奈良時代~平安時代の住居跡13軒、窯跡3基、掘立柱建物跡1棟、堅穴遺構5基等の遺構と共に多数の遺物が出土し、古代の生活の様子が明らかにされました。奈良~平安時代の人々が、適地を求め、のぞましい生活をくり展げた、いわば古代人の生活の跡が偲ばれる、貴重な遺産の出現です。

本書は、その概貌である。失なわれゆくものの永久の保存として、記録に止めるものです。文化財の調査、記録の上に貢献できれば幸いです。

最後に石巻地方広域水道企業団関係者、及び調査に協力して戴いた方々、調査及び記録に汗を流した佐藤君、そして発刊に協力された印刷所に、深甚の御礼を言上して、発刊の辞とします。

平成5年3月 河南町教育委員会 教育長 浅野鐵雄

## 例　　言

1. 本書は石巻地方広域水道企業団創設工事第298号及び第323号須江山浄水場建設(試験)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. [遺跡名] 長者館跡(宮城県遺跡登録番号: 69022)

閑ノ入遺跡(同　上: 69041)

[所在地] 宮城県牡鹿郡河南町須江字閑ノ入290番地

[調査対象面積] 約32,000m<sup>2</sup>

[発掘調査面積] 約12,050m<sup>2</sup>

[調査期間] 確認調査: 平成3年10月7日～平成4年3月12日

事前調査: 平成4年6月15日～平成4年12月11日

[調査主体] 河南町教育委員会教育長: 渡野鐵雄

[調査担当] 河南町教育委員会社会教育課主事: 佐藤敏幸

3. [調査指導] 宮城県教育庁文化財保護課

4. 発掘調査と報告書作成にあたり、次の機関、並びに方々から指導・協力をいただいた。

石巻地方広域水道企業団

宮城県教育庁文化財保護課: 小井川和夫、加藤道男、佐藤則之、菊地逸夫、青妻俊典

宮城県多賀城跡調査研究所: 柳沢和明、村田是一

仙台市教育委員会文化財課: 小川淳一、上浜光朗

石巻文化センター: 中村光一

石巻市教育委員会: 芳賀美実、小暮亮

多賀城埋蔵文化財調査センター: 千葉孝弥、石川俊英

瀬峰町教育委員会: 阿部正苗

涌谷町教育委員会: 伊丹早苗

策郷町教育委員会: 千葉長彦

鶴峰町文化財保護委員長: 佐々木尚見

桑良教育大学: 三辻利一

福島県文化センター: 飯村均

福島県本宮町歴史民俗資料館: 鈴木雅文

会津若松市教育委員会: 石田明大

山形県教育委員会: 野尻侃、名和凌朗、水戸弘美

秋田県埋蔵文化財センター: 利部修、高橋学

秋田城跡調査事務所: 小松正夫、日野久、伊藤武士

日本考古学協会員: 三宅宗誠

河 南 高 校 校 : 相原津一

河 南 高 校 人 文 科 学 部

神 京 川 原 錦 見 審 紮 : 高橋義明

河 南 町 在 住 : 矢島道智

5. 調査・整理参加者: 山川敏子、伊藤とも子、伊藤ゆう子、井上留世、加藤きわ子、加藤次男、今野親夫、今野はな子、鈴木よみ子、高橋力雄、高橋正、橋崎千代枝、三浦真太郎、三浦富子

6. 土層や土器の色調表記については『新版鹿砦土色帖』10版(小川・竹原: 1990.6、日本色研事業株式会社)に準拠し、土性区分は国際土壤学会法の基準を参考にした。

7. 本調査によって得られた成果の一例は、現地説明会資料、広報かんな、平成4年度宮城県内発掘調査成果発表会などによって紹介されているが、本書の内容がそれらに優先するものである。

8. 岡ノ入遺跡は河南町や河南町岡ノ入地区画整理組合の開発により、昭和62年度から発掘調査が継続して行われている。これまで検出された遺構は窓跡26基、鄭穴住居跡36軒、壁穴遺構2基、施土遺構85基、土塁68基などである。これらの報告書は未だ刊行されていないが、今回の調査の際に連續した番号を遺構に付した。

9. 本調査によって得られた資料は全て、河南町教育委員会で保管している。

10. 本書の執筆、編集は河南町教育委員会主事 佐藤敏志が行った。

## 凡 例

今回の発掘調査によって、窓跡、住居跡、掘立柱建物跡等、各種の遺構が検出されている。本書の記述は各遺構ごとに内容を例記しているが、窓跡や住居跡には特徴のある施設(遺構)の付属するものもある。それらには記述の際、便宜上、次の名称を用いて説明を加えた。

外延構: 住居跡の周囲や床面に掘られた溝から住居外にのびる溝。断面は「U」形を呈するが、トンネル状になるところもある。

外周構: 窓跡外または住居跡外に位置し、その三方、あるいは二方を圍むようにめぐらされた溝。断面形は「U」形、あるいは「~」形をなす。

# 目 次

## 発刊の辞

## 例 言

## 目 次

I. 遺跡の位置と環境 .....	1
1. 遺跡の位置と地理的環境 .....	1
2. 遺跡の歴史的環境 .....	2
3. 須江窯跡群の概要 .....	8
II. 調査の経過 .....	10
1. 調査に至る経過 .....	10
2. 調査の方法と経過 .....	10
III. 基本層序 .....	11
N. 検出された遺構と出土遺物 .....	15
1. 窯 跡 .....	15
27号窯跡・28号窯跡・29号窯跡	
2. 住居跡 .....	28
37号住居跡・38号住居跡・39号住居跡・40号住居跡・41号住居跡・42号住居跡	
43号住居跡・44号住居跡・45号住居跡・46号住居跡・47号住居跡・48号住居跡	
49号住居跡	
3. 掘立柱建物跡 .....	67
6号掘立柱建物跡	
4. 積穴遺構 .....	67
3号積穴遺構・4号積穴遺構・5号積穴遺構・6号積穴遺構・7号積穴遺構	
5. 焼土遺構 .....	78
86号焼土遺構・87号焼土遺構・88号焼土遺構・89号焼土遺構・90号焼土遺構	
91号焼土遺構・92号焼土遺構・93号焼土遺構・94号焼土遺構・95号焼土遺構	
96号焼土遺構・97号焼土遺構・98号焼土遺構	
6. 土 壤 .....	84
89号土壤・90号土壤・91号土壤	
7. Ⅱ層出土の遺物 .....	85
V. 出土した遺物の検討 .....	88
1. 鋼文土器 .....	88

2. 土師器・須恵器・赤焼き土器	89
(1) 分類とその特徴	89
(2) 土器の出土状況と土器群の設定	94
(3) 第1群土器	96
(4) 第2群土器・第3群土器	97
(5) 第4群土器	103
(6) 第5群土器	105
(7) 第6群土器	117
3. 須江窯跡群における須恵器の変遷(案)	121
(1) 窯跡の分布と層位的新旧関係	121
1. 窯跡の分布とまとまり	121
2. 層位的新旧関係	123
(2) 須恵器変遷(案)	124
1. 須江窯跡群第Ⅰ期	124
2. 須江窯跡群第Ⅱ期	132
3. 須江窯跡群第Ⅲ期	141
4. 各器種における変遷	164
M. 検出された遺構の検討	180
1. 窯跡	180
2. 住居跡	180
3. 掘立柱建物跡	182
4. 壓穴遺構	183
5. 焼土遺構・土壙	183
VII.まとめ	184
1. 須江窯跡群について	184
2. 閔ノ入遺跡について	185
図版	190

## I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

### 1. 遺跡の位置と地理的環境

関ノ入遺跡、長者館跡は、宮城県桃生郡河南町須江字関ノ入に所在する。宮城県の北東部に位置する桃生郡は、7町から構成され、牡鹿半島を囲むように北と南で太平洋に接している。関ノ入遺跡、長者館跡のある河南町は、面積69.33km<sup>2</sup>、人口18,394人の町で、桃生郡の中でも中央に位置し、東に石巻市、桃生郡河北町、西に遠田郡南郷町、南に桃生郡矢本町、北に同郡桃生町、遠田郡涌谷町と境を接している。JR石巻線、一般国道108号線が、町の中央を東西に走り、国道45号線は町の東側を南北に通っている。また、近年、三陸縦貫自動車道も建設される予定である。このように比較的交通機関に恵まれながらも、町域の約52%を水田が占める農村地域である。

旧北上川は、町の北端で江合川と合流し、石巻湾に注いでおり、北上川とその支流によって形成された沖積平野と、なだらかな丘陵地が町域となっている。町の西に笠岳丘陵から続く標高150m前後の通称旭山丘陵、北に最高所173mの和潤山、東には標高60m前後の通称須江丘陵が配され、町の中央は低坦地である。遺跡の位置する須江丘陵は、南北約4.5km、東西約1.3kmの



第1図 河南町位置図

南北に長い独立丘陵である。この丘陵には樹枝状に入り込む沢が数多くみられ、その沢に面する斜面に瓦窯や須恵器窯がつくられている。これが須江窯跡群で、その分布は須江丘陵全体に広がっている。須江丘陵は、小竹地区を挟んで大きく南北に二分される。閑ノ入遺跡、長者館跡は、丘陵南部のほぼ中央、標高約60~20mの頂部及び斜面に立地しており、須江窯跡群の範囲にも含まれている。

遺跡は砂岩、黒色粘板岩、縞状頁岩、花崗岩質岩の疊からなる中新統：追戸層（佐景山疊岩部層）が基盤をなし、その上に砂岩とシルト岩の互層を主体とする鮮新統：表沢層、さらに最上部には砂質シルト岩と砂岩の互層を主体として上部に陸成的な粘土質シルト岩が発達している鮮新統：俵庭層の堆積がみられる（滝沢・神戸・久保ほか：1984.3）。

## 2. 遺跡の歴史的環境

河南町内では、丘陵及び微高地を中心に多数の遺跡が分布している。ここでは、町内から発見されている遺構や遺物を主として、時代別に概観する。なお、より広い地域で考えなくてはならない時代については、近接地域の資料も用い説明を加えることにした。

### ■ 旧石器時代 ■ ■ ■

旧石器時代の遺跡は、現在のところ町内では発見されていないため、当町におけるこの時代の様相は不明である。

### ■ 繩文時代 ■ ■ ■

河南町内で繩文時代の遺物を出土する遺跡は19ヶ所を数えるが、このうち年代のわかる繩文土器を出土する遺跡は7ヶ所にすぎない。年代順に列記すると、桑柄貝塚はカキを主体とする鹹水産貝塚で、繩文時代前期（上川名II式）の土器を包含する。閑ノ入遺跡では、遺構は検出されていないが、前期（大木2式）、中期（大木7b、8a、8b式）、後期の土器が出土している（中野・佐藤：1990.3、佐藤敏幸：本書）。朝日貝塚はヤマトシジミを主体とする汽水産貝塚で、（中期大木7b、8a、8b式）の遺物を包含する（藤沼・小井川ほか：1989.3）。須江糠塚遺跡からは、中期大木9式の土器が出土している（高橋・阿部：1987.3）。宝ヶ峯遺跡は、繩文時代後期の土器型式「宝ヶ峯式」の標準遺跡として、学的に有名である（松本彦七郎：1919.5、1919.9、伊東信雄：1957.3、志間・桑月：1991.11）。ここからは後期（南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式）、晚期（大洞B、B.C、C1式）の土器が出土している。代官山遺跡（佐藤敏幸：1993.3）、俵庭遺跡からは後期（南境式）の土器が出土している。

これらの遺跡はいずれも、丘陵地とその麓部で平坦地と接する縁辺部に立地している。貝塚

## 桃生郡河南町

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	須江櫛塚遺跡	集落跡 墓	縄文(中)、奈良・平安	25	菊山遺跡	包含地	縄文、奈良・平安
2	須江瓦山廃跡	廃跡	平安	26	黒沢A遺跡	包含地	縄文、古代
3	池袋四遺跡	包含地		27	黒沢B遺跡	包含地	縄文、古代
4	広瀬沼遺跡	包含地		28	箱清水A遺跡	包含地	縄文(後)、古代
5	宝ヶ峯遺跡	包含地	縄文(中～晩)	29	箱清水B遺跡	包含地	縄文、古代
6	朝日貝塚	貝塚	縄文(中)	30	箱清水寺脇遺跡	包含地	縄文
7	本鹿又遺跡	包含地	弥生	31	小友遺跡	包含地	古代
8	桑柄貝塚	貝塚	縄文(前)	32	高森山遺跡	包含地	古墳、古代
9	塙野山城跡	城館	中世	33	大沢A遺跡	包含地	縄文、古代
10	宿屋敷跡	城館	中世	34	大沢B遺跡	包含地	縄文
11	豊山城跡	城館	中世	35	大沢C遺跡	包含地	縄文
12	武田郡城跡	城館	中世、近世	36	戸田館跡	城館	近世
13	柏木城跡	城館		37	代官山遺跡	遺跡	縄文(後)、奈良・平安
14	小崎館跡	城館	近世	38	桑柄遺跡	包含地	古代
15	草田城跡	城館	中世	39	新田A遺跡	包含地	古墳
16	喜多村城跡	城館	中世	40	新田B遺跡	包含地	古代
17	木村館跡	城館	中世	41	代官山横穴古墳群	横穴古墳	古墳、古代
18	(西)庄立城跡	城館	中世	42	森田遺跡	集落跡	古墳、古代
19	駒場館跡	城館		43	奈良山遺跡	窓跡	古代、江戸
20	俵庭遺跡	包含地	縄文(中～後)、 弥生、古代	44	青木城跡	城館	中世
21	長吉手遺跡	城館	縄文、奈良	45	御塩藏場跡	塩蔵跡	近世、近代
22	闇ノ入遺跡	墓	古墳、縄文(前～中)、 奈良・平安、中世	46	細川遺跡	包含地	縄文、奈良・平安
23	小崎遺跡	包含地	縄文、奈良・平安	47	闇ノ果遺跡	包含地	古墳
24	大田沢遺跡	包含地	縄文、古代				

## 桃生郡矢本町

## 桃生郡桃生町

① 赤井溝跡	官衙	縄文、奈良・平安	② 桃生城跡	城柵	奈良・平安
--------	----	----------	--------	----	-------

第1表 閔ノ入遺跡と周辺の遺跡(地名表)

第2図 関ノ入遺跡と周辺の遺跡(地図)

(国土地理院 1:25,000を複製)

や遺跡の立地状況から、丘陵周辺は入海または満潮時には海水が入り込む沼地あるいは湿地であったものと思われる。旭山丘陵についてみると、集落及び貝塚を形成していた宝ヶ峯遺跡や桑柄、朝日両貝塚からうかがえるように、この時代の生業である狩猟、採集に適し、長期に亘り定住可能な地域であったと考えられる。一方須江丘陵は、須江糠塚遺跡、関ノ入遺跡、代官山遺跡、長者館跡の発掘調査が行われているが、その広大な調査面積にもかかわらず、遺構は検出されず、少量の土器片、石器が出土しているにすぎない。これは、旭山丘陵に比べて地形が起伏に富んでいることや、面積の狭い独立丘陵であることから、あまり生業に適さない環境が1つの要因と考えられる。現在のところ、当時代の遺跡の内容は不明な点が多いが、今後調査が進むと遺跡の数も増加し、その具体的な内容も把握されるものと考えられる。

### ■ 弥生時代

町内における弥生時代の遺跡は、未だ調査が不十分なこともあって、本鹿又遺跡、俵庭遺跡の2遺跡認められているにすぎない。本鹿又遺跡では旧北上川の河床から中期(大泉式)の遺物が出土している。俵庭遺跡からは土器は出土していないが、アメリカ式石鏡が採集されている。当町におけるこの時代の遺跡は現在のところ、貧弱であり、今後の調査に期待したい。

### ■ 古墳時代

古墳時代の遺跡は7遺跡が確認されている。約16,000㎡の発掘調査が行われた須江糠塚遺跡では前期(埴釜式期)の住居跡が7軒検出されている。いずれも方形を基調とするもので、丘陵の尾根上平坦面に立地している。関ノ入遺跡からも同時期の住居跡が1軒検出されている(佐藤敏幸:本書)。また、新田A遺跡、鷺ノ巣遺跡から埴釜式期の土器が採集されている。後期では須江代官山に4基の横穴古墳が確認されている。その他に時期は不明であるが、当時代の遺跡に高森山遺跡、群田遺跡がある。

現在までに確認されたこれらの遺跡は、丘陵尾根上平坦面に立地するものが多いものの、水田化された低地帯からも確認されていることから、背後の北上川、追川、江合川を利用した集落の形成及び水田經營が行われていたことがうかがえる。また、この時期の生業は主として水田經營にあったと思われるが、須江糠塚遺跡第4、第5住居跡から土鍤が多数出土していることから、周辺の河川、湖沼での魚漁や採集も生産活動を補完していたと考えられる。さらに、これらの経済活動を基盤とした首長層や高塚古墳の存在が予想される。

### ■ 奈良・平安時代

奈良・平安時代になると遺跡数が増加し、現在のところ23遺跡を数える。その殆んどは丘陵

上に展開されており、このうち、発掘調査が実施されているのは須江糠塚遺跡、関ノ入遺跡、瓦山窯跡、代官山遺跡、群田遺跡の計5ヶ所である。昭和62年度から継続して調査が行われている関ノ入遺跡では、奈良～平安時代にかけての堅穴住居跡が49軒、8世紀末～10世紀前半にかけての窯跡23基、粘土採掘坑跡6基など多数の遺構が検出されている。また、昭和61年度に調査された須江糠塚遺跡からは奈良時代後半～平安時代初期の堅穴住居跡9軒、9世紀後半～10世紀前半にかけての窯跡6基が検出されている。代官山遺跡からは、8世紀末の住居跡1軒、8世紀後半と9世紀後半の窯跡が発見されている。このうち8世紀後半に位置付けられる窯跡で焼成された須恵器の特徴は、栗原郡策館町に所在する伊治城跡から出土した須恵器に近似していることから、本遺跡と密接な関係が予想される。須江丘陵の中央に位置する瓦山窯跡には、奈良時代の瓦と奈良時代～平安時代の須恵器を生産した窯跡群がある。生産された瓦は古代牡鹿郡衙、あるいは牡鹿柵跡と推定されている矢本町赤井遺跡に供給されている(三宅・進藤・茂木:1987.3)。また、発掘調査によって粘土採掘坑と考えられる土壌群が検出されている。旭山丘陵に位置する群田遺跡の発掘調査では、8世紀末～9世紀代の住居跡3軒などが発見されている。

以上のように須江丘陵は、奈良・平安時代の遺跡が多く、特に、瓦や須恵器生産に関しては丘陵全体を窯跡群として捉えることが可能であろう。さらにその内容から、須江窯跡群は古代牡鹿郡との密接な関係を認めることができる。旭山丘陵では群田遺跡以外は本格的な調査が行われていないため今後の資料増加を待ちたい。

なお、須江窯跡群については次項で概要を記述する。

### 中世・近世

中世になると、旭山や須江の丘陵上など14ヶ所に城館が築造されている。長者館跡(長者平遺跡)は金光吉次の仮屋敷跡(藩政期には小島嘉右衛門の除屋敷跡とも言われる)の言い伝えがある。糠塚館跡(須江糠塚遺跡)は、古代の「中山柵跡」に擬定されたこともあり(鈴木省三:1924.12、清水東四郎:1924.12)、「仙台領内古城書上」によれば、東西20間、南北16間の規模で、館主は須藤勘解由左衛門であるとされている(仙台叢書:1971)。塩野田城跡は東西21間、南北27間、館主は須藤勘解由左衛門(一説には矢代斎三郎)と伝えられている。夷田館跡は葛西家家臣夷田氏の居館と伝えられている。多くの館跡は年代、館主共に不明である。また、鹿又地区、須江地区を中心として、町内には、現在のところ86基の板碑が確認されている。紀年銘の判別できるものの中で最古は弘安元年(1278年)、最新は文明10年(1478年)のものである(佐藤雄一:1986.11)。

江戸時代になると、旧北上川や江合川の改修工事や大規模な新田開発が行われている。また、

旧北上川を利用しての舟運も盛んになり、本施又には御廻蔵が設けられ、桃生、牡鹿、本吉、氣仙の四郡から運送された塩を納車したとされている(「風土記御用書上」、佐藤敏幸：1992.3、庄司憲一：1992.3)。この時代の遺跡として、一里塚跡、陶器を生産したと考えられる奈良山遺跡などがある。

### 3. 須江窯跡群の概要

須江窯跡群の位置する須江丘陵には、布目瓦や須恵器を出土する須江瓦山窯跡など、古くから生産遺跡の所在することが知られていたが、詳細な調査、報告はなされていなかった。この須江丘陵で本格的な発掘調査が始まったのは、昭和56年石巻地方広域水道企業団須江山清水場建設に伴う長者館跡、および閑ノ入遺跡の調査からである。この調査からは古代の集落跡や館跡に関する遺構が検出、発見されたが、瓦や須恵器の窯跡は検出されなかった。窯跡の発掘調査が行われたのは、昭和61年、統合中学校建設に伴う須江糠塚遺跡の調査からである。翌昭和62年から閑ノ入地区の大規模開発に伴い閑ノ入遺跡の調査が開始され、現在も継続されている。その間、平成3年に須江瓦山窯跡、代官山遺跡の発掘調査が実施されており、須江丘陵の調査総面積は約610,000m<sup>2</sup>にもおよんでいる。しかしながら、発掘調査の記録報告書が刊行されているのは須江糠塚遺跡(高橋・阿部：1987.3)、代官山遺跡(佐藤敏幸：1993.3)、閑ノ入遺跡(本書)、須江閑ノ入遺跡-工業団地造成に伴う発掘調査概報(中野・佐藤：1990.3)と二、三の紹介(佐藤敏幸：1991.2、1992.2、村田晃一：1992.8など)があるのみで、約510,000m<sup>2</sup>の調査によって須恵器窯19基をはじめ多数の須恵器生産に関する遺構が検出された須江閑ノ入遺跡-工業団地、住宅団地造成に伴う調査-の詳細な調査内容は未発表であるという現状にあり、今後、調査成果の公表が期待されている。

北上川、追川、江合川とその支流によって形成された石巻海岸平野に位置する須江丘陵は、南北約4.5km、東西約1.3km、標高93～3mの南北に長い独立丘陵である。この丘陵には樹枝状に入り込む沢が数多くみられ、その沢に面する斜面に瓦窯や須恵器窯がつくられている。その分布は北上川と接する丘陵北端の糠塚地区から石巻市と境を接する南端の閑ノ入地区まで広がっており、丘陵全体が須恵器の大生産地であったと考えられる。これが須江窯跡群で、現在まで40余基の窯跡が確認されているが、そのほとんどは発掘調査によって発見されたもので、今後、詳細な分布調査を行えばその数は100基をはるかに越えるものと予想される。東北地方でも有数の須恵器生産地といえる。

さて、瓦や須恵器の生産技術が須江窯跡群のどこの地域に移入され、展開していったのかは、詳細な分布調査が行われていないため明確ではない。現在、本窯跡群で確認されている最も古い窯跡は、須江瓦山窯跡と代官山遺跡から発見されている8世紀中葉、あるいはそれをややド

る年代のものである。前者では須恵器と共に平瓦、丸瓦を兼焼しており、古代社鹿郡に関わる生産地としてこの地域から始まったものと推定される。丸はいずれも、国府多賀城からは出土していないもので、宮城県内のこの時期の瓦窯が多賀城と瓦窯附近の城柵・官衙に供給していることから考えれば特異な窯跡群といえる。後者からは、前者で生産されたものと同じ丸瓦を模倣台に転用し須恵器を生産している。この窯の製品と同様の器形、制作技法の須恵器が栗原郡築館町に所在する伊治城跡から出土していることから、密接な関係が推察される(佐藤敏幸: 1993.3)。8世紀後半から9世紀初頭にかけての窯跡は、閑ノ入遺跡から検出されている。この時期までは窯跡数も少ない。その数は9世紀から10世紀初頭にかけて急激に増加し、須江丘陵全域に広がっている。その後、10世紀前半には生産活動を終え、中世までは引継がれない。狹隘な独立丘陵で8世紀中葉から10世紀前半まで連續して操業していた須江窯跡群は、須恵器や窯形態の移り変わりを捉えることができる好遺跡といえる。

須江窯跡群では、相次ぐ大規模開発に伴い広範な発掘調査が行われた結果、須恵器窯をはじめ多数の須恵器生産に関連する遺構が発見されている。須恵器窯は全部で30基調査されている。そのほとんどは群集せず、一基ずつ散在する傾向にある。閑ノ入遺跡の調査では6基の粘土採掘坑跡、粘土精製に使用したと考えられる土壌群、工人集落などが検出されている。粘土採掘坑跡の形態はトンネル状に掘られたものと、上取り状のものがあり、規模も一定していない。最も保存の良好な5号粘土採掘坑跡は、全長約16m、幅4.5m、深さ4m以上の大規模なものである。このように粘土採取から焼成まで一連の過程が捉えられる遺構が検出され、須恵器生産の具体的な様相が明らかになりつつある。

須江窯跡群の周辺には奈良・平安時代の遺跡が多数分布している。城柵・官衙関連の遺跡では、南西約1.2kmに社鹿柵あるいは社鹿郡衙の擬定地である欠木町赤井遺跡、北東約4.5kmに桃生城跡が所在する。特に、赤井遺跡は地理的に近く、瓦の供給関係からも本窯跡群と密接な関係があるものと考えられる。この地方の豪族である道嶋氏一族は、地盤である社鹿郡をはじめ桃生郡(桃生城)、小田郡、栗原郡(伊治城)、国衙多賀城にも関係の深い一族である。須江窯跡群は古代社鹿郡に属していたと考えられ、道嶋氏と深い関わりを想わせる。本窯跡群で生産された製品の供給先は、具体的には不明なところが多いが、瓦や須恵器の一部は赤井遺跡に供給されていることが判明しており、さらに、伊治城のような道嶋氏に関係する遺跡にも供給されていた可能性が考えられる。

今後、調査及び整理がすすむと、当地方での須恵器生産技術の移入と展開、衰退の様相や須恵器生産体制の実態が具体的に明らかにされ、さらに、製品の供給関係から社鹿郡や道嶋氏との関係が理解されるであろう。当地方の古代史を解明していくうえで、重要な遺跡といえる。

## II. 調査経過

### 1. 調査に至る経過

河南町と石巻市の双方にまたがって所在する長者館跡は、奈良・平安時代の墓跡、集落跡として知られる開入遺跡と重複しており、周辺の状況から遺跡の分布密度の高いところとして知られていた。

昭和54年、石巻市水道事業第六次拡張計画が策定され、新設浄水場用地として当地が選定された。昭和55年、事業の連絡を受けた河南町教育委員会では早速、現地踏査を実施し、建設予定地およびその近接地に土塁や空濠など館跡に関する遺構、古代の墓跡などの遺構や遺物の散布を確認した。それをもとに、昭和55年から56年にかけて石巻地方広域水道企業団、河南町教育委員会、石巻市教育委員会と宮城県教育庁文化財保護課との間で協議を重ねた。その結果、諸々の事情から予定地以外に計画変更することが不可能と判断されたため、できるだけ館跡内部の遺構を保存する設計で計画し、保存のできない範囲は調査を実施することとなった。

昭和56年度には宮城県教育庁文化財保護課の指導、協力を得て、立合調査および一部事前調査が行われた。調査の結果、闕文上器、土師器、須恵器の遺物は出土するものの、明確な遺構は検出されなかった。昭和58年には石巻市教育委員会と宮城県教育庁文化財保護課の調査員により、石巻市800m<sup>2</sup>、河南町1,400m<sup>2</sup>の事前調査が行われ、石巻市の範囲から古代に属する堅穴住居跡1軒が検出されている。昭和59年3月には、今回の調査区に含まれる6,800m<sup>2</sup>の発掘調査が、宮城県教育庁文化財保護課によって行われ、古代の堅穴住居跡数軒を確認した。しかし、調査が長期にわたること、調査に要する費用が予想以上に必要と認められることから、一部表土を剥離したまま中断された。確認された遺構はシートで覆った状態で保存された。

平成2年12月、石巻地方広域水道企業団より須江山浄水場拡張工事再会の連絡を受けた河南町教育委員会では、早速現地の踏査を行い、宮城県教育庁文化財保護課と協議した。その結果河南町教育委員が主体となって事前調査を実施することを決め、準備に着手した。

昭和59年から6年間放置されたままの遺構は、保護シートが腐朽していたばかりでなく、自然による遺構、遺物の削平をもたらし、今回の調査を手間取らせた原因にもなったことを付け加えておく。

### 2. 調査の方法と経過

今回の発掘調査は試掘調査と事前調査に分けて実施した。試掘調査は平成3年9月初旬から杉や雜木の伐採などの調査準備に取りかかり、翌10月上旬重機を用いてあらかじめ設定してお

いた3m幅のトレーナーの抜根および表土除去を行った。調査範囲は開発区域全域とし、丘陵頂部平坦面は重機で表土を剥ぎ、重機の入り込めない急斜面は再度踏査を行い遺構の発見に努めた。調査は冬の整理期間を挟んで、平成4年3月12日まで行われた。調査の結果、頂部平坦面から住居跡6軒、土壙2軒、焼上遺構4基、古代の溝1条が検出され、斜面の踏査では、須恵器窯の分布が予想された。

これらの成果をもとに、平成4年6月15日から事前調査を開始した。調査は遺構の分布する丘陵頂部平坦面から斜面にかけて、約12,050㎡全面の表土除去から開始された。その結果、須恵器窯3基、竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡1棟、堅穴道構5基、焼土遺構13基、土壙3基、古代の溝跡1条の予想をうわまわる多数の遺構が検出された。調査期間および予算の修正を行なながら、各遺構の掘り上げ、精査、各種実測図の作成、写真撮影等一連の作業は平成4年12月11日に無事、終了することができた。なお、調査期間中11月1日に実施した一般公開では約120人の参加者が集まった。

また、調査基準点は任意に設定し、後日国家座標に位置付けるという方法をとった。このため、本報告書の遺構図には方位を挿入して統一してある。

なお、須江関ノ入遺跡は昭和62年度から継続して調査が実施されており、今回の調査前まで窯跡26基、住居跡36軒、掘立柱建物跡5棟、堅穴道構2基、土壙88基、焼土遺構85基が既に検出されている。本調査にあたり、これまで検出された遺構に統く遺構番号を付した。

### III. 基本層序

調査区は大きく丘陵頂部平坦面、緩斜面、および急斜面に分けられる。これらの各面の層序は多少の相違はあるものの、基本的には同一の層準を示している。

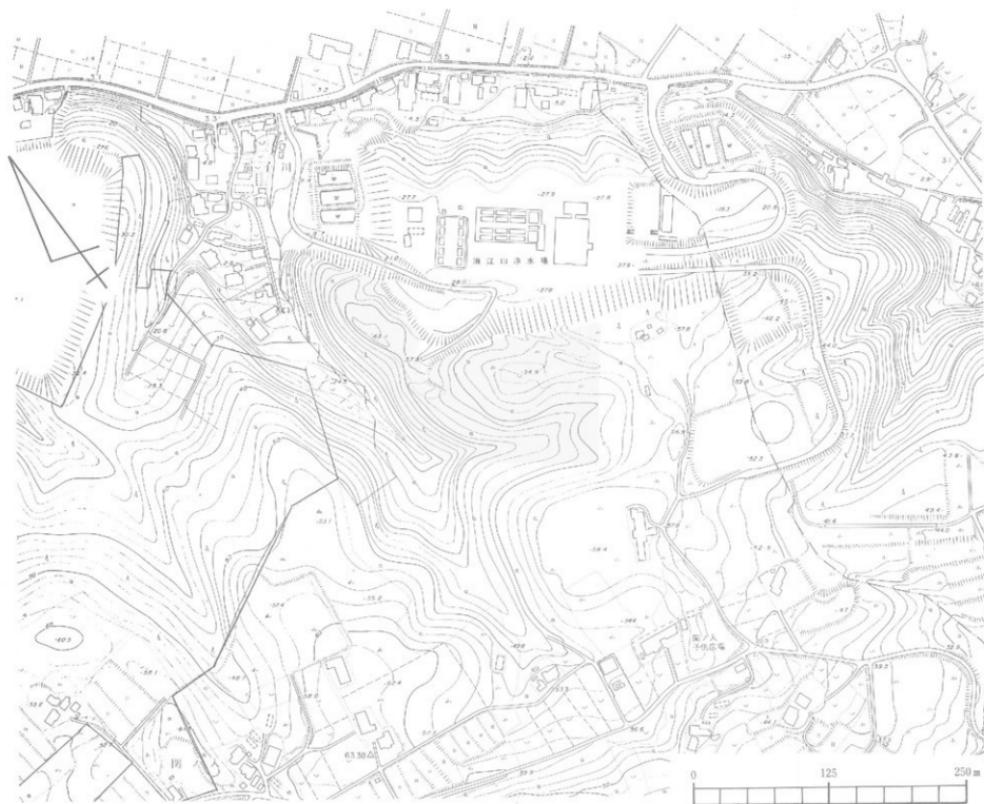
〔I層〕褐(10YR 5/4)色のシルトである。本遺跡の表土で全域にみられる。粘性はなく、しまりに欠ける。層厚は10~40cmである。

〔II層〕にぶい黄褐色(10YR 5/6)色のシルトである。全域に広く分布している。層厚20~30cmで、層中からは少量の繩文土器、土師器、須恵器、石器が出土する。

〔III層〕黄褐色(10YR 5/6)色、またはにぶい黄褐色(10YR 5/6)色のシルト質粘土である。丘陵頂部平坦面にみられる。堅穴住居跡など、窯跡以外の遺構の多くは本層上面あるいは本層中から確認されている。遺物は出土しない。

〔IV層〕灰黄(2.5Y 7/2)色の粘土である。調査区東側にのみ認められる層で、良質の粘土である。層厚は厚い部分で3mにもおよぶ。遺物は認められない。

〔V層〕明赤褐色(5YR 5/6)色のシルト質粘土である。沢で削られた斜面に認められた。層中に多量の砾を含む。窯跡が確認された層である。遺物は認められない。



第3図 調査区と周辺の地形



第4図 遺構配置図

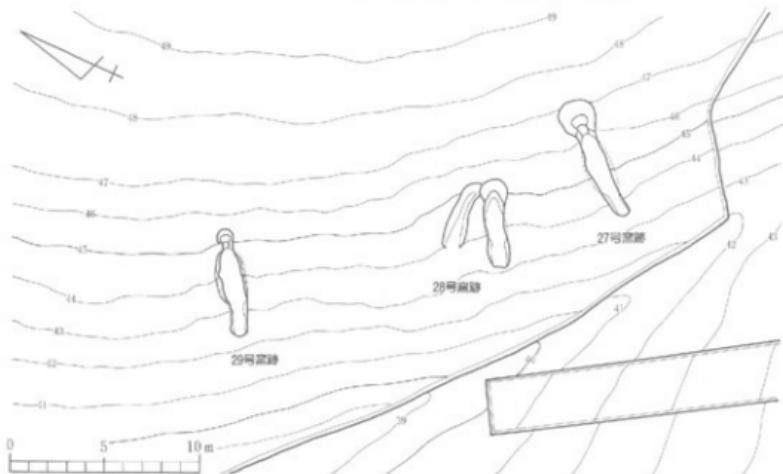
## IV. 検出された遺構と出土遺物

今回の発掘調査によって須恵器窯跡3基(27号～29号窯跡)、堅穴住居跡13軒(37号～49号住居跡)、掘立柱建物跡1棟(6号掘立柱建物跡)、堅穴遺構5基(3号～7号堅穴遺構)、焼上遺構13基(86号～98号焼上遺構)、土壙3基(89号～91号土壙)が検出された。これらの遺構に伴って土師器や須恵器など多数の遺物が出土した。ここでは、検出された遺構と出土遺物に関するデータを、図や表を多用して報告する。

なお、遺構番号については、昭和62年度から継続されている工業団地および住宅団地造成に伴う須江閣ノ入遺跡発掘調査によって検出されている遺構に連続する番号を付している。

### 1. 窯 跡

窯跡は3基検出された。いずれも調査区西側を走る沢に沿って、東面する急斜面に並列している。沢は当時の地形よりもさらに地面を抉り、灰原は認められなかった。



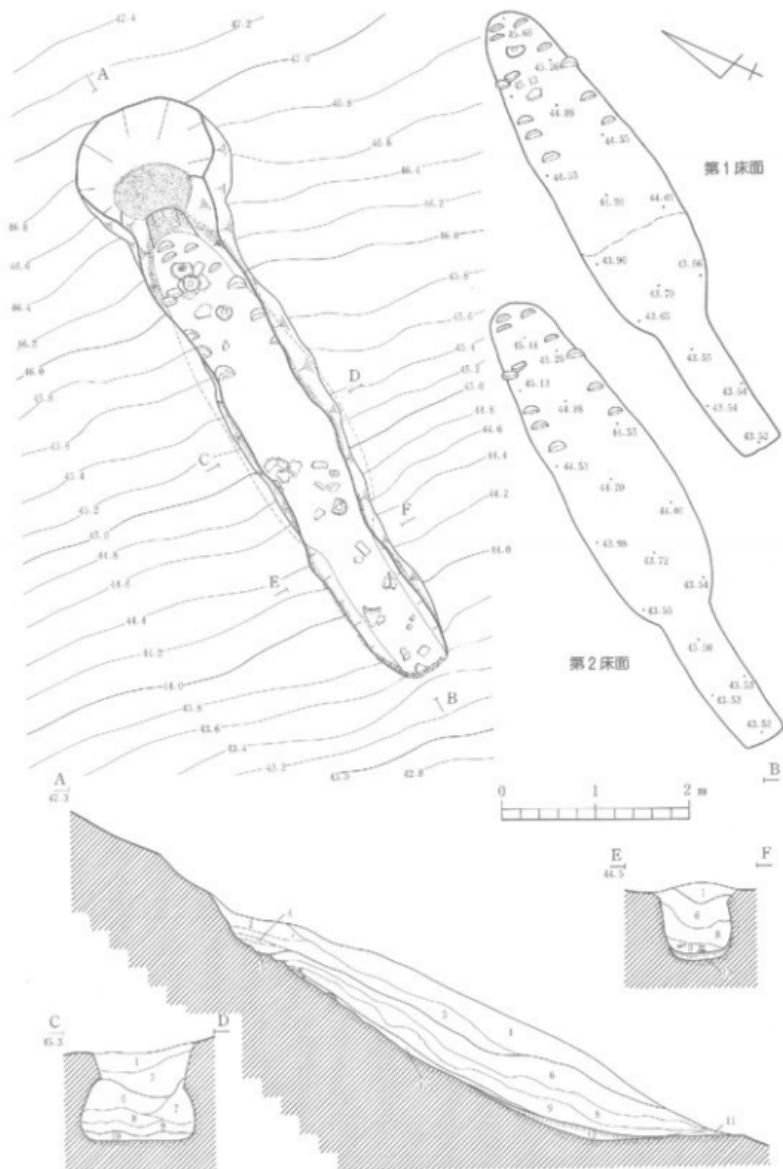
第5図 窯跡配図

#### 27号窯跡

〔確認面〕基本層序V層から確認された。

〔形態〕煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式の窯である。

〔煙道部〕先端に位置し、平面形は歪んだ円形をしている。平粗な底面から急な角度で立ち上



第6図 27号窓跡

がる。底面には炭化材が認められた。

【焼成部】底面の平面形は煙道部に近づくにつれて、緩やかな丸みをもって徐々に狭くなり、先端は丸くおさまり煙道部底面となる。底面は、概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸みをもっている。底面上半には、幅15~24cmのステップ状の段が10個ある。また、礫や須恵器片を焼台にしている。燃焼部から焼成部にかけて徐々に傾斜を強めている。傾斜角は28°~37°ほどである。使用された底面は2面確認された(確認順に、上から第1、第2床面)。第2床面は窯跡掘り方底面である。第1床面は窯跡廃棄時の床面で、第2床面焼成部下半から燃焼部上半にかけて細かい崩落土に砂を敷いて整地している。側壁は内湾気味に立ち上がり天井へと続く。側壁と天井の境は明瞭ではない。側壁には、窯跡掘り方の工具痕が認められた。全体に還元し、硬化している。

【燃焼部】焼成部からくびれて狭くなるところから下方が燃焼部である。底面は、概ね平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。全体に還元し、硬化している。

【堆積土】堆積土は3層に大別される。1層(層No.1、2、3、4、5)は自然堆積層で、天井崩落後に堆積したものである。層No.4及び層No.3下部は灰白色火山灰層である。2層(層No.6、7、8、9)は天井、側壁の崩落土である。3層(層No.10)は黒陶葉から天井崩落までに煙道から流入した自然堆積土である。層No.11は灰層である。層No.12は床面構築土である。

【中軸線の方向】 N - 36° - E

【残存規模】全 体—— 長さ6.84m、 最大幅1.22m、 最大深0.92m

煙道部——長さ1.40m、 底面幅—— m、 残存高0.48m

焼成部——長さ3.84m、 底面幅1.18~0.58m、 残存高0.92m

燃焼部——長さ1.60m、 底面幅0.58~0.48m、 残存高0.78m

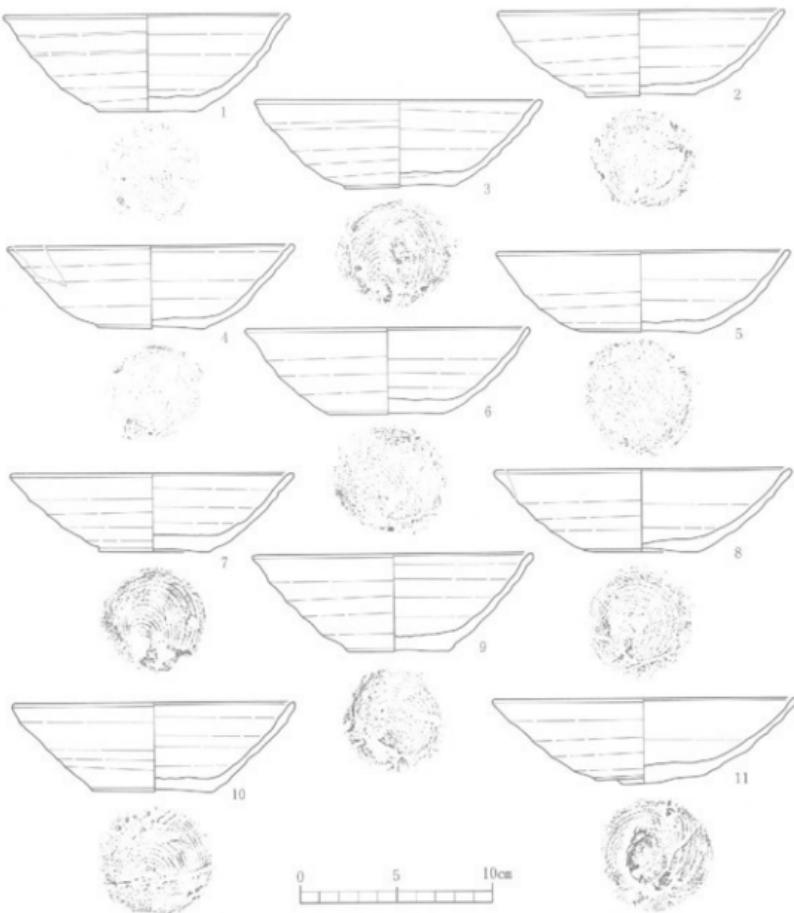
【出土遺物】焼成部各底面から須恵器片、甕、壺が出土した。焼成部から出土した杯は、そのほとんどが伏せた状態で検出された。

杯(第7図1~11、第8図12~14)

1~12は底部から弱い丸味をもって外傾する。底部は回転糸切りで切り離されている。機して焼きが古く、にぶい黄褐色を呈する。口径14.8~15.6cm(平均15.1cm)、底径5.2~6.3cm(平均5.8cm)、器高4.1~5.1cm(平均4.6cm)を計る。13、14は

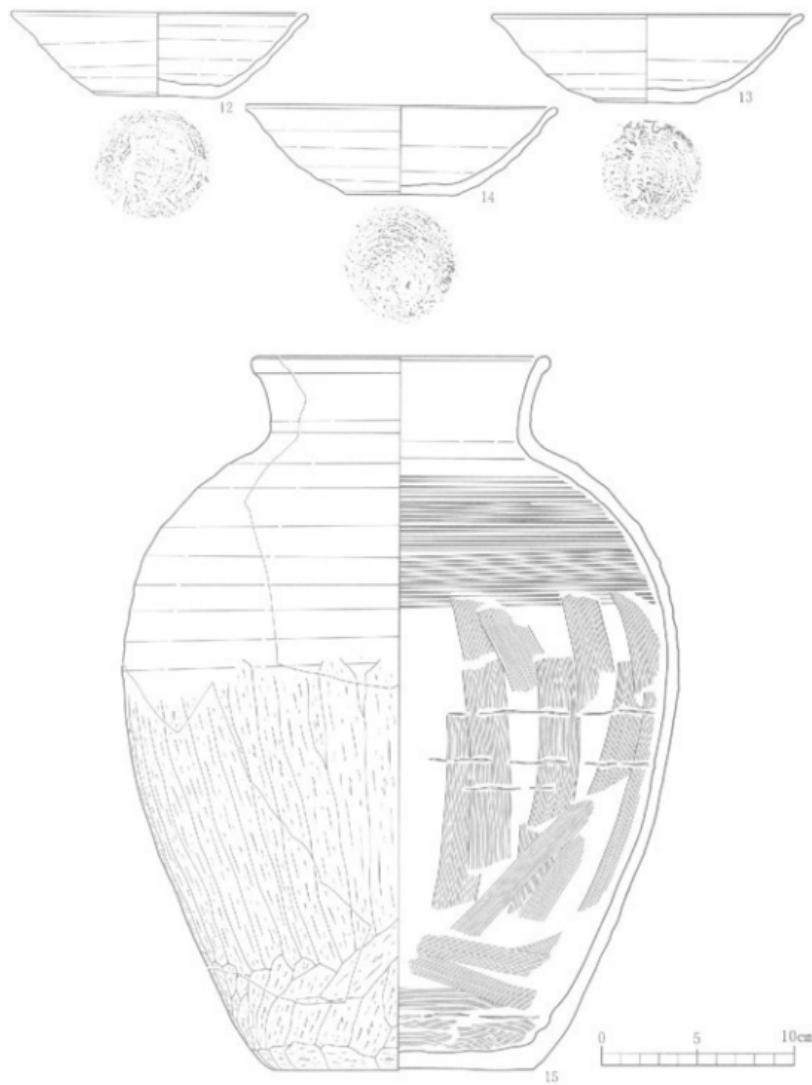
層	土 壤	土 色	質	特 性	大 分
1	灰白土質 SVR <sup>a</sup> 3	灰土質	3	灰素燒10Y R <sup>b</sup> 3と細かいグリッタ質に含む。	
2	灰白土質 VR <sup>c</sup>	白土質	3	灰素燒10Y R <sup>b</sup> 3と細かいグリッタ質に含む。	
3	灰白土質 10Y R <sup>b</sup> 4	灰土質	4	50%灰白色火山灰を含む。	自然堆積層
4	灰素燒 10Y R <sup>b</sup> 3	シ ル	3	灰白色火山灰層。	
5	褐色VR <sup>c</sup>	シ ル	3	下部に灰化物を含む。	
6	灰素燒10Y R <sup>b</sup> 4	粘	3	褐色土質に含む。	
7	切邊 2.5Y R <sup>c</sup>	粘	3	褐色少々灰土質。	
8	灰素燒 2.5Y R <sup>c</sup>	粘	3	全層に灰化物を含む。	天井構築土
9	灰素燒 2.5Y R <sup>c</sup>	粘	3	全層に灰化物を含む。	
10	素燒 3Y R <sup>c</sup>	粘	3	少量の灰化物を含む。地上アーチを含む。	自然堆積層
11	素燒 5Y R <sup>c</sup>	シ ル	3	多量の灰化物を含む。	灰 土
12	灰白土質 10G <sup>d</sup> 2	粘	2	灰白土質。	灰白土質層

第2表 27号窯跡堆積土



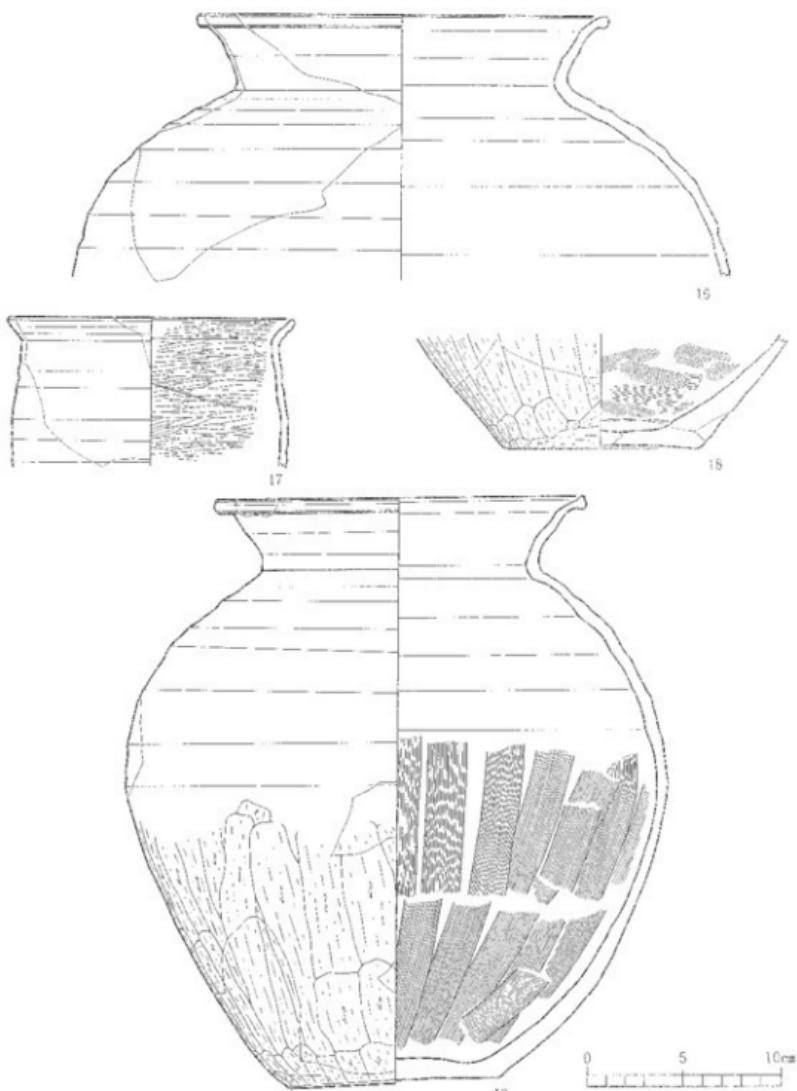
%	種	底	外	底	内	面	口徑・底径・壁高(cm)	分類	考
1	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底白2 YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。底白1-YR <sub>7/2</sub>		15.0-5.2-5.1	E型	圓錐3-2
2	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底白2 YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。底白1-YR <sub>7/2</sub>		14.9-5.8-4.6	E型	圓錐3-4
3	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底白2-YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。底白2-YR <sub>7/2</sub>		14.9-5.8-4.7	E型	圓錐3-5
4	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底白2-YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。色調外側と同じ		15.0-5.8-4.4	E型	圓錐3-6
5	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底白2-YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。底白2-YR <sub>7/2</sub>		15.2-6.2-4.3	E型	
6	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底白2-YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。色調外側と同じ		14.8-5.9-4.1	E型	
7	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底2 YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。底2 YR <sub>7/2</sub>		15.8-5.8-4.1	E型	圓錐3-2
8	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底白2 YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。底白2 YR <sub>7/2</sub>		15.1-5.4-4.7	E型	
9	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底白2-YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。色調外側と同じ		15.6-5.3-5.1	E型	
10	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底白2-YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。色調外側と同じ		14.8-6.3-4.7	E型	圓錐3-1
11	瓦盆	第1底脚	ロクナギテ。底2 YR <sub>7/2</sub>	回転式足	ロクナギテ。底2 YR <sub>7/2</sub>		15.8-5.7-4.5	E型	

第7図 27号窯跡出土遺物(1)



編	種	個	直	外	面	底	部	内	面	0縁・底深・基高・器径(cm)	全體	備考
12	乳頭盤	器:底面	ヨコヨカゲ、横3.5cm、根3YR7/4	地松表面	ヨコヨカゲ、横3.5cm、根7.5YR7/4					15.3 - 6.1 - 4.4	E II	
13	乳頭盤	器:底面	ヨコヨカゲ、根3YR7/4	地松表面	ヨコヨカゲ、灰白2.5YR5/2					16.2 - 5.3 - 4.6	E III	
14	乳頭盤	器:底面	ヨコヨカゲ、根3YR7/4	地松表面	ヨコヨカゲ、灰白2.5YR5/2					16.2 - 5.7 - 4.6	E III	
15	乳頭盤	器:底面	ヨコヨカゲ、割り、底内凹、0.5cm	地調物	ヨコヨカゲ、底紅褐色、茎+サゲ、色調外側と同じ					15.6 - 12.5 - 27.5 - 29.5	A	

第8図 27号窯跡出土遺物(2)



第9図 27号墓出土遺物(3)

編 號	種 類	文 字	規 格	材 質	重 量	口徑 底径 壁厚 高さ(cm)	分 類	備 考
16	漆器盤	無文	漆器	漆器	21.4	—	A 4	
17	漆器鉢	無文	漆器	漆器	35.0	—	B	
18	漆器盤	第1回面 無文、漆器鉢	漆器	漆器	16.1	—	A 6	
19	漆器鉢	第1回面 無文、漆器鉢	漆器	漆器	19.5-21.1-20.7-28.8	19.5-21.1-20.7-28.8	A 2	底端A-7

焼台で、体部が緩やかな丸味をもち、口縁部が外反する。底部は回転糸切りで切り離され、内面にはコテ状工具によるロクロナデが観察される。1~12とは異質な感じを与えるものである。

壺(第9図16~19)

16、18、19は口縁部が短く、口唇部が小さくつくられている。

体部はナデ肩である。器面は口縁部から体部上半が内外面共にロクロナデ、体部下半には外面にケズリ、内面にヘラナデ、ナデが施される。17は長柄壺で、口縁部は短い「く」字状を呈する。器面は外面にロクロナデ、内面にミガキが施されている。

#### 壺(第8図15)

口縁部が短く直立し、体部はナデ肩で底径の大きいものである。器面調整は、外面上半にロクロナデ、下半にケズリが認められ、内面にロクロナデ、回転ハケメ、ヘラナデ、ナデが施されている。

### 28号 烟 跡

【確認面】基本層序V層から確認された。

【形態】焼成部、燃焼部からなる地下式窯跡である。煙道は先端に位置すると思われるが、不明瞭である。

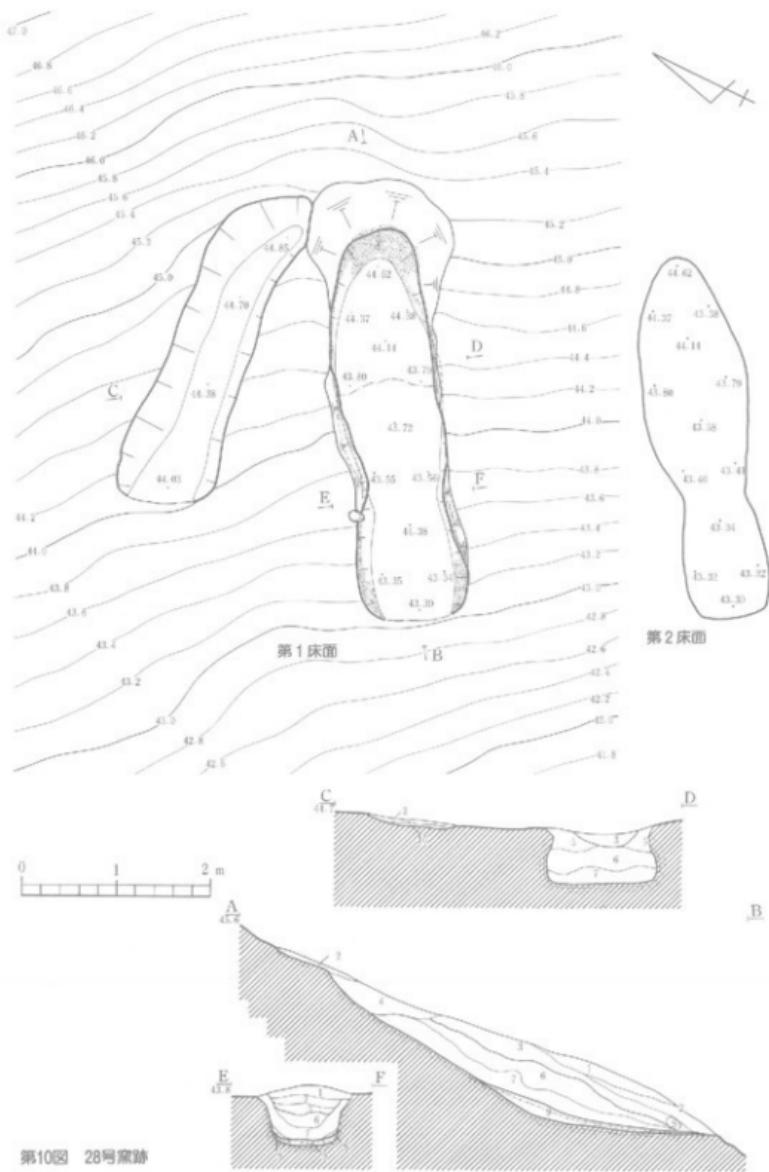
【焼成部】底面の平面形は先端に近づくにつれて、緩やかな丸味をもって徐々に狭くなり、先端はそのまま丸くおさまる。底面は、概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸味をもっている。燃焼部から先端にかけて徐々に傾斜を強めている。傾斜角は $25^{\circ}$ ~ $34^{\circ}$ ほどである。使用された底面は2面確認された(確認順に、上から第1、第2床面)。第2床面は窯跡掘り方底面である。第1床面は窯跡発掘時の床面で、第2床面上の崩落土に砂を敷いて焼成部下半を整地している。側壁は内汚気味に立ち上がり天井へと続く。側壁と大井の境は明瞭ではない。全体に還元し、硬化している。

【燃焼部】焼成部から強くくびれて狭くなるところから下方が燃焼部である。底面は概ね平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。底面、側壁とも還元し、硬化している。

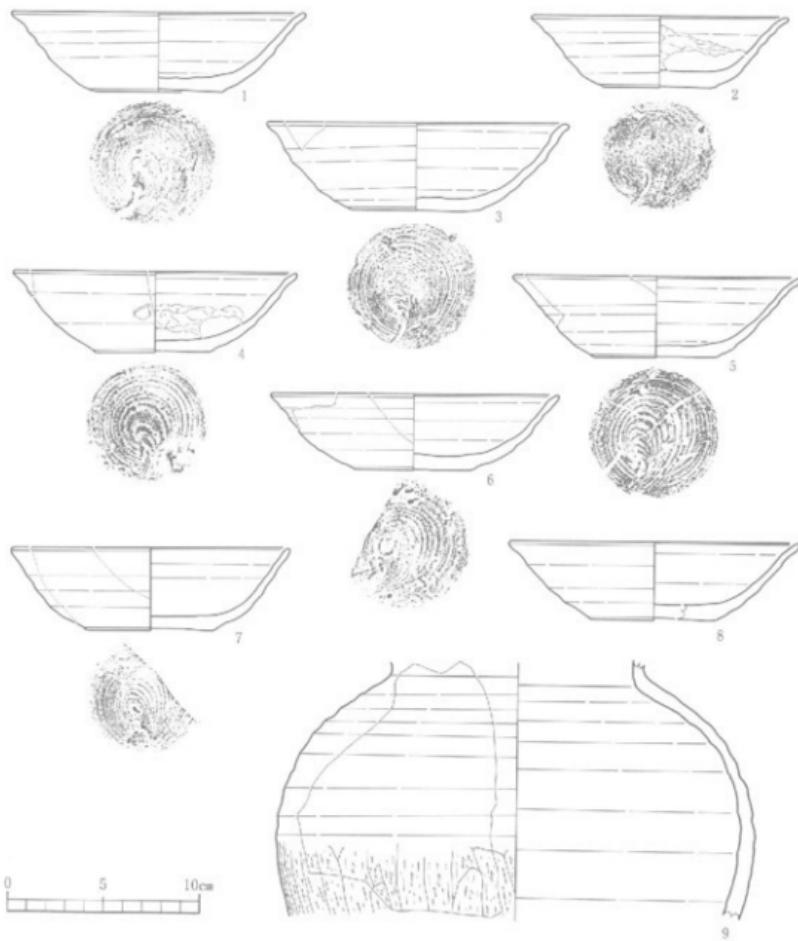
【堆積土】堆積土は2層に大別される。1層(層No.1、2、3、4)は自然堆積層で、大井崩落後に堆積したものである。2層

No.	土 色	粒 組	備	地 大 き
1	赤褐色(黄褐色) $YR\frac{2}{3}$	細土質シルト	焼成面(10) 窯内底面を認めた。ノコリ状に着色。	
2	深褐色(YR $\frac{3}{4}$ )	シルト	窯内壁大穴(空洞)。	
3	深褐色(GY R $\frac{1}{2}$ )	粘	少虫の壁、窯内物(山灰を含む)。	自然堆積物
4	深褐色(YR $\frac{3}{4}$ )	粘土質シルト	新窯頭(10) 窯内壁を盛る。ノコリ状に着色。	
5	灰褐色(GY R $\frac{1}{2}$ )	粘	窯内壁を覆う。ノコリ状に着色。	
6	灰色(GY R $\frac{1}{2}$ )	シルト質土	灰褐色(10) 窯内底面を認めた。	
7	褐色(GY R $\frac{1}{2}$ )	粘	底部に厚くしてある。	火井堆積物
8	褐色(YR $\frac{3}{4}$ )	シルト質土	灰褐色、底部を多量に含む。	
9	褐色(YR $\frac{3}{4}$ )	シルト	灰褐色、底部を多量に含む。	
10	褐色(YR $\frac{3}{4}$ )	シルト	少虫の空洞、砂土を含む。	自然堆積物

第3表 28号窯跡堆積土



第10回 28号窓跡



%	種類	部位	外観	内観	曲	口径	底径	高さ・基盤(cm)	分類	考
1	螺旋器皿	第2灰面	ロクロナゲ。RKN <sup>g</sup>	回転曲面	ロクロナゲ。色調外側と同じ	15.4	6.3	4.2	E I	回転30-9
2	螺旋器皿	第2灰面	ロクロナゲ。RKN <sup>g</sup>	回転曲面	ロクロナゲ。色調外側と同じ	13.5	5.8	3.7	E I	内側に螺旋土付着。回転31-11
3	螺旋器皿	第1灰面	ロクロナゲ。RKN <sup>g</sup>	回転曲面	ロクロナゲ。色調外側と同じ	15.7	6.6	4.6	E I	回転31-8
4	螺旋器皿	第2灰面	ロクロナゲ。RKN <sup>g</sup>	回転曲面	ロクロナゲ。色調外側と同じ	14.8	6.0	4.2	E I	内側に螺旋土付着。回転31-13
5	螺旋器皿	第3灰面	ロクロナゲ。RKN <sup>g</sup>	回転曲面	ロクロナゲ。色調外側と同じ	12.0	6.4	4.3	E I	
6	螺旋器皿	第2灰面	ロクロナゲ。RKN <sup>g</sup>	回転曲面	ロクロナゲ。RKN <sup>g</sup>	13.1	6.1	4.0	E I	
7	螺旋器皿	第2灰面	ロクロナゲ。RKN <sup>g</sup>	回転曲面	ロクロナゲ。色調外側と同じ	14.6	6.5	4.3	E I	
8	螺旋器皿	第2灰面	ロクロナゲ。RKN <sup>g</sup>	回転曲面	ロクロナゲ。色調外側と同じ	15.2	6.4	4.1	E I	回転30-10
9	螺旋器皿	第2灰面	ロクロナゲ。RKN <sup>g</sup>	——	ロクロナゲ。色調外側と同じ	——	——	25.0		

第11図 28号窯跡出土遺物

(層No.5、6、7、8)は天井、側壁の崩落土である。層No.9は第1床面構築のための整地層である。

〔中軸線の方向〕 N-58°-E

〔残存規模〕	全體	長さ4.18m、	最大幅1.17m、	最大深0.72m
	焼成部	長さ2.64m、	底面幅1.12～0.66m、	残存高0.72m
	燃焼部	長さ1.26m、	底面幅0.84～0.66m、	残存高0.54m

〔外周溝〕窓戸から北側斜面にかけて検出された。長さ3.60m、幅1.24~0.78mの規模で、断面「U」形である。底面レベルは窓戸側が最も高く、斜面下方に進むにつれて低くなる。

〔出土遺物〕 捷成部各庭面から須恵器坏、素が出土した。

坏(第11图1~8)

底部から体部にかけて丸味をもって外傾し、口縁部でわずかに外反する。底部は回転糸切りで切り離されている。器厚は比較的厚く皮形している。器内面ミヨミを中心にコテ状工具によるロクロナデが観察され、ロクロ目が不明瞭でツルツルした感じがする。口径13.5～15.7cm(平均14.9cm)、底径5.8～6.6cm(平均6.3cm)、器高3.7～4.6cm(平均4.2cm)を計る。

表(第11図 9)

9は体部上半の破片である。なで肩で、外面上半にロクロナデ、下半に繊方向のケズリが施され、内面はロクロナデが観察される。

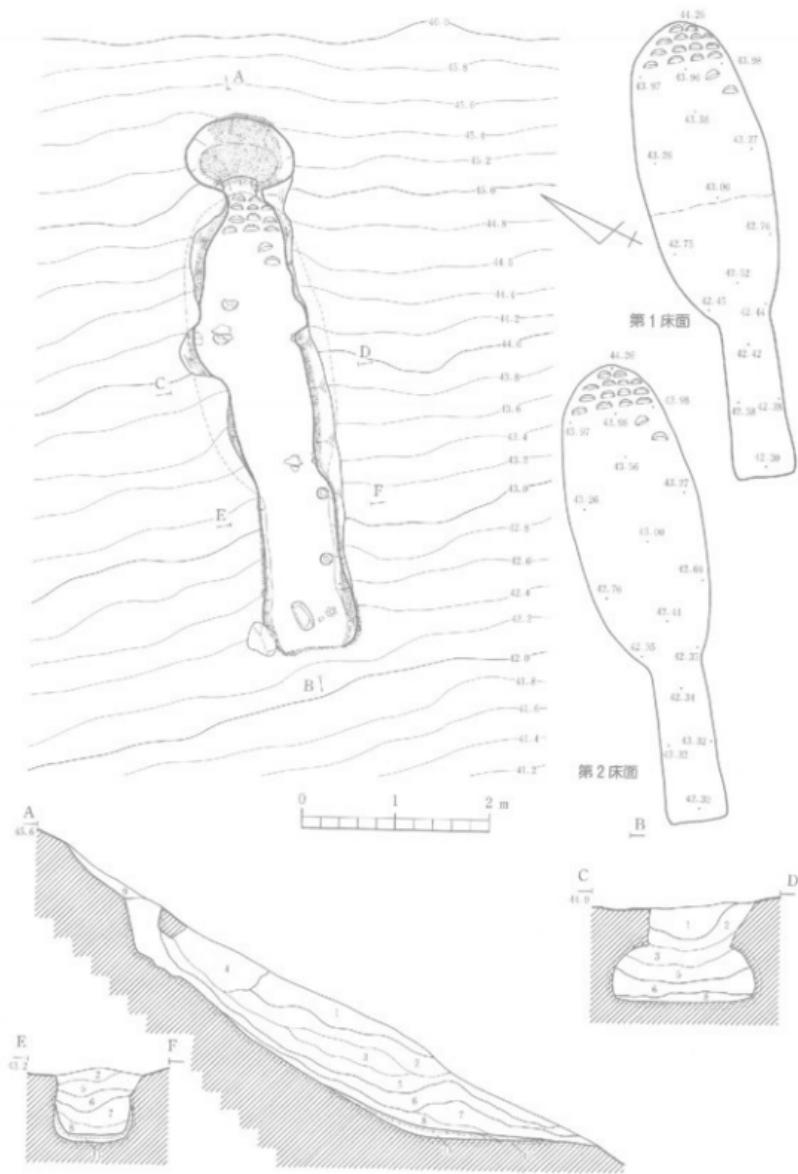
## 29 号 窟 跡

〔確認面〕 基本層序V層から確認された。

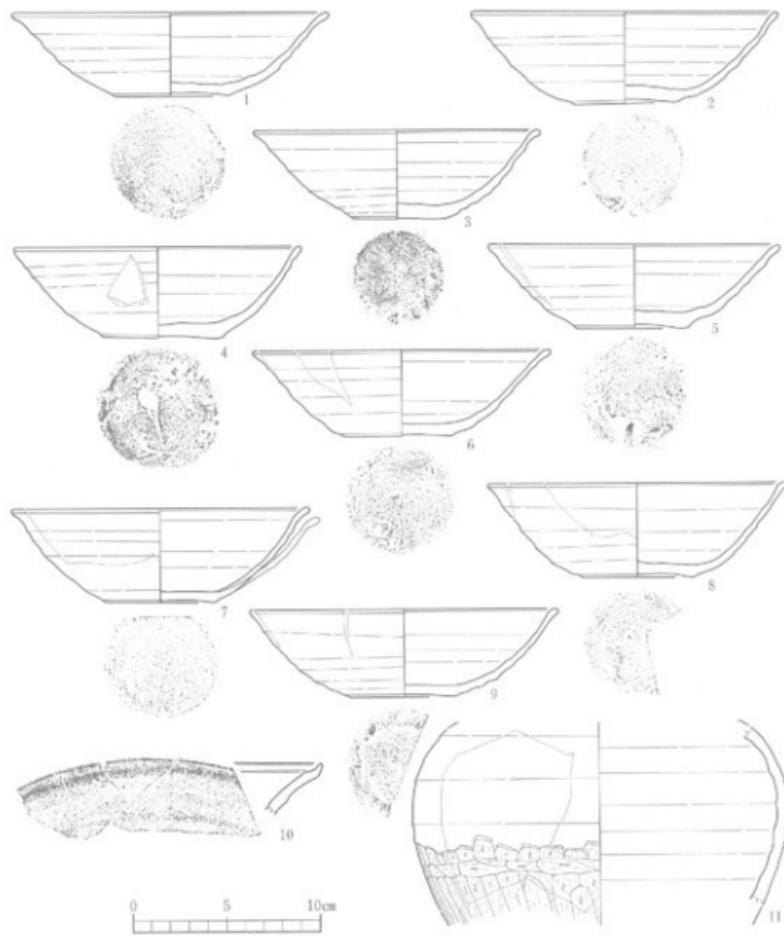
〔形態〕 煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式の窯窓である。

〔煙道部〕先端に位置し、平面形は歪んだ円形をしている。平坦な底面から急な角度で立ち上がる。底面には炭化材が認められた。

〔焼成部〕底面の平面形は煙道部に近くにつれて、縦やかな丸みをもって徐々に狭くなり、先端は丸くおさまり煙道部底面となる。底面は、概ね平坦であるが、壁沿いの部分は丸みをもっている。底面上半には、幅12~18cmのステップ状の段が16個ある。また、礫や須恵器片を焼台にしている。燃焼部から焼成部にかけて徐々に傾斜を強めている。類角角は24°~40°ほどである。使用された底面は2面確認された(確認順に、上から第1、第2床面)。第2床面は窯跡掘り方底面である。第1床面は窯跡発掘時の床面で、第2床面焼成部下半から燃焼部上半にかけて細かい崩落土に砂を敷いて整地している。側壁は内湾気味に立ち上がり天井へと続く。側壁と天井の境は明瞭ではない。側壁には、窯跡掘り方の工具痕が認められた。全体に還元し、硬化している。煙道部から焼成部にかけて、一部天井が残存していたが、調査中に除去した。



第12図 29号窟跡



編 號	圖 形	外 面	裏 面	內 部	側 面	（長×寬×高） mm	分類	備 考
1. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	凹輪底面 ロタコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	17.0 × 6.0 × 4.5	E II	圓盤33-13			
2. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	凹輪底面 ロタコナガ、色調外觀+同上	16.4 × 5.5 × 3.0	E II				
3. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	凹輪底面 ロタコナガ、色調外觀+同上	15.4 × 4.9 × 4.8	E II	圓盤23-16			
4. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	凹輪底面 ロタコナガ、色調外觀+同上	15.3 × 6.4 × 4.9	E II	圓盤33-14			
5. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	凹輪底面 ロタコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	15.6 × 6.0 × 4.5	E II				
6. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	凹輪底面 ロタコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	16.0 × 6.2 × 4.6	E II	圓盤33-17			
7. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	凹輪底面 ロタコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	16.9 × 6.0 × 5.0	E II	圓盤33-18			
8. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	凹輪底面 ロタコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	16.6 × 5.9 × 5.0	E II				
9. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	凹輪底面 ロタコナガ、色調外觀+同上	16.5 × 5.5 × 4.7	E II				
10. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	——	ロタコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	——	A II			
11. 雜形圓環 第1灰面	○タコナガ、 $RN^{\frac{1}{2}}$	——	ロタコナガ、色調外觀+同上	——	B			

第13図 29号窯跡出土遺物

## 〔燃焼部〕 燃成部からくびれて狭

くなるところから下方が燃焼部である。底面は、概ね平坦で、側壁は急な角度で立ち上がる。全体に還元し、硬化している。

〔堆積土〕 地盤土は3層に大別される。1層(層No.1)は自然堆積層で、天井崩落後に堆積したものである。2層(層No.2、3、4)は天

No.	名	性	備	考	入
1	基盤土 R <sup>1</sup>	砂質シルト	明礬乳化灰質の底土を剥離してソーラー鉄柱に供給	自然堆積	
2	重筋T-SV R <sup>2</sup>	砂質泥炭	鮮青灰10枚G <sub>1</sub> 層をもつ堆積層		
3	重筋T-SV R <sup>3</sup>	粘土	下層下山が網膜している。		
4	重筋T-SV R <sup>4</sup>	粘土	下層下山が網膜している。		
5	瓦礫T-SV R <sup>5</sup>	砂	下層下山が網膜している。	天井崩落層	
6	重筋T-SV R <sup>6</sup>	砂・頁岩	地盤下山が網膜している。		
7	瓦礫T-SV R <sup>7</sup>	砂	瓦礫下山が網膜している。		
8	重筋T-SV R <sup>8</sup>	粘土	瓦礫下山が網膜している。	天井崩落層	
9	瓦質T-SV R <sup>9</sup>	シート泥炭	少量の瓦質底火山灰を含む。	自然堆積	
10	重筋T-SV R <sup>10</sup>	粘土	少量の瓦質下山が網膜している。	天井崩落層	
11	重筋T-SV R <sup>11</sup>	砂	多量の瓦質下山が網膜している。	SC 菅	
12	瓦質R10 G <sub>1</sub>	第2コサ		瓦質岩層	

第4表 29号窯跡堆積土

井、側壁の崩落土である。3層(層No.5、6、9)は天井崩落前に流入した自然堆積層で、層No.6は灰白色火山灰層である。4層(層No.7、10)は窯跡廃棄前における天井部還元土の崩落土である。層No.11は灰層、層No.12は第1床面構築のための整地層である。

## 〔中軸線の方向〕 N-54°-E

〔残存規模〕 全体——長さ5.74m、最大幅1.46m、最大深1.01m  
 燃道部——長さ0.79m、底面幅——m、残存高0.62m  
 燃成部——長さ3.40m、底面幅1.46~0.68m、残存高1.01m  
 燃焼部——長さ1.35m、底面幅0.80~0.68m、残存高0.56m

〔出土遺物〕 燃成部各底面から須恵器坏、甕、壺が出土した。燃成部から出土した坏は、そのほとんどが伏せた状態で検出された。

## 坏(第13図1~9)

底部から剥い丸味をもって外傾し、口唇部がわずかに外反する。底部は回転糸切りで切り離されている。器内面にはコテ状工具によるロクロナデが観察される。口径15.3~17.0cm(平均16.0cm)、底径4.9~6.4cm(平均5.8cm)、器高4.5~5.0cm(平均4.8cm)を計る。

## 甕(第13図10)

口縁部の破片で、口唇部が簡略化された受口状になっている。

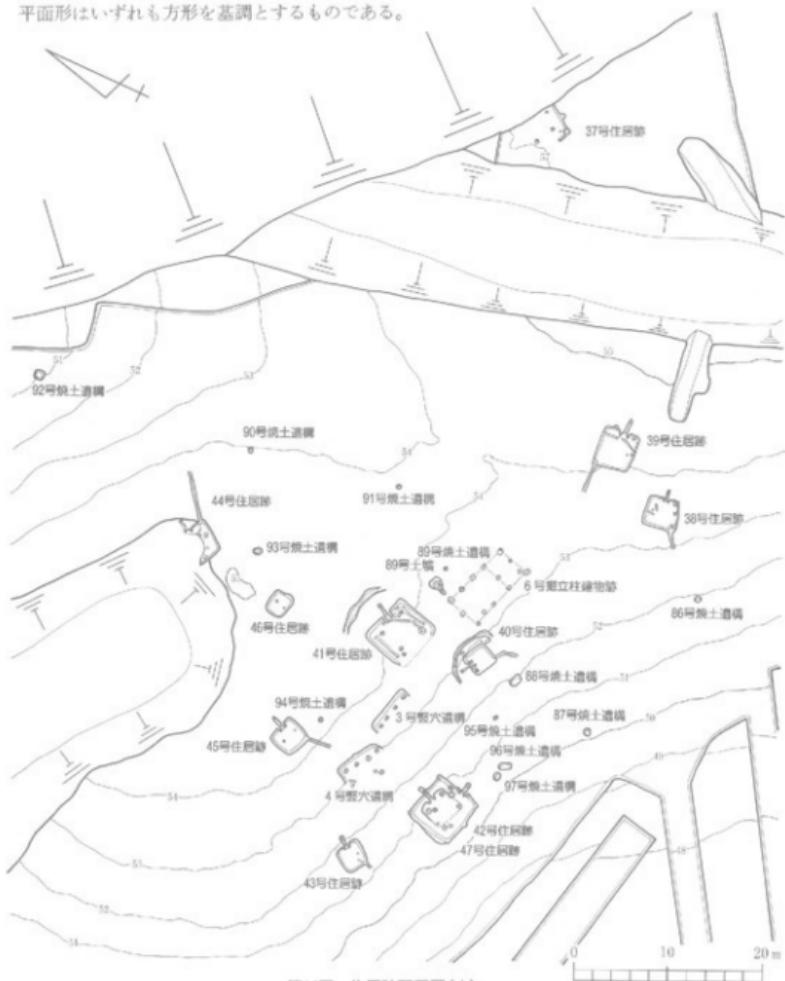
## 壺(第13図11)

体部の破片である。器形はナテ肩で、外面にロクロナデ、ケズリ、内面にロクロナデが施される。

## 2. 住居跡

堅穴住居跡は、丘陵頂部平坦面から斜面にかけて11軒、調査区西側斜面から2軒の13軒検出された(37号～49号住居跡)。

平面形はいざれも方形を基調とするものである。



第14図 住居跡配図(1)

## 37号住居跡

〔確認面〕周溝、カマドとピットだけであるが、基本層序Ⅱ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

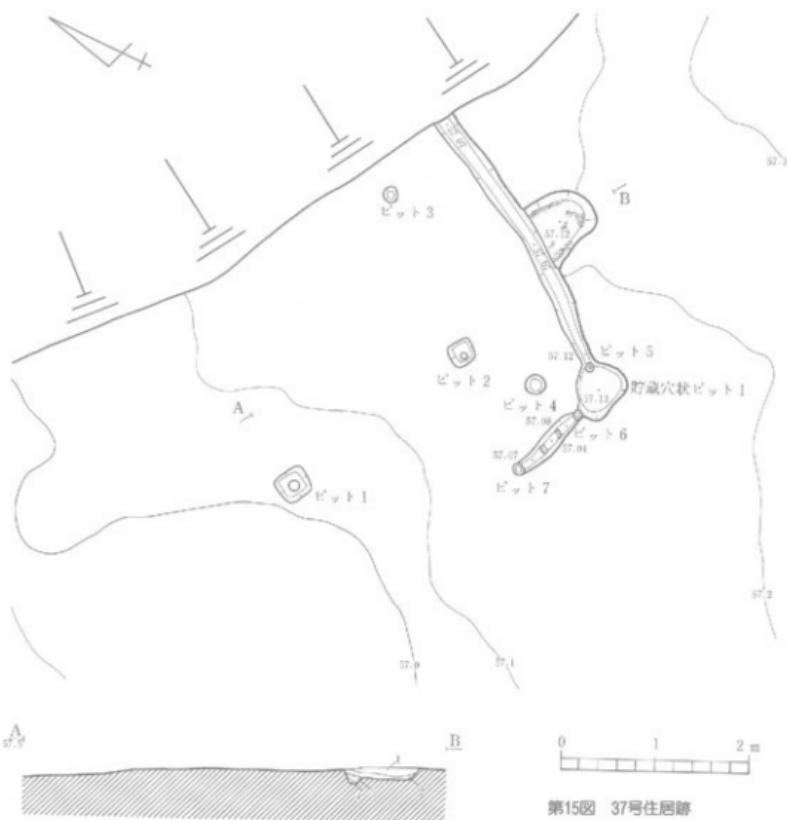
〔規模・平面形〕壁が削平されていたため、規模と平面形は不明である。

〔竪穴層位〕堆積土は検出されなかった。

〔壁〕検出されなかった。

〔床面〕検出されなかった。

〔柱穴〕7個のピットが検出された。ピット1、2は柱穴と考えられる。ピット5、6、7は



第15図 37号住居跡

壁柱穴であろう。その他は柱穴とは考えられない。

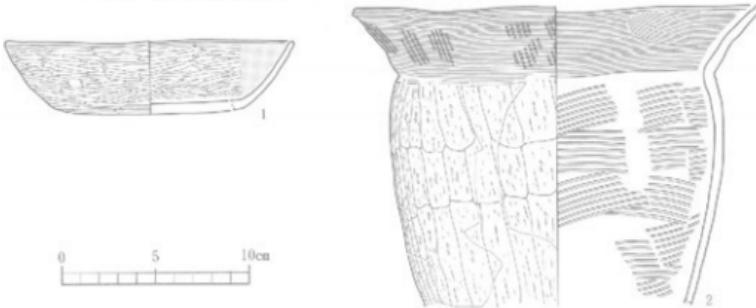
〔カマド〕 東辺の周溝から張り出した燃焼部が検出されたが、その他は削平されている。残存する燃焼部の規模は、奥行き60cm、幅72cmである。底面、奥壁、側壁内面は火熱によって赤変していた。

〔貯藏穴状ピット〕 1個検出された。周溝の南東隅に位置し、長軸60cm、短軸52cm、深さ5cm、不整椭円形である。堆積土は周溝同様、層No.3、4が堆積している。

〔周溝〕 東、および南に位置する周溝の一部が検出されたが、その他の部分は削平のため検出

No.	土色	土性	備考	堆積範囲
1	褐色YR5/2	粘土	少量の炭化物、土器を含む。	カマド
2	赤褐色5YR7/2	シルト質粘土	多量の炭化物、土器を含む。	カマド
3	褐色7.5YR5/3	シルト質粘土		
4	褐色YR5/2	粘土	微量の炭化物を含む。	カマド

第5表 37号住居跡堆積土



No.	地質	層位	外観	裏	断面	内観	寸法・概注・高さ(cm)	分類	備考
1	土壁構成	カマド底面	土質、厚さ、約2.5YR7/2	—	カマド・底面地盤、約2.5YR5/2	15.4・10.0・—	ABII		
2	土壁表面	カマド底面	ココナツ・マメ科、根、約3YR8/2	—	ココナツ・マメ科、根、約3YR8/2	21.2・—・—	AII	壁脚34-1	

第16図 37号住居跡出土遺物

## 38号住居跡

〔確認面〕 基本層序Ⅲ層から確認された。

〔重複・増改築〕 認められない。

〔規模・平面形〕 南北3.66m、東西3.36~3.90mのやや台形状の正方形である。

〔堅穴層位〕 堅穴層位は4層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序Ⅲ層、Ⅳ層からなり、最も保存の良い北東隅では49cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がるが、北壁と東壁の各一部に崩落の痕跡が認められた。

〔床面〕 住居掘り方埋土上面を床面としており、凹凸はない。床面レベルはほぼ水平である。

全体的にかたい。北半には2条の浅い溝が検出された。また、南壁下に礫が4個検出され、南西隅には白色粘土塊が認められた。

【柱穴】4個のビットが検出されたが、柱穴と断定できるものはない。

【カマド】東壁に位置しており、燃焼部、煙道部が検出された。燃焼部は奥行き80cm、幅82cmである。燃焼部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。底面には粘土岩を敷きつめて構築している。煙道部は長さ86cm、幅27cm、底面はほぼ水平である。先端からは埋出しビットが検出された。なお、煙道部は地山をトンネル状に繰り抜いたもので、いくぶん潰れているものの崩落せずに残っていた。

【貯蔵穴状ビット】2個検出された。貯蔵穴状ビット1は層№8が堆積するもので、長軸46cm、短軸44cm、深さ6cmの不整形方形である。貯蔵穴状ビット2は黒褐10YR 5/2砂質シルトが堆積するもので長軸36cm、短軸22cm、深さ4cmの長円形である。底面には火熱の痕跡が認められた。

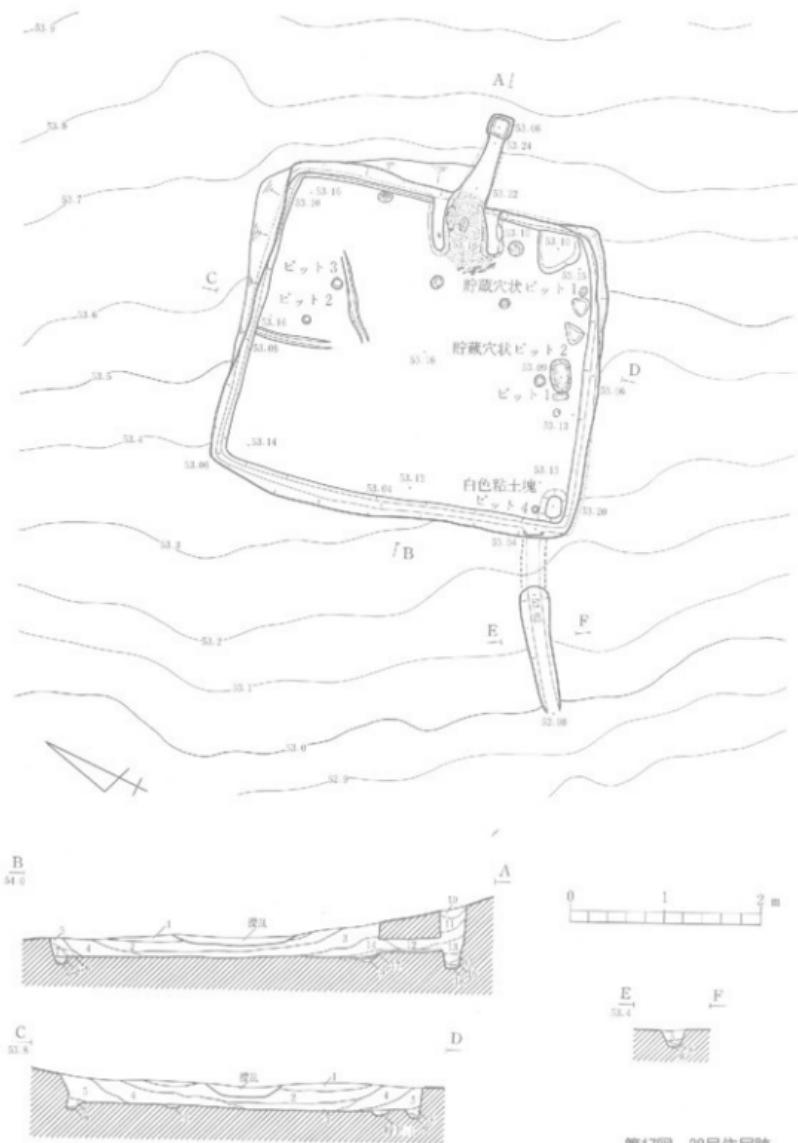
【周溝】カマド部分を除いて、壁沿いに一周する。幅16~23cm、深さ8~10cm、断面は「U」形を基本とするが、周溝下部は外側に張り出している。底面レベルはカマド両脇が最も高く、南北間に近づくにつれて低くなり、外延溝に接続する。周溝の掘り方は全周する。

【外延溝】住居の南西隅やや北側から住居外縁斜面(西)に向ってのびる。西壁から住居外0.6mの所までは地山をトンネル状に繰り抜いており、崩落せずに残存していた。長さ1.85m、トンネル部分の幅0.25m、断面は長円形である。住居から離れるにつれて底面レベルは低くなる。

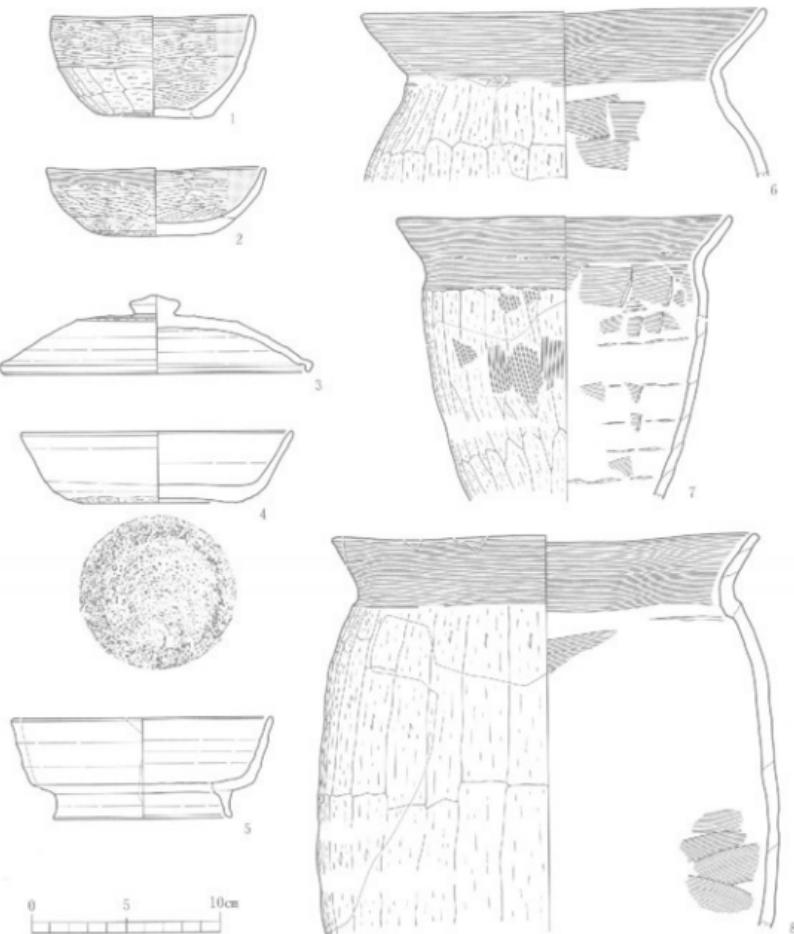
【出土遺物】床面を中心に上器の一括資料が出土した。床面直上出土の甕3点(第18図7、8、第19図9)は床面出土の甕(第18図6)にかさなって出土したもので、本住居に伴うものと考えられる。

No.	上 部	下 部	性 質	号	地質的特 徴
1	褐褐色10YR 5/2	シ ル ト	少量の炭化物を含む。		壁穴1号
2	浅黄褐色9YR 5/2	シ ル ト	浅色丸い瓦質。		壁穴2号
3	褐褐色10YR 5/2	シ ル ト	少量の炭化物、灰土を含む。		壁穴3号
4	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト	黒褐色YR 5/2灰土を含む。チャコリ質。		壁穴4号
5	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト	少量の炭化物を含む。		
6	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト	少量の炭化物、灰土を含む。		
7	褐褐色5YR 5/2	粘 土			
8	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト	少量の炭化物を含む。		
9	褐褐色5YR 5/2	粘 土	少量の炭化物を含む。		
10	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト	少量の炭化物を含む。		
11	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト	少量の炭化物。		
12	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト			
13	褐褐色5YR 5/2	粘 土			
14	褐褐色10YR 5/2	粘 土	褐褐色10YR 5/2灰土をアーチ状に含む。今後の灰土を含む。		
15	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト			
16	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト			
17	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト	多量の炭化物、灰土を含む。		
18	褐褐色5YR 5/2	シ ル ト	少量の炭化物、灰土を含む。		

第6表 38号住居跡堆積土



第17図 38号住居跡



No.	種類	層位	外	内	部	口径	底径	鉢高(cm)	分類	備考
1	土器	床面	コナツ・縁り、鉢5YR <sub>5/2</sub>	縁り	コナツ・黑色粘土、加7.5YR <sub>7/2</sub>	19.8	3.9	3.5	A I	図版34-2
2	土器	床面	コナツ・コナツ・縁り、鉢5YR <sub>5/2</sub>	縁り	コナツ・黑色粘土、加7.5YR <sub>7/2</sub>	11.6	6.1	3.7	A II	図版34-3
3	瓦器	床面	コナツ・縁り、鉢5YR <sub>5/2</sub>	——	コナツ・灰白5Y <sub>7/1</sub>	16.8	——	4.2	A	図版31-8
4	瓦器	床面	コナツ・縁り、鉢5YR <sub>5/2</sub>	四脚丸足・縁り	コナツ・色調外壁と同じ	14.5	8.3	3.8	A II	図版31-5
5	瓦器	床面	コナツ・縁り、鉢5YR <sub>5/2</sub>	——	コナツ・色調外壁と同じ	14.0	9.0	3.4	A	図版34-6
6	瓦器	底面	コナツ・縁り、底5-7.5YR <sub>5/2</sub>	——	コナツ・ヘリツ、色調外壁と同じ	21.4	——	AV3		
7	土器	床面以上	コナツ・ヘリツ・縁り、ICAP-加7.5YR <sub>5/2</sub>	——	コナツ・ハタケ・ヘリツ、色調外壁と同じ	17.8	——	A I		
8	土器	床面以上	コナツ・縁り、鉢5YR <sub>5/2</sub>	——	コナツ・ヘリツ、色調外壁と同じ	22.6	——	AV3		

第18図 38号住居跡出土遺物(1)



第19図 38号住居跡出土遺物(2)

### ■ 39号住居跡 ■

〔確認面〕基本層序Ⅲ層から確認された。

〔重複・増改築〕住居東壁から90cm前後離れた内側に、東壁に並行して走る周溝が検出された。さらにその東側に旧カマド底面と思われる焼け面と、住居外に煙出しビットが検出されている。また旧周溝と周溝の間は、床面より10cm前後高いテラス状となっている。以上のことから、旧住居の範囲は内側周溝まで、東側を増築したものと考えられる。

〔規模・平面形〕拡張前の規模は南北4.00m、東西3.60mの長方形である。拡張後は東西4.23mで、長方形となっている。

〔豊穴層位〕豊穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

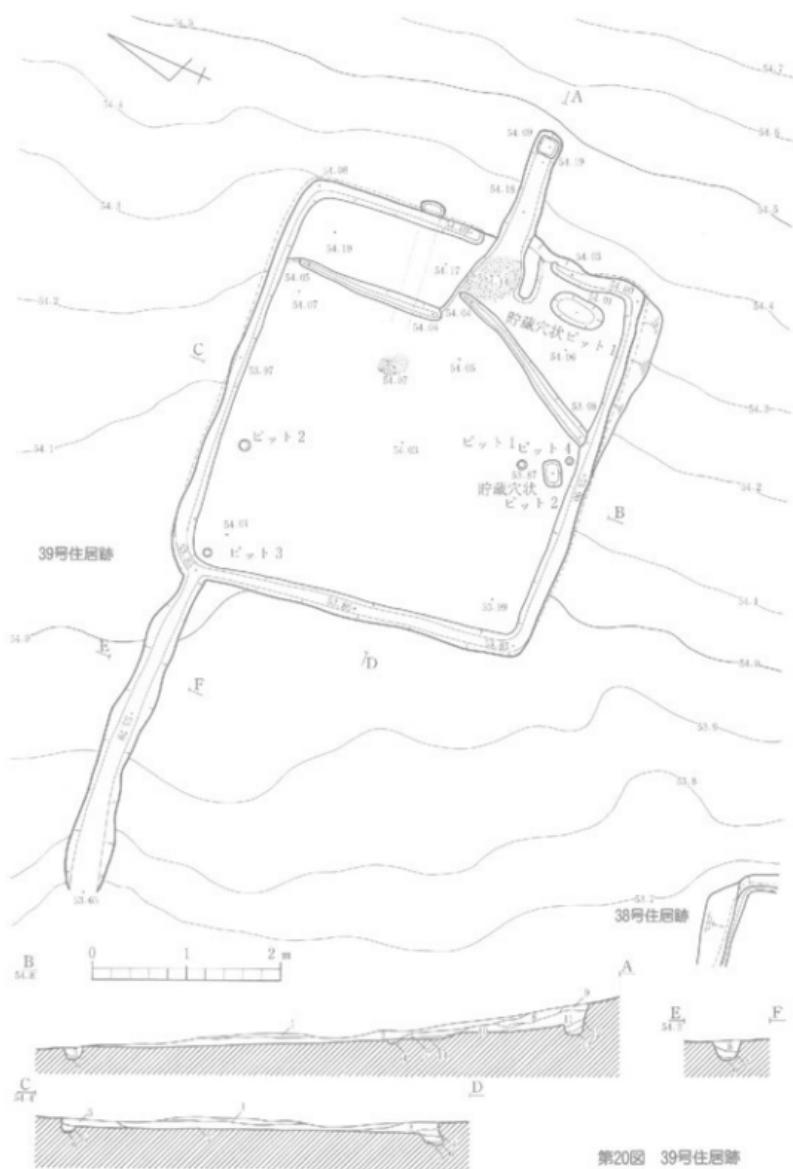
〔壁〕基本層序Ⅲ層、Ⅳ層からなり、最も保存の良い北東隅では32cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がるが、南壁の一部に崩落の痕跡が認められた。

〔床面〕Ⅳ層を床面としており、凹凸はない。東壁側拡張部分は、カマドから北側が10cm前後高いテラス状になっている。床面レベルはほぼ水平である。全体的にかたい。床面にはカマド燃焼部のところから南壁中央に向ってのびる溝が走っており、周溝に接続する。その底面レベルはカマド燃焼部の方が高く、周溝に近づくにつれて低くなる。周溝に接続する部分では8cmの比高差がある。

〔柱穴〕4個のビットが検出されたが、柱穴と判断できるものはない。

〔カマド〕東壁に位置しており、燃焼部、煙道部が検出された。燃焼部は奥行き59cm、幅56cmである。燃焼部内部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。煙道部は長さ134cm、幅32cm、床面レベルは先端に近づくにつれてやや高くなる。先端からは、煙出しビットが検出された。拡張前のカマドも東壁に位置しており、燃焼部底面の痕跡と先端の煙出しビットのみが残存していた。規模は不明である。

〔貯蔵穴状ビット〕2個検出された。貯蔵穴状ビット1は層No.5が堆積するもので、長軸58cm、短軸30cm、深さ5cmの長円形である。貯蔵穴状ビット2は暗褐10YR 5/2砂質シルトが堆積す



第20図 39号住居跡



第21図 39号住居跡出土遺物

No.	土色	土性	層	考	堆積場所
1	浅褐色10YR 5/2	砂質灰褐色。	外		
2	褐色5YR 5/2	砂質シルト。有機物10YR 5/2粘土を夾むを含む。少量の炭化物を含む。	床面	屋内1層	
3	褐色7.5YR 5/2	シルト質粘土。有機物10YR 5/2粘土を夾むを含む。少量の炭化物を含む。	壁	屋内2層	
4	褐色7.5YR 5/2	シルト質粘土。少量の炭化物を含む。	壁	屋内3層	
5	褐色7.5YR 5/2	シルト質粘土。少量の炭化物を含む。	床面		
6	有機物10YR 5/2	粘土質砂	床面		
7	褐色10YR 5/2	シルト。少量の炭化物を含む。	壁		
8	有機物10YR 5/2	粘土。有機物基。	床面		
9	褐色5YR 5/2	粘土。	壁		
10	褐色7.5YR 5/2	シルト。シルトの炭化物を含む。	床面		
11	褐色7.5YR 5/2	シルト。	壁		
12	褐色7.5YR 5/2	粘土。	床面		
13	有機物7.5YR 5/2	シルトの炭化物を含む。	壁		
14	褐色7.5YR 5/2	粘土。少量の炭化物を含む。	床面		

第7表 39号住居跡堆積土

外延溝に接続する。周溝の掘り方は認められない。

〔外延溝〕 住居の北西隅から住居外縁斜面(西)に向ってのびる。長さ3.56m、幅0.46m。断面は「U」形である。住居から離れるにつれて底面レベルは低くなる。

〔出土遺物〕 床面、層No.3から土師器甕の底部実測資料が出土した。

## 40号住居跡

〔確認面〕 基本層序Ⅲ層から確認された。

〔重複・増改築〕 認められない。

〔規模・平面形〕 南北2.60m、東西2.96m、少し歪んでいるが、ほぼ正方形である。

〔堅穴層位〕 堅穴層位は4層に大別される。いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序Ⅲ層、V層からなり、最も保存の良い北西隅では53cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

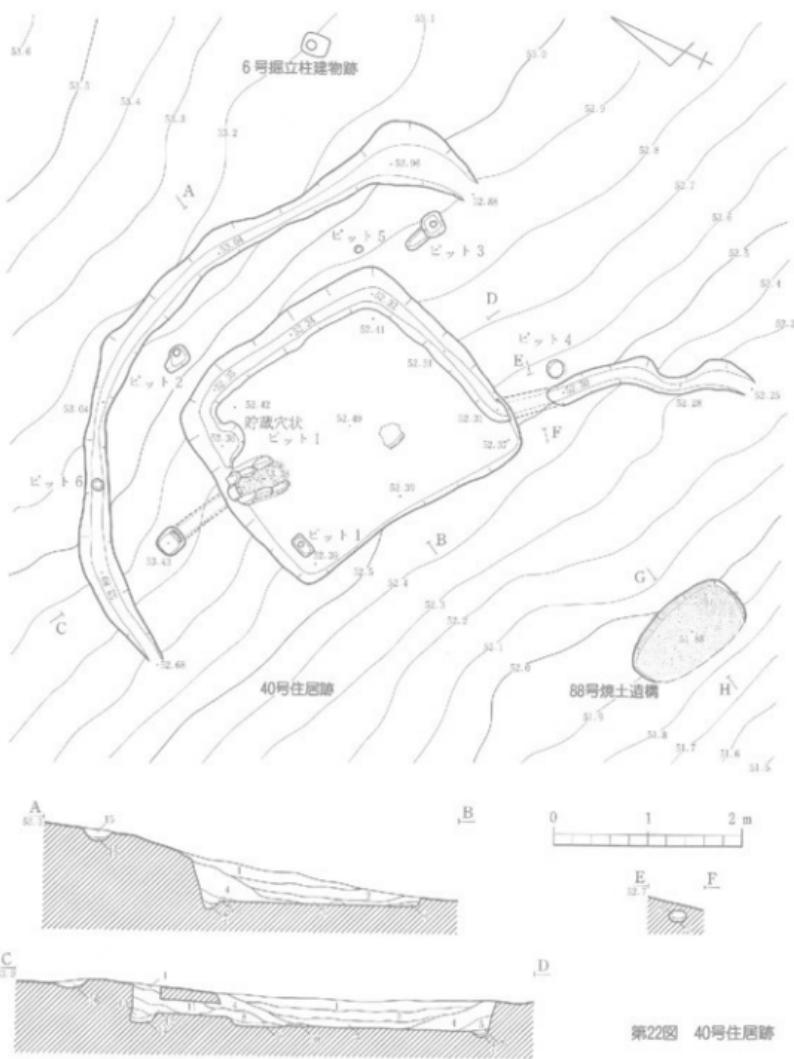
〔床面〕 基本層序Ⅲ層、V層を床面をしており、凹凸はなく、床面レベルは南東隅に向ってやや低くなっている。住居跡中央部から北壁にかけてやわらかいが、南半はかたくしまっている。

〔柱穴〕 ピットが住居内から1個、住居外から5個検出された。ピット1、2、3は掘り方、柱痕跡共に認められることから柱穴と考えられる。ピット4、5、6は柱穴とは考えられない。

るもので、長軸30cm、短軸20cm、深さ15cmの隅丸方形を呈する。

〔周溝〕 カマド部分を除いて、壁沿いに一周する。幅16~24cm、深さ8~16cm、断面は「U」形を基本とするが、周溝下部は外側に張り出している。底面レベルはカマド両脇が最も高く、北西隅下に近づくにつれて低くなり、

〔カマド〕西壁に位置しており、燃焼部、煙道部が検出された。燃焼部は奥行き52cm、幅26cm、側壁は6個の石を組み合させて築いている。燃焼部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。煙道部は長さ103cm、幅20cm、底面はほぼ水平である。先端からは煙出しピットが検出



第22図 40号住居跡

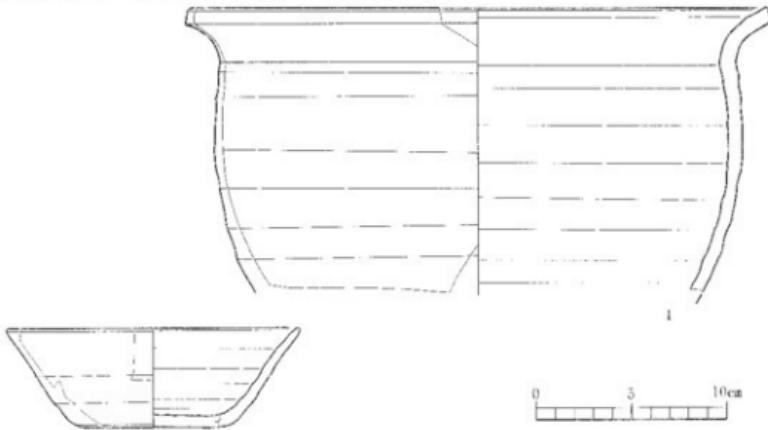
された。なお、煙道部は地山をトンネル状に繰り抜いたもので、崩落せずに残っていた。

〔貯蔵穴状ピット〕 1 個検出された。貯蔵穴状ピット 1 は周溝に接続するもので、層 No. 7 が堆積している。長軸 39cm、短軸 22cm(周溝幅は除く)、深さ 6 cm の半円形である。

〔周溝〕 カマドから北側の西壁下、北壁下、東壁下にめぐり、南東隅で外延溝へつなぐ。幅 24~40cm、深さ 6~9 cm、断面は「U」形である。底面レベルはカマド脇が最も高く、南東隅に近づくにつれて低くなる。周溝の掘り方は認められない。

〔外延溝〕 住居南東隅から住居外急斜面(南)に向ってのびる。東壁から 48cm の所までは地山をトンネル状に繰り抜いており、崩落せずに残存していた。長さ 2.60m、幅 0.22m、断面は長円形である。住居から離れるにつれて底面レベルは低くなる。

〔外周溝〕 西~東の幅 6.12m、住居の三方を囲み、丘陵急斜面(南)に対して開口しており、



第23図 40号住居跡出土遺物

平面形は「一」形をしている。溝の最大幅0.68m、保存の良い西辺では0.11mの深さで残存しており、断面形は「U」形である。底面レベルは北辺壁下が最も高く、開口部に近づくにつれて低くなる。また、西辺中にピットが1個検出された。

〔出土遺物〕床面から須恵器鉢、層No.4から須恵器壺が出土した。

## ■ 41号住居跡

〔確認面〕基本層序Ⅲ層、およびV層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕北壁、東壁、西壁と南壁の一部が検出されたが、南壁のほとんどが削平のため検出されなかった。東西5.68m、南北5.50mのほぼ正方形である。

〔堅穴層位〕堅穴層位は1層で、自然堆積層である。

〔壁〕基本層序Ⅲ層、V層からなり、最も保存の良い北西隅では25cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がるが、北壁から西壁にかけて崩落の痕跡が認められた。

〔床面〕基本層序Ⅲ層、V層を床面としており、凹凸はない。南側にやや傾斜している。V層中の礫が多数見られ、かたい。床面には東壁、西壁沿いに幅18cm、深さ8cm、「一」形の断面を呈する溝が検出されたが、いずれも壁から60cm前後離れて並行するものである。底面レベルは床面と同様で、層No.1が堆積していた。また、カマド燃焼部からピット2に向ってのびる溝が走っており、ピット2に接続している。幅15~18cm、深さ6~8cmで、カマド燃焼部が最も高く、ピット2に近づくにつれて低くなる。

〔柱穴〕7個のピットが検出された。ピット1、2、3、4、5、6は掘り方と柱痕跡が区別された。ピット7は柱穴とは考えられない。ピット1、2、3、4は主柱穴と考えられる。

〔カマド〕北壁に位置しており、燃焼部、煙道部が検出された。燃焼部は奥行86cm、幅65cmである。燃焼部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。また、両側壁および底面周溝掘り方の範囲に土師器甕を用いて構築している。さらに、底面にはいくつかの粘板岩を數きつめていた。煙道部は長さ123cm、幅40cm、底面は先端に近づくにつれて高くなる。先端からは押し出しピットが検出された。

〔貯蔵穴状ピット〕1個検出された。

貯蔵穴状ピット1は層No.1が堆積するもので、長軸38cm、短軸36cmの隅丸方形である。北側で周溝と接続している。

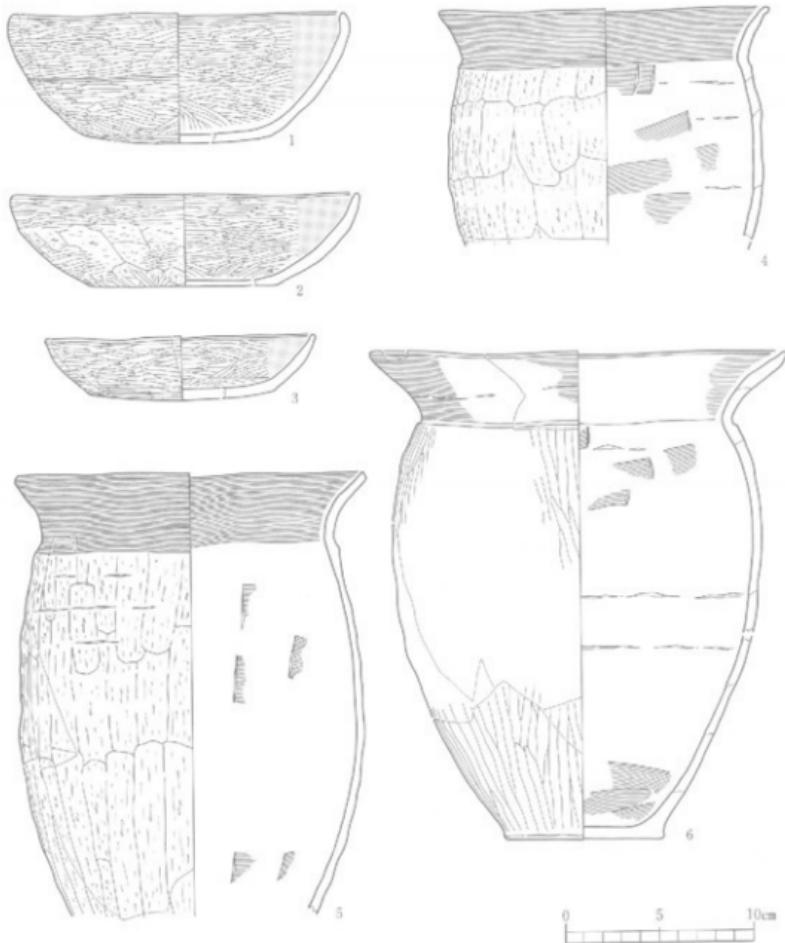
〔周溝〕カマド部分と削平された南壁

下を除いて、壁沿いにめぐる。幅12~25

No.	上　　色	土　性	種	考	地質記述
1	黒褐色YR5/2	シルト	上部に黑色の火山灰をわずかに含む。		堅穴1層
2	灰褐色YR5/1	休耕シルト	黒葉の炭化物を含む。		
3	暗赤褐色YR3/2	シルト			
4	暗赤褐色YR3/2	粘	土	下面に少量の炭化物、礫土を含む。	カマド
5	褐色YR4/1	砂質シルト			
6	褐色YR3/2	シルト	少量の炭化物、礫土を含む。		
7	暗赤褐色YR3/2	粘	土	縫土を多量に含む。	
8	褐10YR4/2	粘	土	表面YR5/1粘土をブロック状に含む。	周溝
9	灰褐色YR5/1	粘	土	表面YR5/1粘土をブロック状に含む。	
10	暗赤褐色YR3/2	砂質シルト			外周溝

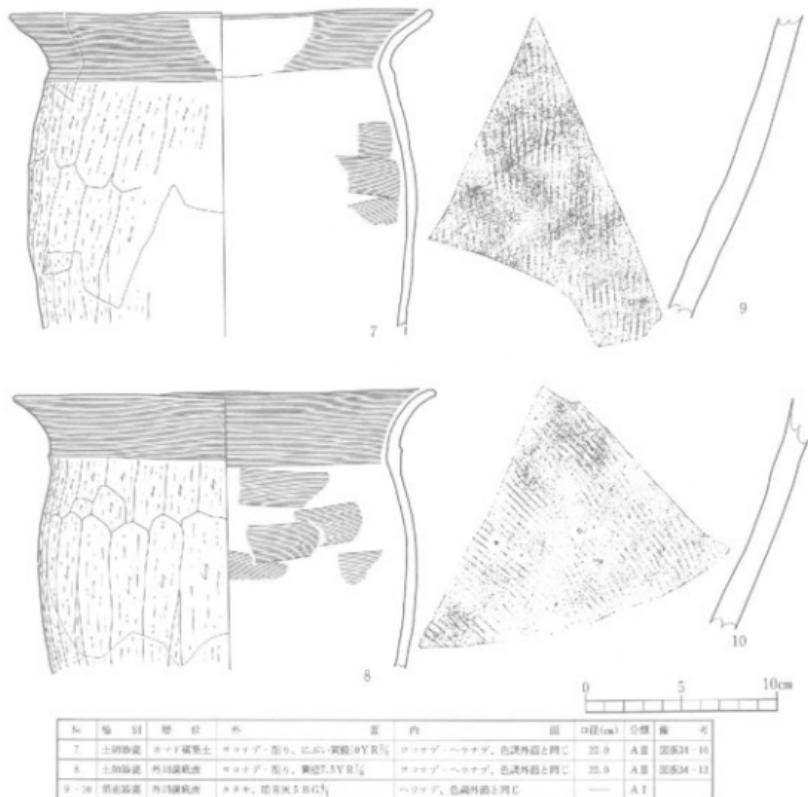
第9表 41号住居跡堆積土

第24図 41号住居



編 號	遺 物 名	形 狀	底 部	内 面	口徑 (m)	底徑 (m)	高さ (m)	分類	性 質
1	土器陶片 実質	「タケ」。K-Cu-鉄達10YR <sup>7/2</sup>	「ガラ」	「ガラ」。黒色粘理、黒3YR <sup>7/2</sup>	18.1	9.8	4.9	AII	住居跡4-7
2	土器陶片 片断陶器地土	「タケ」。頭付。3YR <sup>7/2</sup>	「ガラ」	「ガラ」。黑色粘理、黒3YR <sup>7/2</sup>	18.4	9.8	4.9	AII	住居跡4-8
3	土器陶片 片断陶器地土	「タケ」。頭付。5YR <sup>7/2</sup>	「ガラ」	「ガラ」。黑色粘理、黒3YR <sup>7/2</sup>	14.4	9.8	3.4	AII	住居跡4-9
4	土器陶片 斜面底土	「ココナツ」形。高さ7.5YR <sup>7/2</sup>	「ココナツ」ヘリナギ	「ココナツ」ヘリナギ。色潤外壁と同上	17.6	—	—	AII	住居跡4-11
5	土器器蓋 カマド器蓋上	「ココナツ」形。高さ7.5YR <sup>7/2</sup>	—	「ココナツ」ヘリナギ。色潤外壁と同上	18.7	—	—	AII	住居跡4-14
6	土器器蓋 カマド器蓋上	「ココナツ」形。K白3.5YR <sup>7/2</sup>	「ガラ」	「ココナツ」ヘリナギ。浅黄10YR <sup>7/2</sup>	22.6	9.4	26.1	A II	住居跡4-12

第25図 41号住居跡出土遺物(1)



第26図 41号住居跡出土遺物(2)

cm、深さ2~6cm、断面は「U」形を基本とするが、周溝下部は外側に張り出している。底面レベルは北西隅が最も高く、南東隅に近づくにつれて低くなる。周溝掘り方は全周するものと思われる。

〔外周溝〕西~東の幅6.85m、住居の北辺側を囲み、丘陵斜面(南)に対して開口しており、平面形は「一」形をしている。溝の最大幅0.98m、深さ7cmで残存しており、断面形は「一」形である。底面レベルは北西側が最も高く、開口部に近づくにつれて低くなる。

〔出土遺物〕床面、外周溝底面、カマド構築土から土器の一括資料が出上した。

## 42号住居跡

〔確認面〕発掘前、住居跡は円形の窪地として観察された。V層から確認されたが、中央部は根による擾乱をうけている。

〔重複・増改築〕47号住居跡と重複しており、本住居跡床面貼床下から47号住居跡が検出されたことから、本住居の方が新しい。

〔規模・平面形〕南北5.39m、東西5.61mのほぼ正方形である。

〔竪穴層位〕竪穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序V層からなり、最も保存の良い北壁下では52cmの高さで残存している。床から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕住居掘り方埴土上面を床面としており、凹凸はない。床面レベルは南辺に近づくにつれて低くなる。全体的に軟らかい。南辺西側に白色粘土塊が検出された。

〔柱穴〕16個のビットが検出された。ビット1、2、3、4、5、6、7、8、9、10は掘り方と柱痕跡が区別され、柱穴と考えられる。その他は柱穴とは考えられない。ビット1、2、3、4は主柱穴と考えられる。ビット5、6、7、8、9、10は壁からさらに外側に張り出した壁柱穴である。

〔カマド〕東壁に位置しており、燃焼部、煙道部が検出された。燃焼部は奥行き82cm、幅82cmである。燃焼部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。煙道部は長さ100cm、幅28cm、底面は水平である。先端からは煙出しビットが検出された。

〔貯蔵穴状ビット〕2個検出された。貯蔵穴状ビット1は暗褐色10YR<sub>5/2</sub>砂質シルトが堆積するもので、長軸88cm、短軸86cmの隅丸方形である。底面および壁の各一部に火熱の痕跡が認められた。貯蔵穴状ビット2は層No.6が

堆積するもので長軸58cm、短軸48cmの梢円形である。底面から大礫が出土している。

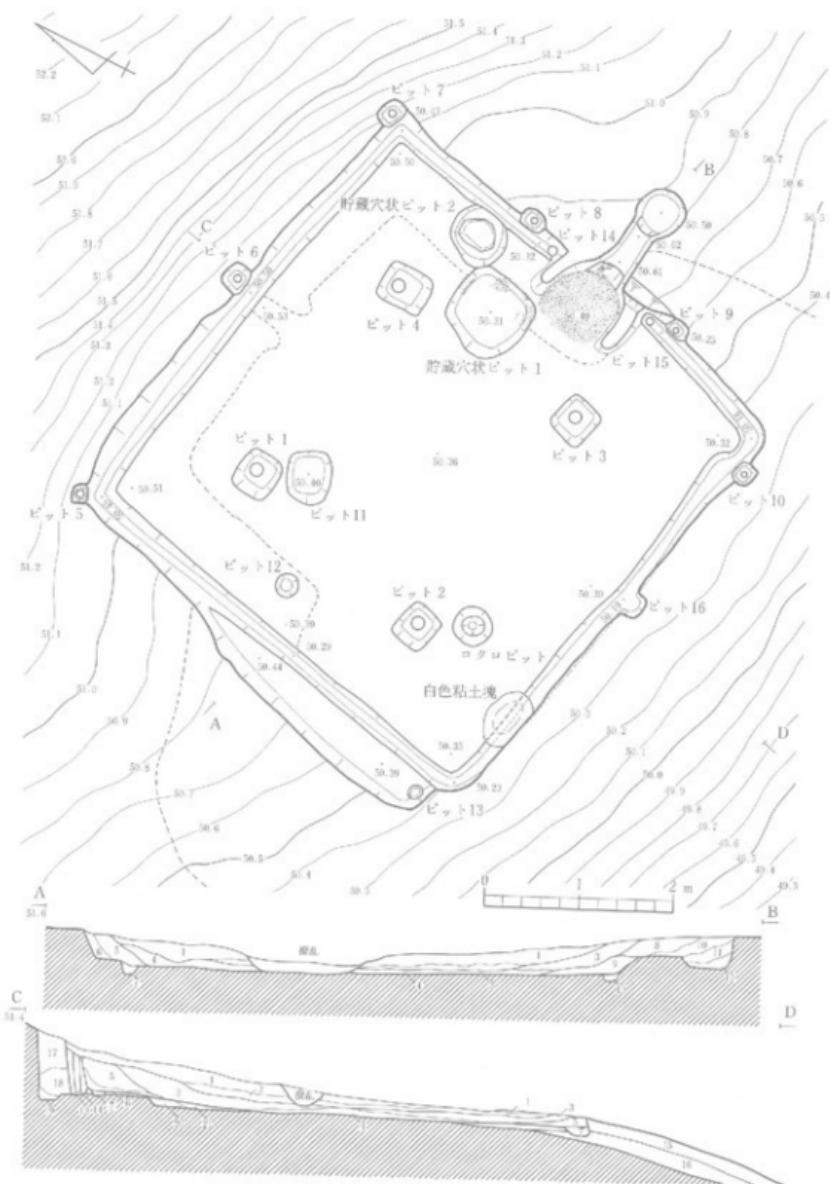
〔ロクロビット〕1個検出された。

径39cmの円形で断面「V」形である。

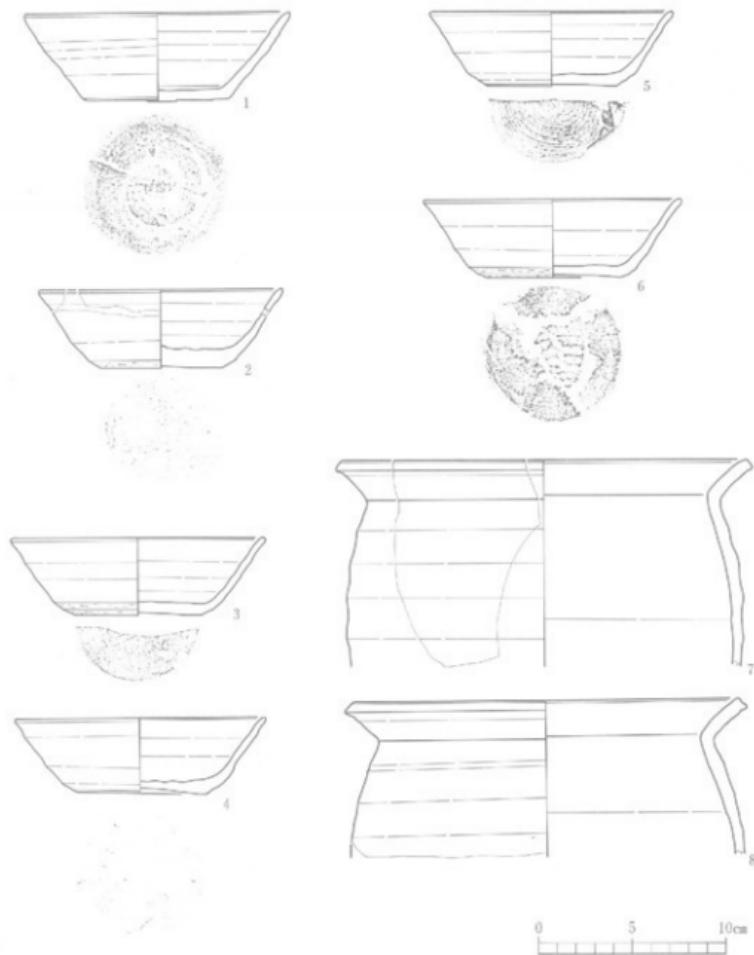
埋土は2層に分けられ、上層は暗褐色10YR<sub>5/2</sub>砂質シルトで、多量の炭化物、焼土を含んでいる。下層は褐10YR<sub>5/2</sub>シルトである。上層と下層の間に須恵器甕(第29図11)が埋められ

No.	土 色	土 性	種	考	堆積層
1	暗褐色10YR <sub>5/2</sub>	シ ルト	少量の炭化物を含む。		竪穴1層
2	浅黄褐色10YR <sub>5/2</sub>	シ ルト	灰白色大山灰層。		
3	淡褐色10YR <sub>5/2</sub>	砂質シルト	少量の炭化物、焼土を含む。		竪穴2層
4	褐7.5YR <sub>5/2</sub>	シルト質砂	褐褐色10YR <sub>5/2</sub> 粘土層のA-ゾーン法に含む。		
5	褐7.5YR <sub>5/2</sub>	シ ルト	少量の炭化物を含む。		竪穴3層
6	褐7.5YR <sub>5/2</sub>	シ ルト	少量の炭化物、焼土を含む。		
7	褐7.5YR <sub>5/2</sub>	粘 土			周 壁
8	褐7.5YR <sub>5/2</sub>	砂	少量の炭化物を含む。		
9	褐7.5YR <sub>5/2</sub>	シ ルト質砂			
10	褐褐色7.5YR <sub>5/2</sub>	シ ルト質砂			カマド
11	褐7.5YR <sub>5/2</sub>	シ ルト			
12	褐褐色7.5YR <sub>5/2</sub>	砂質シルト			
13	棕褐色7.5YR <sub>5/2</sub>	砂質シルト	多量の炭化物を含む。		V-1
14	褐褐色10YR <sub>5/2</sub>	シ ルト			
15	褐褐色10YR <sub>5/2</sub>	粘 土	褐褐色10YR <sub>5/2</sub> 粘土層をブロック状に含む。		壁 地
16	褐褐色7.5YR <sub>5/2</sub>	粘 土			田 美 土

第10表 42号住居跡堆積土

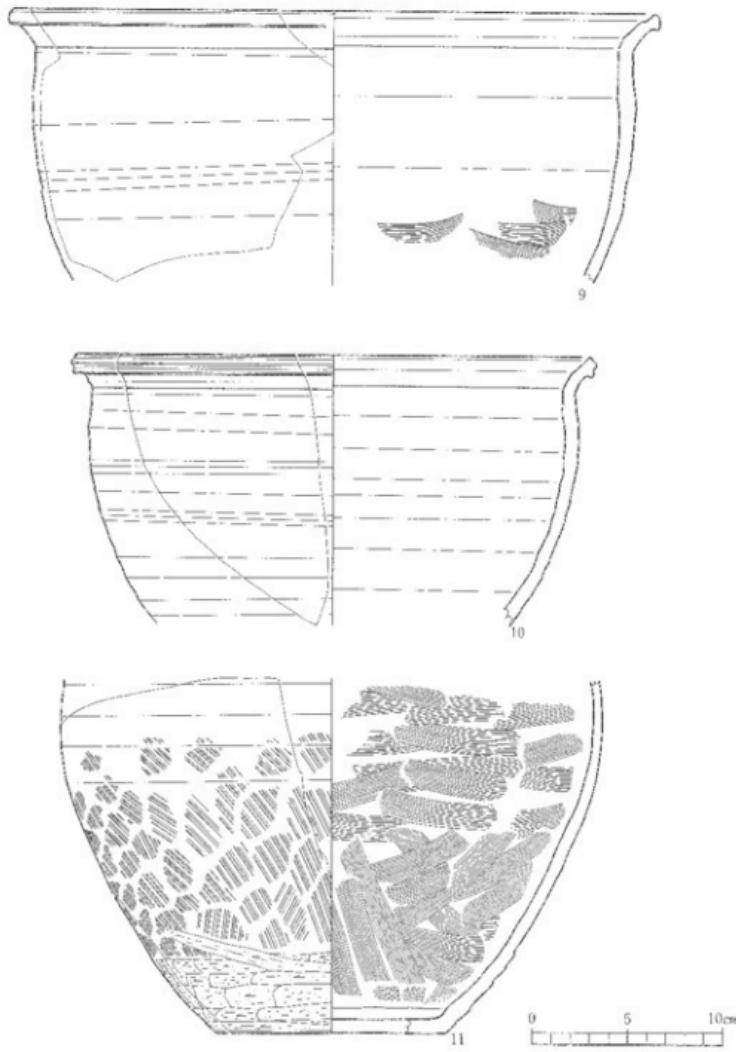


第27図 42号住居跡



No.	種類	層位	外 形	底 部	内 部	直 径	口径	高さ(cm)	分類	備考
1	栗芯陶杯	床面	ロクロナガ, 横筋R10G Y1	回転ヘラ型	ロクロナガ, 色調外面と同じ	14.2	7.9	8.7	B	HAKO-1
2	栗芯陶杯	厨窓穴抜び下2低窓	ロクロナガ, 回転頭リ, 横筋R7.5Y5	回転脚リ	ロクロナガ, 色調外面と同じ	13.0	6.3	8.7	CII	
3	栗芯陶杯	床面	ロクロナガ, 回転頭リ, 横筋R10G Y1	回転脚リ	ロクロナガ, 色調外面と同じ	13.4	6.7	8.1	CII	HAKO-2
4	栗芯陶杯	床面	ロクロナガ, 横筋2.5Y5	切欠き切	ロクロナガ, 色調外面と同じ	13.4	6.9	4.1	CII	HAKO-3
5	栗芯陶杯	壁際底面	ロクロナガ, 横筋2.5Y5	切欠き切	ロクロナガ, 色調外面と同じ	13.0	6.8	4.0	CII	HAKO-4
6	赤燒き土器	床面	ロクロナガ, 回転頭リ, 横筋2.5YR5	直立素切	ロクロナガ, 色調外面と同じ	13.8	7.2	4.2	A	HAKO-5
7	土器破片	厨窓穴抜び下1	ロクロナガ, 横筋2.5YR5	——	ロクロナガ, 色調外面と同じ	22.4	——	——	BB	
8	土器破片	壁際2	ロクロナガ, 横筋10YR5	——	ロクロナガ, 色調外面と同じ	21.4	——	——	BB	

第28図 42号住居跡出土遺物(1)



第29図 42号住居跡出土遺物(2)

名	號	形	外	内	基	口径・底径・高さ	厚さ(cm)	分類	備考
9	1号器物	灰瓦	ロマニア、横2.5×縦7.5	—	セメントアーチアイド、色濃紅褐色と灰じ	34.2×—×—	—	A	回B25-7
10	2号器物	灰瓦	ロマニア、横2.5×縦7.5	—	セメントアーチアイド、色濃紅褐色と灰じ	27.4×—×—	—	A16	回B25-6
11	3号器物	灰瓦	ロマニア、横2.5×縦7.5	底6.5	セメントアーチアイド、色濃紅褐色と灰じ	12.0—29.5	—	A1	回B25-8

ていた。

〔周溝〕カマド部分を除いて壁沿いに一周する。西壁南北では、壁から50cm前後離れて並行している。幅18~39cm、深さ3~14cm、断面「U」形である。底面レベルは北西隅が最も高く、南東隅に近づくにつれて低くなる。

〔周囲の状況〕住居外、南壁から壁外に盛土状の高まりが認められた。調査の最終段階で、住居南半からつづく幅50cmのトレンチを設定し、その土層の観察を行なった。その結果、黄褐色のシルト質粘土層(焼土、炭化物を含む)が旧表土の上に堆積していることがわかった。この土は住居構築時整地層と思われる。

〔出土遺物〕床面を中心に土器の一括資料が出土した。

43号住居跡

〔確認面〕 基本順序V順から確認された。

〔重複・増改築〕住居の覆土を98号焼土造構が切っている。

〔規模：平面形〕南北2.86m、東西3.05mの正方形である。

〔堅牢部位〕堅牢部位は3箇に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序V層からなり、最も保存の良い北西隅では55cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

【床面】基本層序V層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは南東隅になるにつれてわずかに低くなる。全体的にかたい。床面中央やや南東よりから南東隅に向ってのびる溝が検出された。溝は南東隅で周溝と接続し、外延溝へつなげている。カマド東脇から大礫が1個検出された。

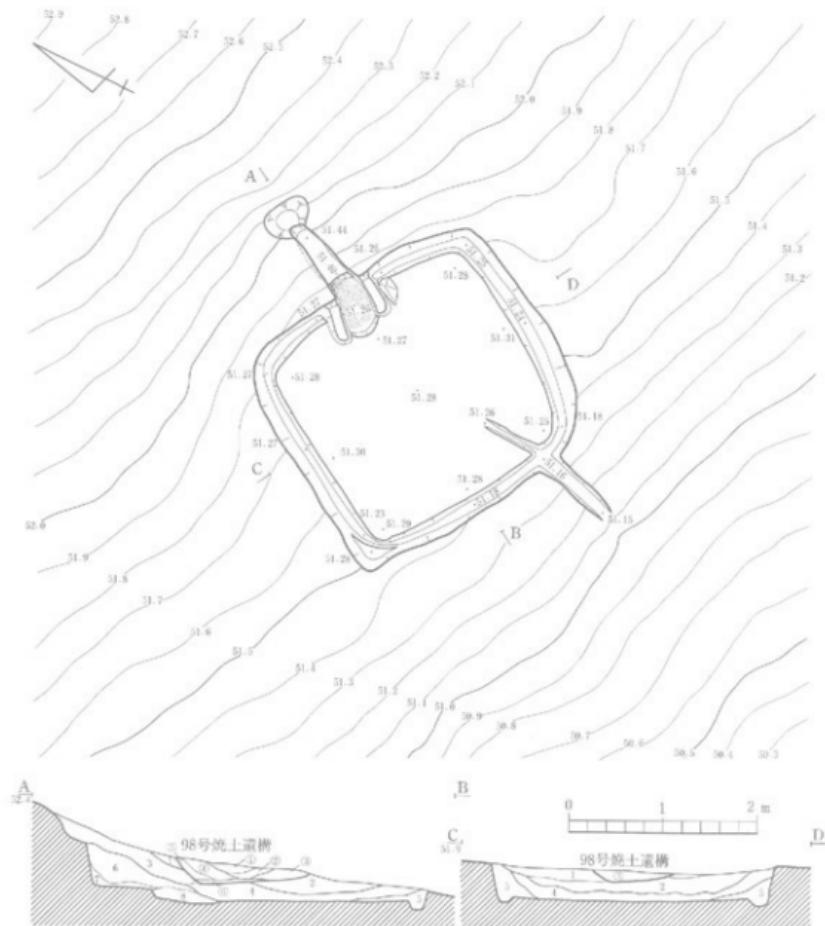
[柱穴] ピットが1個検出されたが、柱穴とは断定できない。

【カマド】北壁に位置しており、燃焼部、煙道部が検出された。燃焼部は奥行き70cm、幅40cmである。燃焼部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。煙道部は長さ68cm(崩落部分け合きない)、幅30cm、底面は水平である。

〔周溝〕カマド部分を除いて壁沿いに一周する。幅17~32cm、深さ2~10cm、断面「U」形である。底面レベルはカマド両脇が最も高く、南東隅に近づくにつれて低くなる。住居南西隅では壁から離れて右腰をもって屈曲する。

〔外延溝〕住居跡南東隅やや西側から住居外急斜面(南)に向ってのびる。長さ0.86m、幅0.22m。断面は「U」形である。住居から離れるにつれて底面レベルは低くなる。

〔出土遺物〕 図化できなかったが、床面から土師器壺の細片が出土している。壺は非黒クロ成形で、丸底のものである。体部中央に軽い段をもち、口縁部まで内窪する。器面は段を境に上



No.	土色	土性	鉱物	考	準拠範囲
1	暗褐色10YR 3/1	シルト			
2	黄褐色5YR 5/2	シルト	黄色火成岩屑。		第6・7層
3	褐色7.5YR 5/3	シルト			第6・7層
4	4.5-7.5YR 5/5V	シルト			
5	黒褐色10YR 3/2	シルト	炭化物を含む。		第6・7層
6	黒褐色10YR 3/2	シルト	黒褐色火成岩屑をブロッキングに含む。炭化物を含む。		
7	褐7.5YR 5/3	シルト	少量の炭化物を含む。		カット
8	褐7.5YR 5/3	シルト	炭化物、透水性を多く含む。		

番	土色	土性	備考	施肥効果
1	褐褐色 5YR 7/2	シルト		無効
2	明褐色 5YR 7/2	シルト	多量の氮化物を含む	無効
3	暗褐色 5YR 7/2	シルト		
4	黒褐色 5YR 7/1	シルト	少量の炭化物を含む	無効
5	褐色 5YR 5/1	シルト	機械耕作を適し	
6	黒褐色 5YR 7/1	シルト	多量の炭化物を含む	無効

第30図 43号住居跡

半にミガキ、下年にケズリが施される。内面はミガキと黒色処理が認められる。

## ■ 44号住居跡 ■ ■ ■

〔確認面〕基本層序V層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕東壁全部と北壁、南壁の各一部が検出されたが、その他の部分については削平のため検出されなかった。東壁の幅は3.90m、残存する北壁、南壁の幅はそれぞれ2.44m、2.70mである。南北3.90m、東西4m前後の正方形、または長方形であると推定される。

〔堅穴層位〕堅穴層位は2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。覆土のほとんどは削平されていた。

〔壁〕基本層序V層からなり、最も保存の良い南東隅では20cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序V層を床面としており、凹凸はない、床面レベルは南壁下が最も高く、北東隅に近づくにつれて低くなる。全体的にかたい。残存するカマド前から北東隅に向ってのびる溝が検出された。溝は北東隅で周溝と接続し、外延溝へつながっている。南壁下から礫が1個検出された。

〔柱穴〕ビットが9個検出された。ビット1、2は掘り方と柱痕跡が区別され、柱穴と考えられる。その他は柱穴とは断定できない。

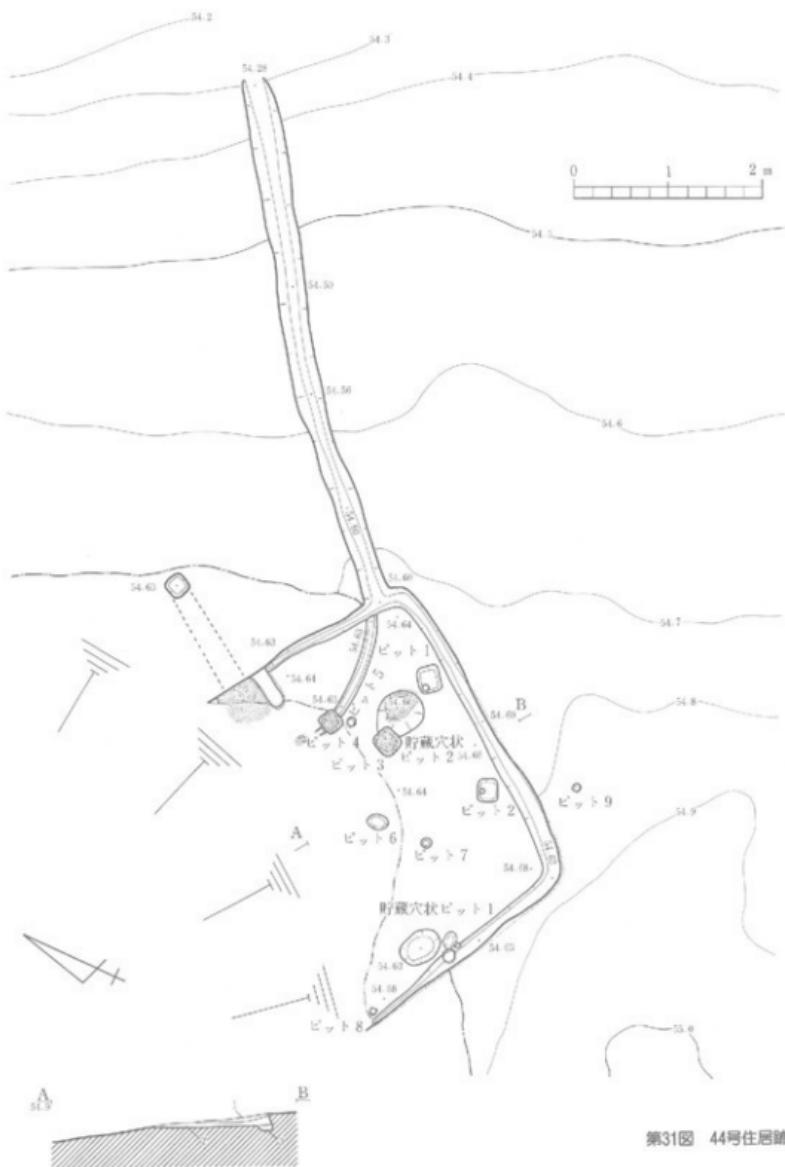
〔カマド〕北壁に位置しており、燃焼部と煙出しビットが検出されたが、その他の部分は削平のため検出されなかった。燃焼部は奥行き45cm、幅43cmである。燃焼部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。煙出しビットは燃焼部奥壁から108cm離れて住居外に位置する。

〔貯蔵穴状ビット〕2個検出された。貯蔵穴状ビット1は層No.2が堆積するもので、長軸45cm、短軸33cm、深さ5cmの長円形である。貯蔵穴状ビット2は暗赤褐色5YR5/8粘土(焼上粒、炭化物を含む)が堆積するもので、長軸52cm、短軸44cm、深さ4cmの不整形である。西側がビット3と接続し、底面は火熱の痕跡が認められる。

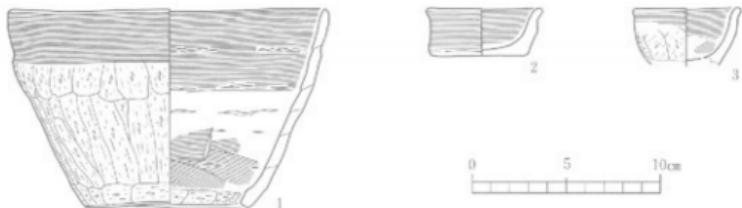
〔周溝〕東壁、残存する南壁、およびカマド部分を除いた残存する北壁沿いにめぐる。幅6~22cm、深さ2~6cm、断面は「U」形を基本とするが、周溝下部は外側に張り出している。底面レベルは残存する南西端が最も高く、北東隅に近づくにつれて低くなる。

〔外延溝〕住居跡北東隅やや東側から住居外緩斜面(北東)に向ってのびる。長さ5.71m、幅0.36m、断面は「U」形である。住居から離れるにつれて底面レベルは低くなる。

〔出土遺物〕周溝底面、およびビット3煙土から実測資料が得られた。



第31図 44号住居跡



### 第32図 44号住居跡出土遺物

45 号住居跡

〔確認面〕 基本層序 V 層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕南北2,72~3,22m、東西3,20mのやや台形状の正方形である。

〔堅穴層位〕 堅穴層位は4層に大別されるが、いずれも自然地積層である。

〔壁〕基本層序V層からなり、最も保存の良い北東隅では36cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

【床面】基本層序Ⅴ層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは北壁側が最も高く、南東隅になるにつれてやや低くなる。全体的にかたい。

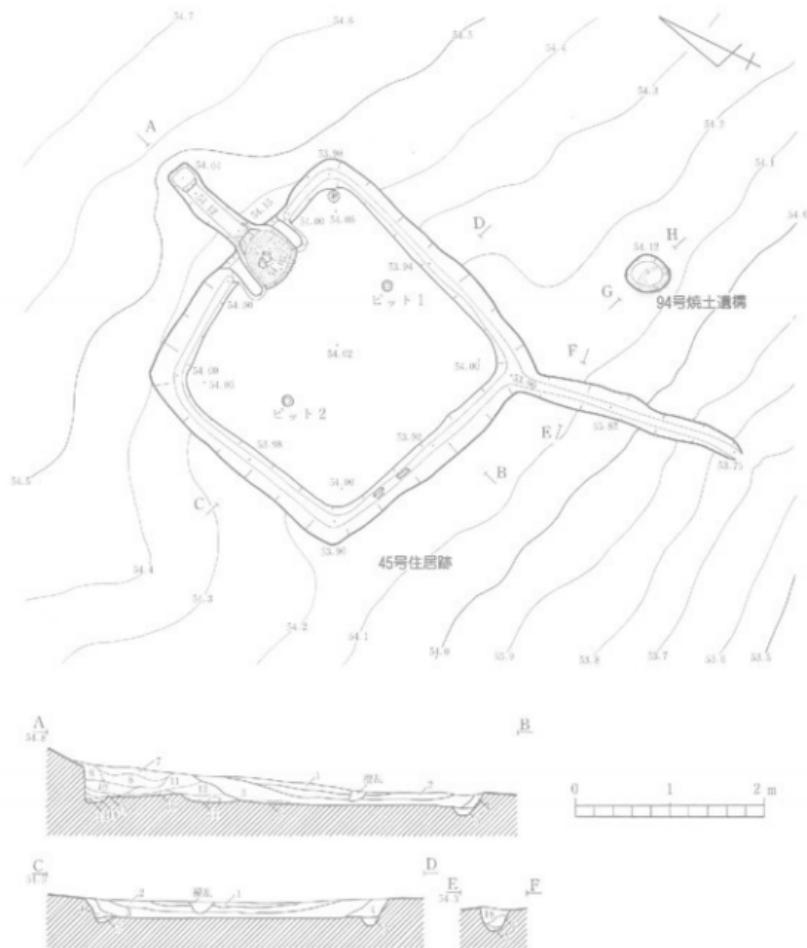
〔柱穴〕 2個のピットが検出されたが、柱穴とは考えられない。

〔カマド〕北壁に位置しており、燃焼部と煙道部が検出された。燃焼部は奥行き62cm、幅53cmである。燃焼部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。煙道部は長さ102cm、幅30cm、底面はほぼ水平である。先端から煙出しピットが検出された。

〔周溝〕カマド部分を除いて、壁沿いに一周する。幅18~30cm、深さ5~10cm、断面は「U」形である。底面レベルはカマド両脇が最も高く、南

No	土色	土性	偏	考	老圃記録
1	褐紅10YR 5/2	シ・アト	少量の植物を含む。		無人1畠
2	淡褐色10YR 5/2	シ・アト	褐色色の灰層。		無人2畠
3	褐紅7.5YR 5/2	粘土質シロト	實質の10YR 5/2粘土を細かいゴマ状に含む。		無人3畠
4	褐7.5Y 5/2	粘土質シロト	少量の植物物、鐵土を含む。		無人4畠
5	褐10YR 4/2	シ・アト・葛付	少量の植物物、鐵化物、鐵土を含む。		周 農
6	褐7.5YR 4/2	シ・アト	鐵化物、鐵土を含む。		無人5畠
7	褐7.5Y 5/2	シ・アト			
8	褐10YR 4/2	シルト質粘土	微量の植物物を含む。		
9	灰褐色10YR 5/2	シルト質粘土	實質の10YR 5/2粘土を細かいゴマ状に含む。		
10	褐鐵10YR 5/2	シ・アト	少量の植物物を含む。		
11	黑褐色10YR 4/2	粘 土	少量の植物物を含む。		
12	深褐色10YR 4/2	シ・アト	少量の植物物、鐵土を含む。		
13	深褐色10YR 4/2	シ・アト	少量の植物物、鐵土を含む。		
14	黑褐色10YR 4/2	粘質シロト			
15	褐7.5Y 5/2	粘 土	少量の植物物ゴマ状、鐵化物を含む。		
16	赤褐色10YR 4/2	粘 土	多量の植物物ゴマ状、鐵化物を含む。		
17	褐7.5YR 5/2	粘 土	多量の植物物ゴマ状、鐵化物を含む。		
18	褐7.5YR 5/2	粘 土	多量の植物物、鐵化物を含む。		外 境 倉

第11表 45号住居跡堆積土

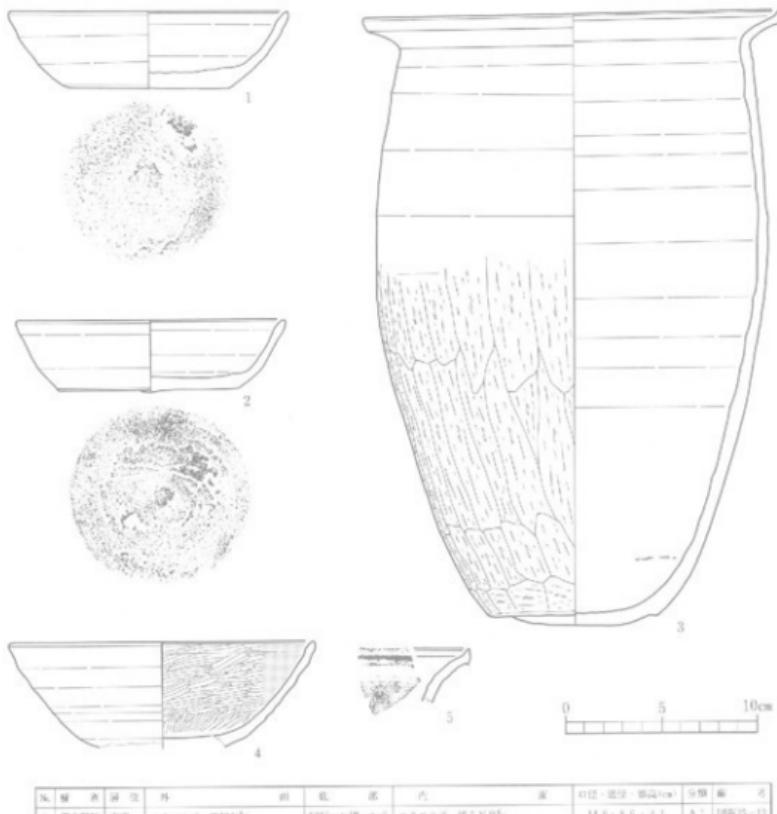


第33図 45号住居跡

延溝に接続する。

〔外延溝〕住居の南東隅から住居外急斜面(南)に向ってのびる。長さ1.41m、幅0.30m、断面は「U」形である。住居から離れるにつれて底面レベルは低くなる。

〔出土遺物〕底面を中心に土器の一括資料が出土した。第33図1、2は須恵器壺で、住居床面北東隅から重なって出土した(第34図1が上、2が下)。3は上師器甕で、住居南壁下周溝底面から上半と下半が2つに割れた状態で出土した。また、カマド底面から出土した破片が接合し



第34図 45号住居跡出土遺物  
でいる。

## 46号住居跡

〔確認面〕 基本層序Ⅲ層から確認された。

〔重複・増改築〕 認められない。

〔規模・平面形〕 南北2.30m、東西2.84mの隅丸長方形である。

〔堅穴層位〕 堅穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序Ⅲ層、V層からなり、最も保存の良い北東隅では49cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がるが、東壁の一部がステップ状に張り出している。

〔床面〕 基本層序V層を床面としており、凹凸はない。床面レベルはほぼ水平である。全体的にかたいが、住居中央部が特にかたい。

〔柱穴〕 2個のピットが検出されたが、柱穴とは考えられない。

〔炉〕 住居のほぼ中央から、炭化物を多量に含む窓みとして検出された。長軸37cm、短軸34cm、深さ3cmのはば円形の焼け面からなる



No.	地	性	説	考	査定範囲
1	褐色7.5YR 5/6	粘土	に低い黄褐色7.5YR 5/6を基調とする褐色5/6に混在。少量の黒化物を含む。		柱穴上層
2	褐色7.5YR 5/6	粘土	に低い黄褐色7.5YR 5/6を基調とする褐色5/6に混在。少量の黒化物を含む。		柱穴上層
3	に低い黄褐色7.5YR 5/6	砂質粘土			柱穴上層
4	褐色7.5YR 5/6	砂質粘土	深窓付近に少量の炭化物を含む。		柱穴上層
5	褐色7.5YR 5/6	砂質粘土	深窓付近に少量の炭化物を含む。		柱穴上層



No.	地	質	形	説	性	底径・直径(cm)	分類	考
1	土器表面	泥炭	1.9cm、径5YR 5/6	熱調節	土器・サザ・ヘリナギ、生糞外側と同	3.0-13.3	A	回数36-1
2	土器内部	堆積土	1.9cm、径5YR 5/6	——	ハコメ、色濃外側と同	——	A	回数36-2

第35図 46号住居跡と出土遺物

地床炉である。

〔貯蔵穴状ピット〕 1個検出された。貯蔵穴状ピット1は層No.4が堆積するもので、長軸36cm、短軸34cm、深さ11cmの円形である。

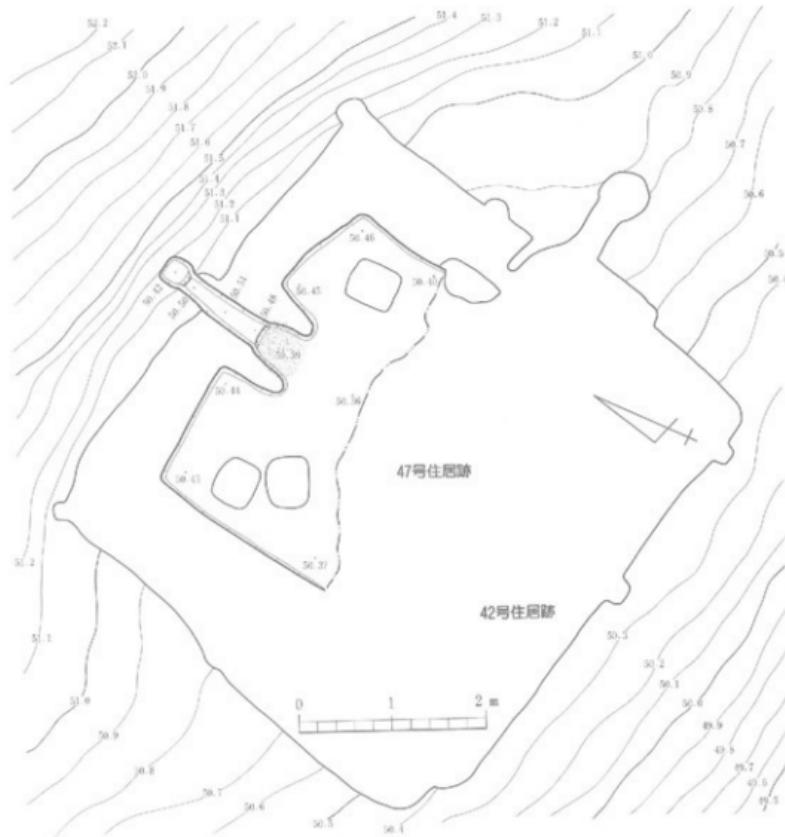
〔周溝〕 認められない。

〔出土遺物〕 床面、堆積土から土器の実測資料が得られた。

## ■ 47号住居跡 ■■■■■

〔確認面〕 42号住居跡床面埋上下から確認された。

〔重複・増改築〕 42号住居跡と重複しており、42号住居跡床面埋上下から確認されたことから



第36図 47号住居跡

本住居跡のはうが古い。

〔規模・平面形〕 北壁全部と東壁、西壁の各一部が検出されたが、その他の部分は削平のため検出されなかった。北壁の幅3.58m、残存する東壁、西壁の幅はそれぞれ1.08m、2.12mである。東西3.58m、南北3.50m前後の正方形、または長方形と考えられる。

〔堅穴層位〕 堅穴層位は1層で、42号住居床面整地のための埋土である(第27図42号住居跡)。

〔壁〕 基本層序V層からなり、最も残存している北壁側では、10cmの高さである。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕 基本層序V層を床面としており、疎が多く凸凹している。床面レベルは南にすすむにつれて低くなる。全体的にかたい。

〔カマド〕 北壁に位置しており、燃焼部、煙道部が検出された。燃焼部は奥行き54cm、幅48cmである。燃焼部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。煙道部は長さ122cm、幅28cm、底面レベルはほぼ水平である。先端からは煙出しビットが検出された。なお、煙出しビットの深さは、確認面から67cmである。

〔周溝〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 カマド底面から須恵器蓋の実測資料が得られた。

No.	上	中	下	性	層	考	堆積量
17	明治YR <sup>1/2</sup>	シート	質跡土	明治7.5YR <sup>1/2</sup> 粘土をブロック状に多量に含む。			
18	明治7.5YR <sup>1/2</sup>	砂	土	無機10YR <sup>1/2</sup> シートをブロック状に含む。		カマド埋土	
19	無機8YR <sup>1/2</sup>	シート	ト	少量の礫化物を含む。			
20	明治7.5YR <sup>1/2</sup>	シート	ト	少量の礫化物を含む。		カマド	
21	明治YR <sup>1/2</sup>	泥	土	明治7.5YR <sup>1/2</sup> 粘土シート状に多量に含む。		埋土1層	

第12表 47号住居跡堆積土



%	種別	層	底	外	内	面	面	厚	（cm）	分類
1	粘土内蓋	カマド底面	シート質跡	明治7.5YR <sup>1/2</sup>	シート質跡	明治7.5YR <sup>1/2</sup>	シート質跡	16.0	A	

第37図 47号住居跡出土遺物

## 48号住居跡

〔確認面〕 基本層序IV層から確認された。

〔重複・増改築〕 認められない。

〔規模・平面形〕 南北3.52m、東西4.33mの長方形である。

〔堅穴層位〕 堅穴層位は4層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

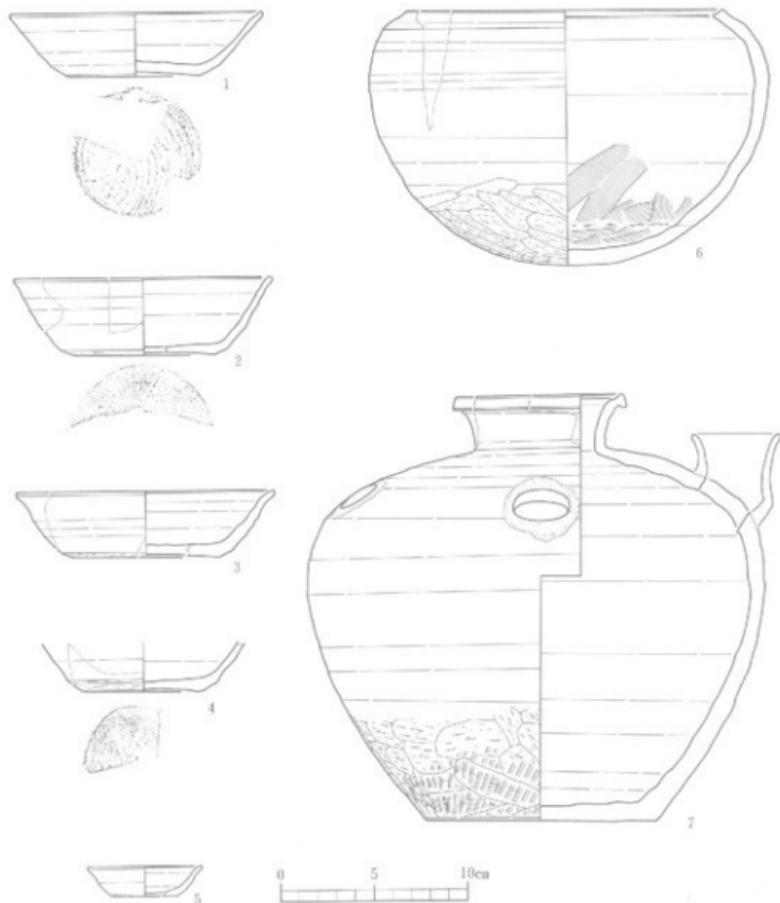
〔壁〕 基本層序IV層、V層からなり、最も保存の良い南東隅では64cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕 基本層序V層、および住居構築土整地層(貼床)を床面としており、凹凸はない。床面レベルはほぼ水平である。北半はかたいが、南半貼床部分は比較的やわらかい。

〔柱穴〕 2個のビットが検出されたが、柱穴と断定できるものはない。



第38回 48号住居跡



No.	種別	器 特 徴	内 面	底 部	内 部	口徑・底径・壁高・厚度(cm)	分類・標 号
1	輪型壺环	灰陶	ロクコサツ、灰白N <sup>2</sup>	圓軌外縁	ロクコサツ、色調外底と同C	13.5・6.8・3.4	CII 回軌B-4
2	輪型壺环	灰陶	ロクコサツ、回軌直り、灰白N <sup>2</sup>	圓軌直り	ロクコサツ、色調外底と同C	13.8・7.2・4.1	CII 回軌B-5
3	輪型壺环	灰陶	ロクコサツ、回軌直り、灰白N <sup>2</sup>	圓軌直り	ロクコサツ、色調外底と同C	13.8・7.8・3.5	CII 回軌B-6
4	刮削器环	2個	ロクコサツ、回軌直り、灰白N <sup>2</sup>	圓軌直り	ロクコサツ、色調外底と同C	—・5.8・—	F 1
5	刮削器环	1個	ロクコサツ、直り、灰白N <sup>2</sup>	直り	ロクコサツ、色調外底と同C	6.1・3.5・1.7	G 1 回軌B-7
6	刮削器环(鉛錠形)	周溝壺環	ロクコサツ、直り、灰白N <sup>2</sup>	直り	ロクコサツ・ハラテツ、8G7.5V <sup>2</sup>	56.8・—・—・13.0・21.3	B 回軌B-9
7	土器四角口盤(破)	灰陶	ロクコサツ・直り・直り、灰白N <sup>2</sup>	直り、無調査	ロクコサツ、色調外底と同C	9.0・12.2・22.7・21.4	B 回軌B-8

第39図 48号住居跡出土遺物(1)

〔カマド〕西壁に位置しており、燃焼部、煙道部が検出されたが、煙道部の一部は削平をうけている。燃焼部は奥行き64cm、幅67cmである。燃焼部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。煙道部は長さ123cm、幅52cm、底面はほぼ水平である。先端からは突出レピットが検出された。

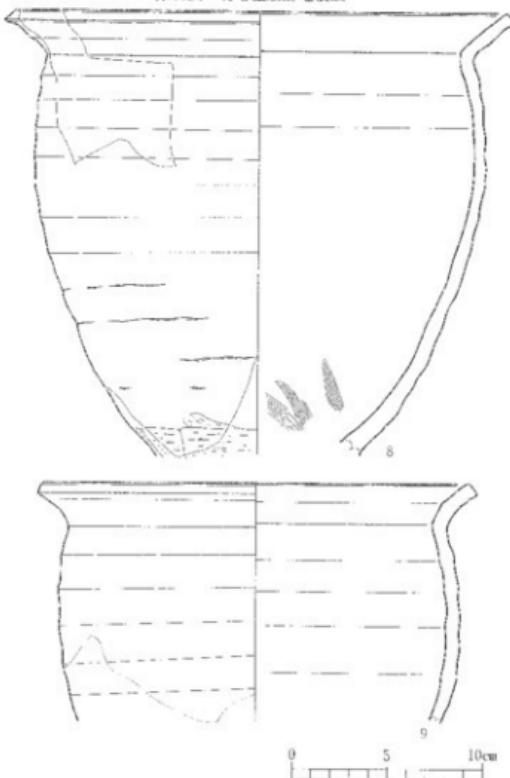
〔貯蔵穴状ピット〕1個検出された。貯蔵穴状ピット1は層No.8が堆積するもので、長軸71cm、短軸51cm、深さ6cmの不整形である。北側で周溝と接続する。

〔周溝〕カマド部分を除いて壁沿いに一周するが、西辺では壁から60cm前後離れて壁に並行している。幅20~48cm、深さ7~12cm、断面は「U」形を基本とするが、周溝下部は外側に張り出している。底面レベルは北東隅が最も高く、南西隅になるにつれて低くなる。周溝の掘り方は全周する。

〔外周溝〕住居外の北西から東、東から南東にかけて検出された。基本的には住居の三方を囲む一条の溝であったものの中央が、削平されたものと考えられる。北西から南東の幅10.68m、丘陵

No.	土 壹	土 壹	地	地	地	地
1	B帶7 YR 5/2	シルト				粘土土質
2	表土2.5Y 1/2	シルト質砂	既往歴大山風を背景に含む。			粘土土質
3	3.5Y 1/2 色相10 YR 5/2	シルト	既往歴大山風を背景に含む。			粘土土質
4	明葉系10 YR 5/2	シルト	既往歴既往10 YR 5/2を背景に含む。			粘土土質
5	3.5Y 1/2 色相10 YR 5/2	シルト	既往歴既往10 YR 5/2を背景に含む。			粘土土質
6	4.5Y 1/2 色相10 YR 5/2	シルト	既往歴既往10 YR 5/2を背景に含む。			粘土土質
7	3.5Y 1/2 色相10 YR 5/2	シルト	少量の焼物灰、板瓦を含む。			粘土土質
8	3.5Y 1/2 色相10 YR 5/2	シルト	既往歴既往10 YR 5/2を背景に含む。			粘土土質
9	3.5Y 1/2 色相10 YR 5/2	シルト	少量の焼物灰を含む。			粘土土質
10	3.5Y 1/2 色相10 YR 5/2	シルト	既往歴既往10 YR 5/2を背景に含む。			粘土土質
11	3.5Y 1/2 色相10 YR 5/2	シルト	既往歴既往10 YR 5/2を背景に含む。			粘土土質
12	4.5Y 1/2	シルト				粘土土質

第13表 40号住居跡焼土



地	地	地	地	地	地	地
6 上部切頭 灰層	ロクモナガ、削平、無灰層、既往10 YR 5/2	ロクモナガ、シルト、シルト、既往10 YR 5/2	26.8	有壁	既往10 YR 5/2	
9 上部切頭 灰層	ロクモナガ、既往10 YR 5/2	ロクモナガ、色調外見に同じ	22.8	有壁	既往10 YR 5/2	

第40図 40号住居跡出土遺物(2)

斜面(南西)に対して開口しており、平面形は「～」である。溝の最大幅1.36m、保存の良い北壁では28cmの深さで残存しており、断面は「～」形である。底面レベルは削平された東壁が最も高く、開口部にすすむにつれて低くなる。

〔周囲の状況〕住居西半が人為的な埋土で構築されている。調査の最終段階で、住居中央から西に向って住居外まで幅50cmのトレンチを設定し土層の観察を行なった。その結果、旧表土と考えられる土(層No.12)とその上に層No.11が堆積していることがわかった。これは住居構築時の整地層と思われる。

〔出土遺物〕床面、および周溝底面から土器の一括資料が出上した。第38図6は鉄鉢形の須恵器鉢である。7は土器器多口瓶(壺)である。肩部対角に4個の穿孔部が認められるが、口縁は4個共欠失している。

## ■ 49号住居跡

〔確認面〕基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕住居西半が削平のため検出されなかった。残存する北壁、東壁、南壁の幅はそれぞれ2.52m、4.01m、2.54mである。南北4.22m、東西4m前後の正方形、または長方形と考えられる。

〔堅穴層位〕堅穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

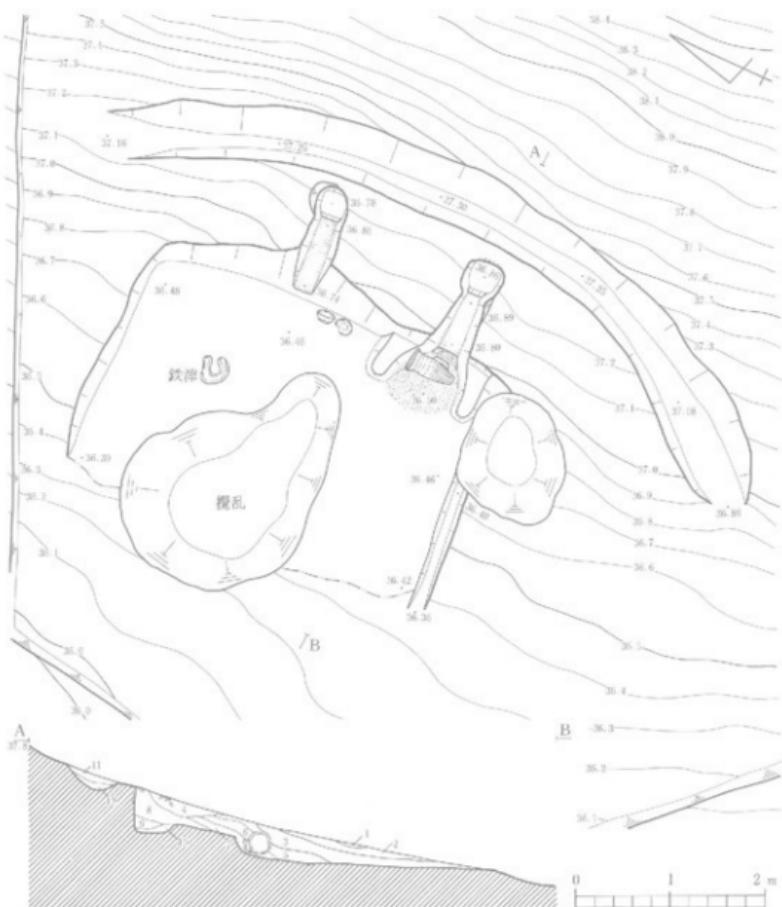
〔壁〕基本層序Ⅳ層からなり、最も保存の良い東壁側で55cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕基本層序Ⅳ層を床面としており、凹凸はない。床面レベルはほぼ水平である。全体的にかたい。中央部分が木の根によって大きく搅乱を受けている。床面中央北よりから馬蹄形の鉄滓が検出された。床面が強い火熱を受けており、小鐵冶炉の可能性がある。

〔カマド〕東壁のやや南側に位置しており、燃焼部、煙道部が検出された。燃焼部は奥行き72cm、幅84cmである。燃焼部底面、側壁内面は火熱によって赤変している。煙道部は長さ104cm、幅44cm、底面は先端に近づくにつれて高くなる。先端からは煙出しビットが検出された。また、東壁のやや北側から、より古いと考えられるカマドの煙道部が検出された。長さ107cm、幅36cm、底面は先端に近づくにつれて高くなる。先端からは煙出しビットが検出された。

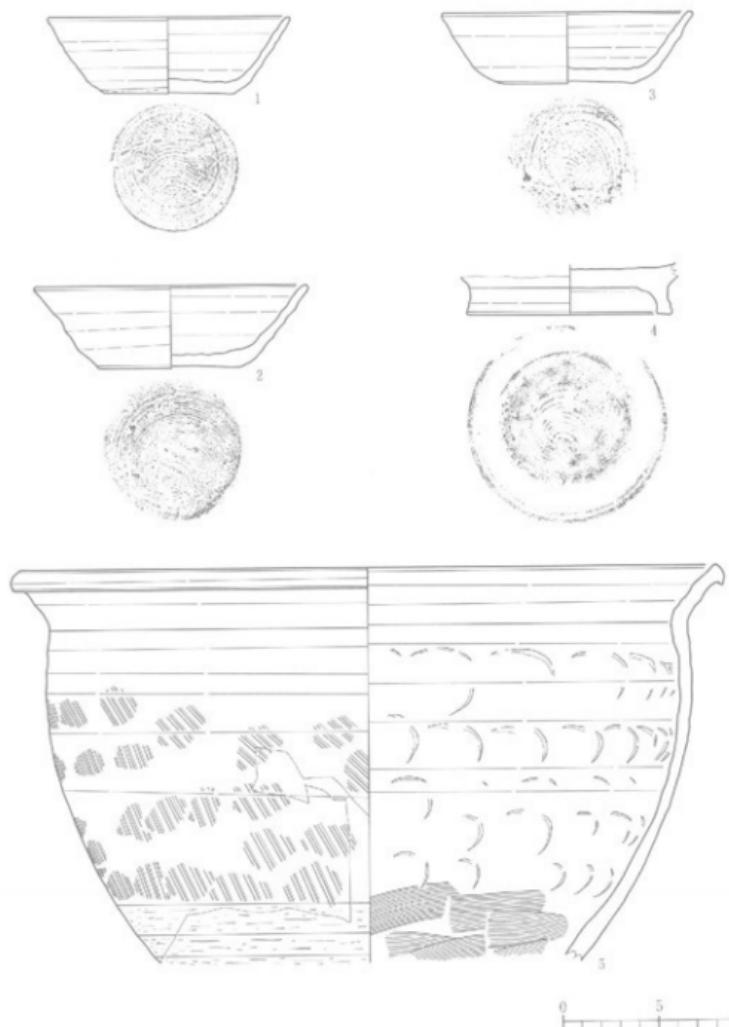
〔周溝〕残存する南壁下から検出された。幅16~21cm、深さ3~6cm、断面は「U」形である。底面レベルは東壁側が高く、南にすすむにつれて低くなる。

〔外周溝〕北~南の幅7.92m、住居の東壁側を囲み、丘陵斜面(西)に対して開口しており、平面形は「～」形をしている。溝の最大幅0.81m、深さ18cmで残存しており、断面形は「～」形であ



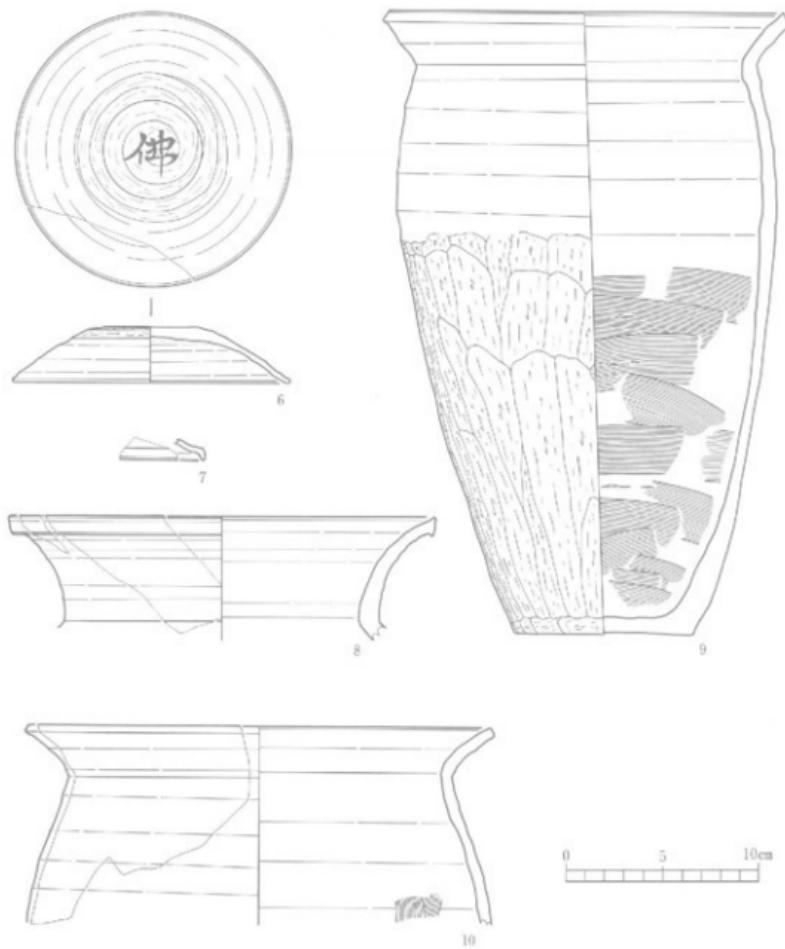
No.	土色	土性	標	堆積物
1	褐色SYR <sup>2</sup>	シ 4 - 5		柱穴上層
2	灰白色YR <sup>7</sup>	シ 4 - 5	灰白色火山灰質。	柱穴上層
3	灰褐色SYR <sup>2</sup>	シホト 貫通	褐色SYR <sup>2</sup> を剥離し含む。	柱穴上層
4	褐色SYR <sup>2</sup>	粘	柱穴SYR <sup>2</sup> の土をブロック状に含む。	
5	灰褐色SYR <sup>2</sup>	泥	灰褐色SYR <sup>2</sup> の土をブロック状に含む。多量の底土を含む。	
6	褐色SYR <sup>2</sup>	泥	灰褐色SYR <sup>2</sup> の土をブロック状に含む。多量の炭化物、根木を含む。	
7	褐色SYR <sup>2</sup>	泥	灰褐色SYR <sup>2</sup> の土をブロック状に含む。多量の底土を含む。	3 - 4 F
8	褐色SYR <sup>2</sup>	シ ム 3	少量の炭化物、根木を含む。	
9	褐色SYR <sup>2</sup>	シホト 疊神	少量の炭化物を含む。	
10	褐色SYR <sup>2</sup>	シ A - 3	少量の炭化物を含む。	
11	灰褐色SYR <sup>2</sup>	シホト 貫通	褐色SYR <sup>2</sup> を剥離し含む。	外周層
12	褐色SYR <sup>2</sup>	シホト 貫通	少量の炭化物、底土を含む。	

第41図 49号住居跡



%	種別	置き位	外 面	底 面	内 面	寸径・底径・器高(cm)	分類	備考
1	瓦器裏環	外周側底面	ロクコナフ・凹輪目裏、底白7.5YR1	凹輪底面・凹輪底	ロクコナフ・色調外面と同上	12.6・6.6・6.1	C11	深窓37-3
2	瓦器裏环	底面	ロクコナフ・底7.5YR1	凹輪底面	ロクコナフ・色調外面と同上	14.2・7.2・6.7	C11	深窓37-4
3	瓦器底环	モード底面	ロクコナフ・底白5.5YR1	凹輪底面	ロクコナフ・色調外面と同上	13.0・6.6・5.8	D3	深窓37-2
4	瓦器器底合付环	底面	ロクコナフ・底白7.5YR1	凹輪底面・凹輪底	ロクコナフ・色調外面と同上	—・16.6・—	C	
5	瓦器底环	焼出しへて	ロクコナフ・タマメ・凹輪底、底白7.5YR1	ロクコナフ・タマメ・ハッカフ・色調外面と同上	37.1・—・—	A7	EBB37-6	

第42図 49号住居跡出土遺物(1)

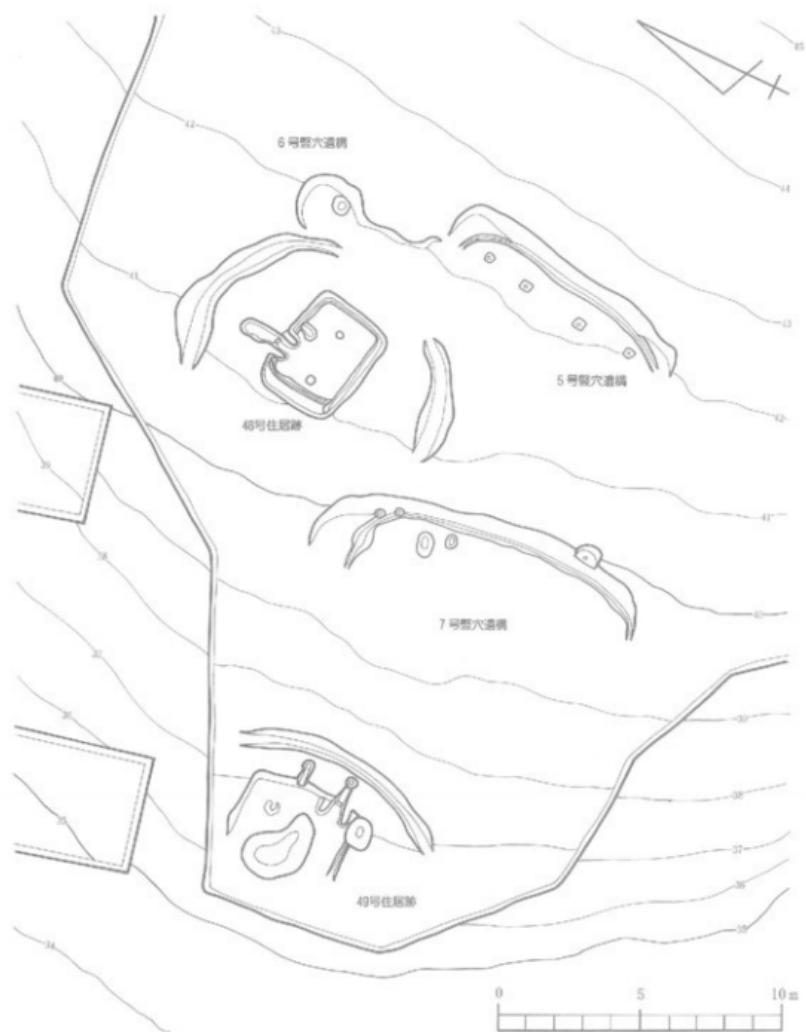


%	編 次	性 質	外 形 面	底 形	内 部 面	寸 法 ・ 状 態	分 類	備 考
6	瓦輪車轂	灰陶	ヨクヨクテ。圓輪形。底面7.5VR <sub>1</sub>	—	ヨクヨクテ。色濃外面と同じ	14.3 —— 2.9	B I	葉形片條・凹凸37-1
7	瓦輪車轂	灰陶	ヨクヨクテ。灰白N <sub>7</sub>	—	ヨクヨクテ。色濃外面と同じ	— —— —	A	
8	圓盤器皿	陶器	ヨクヨクテ。輪盤狀10G <sub>1</sub>	—	ヨクヨクテ。色濃外面と同じ	22.1 —— —	A I	
9	土總器皿	カツド瓦器	ヨクヨクテ。總り。浅鉢狀7.5VR <sub>1</sub>	無脚	ヨクヨクテ・ハラナギ。色濃外面と同じ	21.1 9.0 32.7	B II	圓盤37-5
10	土總器皿	灰陶	ヨクヨクテ。網目狀5VR <sub>1</sub>	—	ヨクヨクテ・ハラナギ。色濃外面と同じ	21.2 —— —	B II	

第43図 49号住居跡出土遺物(2)

る。底面レベルは東辺中央が最も高く、開口部に近づくにつれて低くなる。

〔出土遺物〕床面、およびカマド底面を中心に土器の一括資料が出土した。



第44図 住居跡遺構配図(2)

### 3. 掘立柱建物跡

#### ■ 6号掘立柱建物跡

〔確認面〕基本層序Ⅲ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕3間×2間の掘立柱建物跡であるが、南側の柱列においては2間になってしまい。また、東側には扉が付くものである。北側柱列では7.58m(扉部分を含める。西から1.66m+1.74m+1.70m+2.48m)、南側柱列では7.52m(扉部分を含める。西から2.74m+2.28m+2.50m)、西側柱列では3.64m(北から1.98m+1.66m)、東側柱列では3.54m(北から1.88m+1.66m)、東側扉部柱列では3.72m(北から1.66m+2.06m)である。さらに、扉部南端には複数の柱穴が認められる。

〔方向〕西側柱列においてはN-16°-Eである。

〔柱穴〕14個のピットが検出された。ピット1、2、3、4、5、6、7、8、9は主屋の柱穴、ピット10、11、12、13は扉部柱穴と考えられる。ピット14は柱穴とは考えられない。ピット8は掘り方、柱痕跡ともに火熱を受け、赤変している。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

### 4. 積穴遺構

#### ■ 3号積穴遺構

〔確認面〕基本層序Ⅴ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

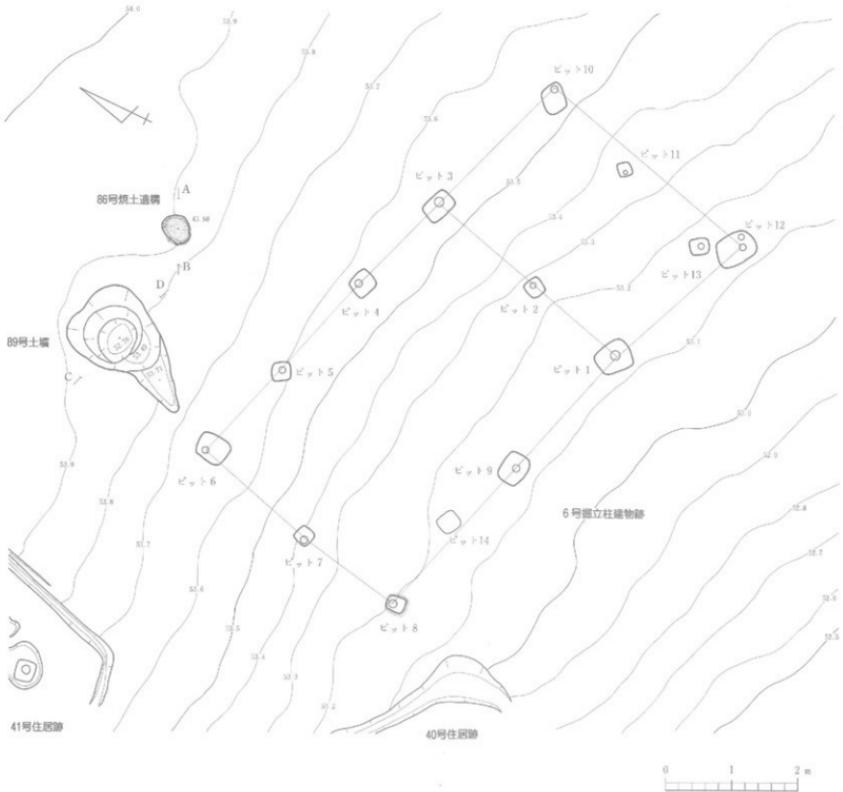
〔規模・平面形〕北壁の幅5.40m、残存する東壁、西壁の幅はそれぞれ1.50m、1.96mである。東西5.40m、南北3m前後の長方形と考えられる。

〔積穴層位〕積穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序Ⅴ層からなり、最も保存の良い北壁では16cmの高さで残存している。床面からだらだらと立ち上がる。

〔床面〕基本層序Ⅴ層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは北壁側がやや高く、南へすすむにつれて低くなる。

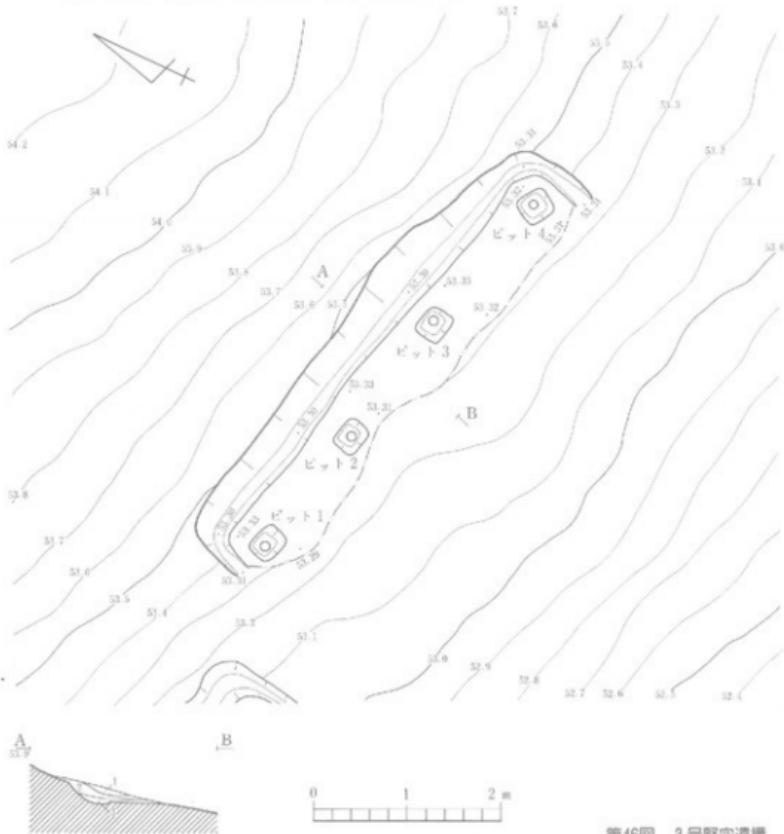
〔柱穴〕4個のピットが検出された。ピット1、2、3、4は掘り方と柱痕跡が区別されることがから柱穴と考えられる。



第45図 6号掘立柱建物跡

【周溝】残存する壁沿いにめぐる周溝が検出された。幅16~28cm、深さ2~4cm、断面は「一」形である。底面レベルは北壁中央が最も高く、離れるにつれて低くなる。

【出土遺物】堆積土から土師器の細片が出土した。



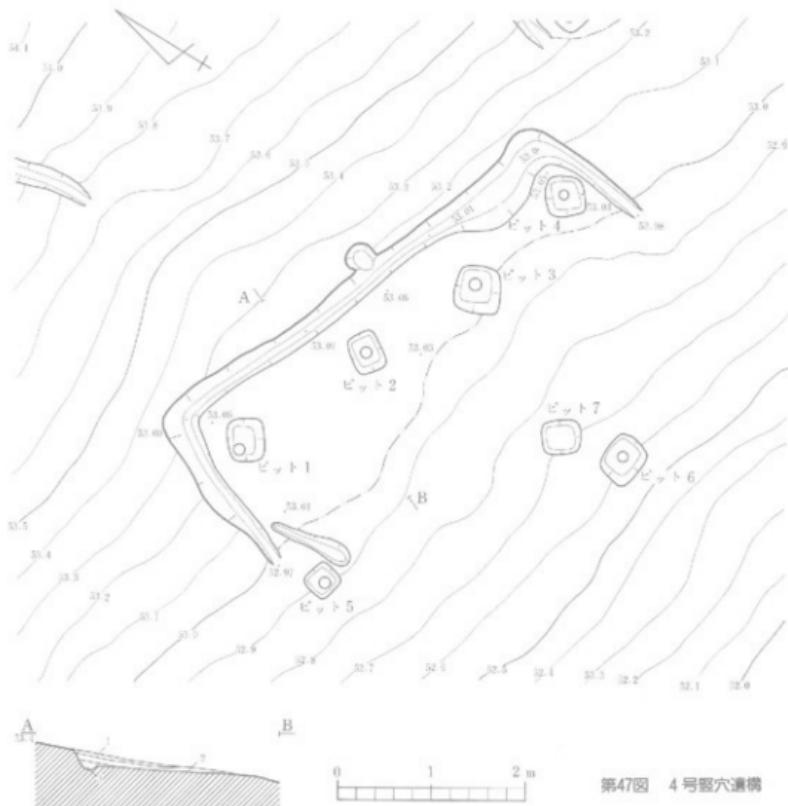
第46図 3号竖穴遗構

### 4号竖穴遗構

【確認面】基本層序V層から確認された。

【重複・増改築】認められない。

【規模・平面形】北壁の幅5.44m、残存する東壁、西壁の幅はそれぞれ1.02m、0.70mである。東西5.44m、南北3m前後の長方形と考えられる。



第47図 4号窓穴遺構

〔窓穴層位〕 窓穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序V層からなり、最も保存の良い北壁では22cmの高さで残存している。床面からだらだらと立ち上がる。

〔床面〕 基本層序V層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは北壁側がやや高く、南へすすむにつれて低くなる。

〔柱穴〕 7個のピットが検出された。ピット1、2、3、4、5、6は掘り方と柱痕跡が区別されることから柱穴と考えられる。ピット7は柱穴とは断定できない。

〔周溝〕 戻存する壁沿いにめぐる周溝が検出された。幅16~46cm、深さ3~6cm、断面は「一」形である。底面レベルは北西隅が最も高く、離れるにつれて低くなる。

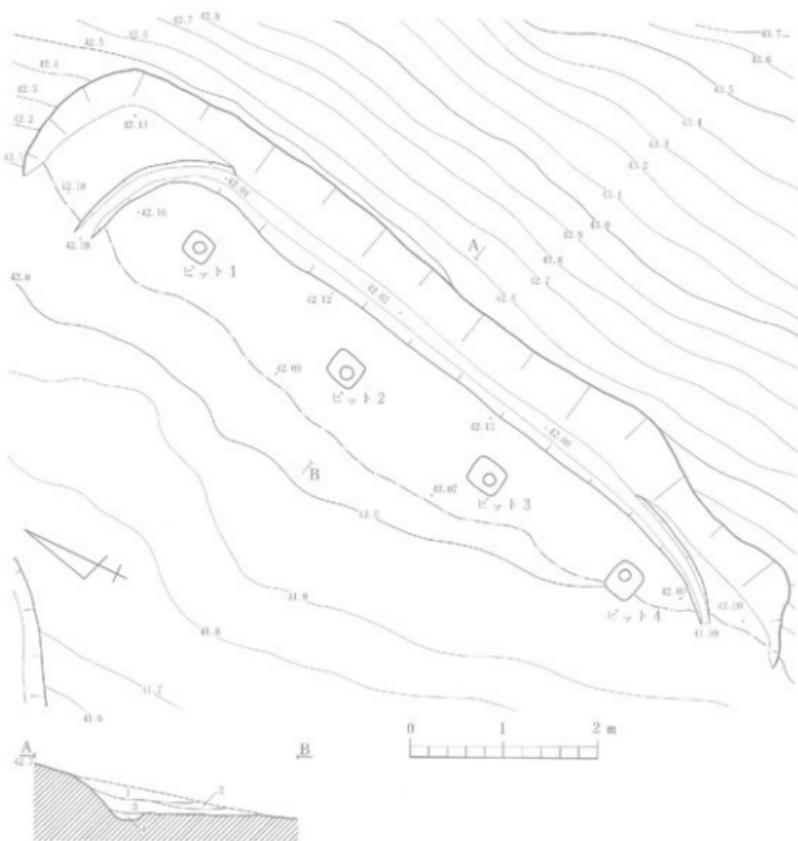
〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

## 5号竖穴遗構

〔確認面〕 基本層序Ⅳ層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕東壁の幅9.28m、残存する北壁、南壁の幅はそれぞれ1.70m、0.88mである。南北9.28m、東西3m前後の長方形と考えられる。



第48図 5号堅穴遺構

〔堅穴層位〕 堅穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕基本層序N層からなり、最も保存の良い北壁では44cmの高さで残存している。床面からだらだらと立ち上がる。

【床面】基本層序互層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは東壁側がやや高く、西へすすむにつれて低くなる。

【柱穴】4個のピットが検出された。ピット1、2、3、4は掘り方と柱痕跡が区別されるところから柱穴と名づけられる。

【周溝】残存する壁沿いに周溝が検出されたが、北壁側と南壁側では壁から80cm前後離れて並行するものである。幅20~24cm、深さ2~9cm、断面は「一」形である。底面レベルは北壁中央が最も高く、頸れるにつれて低くなる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

### 6号竪穴構造

〔確認面〕 基本層序 N 層から確認された。

〔重複・増改築〕認められない。

〔規模・平面形〕東壁の幅5.16m、残存する北壁、南壁の幅はそれぞれ1.98m、0.36mである。南北5.16m、東西3m前後の不整形である。



第49図 6号豎穴遺構

〔窓穴層位〕 窓穴層位は3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序N層からなり、最も保存の良い東壁では33cmの高さで残存している。床面からだらだらと立ち上がる。

〔床面〕 基本層序N層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは東壁側がやや高く、西へすすむにつれて低くなる。

〔柱穴〕 1個のビットが検出された。ビット1は掘り方のみで、やわらかく、柱痕跡も検出されないことから柱穴とは考えられない。

〔周溝〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

## 7号窓穴遺構

〔確認面〕 基本層序N層から確認された。

〔重複・増改築〕 認められない。

〔規模・平面形〕 東壁の幅12.00m、残存する北壁、南壁の幅はそれぞれ2.60m、2.16mである。南北12.00m、東西4m前後の隅丸長方形と考えられる。

〔窓穴層位〕 窓穴層位は2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 基本層序N層からなり、最も保存の良い東壁では54cmの高さで残存している。床面からだらだらと立ち上がる。

〔床面〕 基本層序N層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは東壁側がやや高く、西へすすむにつれて低くなる。

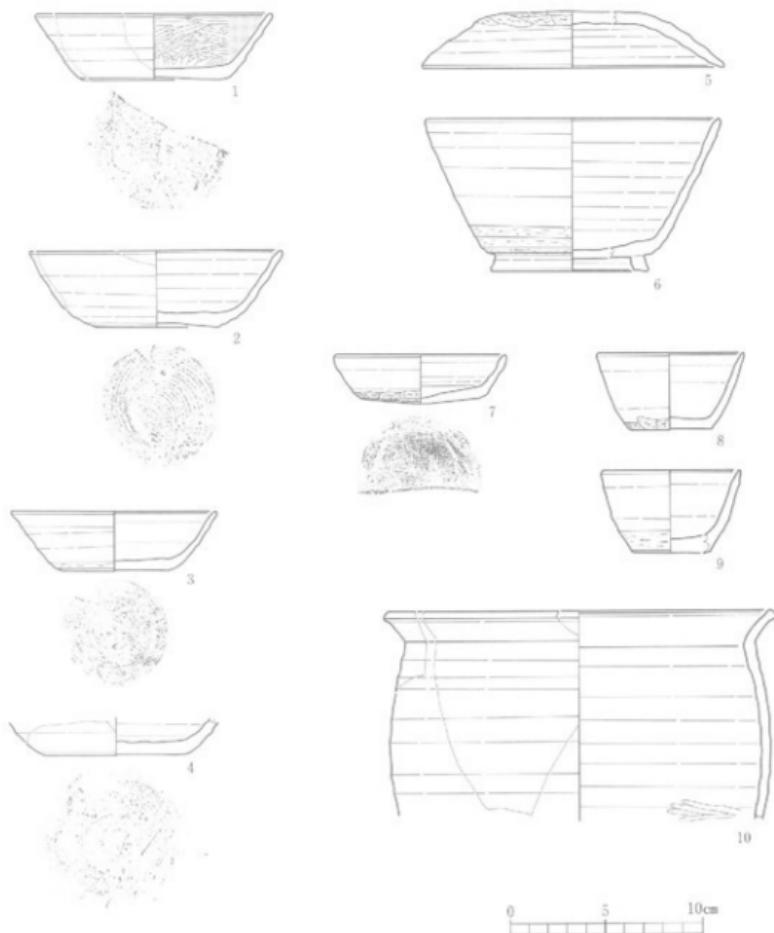
〔柱穴〕 2個のビットが検出された。いずれも柱穴とは考えられない。

〔貯蔵穴状ビット〕 2個検出された。貯蔵穴状ビット1は層No.3が堆積するもので、長軸92cm、短軸70cm、深さ17cmの長円形である。貯蔵穴状ビット2は層No.3が堆積するもので、長軸64cm、短軸43cm、深さ10cmの隅丸方形である。

〔周溝〕 残存する壁沿いにめぐる周溝が検出されたが、北壁側では壁から0.2~1.0m前後離れて並行する。幅16~92cm、深さ2~10cm、断面は「一」形である。北壁下の部分では貯蔵穴状にふくらんでいる。底面レベルは東壁中央部が最も高く、離れるにつれて低くなる。

〔その他の付属施設〕 東壁のやや南側に焼け面を伴うカマド燃焼部に似た遺構が検出された。平面形は長軸91cm、短軸67cm、深さ28cmの隅丸方形である。底面は平坦であるが、中央に支脚と考えられる礎がはめこまれており、火熱を受けた痕跡が確認された。

〔出土遺物〕 床面および周溝を中心に土器の一括資料が出土した。



No.	種類	頭位	外 面	底 面	内 面	寸法 径深・跡高(cm)	分類	備考
1	土器片	周邊部	ロクロナギ、灰白VYR <sup>2</sup>	円錐形切	ミドリ、褐色剥離、灰7.5YR <sup>1.7</sup>	12.4・2.6・3.5	B 7	PCB38-1
2	素面器	周邊部	ロクロナギ、灰白7.5Y <sup>1</sup>	円錐形切	ミドリナギ、色剥離と同じ	13.7・6.4・4.6	D 7	PCB38-4
3	素面器	周邊部	ロクロナギ、円錐形切、灰白7.5Y <sup>2</sup>	円錐形切	ミドリナギ、色剥離と同じ	16.8・5.5・3.2	F 7	PCB38-5
4	乳母器	周邊部	ロクロナギ、灰白N <sup>5</sup>	円錐形切	ミドリナギ、色剥離と同じ	7.5 ······		
5	乳母器	底面	ミドリナギ、灰白N <sup>5</sup>	底	ミドリナギ、色剥離と同じ	15.6 ······ 2.6	B	PCB38-2
6	無縫合口付移	底面	ミドリナギ、灰粘離、灰N <sup>5</sup>	圓錐形切	ミドリナギ、色剥離と同じ	15.5・8.6・8.6	B	PCB38-3
7	底凹形	底面	ミドリナギ、灰6、灰黃7.5YR <sup>2</sup>	底	ミドリナギ、色剥離と同じ	9.0・6.2・2.3	F II	
8	底凹形	底面	ミドリナギ、灰6、灰白7.5Y <sup>2</sup>	底	ミドリナギ、色剥離と同じ	7.6・4.0・4.0	G E	
9	底凹形	底面	ミドリナギ、圓錐形切、灰白7.5Y <sup>2</sup>	圓錐形切	ミドリナギ、色剥離と同じ	6.6・5.8・4.3	G E	
10	底凹形	底面上	ミドリナギ、灰N <sup>5</sup>	——	ミドリナギ、(カキ)、色剥離と同じ	20.0 ······	AII	

第50図 7号竪穴遺構出土遺物

第51図 7号竖穴遺構

## 5. 焼土遺構

### ■ 86号焼土遺構

〔確認面〕Ⅲ層から確認された。

〔重複〕認められない。

〔平面形〕長軸0.85m、短軸0.76mの歪んだ円形である。

〔竪穴層位〕1層に分けられ、自然堆積層である。

〔壁〕Ⅲ層からなり、最も保存の良い北側の壁では10cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕Ⅲ層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

### ■ 87号焼土遺構

〔確認面〕N層から確認された。

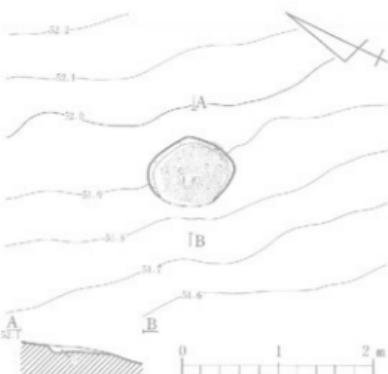
〔重複〕認められない。

〔平面形〕長軸0.91m、短軸0.79mの鵝卵形である。

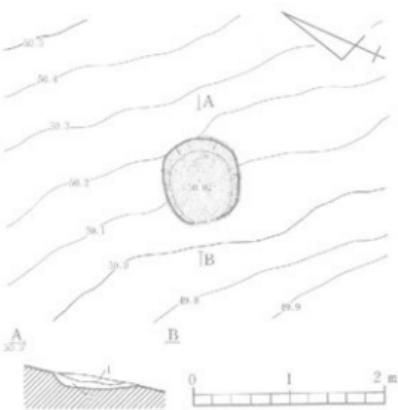
〔竪穴層位〕2層に大別できるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕N層からなり、最も保存の良い北側の壁では13cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕1層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。



第52図 86号焼土遺構



第53図 87号焼土遺構

No.	土色	土性	相	考
1	赤褐色YR 5/2	シルト	粘土質	火化物、底土を多様に含む。
2	黒褐色10YR 4/2	シルト	粘土質	粘土質

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

### ■ 88号焼土遺構 (P.37、第21図)

〔確認面〕 V層から確認された。

〔重複〕 認められない。

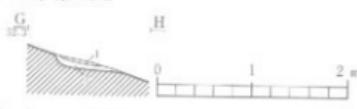
〔平面形〕 長軸1.34m、短軸0.73mの隅丸長方形である。

〔縫穴層位〕 2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 V層からなり、最も保存の良い北側の壁では14cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕 V層からなり、凹凸はない。底面レベルは北壁側が最も低く、南壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



第54図 88号焼土遺構

### ■ 89号焼土遺構 (P.68・69、第44図)

〔確認面〕 V層から確認された。

〔重複〕 認められない。

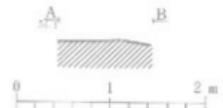
〔平面形〕 長軸0.46m、短軸0.39mの円形である。

〔縫穴層位〕 1層に分けられ、自然堆積層である。

〔壁〕 V層からなり、最も保存の良い北側の壁では、2cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕 V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



第55図 89号焼土遺構

### ■ 90号焼土遺構

〔確認面〕 III層から確認された。

〔重複〕 認められない。

〔平面形〕 長軸0.67m、短軸0.63mの歪んだ円形である。

〔縫穴層位〕 1層に分けられ、自然堆積層である。

〔壁〕 III層からなり、最も保存のよい南側の壁では7cmの高さで残存している。底面から急な

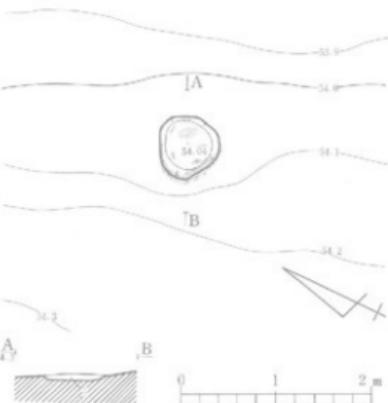
角度で立ち上がる。

〔底面〕Ⅲ層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

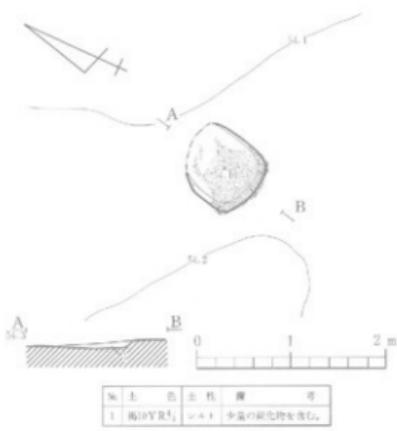
〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

No.	主色	土性	層	考
1	黒褐色	シート	Ⅲ層	炭化物を多量に含む。

第56図 90号焼土遺構



## 91号焼土遺構



第57図 91号焼土遺構

〔確認面〕Ⅲ層から確認された。

〔重複〕認められない。

〔平面形〕長軸0.86m、短軸0.76mの隅丸方形である。

〔堅穴層位〕1層に分けられ、自然堆積層である。

〔壁〕Ⅲ層からなり、最も保存の良い南側の壁では8cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕Ⅲ層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

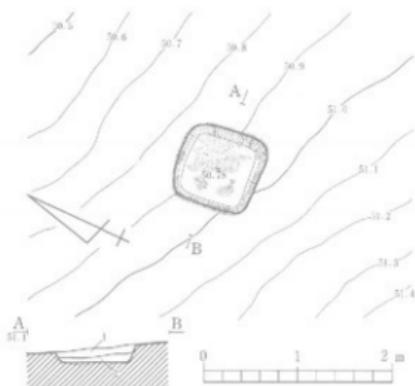
## 92号焼土遺構

〔確認面〕Ⅲ層から確認された。

〔重複〕認められない。

〔平面形〕長軸0.89m、短軸0.86mの方形である。

〔堅穴層位〕2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。



〔壁〕Ⅲ層からなり最も保存の良い南壁側では22cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕Ⅲ層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

No.	土色	土性	備考
1	黄褐色2.5YR5/2	シルト	灰白色火の灰。
2	黒褐色10YR3/2	シルト	多量の礫石を含む。

第58図 92号焼土遺構

## ■ 93号焼土遺構 ■ ■ ■ ■ ■

〔確認面〕V層から確認された。

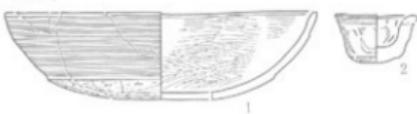
〔重複〕認められない。

〔平面形〕長軸1.19m、短軸1.06mの隅丸方形である。

〔堅穴層位〕2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕V層からなり、最も保存の良い北側の壁では18cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。



No.	土色	土性	備考
1	褐色10YR5/2	シルト	塊山ゾロッタ、炭化物を含む。
2	黒褐色10YR3/2	シルト	炭化物、燒土を多量に含む。

No.	層	実測	部位	外	面	標高	内	面	寸法	底注	鉛直(cm)	分類	備考
1	土壌層	50.6	1	ココア、茶赤褐色5YR5/2	側面	50.6	1	ガラ、鐵3.5YR5/2	16.2	—	4.5	AII	
2	上部砂質土層	50.6	2	ココア、オモカニ、褐3.5YR5/2	側面	50.6	2	ガラ、KCl3.5YR5/2	4.4	2.4	2.6	AB	

第59図 93号焼土遺構と出土遺物

〔出土遺物〕堆積土(層No.1)から実測資料が出土した。

### ■ 94号焼土遺構

〔確認面〕V層から確認された。

〔重複〕認められない。

〔平面形〕長軸0.43m、短軸0.42mの円形である。

〔堅穴層位〕1層に大別され、自然堆積層である。

〔壁〕V層からなり、最も保存の良い北側の壁では

3cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。



No.	土色	土性	構造	考
1	赤褐色YR17/2	砂質	多量の植土を含む。	

第60図 94号焼土遺構

### ■ 95号焼土遺構

〔確認面〕V層から確認された。

〔重複〕認められない。

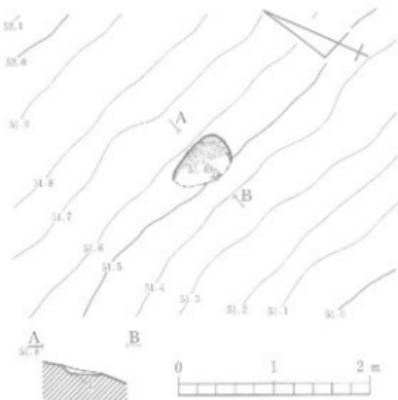
〔平面形〕長軸0.63m、短軸0.44mの隅丸方形である。

〔堅穴層位〕2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕V層からなり、最も保存の良い北側の壁では8cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。



No.	土色	土性	構造	考
1	赤褐色YR17/2	砂質	炭化物を含む。	

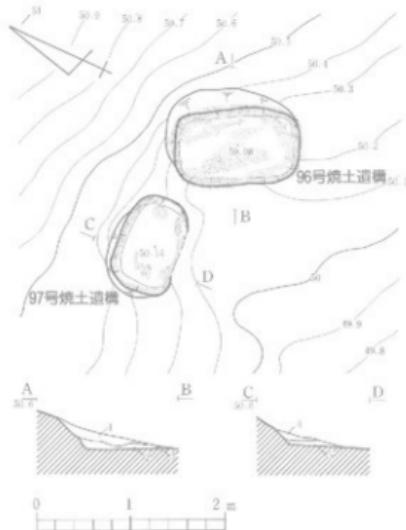
第61図 95号焼土遺構

### ■ 96号焼土遺構

〔確認面〕V層から確認された。

〔重複〕認められない。

〔平面形〕長軸1.34m、短軸0.82mの隅丸長方形である。



【豊穴層位】2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。層No.3は埋土と考えられる。

【壁】V層からなり、最も保存の良い北側の壁では34cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

【底面】V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

No.	土色	土性	備考
1	褐10YR5/4	シルト	PHILIPPIK, 遺物を含む。
2	黒褐10YR2/2	シルト	炭化物、灰土を含む。
3	褐10YR5/1	シルト	

No.	土色	土性	備考
4	褐10YR5/1	シルト	塊状チャコラ、炭化物を含む。
5	黒褐10YR2/2	シルト	炭化物、灰土を含む。

第62図 96号・97号焼土遺構

### ■ 97号焼土遺構 ■ ■ ■ ■

【確認面】V層から確認された。

【重複】認められない。

【平面形】長軸1.04m、短軸0.67mの隅丸長方形である。

【豊穴層位】2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

【壁】V層からなり、最も保存の良い北側の壁では15cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

【底面】V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

### ■ 98号焼土遺構 ■ ■ ■ ■ (P.49、第30図)

【確認面】43号住居跡上面から確認された。

【重複】43号住居跡の覆土を切っていることから、本焼土遺構が新しい。

〔平面形〕長軸1.42m、短軸0.82mの隅丸方形である。

〔豊穴層位〕3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕43号住居跡堆積土を壁としており、最も保存の良い北側の壁では31cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕43号住居跡堆積土からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。底面、壁に火熱の痕跡が認められる。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

## 6. 土 壤

### 89号土壤 (P.68・69、第44図)

〔確認面〕基本層序Ⅲ層から確認された。

〔重複〕認められない。

〔平面形〕長軸2.20m、短軸1.22mの不整形である。

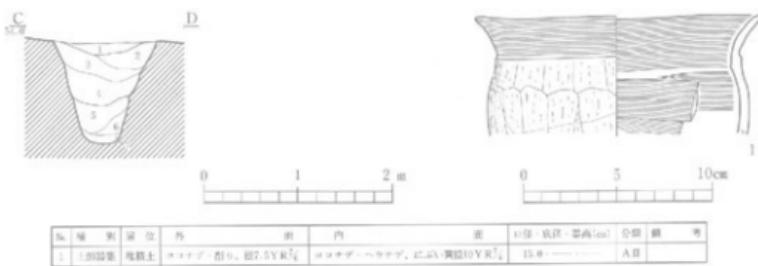
〔豊穴層位〕3層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕Ⅲ、V層からなり、最も保存の良い北側の壁では107cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。

〔出土遺物〕1層から土器の実測資料が出土した。

No.	土 色	土 性 質	考
1	赤2.5YR 5/3	シカリ 少量の炭化物を含む。	
2	赤2.5YR 5/3	堅 上 灰色の板土を含む。	
3	褐7.5YR 5/4	堅 上 少量の炭化物、燒土を含む。	
4	褐洪褐色8YR 5/2	堅 上	
5	褐5YR 5/2	軟	黄褐色8YR 5/2堅土を含む。焼成土を含む。
6	赤2.5YR 5/3	软	黄褐色8YR 5/2堅土を含む。焼成土を含む。
7	黄褐色10YR 5/6	软	



第63図 89号土壤と出土遺物

## 90号土壤

〔確認面〕 V層から確認された。

〔重複〕 認められない。

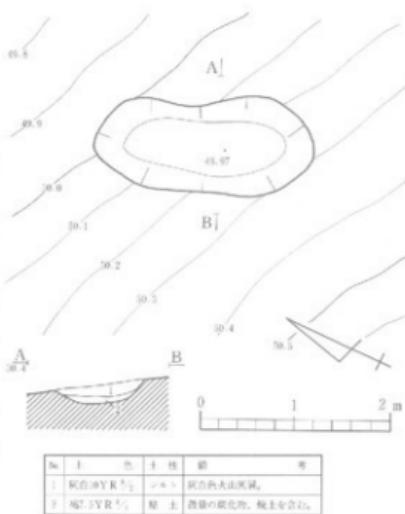
〔平面形〕 長軸2.33m、短軸1.08mの長円形である。

〔堅穴層位〕 2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 V層からなり、最も保存の良い北側の壁では32cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕 V層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



第64図 90号土壤

## 91号土壤

〔確認面〕 基本層序Ⅲ層から確認された。

〔重複〕 認められない。

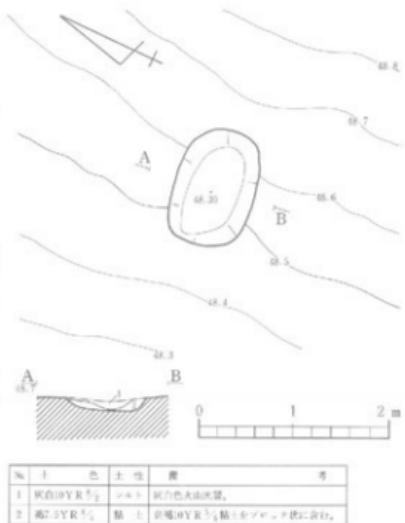
〔平面形〕 長軸1.27m、短軸0.87mの長円形である。

〔堅穴層位〕 2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 Ⅲ層からなり、最も保存の良い東側の壁では22cmの高さで残存している。底面から急な角度で立ち上がる。

〔底面〕 Ⅲ層からなり、凹凸はない。底面レベルは中央部が最も低く、壁に近づくにつれて高くなる。

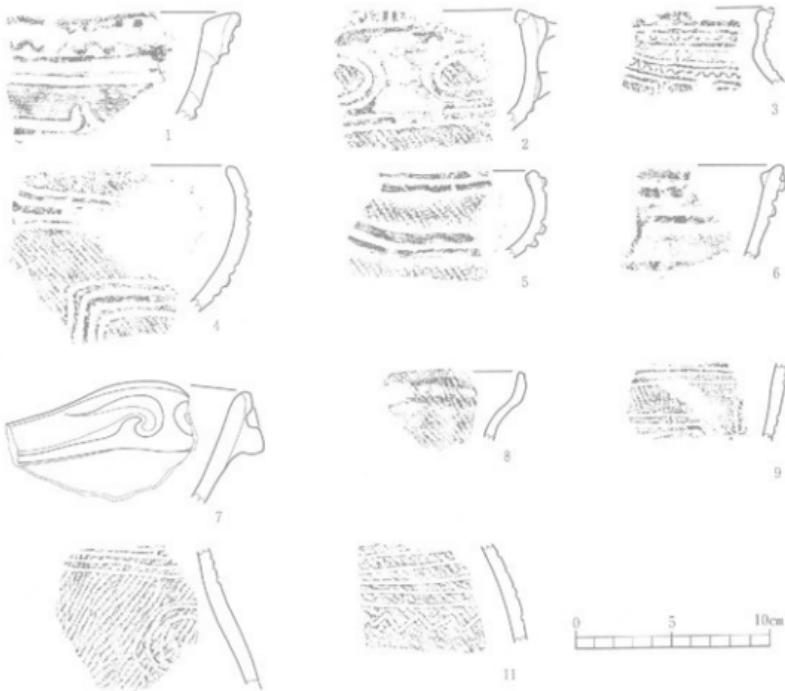
〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。



第65図 91号土壤

## 7. II層出土の遺物

基本層序II層からは、縄文上器、土顎器、須恵器の土器類と、少量の石器が出土している。石器は紙片の関係から括愛した。



No.	種別	場所	外観	内観	参考
1	縄文土器	Ⅱ層	口縁 横縞文・縦縞文・織文L.R. 植5YR5/2		1.9cm. 色調外側と同じ
2	縄文土器	Ⅱ層	口縁 底縞文・横縞文・縦縞文L.R. 黄赤5YR7/2		1.9cm. 色調外側と同じ
3	縄文土器	Ⅱ層	口縁 底縞文・安昙羽衣文・織文10YR7/1		1.9cm. 植6C6YR5/2
4	縄文土器	Ⅱ層	口縁 底縞文・縦縞文L.R. 植10YR7/2		1.9cm. 色調外側と同じ
5	縄文土器	Ⅱ層	口縁 縦縞文・横縞文・織文L.R. 植7.5YR5/2		1.9cm. 植5YR5/2
6	縄文土器	Ⅱ層	口縁 縦縞文・横縞文・側旁文・織文L.R. 植5YR5/2		縦縞文・1.9cm. 色調外側と同じ
7	縄文土器	Ⅱ層	口縁 縦縞文・横縞文・側旁文・織文L.R. 植5YR5/2		1.9cm. 色調外側と同じ
8	縄文土器	Ⅱ層	口縁 横縞文・織文L.R. 植5YR5/2		1.9cm. 色調外側と同じ
9	縄文土器	Ⅱ層	口縁 横縞文・縦縞文・織文L.R. 植5YR5/2		1.9cm. 色調外側と同じ
10	縄文土器	Ⅱ層	口縁 横縞文・縦縞文L.R. 植5YR5/2		1.9cm. 植5YR5/2
11	縄文土器	Ⅱ層	口縁 横縞文・縦縞文L.R. 植5YR5/2		1.9cm. 植6.5YR5/2

第66図 II層出土遺物(1)



No.	種	形	器	外	面	底	内	色	寸法	直徑	壁高(1cm)	分類	考
1	土器筒	直筒	一	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	-	-	-	A	
2	土器筒	直筒	一	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	13.0	-	1.0	A E	
3	土器筒	直筒	一	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	-	10.0	-	A E	
4	土器筒	直筒	一	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	-	14.8	-	B	
5	土器筒多コ凹(裏)	直筒	二	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	-	-	-	B	図67-8
6	土器筒多コ凹(裏)	直筒	二	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	-	-	-	B	図67-9
7	頭部器	直筒	一	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	8.9	5.0	2.3	F 2	
8	頭部器	直筒	一	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	-	5.5	-	F 1	図67-6
9	頭部器	直筒	一	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	-	6.0	-	F 1	
10	頭部器耳附	直筒	一	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	-	-	-	A	図67-7
11	頭部器	直筒	一	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	-	-	-	A E	
12	頭部器	直筒	一	ヒ・シ、E・DA-802・5Y R5/1	削り	「」	「」	「」	-	-	-	A E	

第67図 II層出土遺物(2)

## V. 出土した遺物の検討

本遺跡から出土した遺物としては繩文土器、土師器、須恵器、石器があり、その大部分は住居跡と窯跡から出土した土師器、須恵器である。これらを各種別ごとに、各々の特徴に基づいて分類を試み、その編年的位置や問題点を検討していきたい。

### 1. 繩文土器

本遺跡からは繩文土器片が平箱(テンバコ32)で2箱分出土している。これらは全て表土、または正層から出土したもので、繩文時代の構造は検出されていない。土器片の中から文様のわかるものの11点を図化した。ここでは、図化した11点(第66図)について、その特徴と編年の位置について考えたい。

第67図3は鉢形土器の口縁部片で、口唇部を欠失している。平行する沈線の間に交互刺突が施される。この文様の特徴は繩文時代中期前葉大木7a式に位置付けられる篠塚町嘉倉貝塚第6地点(佐藤信行:1973.3)や七ヶ宿町小堀川遺跡(相原淳一:1986.3)東側遺物包含層第Ⅱ群土器に共通した要素をもつところから、同式に併行するものと考えられる。

同図1、2、4、5は口縁部片である。1は厚い口縁部に波状の粘土縫貼付文、その下に太い沈線で文様が構成される。2は桶状把手が付くもので、口唇部に捺糸文、口縁部に沈線文と隆線文が施される。4、5は深鉢で口縁が強く内湾するものである。地文の繩文LRを押捺し、粘土縫貼付文に沈線を沿わせる、いわゆる隆沈文で文様をあらわしている。9、11は体部片である。地文の繩文に沈線で文様が描かれたもので、曲折文と考えられる。以上の土器の特徴は南方町長者原貝塚第1号住居跡(阿部・遊佐:1978.3)から出土した繩文時代中期中葉大木8a式に位置付けられる資料に類似を求めることができる。これらの土器も同式のものと考えられる。

同図7、10は渦巻文の文様をもつ土器片である。7は波状口縁で、無文帶に太い隆線で渦巻文を描いている。10は体部片で、繩文RLの地文に平行する沈線文と、渦巻を描く沈線文が施されたものである。これらは繩文時代中期中葉大木8b式に位置付けられている大和町勝負沢遺跡(丹羽・阿部・小野寺:1982.3)第Ⅱ群土器や大郷町大松沢貝塚出土土器(加藤孝:1956.3)に共通した特徴をもつことから、同式と理解してよいものと思われる。

同図8も口縁部が内湾するもので、地文の繩文LRが押捺される。大木8a~8b式に位置付けられる。

今回の調査で発見された繩文土器は、以上とおり、繩文時代中期大木7a~8b式のものである。

## 2. 土師器、須恵器、赤焼き土器

### (1) 分類とその特徴

#### 1. 土師器—壺—

【A類】ロクロ不使用で、そのほとんどが内面にミガキと黒色処理が施され、外面中位に段のあるもの(A I)、下位に段のあるもの(A II)、段のないもの(A III)。器形は丸底もしくは丸底風平底である。

A I i : 平底風丸底の底部から緩く内湾して立ち上がり、口唇部が内傾しておさまるものである。器外面にミガキが施される。概して大ぶりなものである。

A I ii : 段を境として口縁部にミガキ、体部と底部にケズリが施される。概して小ぶりである。

A II i : 丸底の底部から体部が内湾するもので、段を境として口縁部にヨコナデ、体部と底部にケズリが施されている。内面にはミガキが施されるが黒色処理はなされない。概して大ぶりなものである。

A II ii : 丸底の底部から体部が内湾するもので低平な器形である。段を境として口縁部にミガキ、体部と底部にケズリとミガキが施される。概して小ぶりである。

A III i : 平底風の底部から体部が内湾しておさまるもので、口縁部にミガキ、体部と底部にケズリとミガキが施される。概して大ぶりである。

A III ii : 平底風の底部から体部が外傾するもので、口縁部から底部までミガキが施される。低平な器形である。

A III iii : 丸底風の底部から体部が内湾するもので、口縁部にヨコナデ、体部にミガキ、底部にケズリが施される。概して小ぶりなものである。

【B類】ロクロ使用で、内面にミガキ、黒色処理が施されるもの。小ぶりで逆台形状を呈し、底径・口径比の大きいもの(B I)と、大ぶりで内湾する器種のもの(B II)がある。

B I : 底部から直線的に外傾するもので、器形は逆台形である。底部は回転糸切りで切り離されており、再調整は施されない。

B II : 体部が内湾するものである。底部は欠損しているため不明である。

#### 2. 土師器—高壺—

【A類】脚部破片のため全体は不明であるが、ロクロ不使用で、外面に細かいハケメ、内面にケズリが施される。

### 3. 土師器－高台付坏－

【A類】体部下半が残存するもので、制作に際しロクロを使用したものである。高台部は外側にふんばるもので、体部は直線的に外傾する。器面は外面にヨクロナデ、内面にミガキと黒色処理が施されている。

### 4. 土師器－鉢－

【A類】製作に際しロクロを使用するもので、口縁部が「く」字状に短く開き、体部が内湾するものである。口縁部に最大径をもつ。器面は外面にヨクロナデ、内面上半にヨクロナデ、下半にヘラナデが施されている。

### 5. 土師器－壺－

【A類】製作に際しロクロ不使用のもの。

A I : 口縁部が直線的に外傾し、体部が膨まないもので、頸部にはやや不明瞭な段をもつ。口唇部がつまみあげられ、器面は外面口縁部にヨコナデ、ハケメ、体部にケズリが施され、内面口縁部にヨコナデ、体部にハケメが認められるもの(A I i)と口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にハケメとケズリ、内面にヘラナデが施されるもの(A I ii)がある。

A II : 口縁部が外傾し、体部が弱い膨みをもつもので、頸部に明瞭な段をもつ。器面は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にミガキ、内面にヘラナデが施される。

A III : 口縁部が外反し、体部が膨みをもつもので、口縁部に最大径をもつ。頸部に明瞭な段が認められる。器面は口縁内外面にヨコナデ、体部外面にケズリ、内面にヘラナデが施される。

A IV : 口縁部が直線的に外傾し、体部に膨みをもつもので、体部に最大径をもつ。口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にケズリ、内面にヘラナデが施される。頸部に明瞭な段をもつもの(A IV i)とやや不明瞭な段をもつもの(A IV ii)がある。

【B類】製作に際しロクロ使用のもの。

B I : 器高の高い長胴形のもので、頸部の屈曲が強く、口縁部が直線的に外傾し、口唇部に至って内面が立ち上がるものの。体部は緩く膨み、中位で最大となる。底部はオサエメによって丸底風に仕上げられている。器面は外面口縁部から体部上半にかけてロクロナデ、体部下半にケズリが施され、内面にはロクロナデが認められる。

B II : 器高の高い長胴形のもので、頸部の屈曲が強く、口縁部が直線的に外傾するもの。体部はわずかに膨み、上位で最大となる。器面は体部上位より上はロクロナデ、下はシャープなケズリが施される。内面は上半にロクロナデ、下半にヘラナデが認められる。

B III：口径と器高がほぼ等しい短胴形のもので、頸部が強く屈曲し、口縁部が直線的に外傾する。外面上半にロクロナデ、下半が無調整、下端に横平行のケズリが施され、内面にロクロナデとヘラナデが認められる。

#### 6. 土師器一壺一

【A類】製作に際しロクロ不使用のもの。全体をうかがうことのできる資料がないため、口縁部は不明であるが、体部は球形で、底部は径の小さいあげ底である。頸部で強く屈曲し、直線的に外傾するものと思われる。器面は外面全体に緻密なミガキが施され、内面は頸部にミガキ、体部にナデとヘラナデが施される。頸部の破片資料には突帯の付くものもある。

【B類】ロクロ使用のもの。頸部をもつもので、体部は強く肩が張り、底部は平底である。肩部には対角に四つの穿孔が認められ、極く短い口縁がつくものと思われる、多口瓶(壺)である。器面はロクロナデと外面下端にケズリとタタキ目が認められる。

#### 7. 土師器一筐

【A類】製作に際しロクロ不使用のもの。

A I：底部から口縁部にかけて直線的に外傾する無底式のもので、頸部に段をもつもの。外面は口縁部にヨコナデ、体部にケズリ、内面は口縁部にヨコナデ、体部にヘラナデとケズリが施される。

A II：体部下端の破片資料で全体はわからない。無底式のものである。外面はハケメとケズリ、内面はヘラナデとケズリが施される。

【B類】ロクロ使用のもの。体部下端の資料で全体はわからない。無底式のものである。外面はケズリとロクロナデ、内面はヘラナデとロクロナデが施される。

#### 8. 土師器一手挽ね土器一

【A類】ロクロ不使用のもの。

A I：平底で、口径と底径の差のないもの。器面は外面、内面共にヨコナデが施される。

A II：体部が彎曲するもの。外面はヨコナデとケズリ、内面はヨコナデが施される。

A III：丸底風のもの。器面は外面、内面共にヨコナデ、オサニメが施され、外面底部にはケズリが認められる。

#### 9. 須恵器一壺一

【A類】口径に比して底径が大きく、器高の低いもの。底部から膨みをもって立ち上がり、口

縁部にかけて直線的に外傾する。底部の切り離しが回転ヘラ切りのもの(A I)と回転糸切りにケズリ再調整の施されるもの(A II)とに分類される。

A I : 底部の切り離しが回転ヘラ切りで、軽いナデが認められる。

A II : 底部の切り離しが回転糸切りで、体部下端から底部外縁にかけてケズリが施される。

〔B類〕 口径に比して底径がやや小さく、器高の高いもの。底部からやや外反して立ち上がり、口縁部にかけて直線的に外傾する。底部は回転ヘラ切りで切り離されている。器厚は薄い。

〔C類〕 口径に比して底径が半分前後で、底部から弱い膨みをもって立ち上がり、口縁部にかけて直線的に外傾する。器高が4.1cm前後のもの(C I)と3.6cm前後のもの(C II)に分類される。

C I : 体部下端から底部全面もしくは底部外縁に回転ケズリ再調整の施されるもの。底部の切り離しのわかるものは回転糸切りである。

C II : 回転糸切りで切り離され、再調整の認められないもの。

C III : 体部下端から底部全面に回転ケズリ再調整の施されるもの。

C III : 回転糸切りで切り離され、再調整の認められないもの。

〔D類〕 口径に比して底径が半分前後で、体部が強い丸味をもつもの。底部の切り離しは回転糸切りで、再調整は認められない。

D I : 器高が4.1cm前後のもの。

D II : 器高が3.6cm前後のもの。

〔E類〕 口径に比して底径が小さく、体部が内湾するもの。器厚は極めて薄い。

E I : 体部の湾曲は下端が強く、中位が直線的に外傾し、口唇部が外反するもの。器高はやや低い。口径に対する底径の比は1:0.42前後である。

E II : 体部全体が内湾して外傾し、口唇部が外反するもの。器高はやや高い。口径に対する底径の比は1:0.36前後である。

E III : 体部全体が緩く内湾して外傾するもの。器高はやや高い。口径に対する底径の比は1:0.38前後である。

〔F類〕 口径が10cm前後の小さめのもの。体部は直線的に外傾する。

F I : 口径に比して底径が半分前後で、体部下端から底部全面に回転ケズリが施される。

F II : 口径に比して底径が3分の2前後で、体部下端から底部全面、もしくは底部全面にケズリが施される。

〔G類〕 口径が7cm前後の小さいもの。器高の低いもの(G I)と高いもの(G II)がある。

G I : 器高が低く、体部が外傾して口唇部が反るものの。底部はケズリが施される。

G II : 底径と器高がほぼ同一の器高の高いもの。体部は直線的に外傾する。体部下端から底部全面に回転ケズリ、もしくはケズリ再調整が施される。

## 10. 須恵器・高台付坏ー

【A類】口径に比して底径が大きく、体部、口縁部がほぼ直立するもの。底部の切り離しは欠損のため不明である。再調整は認められない。

【B類】杯部の器高が高く、高台部が低いもの。体部、口縁部は直線的に外傾する。体部下端から底部全面に回転ケズリが施され、高台が付されている。

【C類】杯部上半を欠くもので、全体はわからないが、大きめのものである。底部は回転系切りで切り離され、外縁に回転ケズリが施されている。

## 11. 須恵器ー双耳坏ー

【A類】耳部の破片のみで、全体はわからない。耳部は円柱状で、外面はケズリが施される。

## 12. 須恵器ー蓋ー

【A類】概して低平な器形で、宝珠形のつまみが付き、平坦な天井部から体部が直線的に外傾するもの。口縁部は内側に短く折れ曲がる。口縁部外面に沈線のめぐるものもある。天井部外面は回転ケズリが施される。

【B類】つまみのないもので、平坦な天井部から体部、口縁部が直線的に外傾するものである。

B I : 外面天井部全面と体部上端に回転ケズリが施される。

B II : 外面天井部全面と体部上端にケズリが施される。

## 13. 須恵器・鉢ー

【A類】口縁部が「く」字状に短く屈曲し、体部は緩く内湾するもので、大形のもの(A I)と中形、小形のもの(A II)に分けられる。

A I : 大形のもので、口唇部は厚くつくられている。外面にタタキ、回転ケズリ、ロクロナデが施され、内面にはアテメ、ヘラナデ、ロクロナデが認められる。

A II i : 中形のもので、口唇部は単純におさまる。外面、内面共にロクロナデが施される。

A II ii : 中形のもので、口唇部が厚くつくられている。外面、内面共にロクロナデが施される。

A II iii : 中形のもので、やや長胴形である。外面にロクロナデ、内面はロクロナデ、ミガキが施される。

【B類】丸底の底部から体部が内湾するもので、口縁部は内湾したままおさまる。いわゆる鉢鉢形のものである。外面は底部から体部下端にケズリ、口縁部から体部にロクロナデが施され、内面にはロクロナデとヘラナデが施される。

## 14. 須恵器—甕—

〔A類〕体部上半、または中央に強い張りをもつ胴張り形のもの。全体形を知るものは少ない。

A I : 口縁部が発達し、器厚は全体に厚いもの。外面はロクロナデ、タタキ、横方向のケズリが施され、内面はロクロナデ、アテメ、ヘラナデ、ナデが認められる。

A II : 口縁部は簡略化され、器厚は薄い。器面は外面ロクロナデ、縱方向のケズリ、内面にロクロナデと縱方向のヘラナデが施される。

〔B類〕長胴形のもので、頸部が「く」字状に屈曲し、口唇は単純におさまるもの。外面にロクロナデ、内面にミガキが施される。

## 15. 須恵器—壺—

〔A類〕口縁部は直立し、頸部が強く屈曲して体部が内湾するもので、底部は平底で大きい。口唇部は簡略化されわずかに膨む。外面は上半がロクロナデ、下半に縱方向のケズリが施され、内面はロクロナデ、回転ハケメ、ヘラナデ、ナデが施される。

〔B類〕体部片で全容は不明である。体部がつよく内湾するもので、外面にロクロナデ、体部中央から下半にケズリが施される。内面はロクロナデが認められる。

## 16. 赤焼き土器—壺—

〔A類〕底部から弱い膨みをもって立ち上がり、口縁部にかけて直線的に外傾するもの。口径に比して底径が半分前後である。体部下端から底部外縁にかけて回転ケズリ再調整が施される。器形、調整とも須恵器壺C I i類と同様であるが、底部の切り離しは静止糸切りである。

## (2) 土器の出土状況と土器群の設定

### ■ 土器の出土状況 ■ ■ ■ ■ ■

前項で分類した土師器、須恵器、赤焼き土器は、基本層、各遺構底面、各遺構堆積土から出土したものである。遺物はできるだけ図化することを心掛けた。その結果、土師器は44点を実測図化、須恵器は80点を実測図化、6点を拓影図化、赤焼き土器については出土数が極めて少なく1点を実測化することができた。これらの遺物の出土状況をまとめたものが第15表である。

遺構の床面や底面から出土した遺物は出土した遺構に伴うものであり、時間の限定できない堆積土から出土した遺物とは同等には扱えないことは周知のことである。そこで、遺構床面や底面から出土した遺物のまとまりを共伴関係にあると考え、検討の基本とした。この出土状況は、厳密には遺構廃棄時点の共伴関係を示しており、製作や使用の年代とは異なるが、廃棄の

第14表 土師器・須恵器・赤焼瓦土器の出土状況

時間的幅が極めて狭いと考えられることを考慮したことである。一方、堆積土から出土した遺物は、同時性が検証できにくうことから、検討の基本とはせず、その出土状況を吟味し、土器のもつ属性を考慮しながら補助として扱った。

なお、層位的に新旧関係を認めることが出来る遺構の重複は少なく、さらに、重複するそれぞれの遺構から検討に耐え得る資料が出土していないことから、土器群設定には使用できなかった。

### ■ 土器群の設定

土師器にはロクロ不使用のものとロクロ使用のものがある。壺についてみると、ロクロ不使用のものはA I i～A III類、7種、ロクロ使用のものはB I～B II類、2種に分けられる。須恵器壺についてみるとA I～G II類、16種に分類された。これらの上師器壺、須恵器壺は比較的その特徴を覚えやすく、出土量が多いことから、先述した出土状況に基づき、検討を加えた。その結果、後述する様な組み合わせが認められた。さらに、土師器壺、須恵器壺以外の器種について検討したところ、同様に対応する組み合わせが認められた。これらの組み合わせを上器群とし、設定した。なお、土師器壺や須恵器壺の認められなかつたまとまりについては、これまでの研究成果に基づいて検討し、土器群として設定した。

### （3）第1群土器

#### ■ 第1群土器の特徴

46号住居跡の床面からロクロ不使用の上師器壺A類が1点出土している。その他に伴出した土器はない。土器群設定の基本とした土師器壺、須恵器壺が含まれないことから、土器群と認識するには不明確であるが、土器の特徴が他の土器群と全く異なり、これまでの研究成果を踏まえ第1群土器とした。46号住居跡堆積土からも土師器壺A類の頸部破片が1点出土している。これも土器の特徴から第1群土器に含めて考えることにした。本土器群は、この2点のみで、その内容は極めて貧困である。

壺の特徴は、口縁部から頸部を欠くため詳細は不明であるが、底部があげ底状で、強い膨みをもつ球形の体部に直立する頸部がつくものである。外面全面に縱方向の丁寧なミガキが施され、内面頸部は同様のミガキ、体部はナデとヘラナデが認められる。

頸部破片の方は、屈曲する頸部と体部の境に三角形の突帯をめぐらすので、ハケメ調整後、丁寧なミガキが施され、内面はハケメ調整である。

## ■ 第1群土器の編年的位置と問題点 ■ ■ ■ ■ ■

第1群土器の特徴は、「東北上師器の型式分類とその編年」の第1型式(塩釜式)(氏家和典: 1957.3)と共通するものである。塩釜式については型式設定以降、高塚古墳、方形周溝墓、集落跡の調査資料が増加し、時期的な変遷でとらえられてきている(丹羽茂: 1983.3、1985.3他)。

本遺跡から出土した小形の壺(第68図1)は名取市西野田遺跡(丹羽・柳田・阿部: 1981.3)第5住居跡出土のつぶれた球形の胴部をもつ単純口縁壺に類似するものの、本資料の器面は丁寧なミガキが施されている。この球形胴部を基調とする壺は塩釜式の古い段階から新しい段階まで全般を通してみられるもので、器形では本資料の様な「玉蔭状胴部をもつものは全体に変化に乏しい」(丹羽茂: 前掲)という指摘の通り、

詳細な時期を限定できない。突堤のめぐる頸部破片も同様に時期を限定することは困難である。本群は古墳時代前期塩釜式期、4世紀代頃のものと理解し、闇ノ入遺跡内での本群の資料数増加を待って、今後、検討されることを期待したい。



Na	種	別	分類	編	年
1	上師器壺	A	床面		
2	上師器壺	A	地盤土		

第68図 第1群土器(46号住居)

## (4) 第2群土器・第3群土器

### ■ 第2群土器と第3群土器の特徴 ■ ■ ■ ■ ■

ロクロ不使用で内面にミガキと黒色処理が施される上師器壺を出土した遺構には37号住居跡、38号住居跡、41号住居跡がある。中でも38号住居跡と41号住居跡からは2個体以上の土師器壺に加えて甕や須恵器壺、高台付壺、蓋が伴出しており、器種相互の相違を比較し易いものと考え、両住居跡について検討する。

38号住居跡からはロクロ不使用の上師器壺A I ii、A II iii類、甕A II ii、A III、A IV ii類、須恵器壺A II類、高台付壺A類、蓋A類が伴出している。の中には38号住居跡の項でも述べたように、遺物の取り上げは床面上層としたが、床面の遺物に重なって出土した土師器甕A I ii、A III、A IV ii類の各1点を本住居跡に伴うものとして含めてある。

土師器壺は内面にミガキと黒色処理が施されるもので、既して小ぶりである。平底の底部から丸味をもって直立ぎみに外傾し、外面中位に段をもち、段より上にミガキ、下にケズリが施されるもの(A I ii)、やや丸味を帯びた平底甕の底部から緩く内湾し、外面に段をもたず、ヨコ

ナデ、ミガキ、ケズリの施されるもの(AIII)がある。甕はロクロ不使用で、口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、内面にヘラナデが施される。体部にハケメの残るものもある。いずれも、既して口縁部は細かめで頸部に段をもつが、だらだらとして不明瞭なものである。口縁部に最大径をもち、口縁が直線的に外傾し体部が膨らまないもの(AII)、口縁部と体部径がほぼ同一で、口縁部が直立ぎみに外反するもの(AIII)、体部に最大径をもち、口縁部が直線的に外傾するもの(ANII)がある。須恵器甕は、底部から膨みをもって立ち上がり直線的に外傾するもので、回転糸切り後、体部下端から底部外縁にケズリが施される(AII)。高台付甕は体部、口縁部がほぼ直立するもの(A)である。蓋は宝珠形のつまみがつき、平坦な天井部から直線的に外傾するもの(A)である。

41号住居跡からはロクロ不使用の土師器甕AIIi、AIII類、甕AII、AIII、ANi類、須恵器甕AII類が併出している。なお、同住居跡外周溝からは遺物の取り上げは堆積土としたが、底面の遺物に重なるようにして出土した土師器甕AIIIi、AIII類の各1点が出土している。この2点は出土状況の含味と土器の属性から、本住居跡に伴うものとして含めてある。

土師器甕は内面にミガキと黒色処理が施されるもので、丸底のものと平底のものとがある。丸底のものは体部が内湾するもので、大ぶりの輪形で外面中位に段をもつもの(AII)、小ぶりで外面下位に段をもつもの(AIII)があり、器面は全面にミガキが施される。平底のものは、大ぶりで外面に段をもたず、口縁部にミガキ、体部にケズリとミガキが施される(AIII)。甕は口縁部に最大径をもち、頸部に明瞭な段をもつもので、口縁部が外反し、体部に丸味をもつ。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、内面にヘラナデが施されるもの(AIII)と外面上にミガキが施されるもの(AII)、体部に最大径をもち、頸部に明瞭な段をもつもの(ANII)がある。須恵器甕は厚手で、外面にタタキ、内面にアテメを残すもの(AI)である。

さて、38号住居跡と41号住居跡の七器の特徴は以上のとおりである。次に、両者の共通点と相違点について考えたい。両者の上器にはロクロ不使用の土師器甕、甕の組み合わせが認められる。甕では丸底のものと平底のものがあり、外面に段をもつものともたないものがある。器面は内面にミガキと黒色処理が施される。甕では長胴形のものが主体を占め、口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、内面にヘラナデが施されるという共通性をもっている。しかし、41号住居跡の甕は有段丸底のものが含まれ、ミガキを主体とするのに対し、38号住居跡のものは、ヨコナデ、ミガキ、ケズリ調整が統一されていない。甕では41号住居跡のものは口縁部に最大径をもち、頸部の段が明瞭で、口縁部が外反し、体部が丸味をもつに対し、38号住居跡のものは口縁部と体部径がほぼ同一もしくは体部径が大きく、頸部の段も不明瞭で、口縁部が直線的に外傾するという違いが認められる。

つまり、双方に共通する要素は認められるものの、それぞれに異なる土器のまとまりとして



縮 尺 1/4

No.	施 形	分類	層 位
1	土頭器耳	A I	表面
2	土頭器耳	A II	外周器表附土
3	土頭器耳	A II	外周器表附土
4	土頭器	A II	燒造底面
5	土頭器	A II	カット痕等土
6	土頭器	A II	カット痕等土
7	土頭器	A II	カット痕等土
8	土頭器	A II	外周器底面
9	土頭器	A I	外周器底面

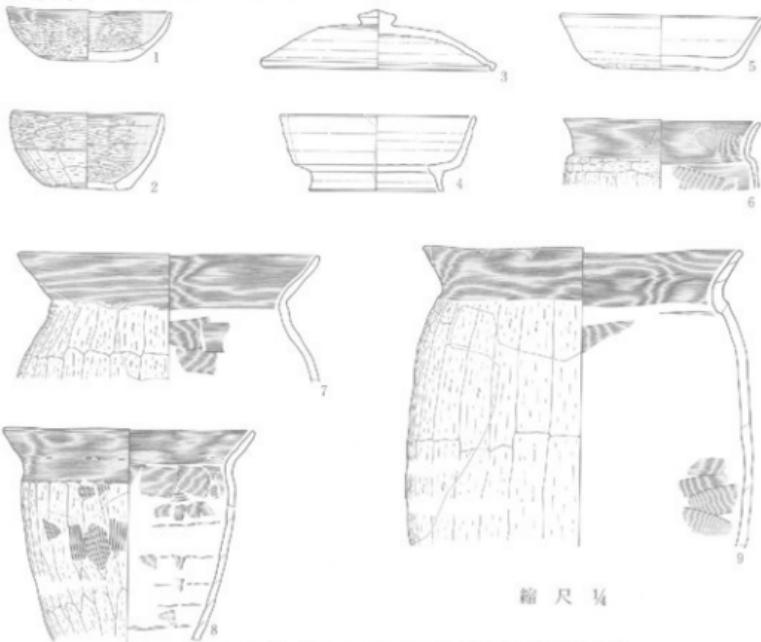
第69図 第2群土器(41号住居跡)

認識することができる。したがって38号住居跡と41号住居跡の土器をそれぞれ独立した土器群とし、仮に前者を第3群土器、後者を第2群土器とする。

### 第2群土器・第3群土器の編年的位置と問題点

第2群土器・第3群土器の特徴は志波郷町糠塚遺跡(小井川・手塚:1978.3)第1群土器や瀬峰町大境山遺跡(阿部・赤沢:1983.3)第3土器群、第4上器群に類例を求めることができる。糠塚遺跡第1群土器は国分寺下層式(氏家和典:1961.3、1967.9)の標準資料として取り扱われているものであり、その特徴は次のように要約される。土師器坏、甕、瓶、高坏、椀、蓋、須恵器坏、高台付坏、蓋、甕、壺、鉢から構成される。

土師器坏はロクロ不使用で、内面にミガキと黒色処理が施される。丸底のもの、平底のものがあり、さらに、外間に段をもつもの、沈線をめぐらすもの、段や沈線の認められないものと



No.	種	消	分類	層位
1	土器器坏	糠塚	灰陶	(C) 須恵器高台付坏
2	土器器坏	A1a	灰陶	7 上部器坏
3	須恵器蓋	A	灰陶	8 上部器坏

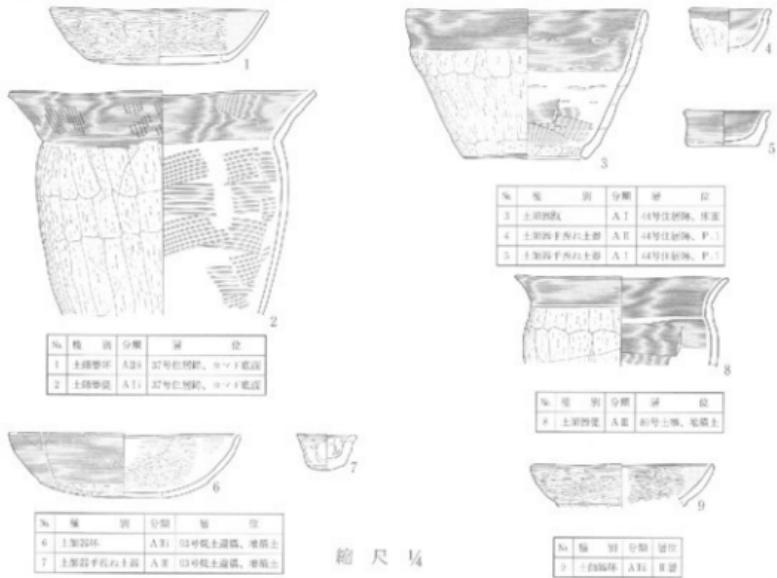
No.	種	消	分類	層位
-----	---	---	----	----

第70図 第3群土器(38号住居跡)

に分けられ、多様な杯の組み合わせが認められている。外面の調整はくがやが主体的に施され、ケズリがこれに次いで用いられるという規則性が見い出される。甕はロクロ不使用で大形のもとの小形のものとがあり、大部分が長胴形のもので、これに斬形のもの、鉢形のものも加わり、多様な器形から構成される。須恵器杯は底部の切り離しが回転ヘラ切りによるものが多く、回転糸切りのもの、ケズリ再調整が施され切り離しの不明なものも含まれる。

第2群土器、第3群土器の特徴は、第3群土器の須恵器杯(AII)と高台付坏(A)を除き、糠塚遺跡第1群土器の特徴と一致する。したがって、本遺跡第2群土器、第3群土器は糠塚遺跡第1群土器と同時期のものと考えることができる。

ところで、大境山遺跡の報文では糠塚遺跡第1群土器とその前後の土器群として、大境山遺跡第3土器群、第4土器群の資料を提示している。大境山遺跡からは多量の土器群、須恵器が出土し、特に土器群について詳細な検討を加え第3土器群、第4土器群を設定している。第3土器群は、糠塚遺跡第1群土器との比較から共通する要素と相違する要素を抽出し、相違する要素をより古い段階から引き継がれるものとして糠塚遺跡第1群土器に先行する土器の組み合わせとして位置付けている。第4土器群も同様に検討し、糠塚遺跡第1群土器に後続する土器の組み合わせとして位置付けた。



第71図 第2群～第3群土器(各遺構、Ⅱ層)

大境山遺跡第3土器群と第4土器群を比較すると、堀では第3土器群のものは「頸部が直立、もしくはわずかに外反し、口縁部が緩やかな丸味をもつて外傾する長胴形のものが多く、第4土器群のものは「頸部に段や沈線をもち、頸部の屈曲が強く、口縁部にかけて直線的に外反する長胴形のものを主体と」している。さらに、具体的な記載はないが、第4土器群には頸部に段をもたないものが増すという傾向も見られる。これらは、本遺跡第2群上器と第3群土器の相違点につながるものと考えられる。壺についてみると、大境山遺跡第3土器群にみられた古い要素は、本遺跡第2群土器には見られない。また、大境山遺跡第4土器群の中に本遺跡第3群土器が認められる。

以上のことから、本遺跡第2群土器は第3群土器に先行し、大境山遺跡第3土器群に近いもの<sup>註1</sup>、第3群上器は大境山遺跡第4土器群に近いものと考えられる。



第72図 間ノ入遺跡16号住居跡出土土器（「河南町文化財調査報告書」第4集より）

さて、第2群土器に先行する、国分寺下層式でも古い段階の土器群が関ノ入遺跡から検出されている(中野・佐藤:1990.3)。16号住居跡、17号住居跡(第72図)に代表されるこの土器群は、内湾する有段丸底杯と口縁部が外反し頸部に明瞭な段をもつ長胴壺を主体とするもので、他の遺跡との検討から国分寺下層式でも古い段階の8世紀前半頃に位置付けた。この土器群の特徴は、器形の面からみると第2群土器につながるものと考えられる。

以上、第2群上器と第3群土器について類例の求められる他の遺跡との検討を試みたが、その編年の位置と年代について考えてみたい。第2群上器、第3群土器は櫛塚遺跡第1群土器に類似することから国分寺下層式でも新しい段階に位置付けられ、さらに第2群土器は大境山遺跡第3土器群に、第3群土器は大境山遺跡第4土器群に近いものと考えられる。実年代では、関ノ入遺跡17号住居跡が8世紀前半頃、大境山遺跡第3土器群が8世紀中頃、同第4土器群が8世紀後半頃とされる。本遺跡第2群土器は大境山遺跡第3土器群同様の8世紀中葉、第3群上器は後述する第4群土器を8世紀第3四半期後半～第4四半期にかけてのものとしたことから、それらに先行する8世紀中葉から後半頃と考えたい。

さて、第2群上器、第3群土器に包括される土器は37号住居跡、39号住居跡、43号住居跡、44号住居跡、93号焼土遺構堆積土、89号土壤堆積土、Ⅱ層から出土している。これらの土器は遺構に伴うものの両土器群に共伴関係が認められなかつたり、分類可能な土器が単数であったりしたものである。いずれも第2群土器、第3群土器のどちらに属するのか検討が困難なことから、両群のいづれかに属するものとして幅をもって位置付けておきたい。

註1：第2群土器と第3群上器は資料数の貧弱さから十分に検討できず、両者を分離することには問題があるかもしれない。この土器群分離の是非は、層位的検証と本遺跡近辺での資料数増加を待って再度検討することとしたい。

## (5) 第4群土器

### ■ 第4群土器の特徴 ■ ■ ■

45号住居跡一括土器は須恵器杯とロクロ使用の土師器甕のみであるが、いずれも第3群土器や後述する第5群上器と様相を異にすることから、第4群土器とした。第4群土器は須恵器杯A I類、土師器甕B I類で構成される。

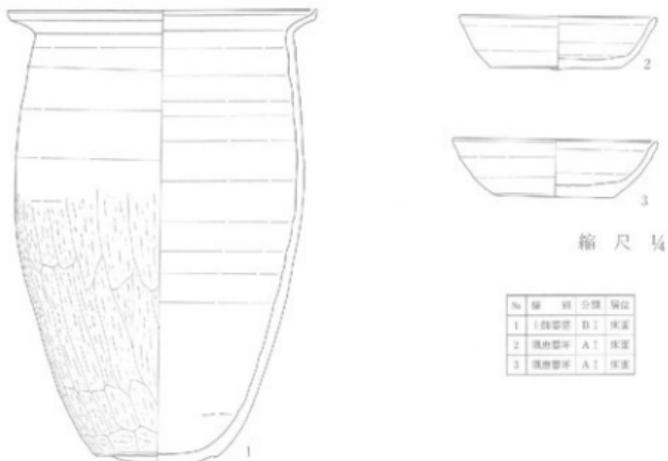
須恵器杯は口径に比して底径が大きく、器高の低いもので、口縁部から体部にかけて弱い丸味をもって外傾する。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、軽いナデが認められる(A I)。土師器甕はロクロ使用のものである。器高が高い長胴形で、頸部の屈曲が強く、口縁部が直線的に

外傾し、口唇部に至って内面が立ち上がる。体部は緩く膨み、中位で最大となる。底部はオサエメによって丸底風に仕上げられている。器面は、ロクロナデと体部下半にケズリが施される(B I)。

#### ■ 第4群土器の編年的位置と問題点 ■ ■ ■ ■ ■

第4群土器は遺物の量が極めて少なく、器種も須恵器杯、土師器甕にかぎられることから、土器の組み合わせを通して他の遺跡と比較することは難しい。そこで、先ず、須恵器杯、土師器甕個々の器種について検討し、合わせて編年の位置を考えたい。

須恵器杯 A I 類は閑ノ入遺跡に隣接する代官山遺跡 1号窯跡(DAI 1)(佐藤敏幸: 1983.3) 瓶N類に類例を求めることができる(DAI 1窯の概要は次項「(V-3)須江窯跡群における須恵器の変遷(案)」を参照されたい)。第4群土器 A I 類と DAI 1 窯瓶N類は器形、技法、胎上、法量共に同一で、A I 類は須江窯跡群第1期 DAI 1 窯段階のものと考えられる。また、DAI 1 窯に直接後続する須恵器は、未だ窯跡は発見されていないが、篠館町伊治城跡 S I-173住居跡(菊地逸夫: 1991.3)出土の須恵器杯 I 類、高台付杯 I A、VA類、蓋 I 類に見い出すことができる(佐藤敏幸: 前掲)。第4群土器 A I 類は伊治城跡 S I-173住居跡 I 類に比べて体部の湾曲が弱く直立気味で、底径が大きく、DAI 1 窯に近いものと見ることができる。したがって、



第73図 第4群土器(45号住居跡)

須恵器杯A I類はD A I I 窯と同様の8世紀第3四半期を中心とする年代が考えられる。<sup>註2</sup>

土師器甕B I類は奈良時代末から平安時代前半の多くの遺跡に類例が認められ、年代を特定できない。そこで、須恵器杯の年代が推定されたことから、その年代に近い伊治城跡S I-173住居跡、色麻町上新田遺跡(小井川和夫:1981.3)第8号住居跡と、須恵器杯の組み合わせについて比較する。伊治城跡S I-173住居跡は須恵器杯の比較で前述したように、本群より新しいものと考えられる。上新田遺跡第8号住居跡では、伴出する須恵器杯は8世紀後半から9世紀前半頃に多く見られる器形で、本群のものより新しい段階のものと言える。

以上、第4群土器について簡単に検討したが、土器の組み合わせでは類例が見当らないことから、須恵器杯の年代を用いて位置付けることにする。本群は須江窯跡群第1期D A I I 窯が8世紀第3四半期を中心とする頃と考えられることから、遺構の性格の違いを考慮し幅をもたせて、8世紀第3四半期後半から第4四半期前半頃と考えたい。

ところで、ロクロ使用の土師器甕B I類が8世紀後半に既に出現していたことになるが、本遺跡が須恵器生産地であるという条件がその要因であって、同時期に一般的な状況ではない。甕B I類の口縁部形態は、D A I I 窯の須恵器鉢の口縁部と同じつくりをしており、須恵器工人の技術によるものと推察される、と同時に、須恵器杯でしか検討できなかったD A I I 窯との同時性も補強するものと言える。

註1：須江窯跡群は現在のところ、丘陵全体を一遺跡として扱わざ、個々の遺跡の分布する丘陵として登録されている。したがって、須江難塚遺跡、代官山遺跡、閑ノ入遺跡から検出された窯跡は各々の遺跡名のついた番号(E X. 閑ノ入遺跡 1号窯跡)を使用している。窯跡名を記載して文書化すると煩雑になることから略称を用いることとした。なお、略称は「(V-3) 須江窯跡群における須恵器の変遷(案)」で記述している。

註2：検討した須恵器杯A I類と同様の器形、技法のものは、8世紀中頃から末頃に位置付けられる遺跡から出土しているが、閑ノ入遺跡が須江窯跡群内に位置するという地理的条件と、器形、技法、胎土、法量の全てに共通するという土器自体の特徴が一致する事実から、本窯跡群の製品と断定し他の遺跡とは比較しなかった。

なお、第3群土器の須恵器杯A II類、高台付杯A類、蓋A類は、現在のところ須江窯跡群からは発見されていないため、本窯跡群内での比較はできなかった。なお、これらの須恵器はその特徴から見ると、本窯跡群には認められず、他の地域から持ち込まれたものと考えられる。

## (6) 第5群土器

### ■ 第5群土器の特徴 ■ ■ ■

ロクロ使用の土師器杯を出土した遺構に7号竪穴遺構がある。7号竪穴遺構からは土師器杯

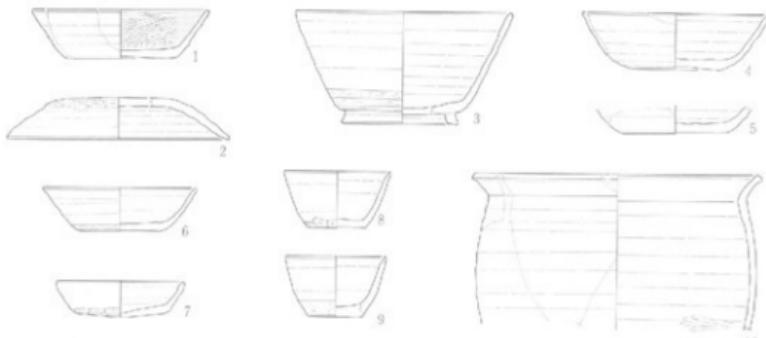
B I類、須恵器杯D I、F I、F II、G II類、高台付杯B類、蓋B II類、鉢A IIi類が併出してい。同様の土器は、40号住居跡、42号住居跡、48号住居跡、49号住居跡から出土している。40号住居跡からは須恵器杯C II類、鉢A IIi類、42号住居跡からは土師器甕B III類、壺B類、須恵器杯B、C IIi、C III類、鉢A III類、甕A I類、48号住居跡からは土師器甕B III類、壺B類、須恵器杯C II、C IIi、C III、F I、G I類、鉢B類、赤焼き土器A類、49号住居跡からは土師器甕B II類、須恵器杯C II、C IIi、D II類、高台付杯C類、蓋A、B I類、鉢A I類、甕A I類がそれぞれ出土している。これらの遺構は互いに共通する土器が認められることから共伴関係にあると考え、土師器杯B I類、鉢A類、甕B II、B III類、壺B類、須恵器杯B、C IIi、C III、C IIIi、D I、D II、F I、F II、G I、G II類、高台付杯B、C類、蓋A、B I、B II類、鉢A I、A IIi、A IIIi、A III、B類、甕A I類、赤焼き土器杯A類を第5群土器とする。

次に、第5群土器についてその特徴を整理してみたい。本土器群はロクロ使用の土師器杯、鉢、甕、壺、須恵器杯、高台付杯、蓋、鉢、甕、赤焼き土器杯の10器種から構成される。

土師器杯はロクロ使用で、口径に比して底径が大きく器高の低いものである。体部が直線的に外傾し、底部は回転条切りで再調整は認められない。器面は外面にロクロナデ、内面にミガキと黒色処理が施される(B I)。

鉢は口縁部が「く」字状に短く開き、体部が内湾するもので、外面にロクロナデ、内面にロクロナデとヘラナデが施される(A)。

甕は器高の高い長胴形のもの(B II)と口径と器高がほぼ同一の器高の低いもの(B III)がある。長胴形のものは頸部の屈曲が強く、口縁部が直線的に外傾するもので、体部がわずかに膨り、体部上位で最大となる。器面は外面体部上位より上にロクロナデ、下にシャープなケズリ、内



第74図 第5群土器(7号竪穴遺構)

N	種	別	分類	器	分
1	土師甕	B I	直腹底深		
2	須恵甕	B II	直腹		
3	須恵器内合付杯	B	直腹		
4	須恵器甕	D I	直腹底浅		
5	須恵器甕	—	直腹底浅		
6	須恵器甕	F I	直腹底浅		
7	須恵器甕	F II	直腹		
8	須恵器甕	G II	直腹		
9	須恵器甕	G III	直腹上		
10	須恵器甕	越足	須要土		

面上半にロクロナデ、下半にヘラナデが施される。短胴形のものは長胴形のものを低くした器形で、器面調整は外面上半にロクロナデ、下半が無調整、下端に横方向のケズリが施される。

壺は短い口縁部をもつもので体部は強く肩が張り、底部は平底である。肩部には対角に4つの穿孔が認められ、極く短い口縁部が付く多口瓶(壺)である(B)。

須恵器壺は出土量が多く、バラエティに富んでいる。いずれも口径に比して底形が半分前後で、底部からやや外反して立ち上がり、口縁部にかけて直線的に外傾するもので、底部は回転ヘラ切り無調整のB類、底部から弱い膨みをもって立ち上がり体部以上が直線的に外傾するC類と、体部が強い丸味をもつD類、C類を小さくしたF類、さらに小形のG類がある。C類は器高が4.1cm前後のC I類、3.6cm前後のC II類があり、さらに体部から底部にかけて回転ケズリ再調整が施されるC Ii、C IIi類と回転糸切り痕を残すC IIii類に分けられる。D類も器高が4.1cm前後のD I類、3.6cm前後のD II類に分けられる。F類は皿状のF I類、器高の高いF II類に分けられる。中でもC類の出土量が多い。底部の切り離しは大部分が回転糸切りで、ヘラ切りのものはわずかである。再調整の認められるものと認められないものの量比はほぼ半数である。法量でみると、B、C I、D I類、C II、D II類がそれぞれ同一であるから、6法量にまとめられる。

高台付壺は壺部の器高が高く、体部から口縁部が直線的に外傾するもので、体部下端から底部全面に回転ケズリ再調整が施され、低い高台が付されるB類と、壺部下半以下が残存する大きめのもので、回転糸切り後底部外縁に回転ケズリ再調整され高台部が付されるC類がある。

蓋はつまみのないもので、平坦な天井部から体部、口縁部が直線的に外傾するもの(B類)である。天井部全面に回転ケズリが施されるB I類と手持ちケズリが施されるB II類に分けられる。

鉢は口縁部が「く」字状に短く屈曲し、体部は緩く内湾するA類と、いわゆる鉄鉢形のB類がある。さらにA類は大形のA I類と中形のA II類に分けられる。

甕は比較的厚手のもので(A I)、体部にタタキメと横方向のケズリが認められ、内面に横、斜め方向のナデが施されるものがある。

赤焼き土器壺は器形、法量、技法共に須恵器壺C Ii類と同様で酸化焰焼成されたものである。底部の切り離しは須恵器と異なり、静止糸切り痕が観察される(A)。

以上、第5群上器の特徴を述べたが、器種が多彩でバラエティに富み、特に須恵器の量が非常に多いといえる。

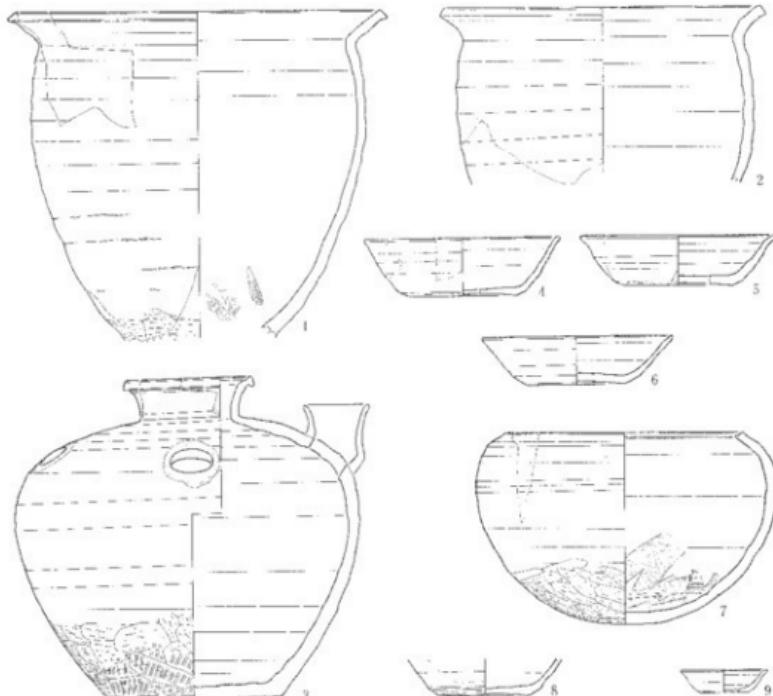
## ■ 第5群土器の編年的位置と問題点 ■ ■ ■

第5群土器は器種が多彩でバラエティに富み、本群に占める須恵器の量が非常に多いことは先に述べたとおりである。これは関ノ入遺跡が須江窯跡群内に所在し、須恵器生産の直接の影

縄下にある集落であることに起因する。この点を念頭に置いて考えたい。

須江窯跡群の中で、本群に類似する土器を出土した遺構には関ノ入遺跡(中野・佐藤：1990、3)10号住居跡、代官山遺跡(佐藤敏幸：1993.3)1号住居跡の堅穴住居跡と関ノ入遺跡II号(S.E.K.11)窯跡(佐藤敏幸：1991.2、1992.2、村田見一：1992.8)の須恵器窯がある。

関ノ入遺跡10号住居跡はヨクロ使用の上師器坏、壺、ヨクロ不使用の鉢、甕、須恵器坏、甕、双耳壺で構成される。上師器と須恵器の量比は半々程度である。本群のものと比較すると、須恵器坏、甕は類似性が認められ、坏は本群C類に相当するものである。土師器については坏、甕



器種	目別	分類	施釉	器種	目別	分類	施釉	器種	目別	分類	施釉
1	上師器	H.3	無釉	1	須恵器	C.1	無釉	2	須恵器	H.	須惠器
2	上師器	H.3	無釉	3	須恵器	C.1	無釉	4	須恵器	F.1	無釉
3	土師器	H.	無釉	6	須恵器	C.14	無釉	5	須恵器	G.1	無釉

第75図 第5群土器(48号住居跡)

共に器形、製作技法が異なっている。

代官山遺跡1号住居跡は十師器窯、甌、須恵器杯、甌、甌、赤焼き土器杯で構成される。土師器と須恵器の量比は半々程度である。本群のものと比較すると、土師器窯、須恵器甌、甌に類似性が認められ、土師器甌は本群のB II類に、須恵器杯はC I i, C I ii, D I類に相当するものである。しかし、土師器甌でも中、小形のものや、赤焼き土器杯では器形が異なっている。

SEKII窯(本宮IV-3)、須江窯跡群における須恵器の変遷(案)〔参照〕は須恵器杯、双耳杯、甌、鉢、甌、短頸甌、長頸甌で構成される。本群の須恵器と比較すると、本群の杯C I i, C I ii, C II i, C II ii, D I, D II類、甌A II類、甌A I類は、製作技法、器形、調整技法、法量共にSEKII窯のものに酷似する。

以上のことから、須恵器、特に杯について見ると、第5群土器、閑ノ入遺跡10号住居跡、代官山遺跡1号住居跡にはSEKII窯のものと考えることができる。

次に、第5群土器とSEKII窯の相違点について検討したい。類似する器種については、先に述べたとおりであるが、本群には、SEKII窯には見られない器種や特徴もある。本群の須恵器杯B、F I, F II, G I, G II類は、SEKII窯には認められないもので、本群の方が、器種、法量が分化しており、豊富であるといえる。特に、須恵器杯C I類とF I類は相似形をなし、「同一器形の法量による器種分化」(西弘海: 1986: 5)が、この時期の須恵器杯にも認められる理解できる。また、SEKII窯には双耳杯以外では高台の付く杯類は無く、本群の高台付杯B、C類は認められない。高台付杯B類の杯部と同様の器形、技法、法量の杯が認められるので、SEKII窯は高台が消失した段階と考えることができる。蓋は両者共つまみをもたないものであるが、本群の蓋B I, B II類は天井部に再調整が施され、丁寧に仕上げられるに対し、SEKII窯のものは、回転糸切り無調整で、技法的に簡略化されている。また、本群には、口縁部を折り曲げたものもみられる。大形の鉢や甌の調整技法についても、本群のものは回転ケズリや内面のナデが丁寧であるのに対し、SEKII窯のものは手持ちケズリや内面のナデが少なく疎な感じを与える。

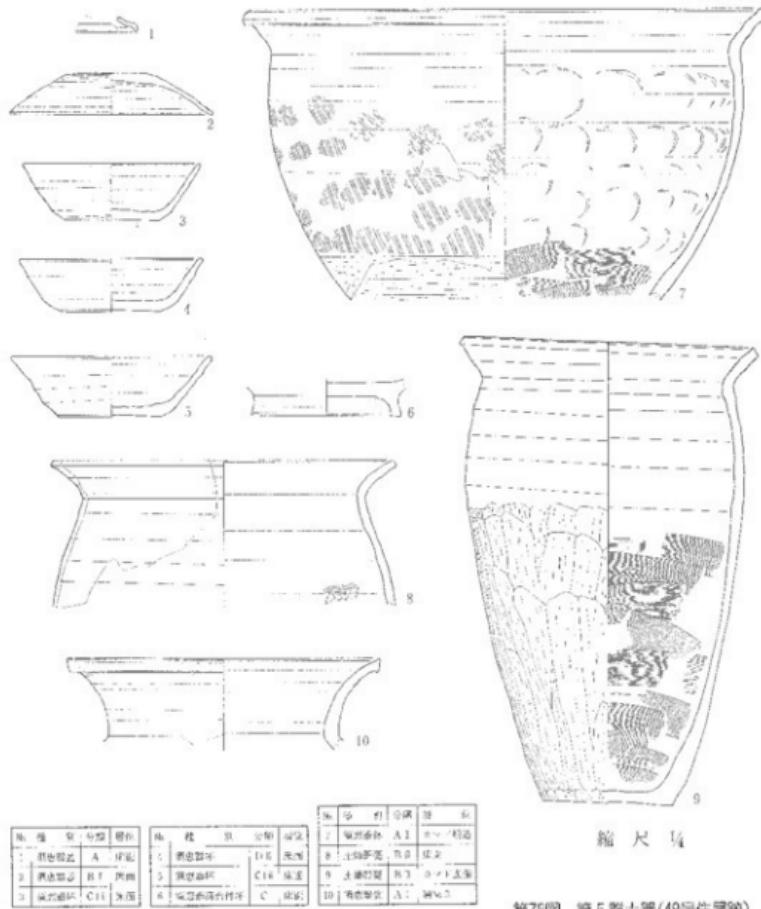
第5群土器とSEKII窯の類似点、相違点をまとめると、杯や中形、小形の鉢では類似するものの、第5群土器はSEKII窯に比べて杯の法量分化が著しく、豊富である。また、杯類では高台付杯が残存する。さらに器種全体を通して調整も丁寧であるといえる。したがって、第5群土器はSEKII窯、閑ノ入遺跡10号住居跡、代官山遺跡1号住居跡に類似する要素と相違する古い要素が認められることから、総体としてSEKII窯に先行する土器群と考えができる。

なお、本群と閑ノ入遺跡10号住居跡、代官山遺跡1号住居跡の十師器杯、甌の相違点は、時間的差違と、須恵器と土師器の量比から推察される遺構の機能・性格の差違によるものと考え

ておきたい。

次に、須江窯跡群以外の遺跡と検討してみたい。

第5群土器と同様の特徴を持つ土器の類例は見当らないが、比較的類似する土器は、利府町硯沢窯跡(真山悟ほか: 1987.3) A I a号窯跡、山元町北名生東窯跡(佐藤憲智: 1991.3)、大衡村大衡窯跡群横前窯跡(田村児一: 1988.3)、仙台市安養寺下窯跡(渡辺泰伸: 1973.3、結城慎一: 1981.3)の窯跡や、色麻町上新田遺跡(小井川和夫: 1981.3)第1、第8号住居跡、亘理町宮前遺



第76図 第5群土器(49号住居跡)

跡(丹羽茂: 1983.3)第20号住居跡、名取市今熊野遺跡(丹羽茂: 1985.3)KS第13号住居跡の住居跡から出土している。

硯沢A I a号窯跡は壺、高台付壺(報文では碗)、甕から構成される。資料数は少ない。壺は回転糸切り無調整の底部から緩く内湾するものと、体部下端から底部に回転ケズリ再調整が施され体部上半以上が直線的に外傾するものがあり、本群の壺C類に類似する。高台付壺は器高いもので、底部は回転ケズリ再調整が施されている。本群の高台付壺と比較すると、底径が大きく、古い様相と考えられる。硯沢A I a号窯は硯沢窯跡第4群土器に包括され、「8世紀後葉でも大きく降らない」年代を与えている。

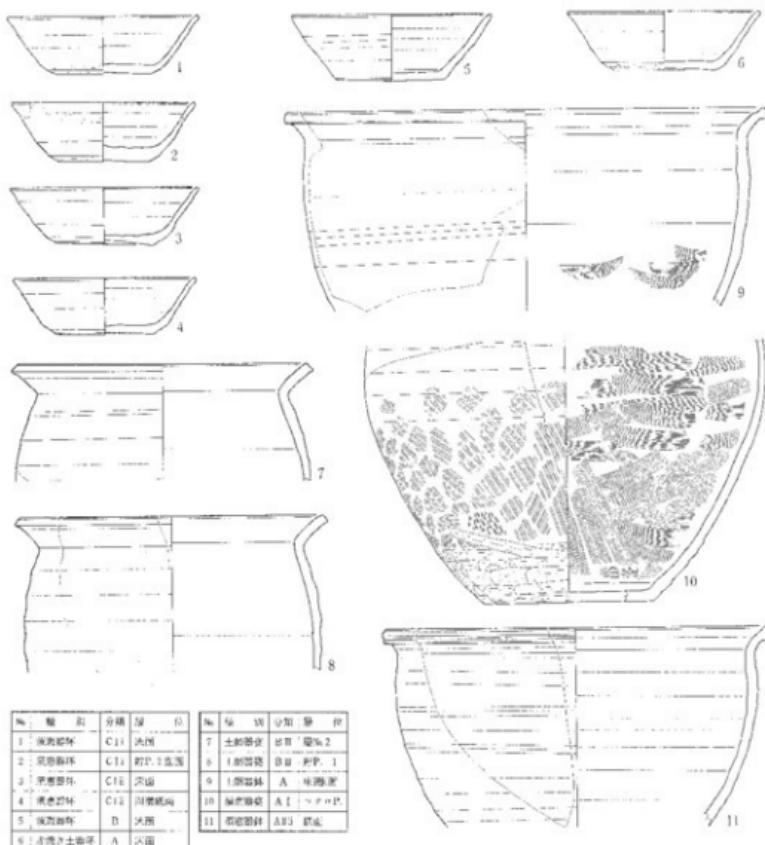
北名生東窯跡は壺、高台付壺、蓋、甕、長颈壺から構成される。壺は体部が直線的に外傾するものと、下部が丸味をもつものがあり、底部は回転糸切り無調整のもの、ヘラ切り無調整のもの、回転ケズリ再調整のものがある。器形や法量、底部の切離し技法共に本群の壺B、C類やSEK11窯のものに類似する。北名生東窯跡は今熊野遺跡KS第13号住居跡や宮前遺跡第20号住居跡などとの検討から、やや根拠に欠けるが、8世紀末葉を中心とした年代を与えている。

大衛窯跡群横前窯跡は採集土器であるが、比較的まとまった資料である。壺、高台付壺、小皿、蓋、甕、上鉢がある。壺は体部が直線的に外傾するもので、底部の切り離しは回転糸切りとヘラ切のものがある。本群の壺B、C類に類似する。小皿は本群の壺G I類に類似する。横前窯跡は宮城県北部の集落との検討から8世紀後半から9世紀初頭の年代を与えている。

安養寺下窯跡は多賀城跡政府第Ⅱ期の瓦を生産している。瓦と共に作る須恵器壺は、底部の切り離しはヘラ切りであるが、本群C類に類似するものである。多賀城跡政府第Ⅱ期は780年の火災以降で、瓦は本格的な復興期である第2小期(8世紀末頃)に属すると考えられている。

上新田遺跡第1、第8号住居跡は上師器壺、高台付皿、蓋、甕、須恵器壺、縫焼、蓋、赤焼き上器壺、蓋、鉢で構成される。須恵器壺は体部が直線的に外傾するもので、底部の切り離しは回転糸切り、ヘラ切、手持ちケズリ再調整の施されるものがあり、本群のB、C類やSEK11窯のものと器形、技法、法量共に類似する。長胴形の上師器甕は本群のB II類や代官山遺跡1号住居跡に類似し、中形の甕は代官山遺跡1号住居跡に類似する。これらの土器は表衫ノ入式でも古い段階に位置付けられるものの、上師器の製作集団が須恵器工人と密接な関係にあるか、あるいは須恵器工人そのもの(小井川和夫: 前掲)とされ、遺跡の性格からすれば本遺跡に近いものと見える。

宮前遺跡20号住居跡は十師器壺、蓋、甕、須恵器壺、蓋、高台付壺、甕からなる。須恵器壺は底部から内湾して立ち上がり、体部が直線的に外傾するもので、回転糸切り、ヘラ切り、回転ケズリの施されるものがあり、本群のB、C類に相当する。上師器甕では長胴形のものは本群のB II類や代官山遺跡1号住居跡のものに類似する。宮前遺跡20号住居跡は土師器壺の検討



縮尺 1/4

第77図 第5群土器(42号住居跡)



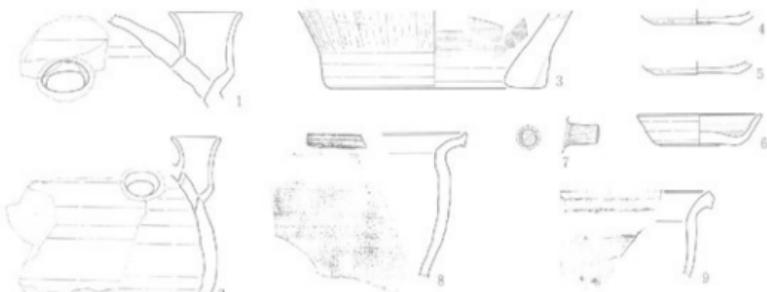
第78図 第5群土器(40号住居跡)

から8世紀末～9世紀初頭の年代を与えている。

今熊野遺跡K S第13号住居跡は土師器坏、甕、須恵器坏、壺、盤、蓋転用硯がある。須恵器坏は本群やS E K11窯のものに器形、技法、法量共に類似する。平安時代初期の年代が与えられている。

以上、各遺跡の特徴と類似点を羅列した。その内容を簡単にまとめると、須恵器坏は本群のものは回転ケズリの施される範囲が広く、古い技法を継承しているという相違はあるものの、器形が類似し、切り離し技法も回転糸切りとヘラ切が共存するという共通性が認められる。他の器種についても同様といえる。したがって、第5群土器、S E K11窯、関ノ入遺跡10号住居跡、代官山遺跡1号住居跡は、比較した各遺跡と同様の年代(8世紀後葉～9世紀初頭)幅におさまるものと考えられる。また、須江窯跡群内の比較で述べたように、本群はS E K11窯等に先行すると考えられるので、第4群土器に後続する、8世紀第4四半期頃と考えておきたい。

さて、本群の須恵器とS E K11窯は「須江窯跡群第Ⅱ期」の「糸切技法の導入された時期」に位置付けられる(V-3-(2))。回転糸切り技法で知られる東海地方の猿投窯と比較すると、本群のつまみをもたない須恵器蓋は猿投窯Ⅳ期第4小期1G-78号窯式期に出現するものである。I G-78号窯式期は高台の付く杯B類が激減し、無高台の坏が主体を占める段階で、本群の須恵器や本群からS E K11窯への変遷にも妥当性をもつものと言える。本群の高台付坏B類もI G-78号窯式期のK-35号窯やI-45号窯に認められる。壺では前段階である0-10号窯式期で一般的であった口頸部の三段構成がI G-78号窯式期前半で減少し、後半では二段構成のみになるとされる。S E K11窯のものには三段構成のものと、二段構成のものがあり予盾しない。関ノ入遺跡10号住居跡の双耳甕は肩部の破片で比較し難いが、板状の耳部や肩部の形態からI



縮尺 1/4

第79図 第5群土器(I層)

No.	器	質	分類	特徴
1	土師器多口瓶(甕)	A	B	三層
2	土師器多口瓶(甕)	B	B	三層
3	土師器瓶	B	C	三層

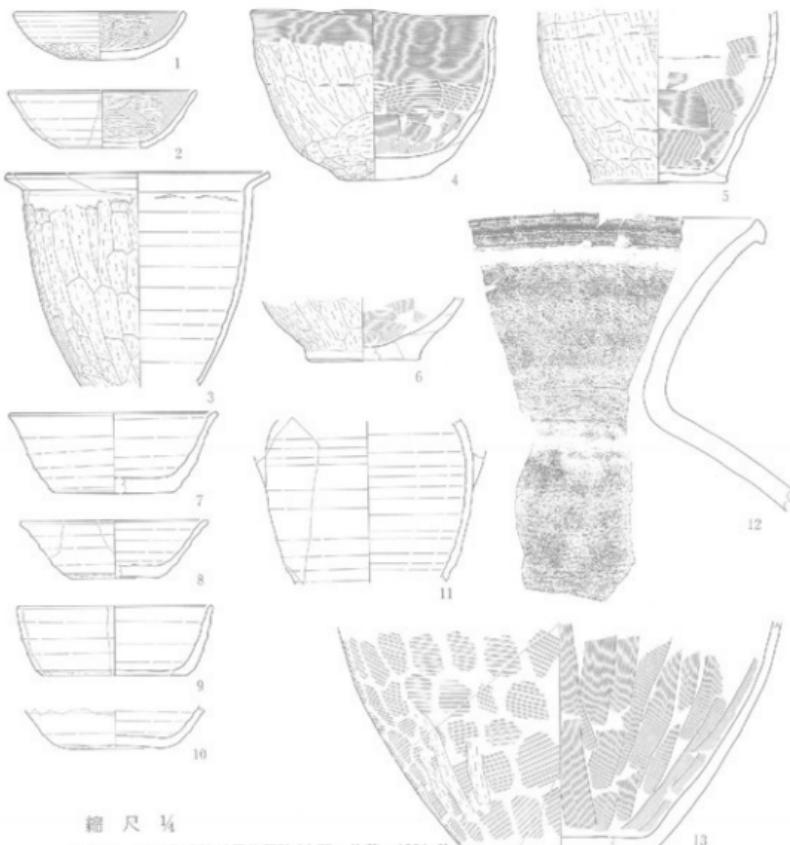
No.	器	質	分類	特徴
4	須恵器切刃	F I	E	三層
5	須恵器切刃	F I	E	三層
6	須恵器切刃	F II	E	三層

No.	器	質	分類	特徴
7	須恵器双耳甕	A	D	三層
8	須恵器切刃	A(E)	E	三層
9	須恵器切刃	A(E)	E	三層

G-78号窯式期のものと比較しても矛盾しない。IG-78号窯式の年代は後続するK-14号窯式やK-90号窯式の年代が遡る可能性が指摘され、現在、概ね8世紀末から9世紀初頭を中心とした年代が考えられ、年代観も予盾しない。

ところで、これまで検討できなかった器種には、特殊なものが含まれる。それらについて若干の検討を加えたいと思う。

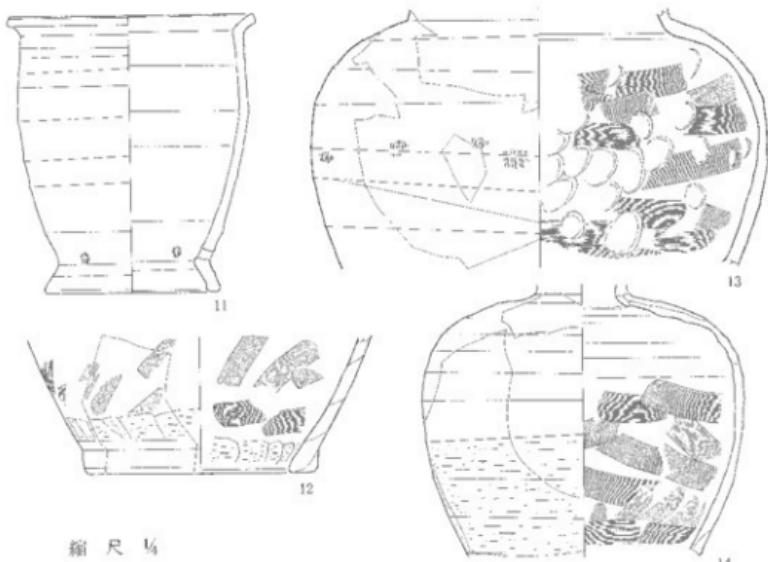
土器壺B類は48号住居跡、Ⅱ層から出土している、多口瓶(壺)である。多口瓶は仏器として、三彩、灰釉、須恵器の製品が知られている。土器壺多口瓶は岩手県盛岡市林崎遺跡(八木・千田:1979.3)RA03竪穴住居跡から出土したものがあるが、小ぶりで、中央の口の他に3つの口がつく、9世紀後半のものが知られているだけで、他に例を見ない。東北地方では須恵器



第80図 関ノ入遺跡10号住居跡(中野・佐藤:1991.3)



第81図 代官山遺跡1号住居跡(1)(佐藤敏幸:1993.3)



第82図 代官山遺跡1号住居跡(2)

製のものが福島県磐梯町蔦日寺(山野・生江: 1989.3)から出土しているが、全容は不明なものである。本例の様に口縁部が短く、肩の張る器形のものは、三彩、灰陶、須恵器共に類似がない。猿投窯では、0-10号窯式期のK-36号窯の多口瓶が有名である。むしろ、本例は1G-78号窯式の瓶類の器形に似ている。いずれにせよ、須江窯跡群第Ⅱ期に糸切技法を導入した工人が、他の多口瓶を模して製作したものであろう。

なお、Ⅱ層から出土した2点の破片のものは、多口瓶としたが、淨瓶の可能性も考えられる。須恵器鉢B類は鉄鉢形のものである。この器形は金屑器鉄鉢を模したもので、仏器として知られるものである。この器形の須恵器は、宮城県内では多賀城市水人遺跡(森賀喜: 1982.3)、同市市川橋遺跡(高倉・瀧口・石本: 1983.3)、角田市峠瓦窯跡(角田市教育委員会: 1979.3)、田尻町八幡遺跡跡(小村田達也: 1991.3)1号住居跡から出土している。これらは8世紀~9世紀に位置けられており、本例も8世紀末頃のものとして1例を加えたことになる。

須恵器杯G豆類に分類した小形で器高の高いものは、多賀城市山山土遺跡(千葉・石本: 1991.3)第10次調査SD180B溝跡から1点出土している。SD180B溝は伴出した漆紙文書記載の年号から763年前後頃とされる(千葉孝弥氏御教示)。特殊な器形で出土例が少なく、非日常的な用途と思われる。猿投窯では0-10号窯式期の0-80号窯(植崎・斎藤・森田: 1978.3)に類似す

るものがみられ、双耳瓶蓋とされている。第5群土器にはG II類と組む口縁部が認められないもので、検証できない。今後、類例の増加を待ちたい。

最後に、第80図にしめたII層出土の土器は、いずれも第5群土器と同様に分類されたもので本群の土器に含めておくことにする。なお、これらの土器は第5群土器を出土した48号住居跡、49号住居跡、7号堅穴遺構付近から出土したものである。

註1：陸奥国におけるこの時期の「同一器形の汎量による器種分化」について仲田茂司氏が「東国古代の飧物一食膳における土器との補完関係」(仲田茂司：1993.3)の中で触れている。仲田氏の論文によれば「同一器形の汎量による器種の分化」は同時期の非ロクロ土器群と須恵器には明確でなく、ロクロ土器の特色である」とされる。本群の須恵器はC I類とF I類は、「同一器形の汎量による器種分化」と考えられ、須恵器生産地である須江窯跡群では須恵器の器種分化にも認められる。この相違は消費地である集落跡と生産地との違いによるものか、本窯跡群のみに認められることか、今後検討されたい。

註2：本群の須恵器を含めた須江窯跡群第II期と、猿投窯第I期0~10号、IG-78号窯式を比較したが、須江窯跡群第II期が、即、猿投窯の系譜につながるものとは考えていない。系切り技法をもつ須恵器の生産地で、調査例が多く、変遷過程がとらえられている猿投窯が、容易に比較できると考えたからである。須江窯跡群第II期の系譜は、現在のところ検討していないため不明である。今後、検討される問題であろう。

## (7) 第6群土器

### ■ 第6群土器の特徴

底部の切り離しが回転糸切りで、体部に丸味をもつ須恵器は、27号(S E K27)窯跡、28号(S E K28)窯跡、29号(S E K29)窯跡から出土している。S E K27窯からは須恵器E II、E III類、壺A II、B類、壺A類、S E K28窯からは須恵器E I類、壺A II類、S E K29窯からは須恵器E II類、壺B類がそれぞれ出土している。これらの土器は窯跡以外の遺構からは出土していないことから、結果的に窯跡出土の土器を第6群土器とすることとなった。

各窯跡出土の須恵器は、それぞれ分類された特徴の組み合わせが異なることから、各窯ごとに説明する。

#### [27号窯跡(S E K27)](P.18~P.20、第7図~第9図)

壺E II・E III類が出土している。出土状況は、壺E III類を製品として焼成し、壺E II類は焼台に使用されたもので極めて少ない。壺E III類は体部全体が緩く内湾して外傾するもので、器高はやや高い。底部は平底で回転糸切りで切り離されている。外面は指による緩やかなロクロナデが施され、内面にはコテ状工具によるロクロナデが観察される。固化できたものでは口径14.8~15.6cm(平均15.1cm)、底径5.2~6.3cm(平均5.8cm)、器高4.1~5.1cm(平均4.6cm)である。

口径と底径の比は平均で1:0.38、口径と器高の比は平均で1:0.30である。焼台に使用された坏EⅡ類は2点で、口径はいずれも16.2cm、底径5.7~5.3(平均5.5cm)、器高4.5~4.6cm(平均4.5cm)で、口径と底径の比は1:0.34、口径と器高の比は1:0.28である。なお、出土した坏の中には、底部が円盤状に剥がれ落ちたものが数点あり、剥落面には回転糸切り痕が観察された。

甕、壺は出土量が少ない。全体的に薄手で、口縁部は短く外傾し、口唇部も小さく簡略化されている。外面はロクロナデと縦方向のケズリが施され、内面は縦方向のヘラナデやナデが認められる。

#### 〔28号窯跡(SEK28)〕(P.23、第11図)

坏EⅠ類が出土している。坏EⅠ類は体部の湾曲が下端で強く、中位が直線的に外傾し、口唇部が緩やかに外反する。器高はやや低い。底部は平底で回転糸切りで切り離されている。外面は指によるロクロナデが施され、内面はミコミを中心にコテ状工具による丁寧なロクロナデが認められる。図化できたものでは口径13.5~15.7cm(平均14.9cm)、底径5.8~6.6cm(平均6.3cm)、器高3.7~4.6cm(平均4.2cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.42、口径と器高の比は平均で1:0.28である。

甕は体部片が1点図化できたのみで、資料数が極めて少ない。

#### 〔29号窯跡(SEK29)〕(P.26、第13図)

坏EⅡ類が出土している。坏EⅡ類は体部全体が内湾して外傾し、口唇部が外反するもので、器高はやや高い。底部は平底で回転糸切りで切り離されている。外面は指によるロクロナデが施され、内面はコテ状工具によるロクロナデが認められる。図化できたものでは口径15.3~17.0cm(平均16.0cm)、底径4.9~6.4cm(平均5.8cm)、器高4.5~5.8cm(平均4.8cm)である。口径と底径の比は平均で1:0.36、口径と器高の比は平均で1:0.30である。なお、出土した坏の中には、底部が円盤状に剥がれ落ちたものが数点あり、剥落面には回転糸切り痕が観察された。

甕、壺は破片資料で全容がつかめず、資料数も極めて少ない。

### ■ 第6群土器の偏年的位置と問題点 ■ ■ ■ ■ ■

SEK27窯、SEK28窯、SEK29窯出土土器の相違点を整理しておきたい。SEK28から出土した須恵器坏EⅠ類は、SEK29窯出土のEⅡ類やSEK27窯出土のEⅢ類に比べて、口径・底径比が0.42前後とやや大きく、口径・器高比も1:0.28前後でやや低い。また、器厚も後者に比べて厚く、内面に施されたコテ状工具による調整も丁寧でEⅡ、EⅢ類とは一線を画する違いを見せている。EⅡ、EⅢ類は口径・底径比がそれぞれ1:0.36、1:0.38前後で、共に器厚は薄い。EⅡ類は体部が内湾し口縁部が外反する器形で、器面調整も比較的丁寧であ

るのに対し、EⅢ類は体部の湾曲が弱く口縁部もあまり外反せず、つくりが雑で、器面も凸凹している。

さらに、時間的前後関係について整理したい。各窯跡相互の切り合い関係は認められないことから、明確に層位的前後関係を捉えることはできない。出土状況では、SEK27窯からEⅡ類とEⅢ類が出土しており、EⅡ類を焼台としてEⅢ類を焼成していることからEⅢ→EⅡ類の前後関係が認められる。しかしながら、その時間差は短いものと考えられる。また、EⅠ類とEⅡ・EⅢ類について考えると、これまでの城柵・官衙・集落跡等の調査で検証されてきた“口径・底径比の大きいものから小さいものへの変化”や、“体部が直線的に外傾するものから湾曲する椀形のものへの変化”という器形の変化から考えれば、EⅠ・EⅡ・EⅢ類の変遷が想定される。このことは、SEK28窯とSEK27・SEK29窯の規模、形態が異なっており、Hつ、SEK27窯とSEK29窯がほぼ同様の規模、形態であるという遺構の特徴からも補強される。

次に、類似する土器を出土した他の窯跡と比較してみたい。第6群土器の須恵器环E類と同様の、底部の切り離しが回転糸切りで無調整の椀形の环を焼成した窯跡としては、本遺跡の所在する須江窯跡群北端の須江糠塚遺跡(高橋・阿部：1987.3)第1(NUK1)、第6(NUK6)窯、本遺跡の以前の調査で検出された関ノ入遺跡(中野・佐藤：1990.3)1号(SEK1)、2号(SEK2)、3号(SEK3)窯、本遺跡に隣接する代官山遺跡(佐藤敏幸：1993.3)2号(DAI2)窯や、仙台市台原・小田原窯跡群の五木松窯跡(小川淳一：1987.3)などがある。また、底部の切り離しが回転糸切りで、体部下端から底部にケズリ再調整の施される須恵器环は、仙台市安養寺中畠窯跡(東北学院大学考古学研究部：1967.3、村田晃一：1988.3)から出土している。

須江糠塚遺跡、五木松窯跡、安養寺中畠窯跡は須江糠塚遺跡(高橋・阿部：前掲)、五木松窯跡(小川淳一：前掲)報文中で詳細な検討が行われており、

五木松B群・安養寺中畠窯 → 五木松C群 → NUK6窯 → NUK1窯

(9C後半でも870年に近い時期) (10C.前半)

という変遷が推定された。また、関ノ入遺跡(中野・佐藤：前掲)報文中では、須江窯跡群内での検討から、須江糠塚遺跡報文の変遷案を捉え、

SEK2窯 → SEK3窯・NUK6窯 → SEK1窯 → NUK1窯

(概ね9C.後半頃) (10C.前半)

という変遷案を提示した。

ところで、須恵器における器形変化の過程は、人まかには各地で相似した傾向性を見い出すことができるが、具体的には地域性、T.I.集団系譜、工人の辦、需要と供給の関係などの影響から、窯や窯跡群(地域)ごとに異なるものと考える。そこで、先ず、本遺跡の所在する須江窯跡

群の中で類似する窯跡出土資料と簡単に検討したい。

S E K28窯出土のE I類に類似する資料は、S E K3窯製品の中に認めることができる。S E K3窯は体部が比較的直線的に外傾する逆台形に近い器形のものと、体部が窪曲して口縁部が緩く外反する椀形のものとがあり、E I類は後者に類似する。S E K28窯は椀形の杯E II類のみの1器種1法量を焼成していることから、S E K3窯に類似しながらも、後続する要素も認められる。口径・底径比もE II類が1:0.42、S E K3窯が1:0.41と近い値を示しており、他の計測値も同様である。したがって、E I類はS E K3窯に近い年代を与えることが可能であろう。

S E K29窯出土のE II類の様に体部全体が窪曲し口縁部が外反する器形は、S E K1窯製品に類似する。口径・底径比はE II類が1:0.36、S E K1窯が1:0.38で、ややE II類の方が小さいが、その他の計測値は近似する。E II類はS E K1窯と同様の年代を与えることができよう。

S E K27窯出土のE III類は、口径・底径比が1:0.38で、その他の計測値もS E K1窯と同様である。器形は、体部の窪曲が弱く、口縁部も外反しないもので、NUK1窯製品の器形に近いものと見ることができる。E III類は、その出土状況からE II類とはほぼ同時期で、E II類に後出するものと考えられることから、S E K1窯に近い年代を想定できる。

以上のような簡単な検討の結果を、前述した闕ノ入遺跡の変遷案に当てはめて考えることができる。直接、年代を与える資料はないが、E I類(S E K28窯)は9C後半頃、E II(S E K29窯)・E III(S E K27窯)類は、9C末葉頃と考ておきたい。

さて、須江窯跡群では、昭和61年以降、現在まで30基余りの須恵器窯の発掘調査が実施されている。しかしながら、正式な記録報告書が刊行されているものは少なく、未発表の膨大な資料が蓄積されてきている。先述したように、一定期間維持して生産されてきた本窯跡群内の変遷過程を検討し、各窯跡を位置付け、さらに、他の地域(窯跡群)と比較しなければならない。そこで、未発表の資料を提示すると共に、再度、次項で検討したい。

最後に、E II・E III類にみられた底部剥落資料についてふれておきたい。剥落面に回転系切り痕が観察される資料は、仙台市五本松窯跡、須江窯跡群S E K3窯、S E K15窯、D A I 2窯で検出されている。この資料について、五本松窯跡報文(小川淳一:前掲、(4)須恵器の検討(製作技法の観察)[成形工程]P.112)で小川氏が検討している。詳細については小川氏の論にゆずるが、筆者も、小川氏と同様に、円盤、もしくはロクロ回転に耐え得る高さ(比較的低いもの)の円柱に粘土塊を積み上げる成形法を想定している。今後、その痕跡資料の増加による成形法の検証、技法の出現時期については課題としておきたい。

### 3. 須江窯跡群における須恵器の変遷(案)

閑ノ入遺跡の所在する須江窯跡群では、これまで須江櫻塚遺跡、閑ノ入遺跡、代官山遺跡、瓦山窯跡の発掘調査が実施され、30余基の須恵器窯をはじめ多数の須恵器生産に関する遺構が検出されている。しかしながら、発掘調査の記録報告書が刊行されているのは須江櫻塚遺跡(高橋・阿部:1987.3)、代官山遺跡(佐藤敏幸:1993.3)、閑ノ入遺跡(本書)、須江閑ノ入遺跡-工業団地造成に伴う発掘調査概報-(中野・佐藤:1990.3)と二、三の紹介(佐藤敏幸:1991.2, 1992.2、村田晃一:1992.8など)があるのみで、約510,000㎡の調査によって19基の須恵器窯などが検出された須江閑ノ入遺跡-工業団地・住宅団地造成に伴う調査-の詳細な調査内容は、現在も調査が継続されており、未発表という現状にある。須恵器の組成、器形変化は、大まかには各地で粗陋化傾向を見い出すことができるが、具体的には地域性、工人の系譜、工人の辨、需用と供給の関係などの影響から、窯跡群ごとに異なるものと考える。今回の調査でも3基の窯跡が検出されたが、須江窯跡群の須恵器変遷過程がまとめられていないことから、その年代的位置付けを十分に検討できず、さらに他地域の窯跡群と比較することが困難であった。そこで、未発表の資料を含めて須江窯跡群における須恵器の変遷を考えてみたい。

なお、検出された窯跡は各遺跡でそれぞれに名前、番号が付されている。本書では、記述の際、煩雑さを避けるため、各遺跡に次の略称を用いて説明することとした。

須江櫻塚遺跡→NUK

須江瓦山窯跡→KAW

代官山遺跡→DAI

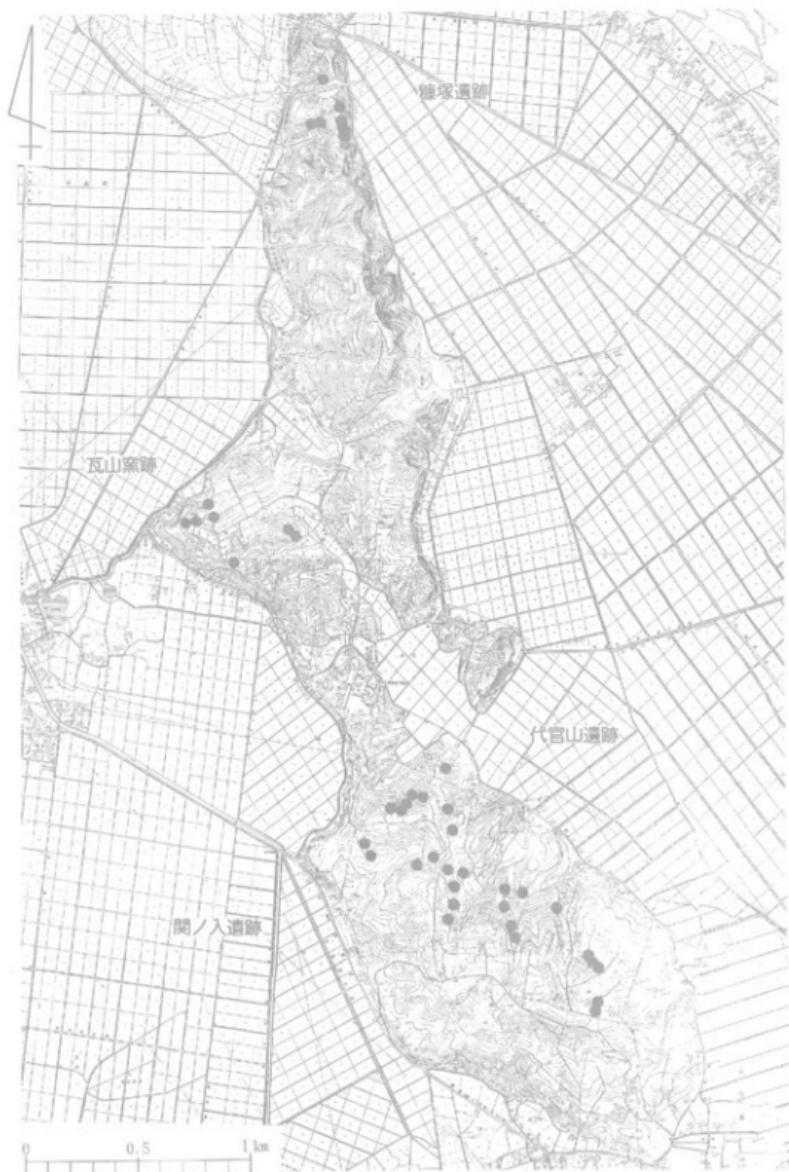
閑ノ入遺跡→SEK

本項で検討する須恵器窯は、発掘調査によって検出された30基の内、比較的豊富な遺物量をもつNUK1、6窯、DAI1、2窯、SEK1、2、3、4、10、11、12、14、15、16、17、24、27、28、29窯の19基の窯跡と採集資料である。このうち、SEK10、11、12、14、15、16、17、24窯は未発表の資料で整理が完了していないことから、特徴的な遺物を任意に抽出した。これらの資料は、今後、閑ノ入遺跡-工業団地・住宅団地造成に伴う調査-の正式な報告書の中で再検討されることになるが、本項はそれらに先立って検討の叩台としたい。

#### (1) 窯跡の分布と層位的新旧関係

##### 1. 窯跡の分布とまとまり

石巻海岸平野に位置する須江丘陵は、南北約4.5km、東西約1.3km、標高93~3mの南北に長い独立丘陵である。この須江丘陵には、丘陵北端の須江櫻塚遺跡から南端の閑ノ入遺跡まで瓦窯や須恵器窯が分布している(第82図)。これが須江窯跡群で、現在まで40余基の窯跡が確認さ



第83図 須江窯跡群の須恵器窯の分布

(1993. 3現在)

れているが、そのほとんどは発掘調査によって発見されたもので、今後、詳細な分布調査を行えば、その数は100基をはるかに越えるものと予想される。

須江窯跡群で発掘調査によって検出された須恵器窯は、30基ある。その分布状況は、ほとんどが1基ずつ散在する傾向にある。比較的まとまって検出されているのは、NUK 3、4、5窯の3基、SEK 14、15、16、17窯の4基、SEK 27、28、29窯の3基である。しかし、まとまって検出された各窯跡は窯形態、出土遺物の特徴が異なり、それぞれに時間差が認められ、他の遺跡で検出されている数基を単位とする連続操業されたまとまりとは異なり、単独操業の窯が時間差をもってまとまったものと考えられる。

## 2. 層位的新旧関係

須江窯跡群で層位的に新旧関係を捉えられたcaseには、窯跡同士または窯跡と他の遺構との重複が認められた場合〈case①〉、窯跡床面または灰原の灰層の重複が認められた場合〈case②〉、Key層を軸とした新旧関係が認められた場合〈case③〉の三つがある。また、これらの組み合わせも認められる。

〈case①〉で認められた新旧関係は、

○ SEK 15窯 → SEK 16窯 → (灰白色火山灰層下) → SEK 17窯

○ NUK 1 窯 → 須江窯跡遺跡第12住居跡堆積上第3層 → (灰白色火山灰層下)

の2つである。窯跡同士の重複については、須江窯跡群における須恵器窯の分布が1基ずつ散在するという特徴から極めて少ないものと考えられる。

〈case②〉で認められた新旧関係には、窯跡床面の重複と灰原の灰層が重複するものがある。窯跡床面の重複については、各窯共2~4面の床面(焼成回数に伴う弊地面)が検出されているものの、廃棄時以前の床面から出土する遺物は少なく、また、各床面における遺物の属性に違いが認められない。このことは、窯の操業が極く短期間に連続して行われたことによるものと考えられる。灰原における灰層の重複は、SEK 3窯、SEK 11窯に認められたが、現在、灰原の十分な整理が進んでいないことから本論では検討できなかった。

〈case③〉のKey層としたものは、10世紀前半(陸奥国修理府が設けられた貞観12(870)年以降、七重塔が焼失した承平4(934)年までの間)のうち、「塔焼失に近い時期」(白鳥良一:1980.3)に降下したと考えられる灰白色火山灰層である。検出された殆どどの窯跡堆積土(自然流入土)に認められることから、灰白色火山灰層以前の年代のものである。堆積土にこの火山灰が認められず、さらに灰原において灰層の下から火山灰層が検出されたSEK 4窯、SEK 17窯は明らかにKey層よりも新しいものと認められる。

○(灰白色下山灰層下) → SEK 4 窯・SEK 17 窯

以上が層位的に新旧関係の明らかなものである。検出された窯跡の多くは、層位的に新旧関係の不明なものであり、属性分析による形式論に依らねばならない。

## (2) 須恵器変遷(案)

須江窯跡群の変遷過程には大きく2つの画期が認められ、Ⅲ期に分けられる。第Ⅰ期は須恵器生産技術導入期である。陸奥国牡鹿郡で必要とされる瓦・須恵器の需要に応じて、生産技術が須江丘陵に導入されたものと考えられる。窯構造は半地下式窯で、須恵器では回転ヘラ切り技法を伴う工人集団である。第Ⅱ期は、回転糸切り技法を伴う技術工人の移入期で、第Ⅰ期とは全く異なる須恵器様式をもって生産される。第Ⅲ期は、展開・衰退期で、須恵器生産技術の能率化、簡略化が認められる。窯構造では急斜面を利用した小規模な地下式窯で、須恵器では器種、法量の単一化、調整技法の簡素化が指摘される。

### 1. 須江窯跡群第Ⅰ期

須江窯跡群第Ⅰ期は牡鹿郡で必要とされる瓦・須恵器の需要に応じて、その生産技術が須江丘陵に導入され、須江窯跡群で須恵器生産が開始された時期である。須江窯跡群で最も古い窯跡は、未だ検出されていないが、おそらくは須江瓦山窯跡から出土している瓦・須恵器を焼成した窯跡と考えられる。瓦には平瓦、丸瓦がある。平瓦は凸面繩叩、凹面布目と糸切り痕を残す一枚造り、丸瓦は凸面繩叩き、凹面布目を残す粘土紐巻き造りである。軒先瓦は不明である。瓦の供給先は牡鹿郡衙または牡鹿柵跡に擬定されている矢木町赤井遺跡が知られている。また、第Ⅰ期の窯跡は代官山遺跡からも検出されている。DAI 1 窯は、須江瓦山窯跡出土と同様の丸瓦を焼台に使用している須恵器窯で、焼成された須恵器は榮町伊治城跡出土須恵器の一部に近似し、伊治城跡出土須恵器に先行するものである(佐藤敏幸: 1993.3)。伊治城の造営に牡鹿郡道島氏一族の道島宿禰三山が積極的に関与しており、伊治公呂麻呂の乱で牡鹿郡大領道島大盾が殺害されるなど、牡鹿郡(道島氏)と伊治城は密接な関連があり、須江窯跡群の製品あるいは技術(工人)が供給されたとしても不思議ではない。

須江窯跡群Ⅰ期の特徴は、窯構造が半地下式窯で、形態が焼成部・燃焼部からなる平面「短櫛」形で、須恵器が回転ヘラ切り技法を伴う工人によるものである。

#### ■ DAI 0 窯・KAW 窯段階 ■ ■ ■ ■ ■

##### 〔窯跡の概要〕

DAI 0 窯・KAW 窯共に、未だ窯跡は検出されていないが、後述する DAI 1 窯に先行するものとして提示しておきたい。

DA 10 窯は代官山遺跡内から採集されたものである。畠地脇の1地点から一括して採集されたもので、窓側壁、あるいは天井土と考えられる還元したスサ入り粘土と共にまとまっていた。窓製品と考えられる。

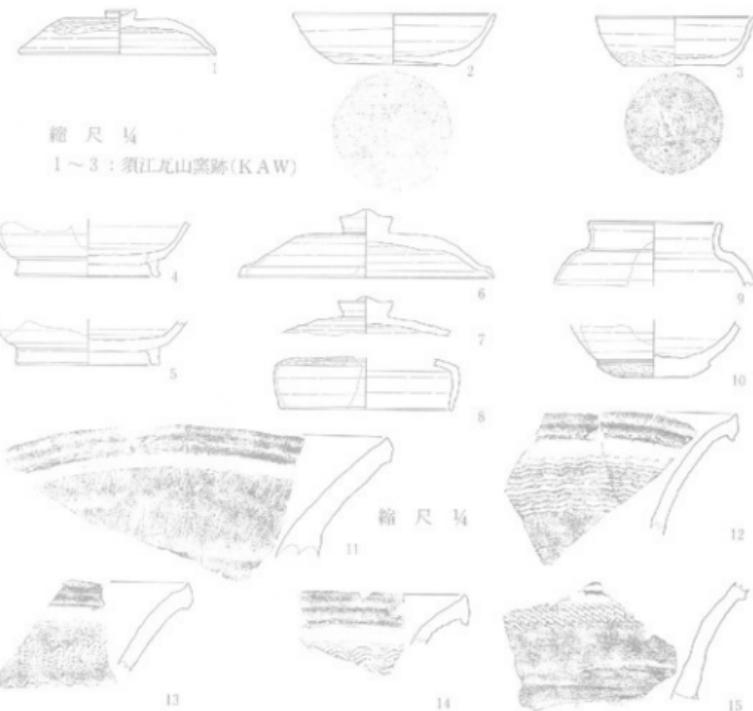
KAW窯は須江瓦山窯跡から採集されたもので、須江瓦山在住の矢島道智氏所蔵のものである。矢島氏宅にはこれらの須恵器の他に平瓦、丸瓦が保管してある。平瓦は凸面繩叩、凹面に布目、糸切り痕を残す一枚造り、丸瓦は凸面繩叩、凹面布目を残す紐巻き造りによる無段のものである。

今後、これらの窯跡が検出され、その具体的な内容も明らかにされると思われる。

#### 〔須恵器の特徴〕(第83図)

DA 10 窯の遺物には、高台付杯、杯蓋、壺蓋、壺、器種不明品がある。

高台付杯(4, 5)はいずれも口縁部を欠失するものである。体部下端で強く屈曲し、体部



第84図 DA 10窯・KAW窯 出土須恵器

が直線的に外傾するもので、屈曲点からやや内側に厚めの高台部がしっかりと付されている。底部は高台付着時のロクロナデが全面に認められ、切り離し技法は不明である。

杯蓋(6, 7)は弱い丸味をもった天井部に直線的な体部が外傾し、口縁が内側に屈曲するもので、バランスのとれた大きさの宝珠形のつまみが付されている。天井部外面は回転ケズリの施されるものと認められないものがある。壺蓋(8)は天井部から口縁部にかけて残存するものである。回転ケズリの施された天井部から屈曲して、丸味をもった口縁部が直立する。

短頸壺(9)は口縁部片で、やや外反気味に直立する口縁から頸部が屈曲するものである。

壺(11~15)は口縁部の破片のみである。いざれも厚みのある丁寧なつくりの口縁で、ロクロ回転を利用した波状沈線が施されている。

KAW窯の遺物で図化したものは、杯、杯蓋である。

杯(2~3)は平底の底部から、体部が極く弱い丸味をもって外傾するものである。底部の切り離しのわかるものは回転ヘラ切りで、体部下端から底部にかけて回転ケズリやケズリの再調整が施される。器面は内外面共に指によるロクロナデが認められる。

杯蓋(1)は平坦な天井部から体部が緩く内湾し、端部が屈曲するものである。天井部外面にはケズリ再調整が施される。つまみは小さいリング状のものが付されている。

これらの遺物は、他の窯跡との比較から8C. 中葉を中心とする年代が考えられている（佐藤敏幸：1993.3）。

## ■ DAI I 窯段階 ■ ■ ■

### 〔窯跡の概要〕

DAI I 窯は施成部、燃焼部からなる半地下式窯窯である。規模は全長6.14m、焼成部の長さ4.60m、底面幅0.68~0.86m、燃焼部の長さ1.54m、底面幅0.74~0.80m、最大深0.58mを計る。平面形は焚口から窯尻まで、あまり幅の変わらない「短柵」形である。床面の傾斜角は14°~33°ほどである。床面は2面確認され、初期床面からは舟形が検出された。窯跡周囲には外周溝が巡らされている。外周溝は平面「U」形で、断面「U」形の明確なものである。床面および灰原からは焼台に使用した丸瓦片が出土した。丸瓦の特徴はKAW窯から採集されたものと同様である。窯詰の方法は明確ではないが、蓋の内外面には重ね焼きによって変色した部分があり、高台付杯と組み合わせて焼成したものと考えられる。

### 〔遺物の特徴〕(第84~86図)

DAI I 窯から出土した遺物には、杯、高台付杯、杯蓋、甕、壺、鉢がある。杯はⅠ類(14, 15, 22~24)、Ⅱ類(25, 26, 30~32)、Ⅲ類(27~29)、ⅣA類(33~38)、ⅣB類(41~46)の5種に分類される。底部の切り離しのわかるものは全て、回転ヘラ切りで、回転ケズリ、

ケズリ、堅いナデの再調整が施されるものが多い。分類された各類の特徴は第16表にまとめたとおりである。

高台付环はⅠ A類(6、8)、Ⅰ B類(7)、Ⅱ A類(11)、Ⅱ B類(10)、Ⅱ C類(9)、Ⅲ A類(13)、Ⅲ B類(12)の3法蓋7種に分類される。环部は各類共内湾する楕形のものである。高台部はやや高めで薄く、シャープにつくられている。高台端部は断面「U」形で丸味をもたない。分類された各類の特徴は第16表のとおりである。高台付环で特筆されるのは、环部と高台部の接合面に観察された接合沈線である。深さ1.5~2.0mm、ロクロ回転を利用した同心円状の2条の沈線である(6~12の断面参照)。また、环部と高台部の接合部外面には、棒状工具による沈線の認められるものもある(9)。これは接合時の密着度を高めるためか、あるいは余った粘土を削り取るために結果的についてものと考えられる。

环底は体部が直線的に外傾するもと、緩く内湾するものがあり、口縁部が屈曲するものである。つまみ部は全て、欠失のため不明である。11径から推察すると高台付环Ⅰ類と組み合う大形のもの(1、2)、Ⅱ類と組み合う中形のもの(3~5)がある。いずれも天井部外面に回転ケズリ再調整が施されている。つまみの剥落面にも接合沈線が認められた。

甕(40、47~52)は全容のわかるものはない。丸底と平底のものがあり、後者が主体を占める。小型のもの(40)は肩の張らない球形の体部から屈曲して短い口縁が直線的に外傾するものである。大型・中型の甕は、口須部が外反し、幅のある口縁部が丁寧につくられたもので、ロクロ回転を利用した波状沈線の施されるものもある。体部はロクロナデ、タタキ、回転ケズリ、ケズリが並用される。内面はロクロナデ、アテメ、ヘラナデ、ナデが観察される。

瓶(15~19)も全容のわかるものはない。口須部が細長く、口縁部は大型・中型甕と同様の形態を呈する。体部は比較的肩の張る球形で、上半にロクロナデ、下半に回転ケズリが施される。高台部は厚みがあり、外内にふんばるように底部外縁に付されている。高台部の接合にも、深さ1.5~2.0mmの、ロタシ回転を利用した同心円状の3条の接合沈線が認められる。

組別	須恵器	分類	主な特徴	特徴	
				内	外
A	Ⅰ A類	10径7cm前後、器高2.5cm前後、壁厚1mm前後	内面は薄く凸出、口縁部が内湾する。強調強化。	外側下部~底盤上面にアテメやロクロナデ	
	Ⅰ B類	11径7cm前後、器高2.5cm前後、壁厚1mm前後	内面は薄く凸出、底盤早い。	外側下部~底盤全面と回転ケズリ	
B	C類	11径7cm前後、器高2.5cm前後、壁厚1mm前後	内面は薄く凸出。		
	N類	11径14.5cm前後、器高2.5cm前後、内径9.5mm	内面は薄く凸出。		
C	Ⅰ A類	12径17.5cm前後、器高2.5cm前後、内径11.5cm前後	内面は薄く凸出。	回転ケズリ~丁寧なタタキ、ナデ	
	Ⅰ B類	12径17.5cm前後、器高2.5cm前後、内径11.5cm前後	内面は薄く凸出。	回転ケズリ~丁寧なタタキ、ナデ	
D	Ⅰ A類	13径19cm前後、器高2.5cm前後、内径13cm前後	内面は薄く凸出。	内面下部~底盤全面にロクロナデ	
	Ⅰ B類	13径19cm前後、器高2.5cm前後、内径13cm前後	内面は薄く凸出。	内面下部~底盤全面にロクロナデ	
E	Ⅱ A類	14径21cm前後、器高2.5cm前後、内径15cm前後	内面は薄く凸出。	内面下部~底盤全面にロクロナデ	
	Ⅱ B類	14径21cm前後、器高2.5cm前後、内径15cm前後	内面は薄く凸出。	内面下部~底盤全面にロクロナデ	
F	Ⅱ C類	14径21cm前後、器高2.5cm前後、内径15cm前後	内面は薄く凸出。	内面下部~底盤全面にロクロナデ	
	Ⅲ A類	15径25cm前後、器高4.5cm前後、内径18cm前後	内面は薄く凸出。	内面下部~底盤全面にロクロナデ	
G	Ⅲ B類	15径25cm前後、器高4.5cm前後、内径18cm前後	内面は薄く凸出。	内面下部~底盤全面にロクロナデ	

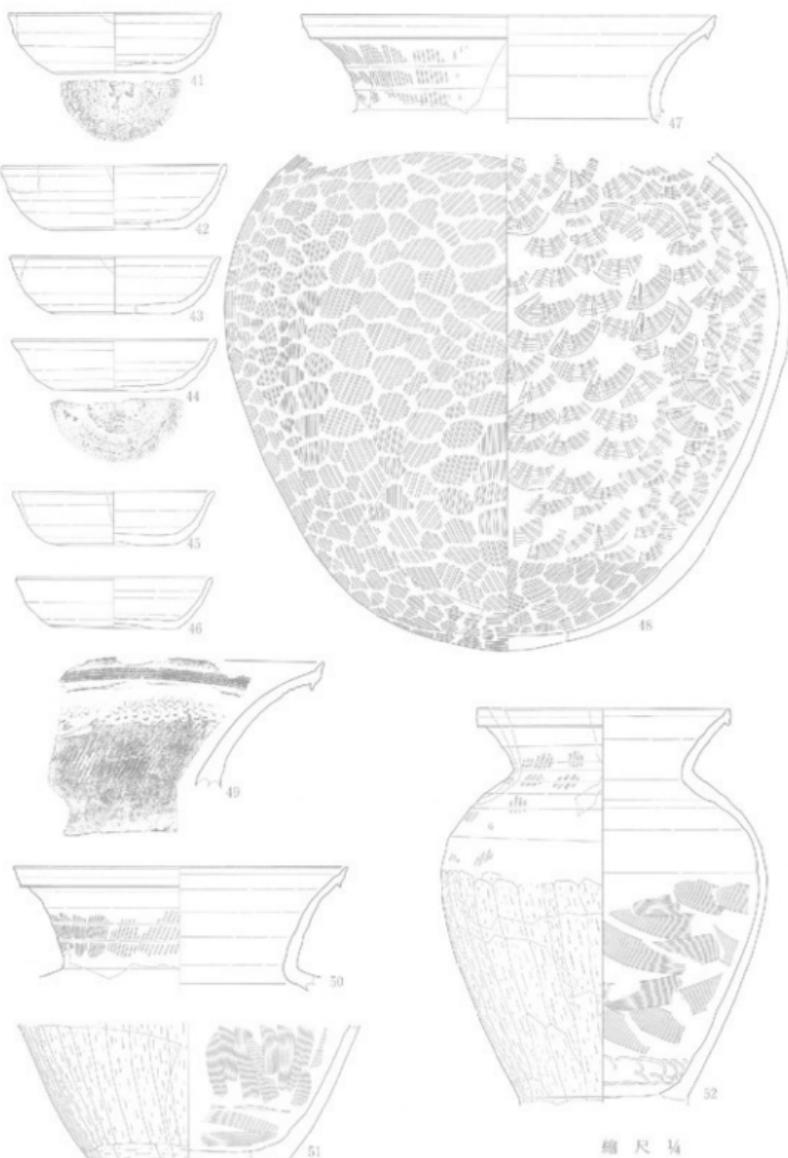
第15表 DAI 1窯出土环・高台付环の特徴



第85図 DA I 1窯出土土器 (1)



第86図 DA I 1窯 出土土器 (2)



第87図 DA I 1窯出土土器 (3)

縮尺 1/4

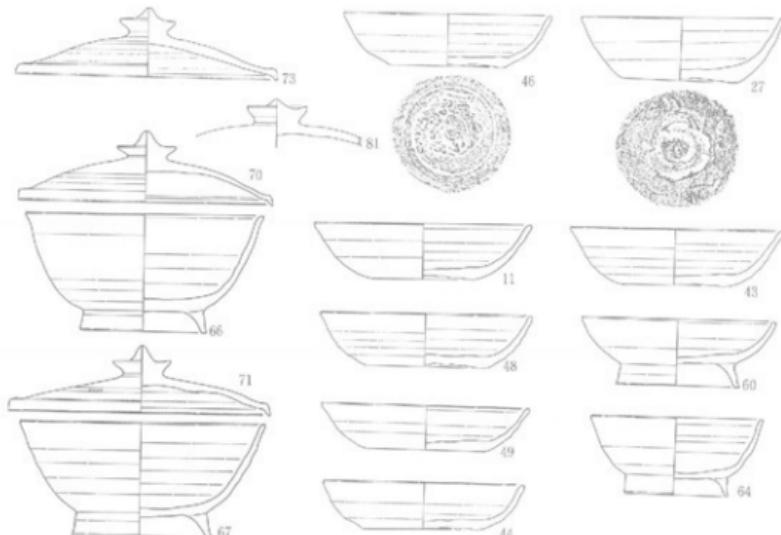
鉢(20、21、39)は平底の底部から体部が緩い膨みをもって外傾し、短い口縁が受口状に広がるものである。体部外面にはロクロナデと回転ケズリまたはケズリが施され、内面にはロクロナデとヘラナデ、ナデが認められる。

これらの遺物は、他の遺跡との比較から8C. 第3四半紀を中心とする年代が与えられている(佐藤敏幸: 1993.3)。

### 伊治城跡出土土器段階

須江窯跡群の北西約39kmに位置する築館町伊治城跡は、神護景雲1(767)年に造営された城柵で、道島宿禰三山は造営にたずさわった功により徒五位上を賜っており、牡鹿郡にも関係の深いところである。伊治城跡の調査は、昭和52年以降、宮城県多賀城跡調査研究所や築館町教育委員会により実施され、多数の遺構、遺物が検出されている。出土遺物の一部は、DAI I 窯製品に極く近似するもので、他の窯跡製品とは異なることから、窯跡は検出されていないため不明な点が多いが、DAI I 窯に後続するものとして提示する。なお、出土量が豊富で、伊治城跡の出土状況を反映しているS I 173住居跡(菊地逸夫: 1991.3)を取り上げることとした。

〔伊治城跡 S I 173住居跡出土土器〕



(Noは伊治城跡報告書による)

第88図 伊治城跡 S I 173住居跡 出土土器(一部) (菊地逸夫: 1991.3より)

縮尺 1/4

伊治城跡 S I 173住居跡出土遺物は、その出土状況が「住居が廃棄され若干の土砂の堆積が進行した後、炭化物などと共に一括投棄されたもの」で、堆積土の検討や遺物間の接合関係から「ほぼ同時期の所産」と考えられるものである。さらに、出土遺物は「器形や調整などの特徴からいくつかのグループに分類」され、焼成状況や胎上の観察から同一供給源(窯)と考えられる杯I類、蓋I類・皿類、高台付杯I A・NA類を注出することができるとしている。

#### 〔土器の特徴〕(第87図)

伊治城跡 S I 173住居跡杯I類、蓋I類・皿類、高台付杯I A類・NA類と、近似するDA I I 窯のものと比較しながら述べたい。

杯I類(11,27,43,44,46,48,49)は底部が回転ヘラ切り無調整で体部が内渦する器形のものである。DA I I 窯の杯IV類に類似するものの、底径がやや小さく、再調整も施されない点で後出の要素をもつ。

蓋I(70,71,73,81)・皿類は、体部が直線的に外傾し、端部が屈曲するもので、大きめの宝珠形のつまみがつくものである。大井部には回転ケズリ調整が施される。DA I I 窯の蓋に近似する。DA I I 窯の蓋はつまみ部を欠失するため不明であるが、後述するSEKII窯出土の壺蓋のつまみも大きめの宝珠形で、DA I I 窯のつまみを推察することができる。

高台付杯I A類(66,67)・NA類(60,64)は、強く内渦する杯部に極く薄くシャープで、比較的高い高台部が付されたもので、接合面にはDA I I 窯と同様の接合沈線が観察される。DA I I 窯の高台付杯I B類・皿類に近似するものの、底部は回転ヘラ切り無調整で、再調整の施されるDA I I 窯より後出的要素をもつ。

伊治城跡 S I 173住居跡出土遺物から注出されたまとまりである杯I類、蓋I・皿類、高台付杯I A・NA類は、器形・技法の検討からも近似し、DA I I 窯に後続するものと考えられる。また、両者は同一系譜の技術による所産と考えられる(佐藤敏幸:1993.3)。年代は胆沢城跡や併出した「壺G」との比較から8世紀末~9世紀初頭と考えられている。

## 2. 須江窯跡群第Ⅱ期

須江窯跡群第Ⅱ期は、回転系切り技法を伴う技術工人の移入期で、第Ⅰ期とは異なる須恵器様式をもって生産される。器種も多様に分化し、同一器種の法量分化したものもみられる。また、Ⅱ期後半には器種の減少と法量の单一化の傾向へすすむ。窯形態は第Ⅰ期同様、半地下式竈窯で外周構を伴うものであるが、平面形は矩形から、焼成部と燃焼部の境の明確な左右対称胴張形へと変化する。底部の切り離し技法では、一度期に回転系切り技法に転換したものではなく、第Ⅱ期の初めには、小数であるがヘラ切り技法が残存し、共存していた時期もある。このことは、異なる技術系譜の工人が移入されても、前段階の技法を排除することなく、包含し

ていったとも考えられる。

### ■ 関ノ入遺跡第5群土器段階

今回の調査で検出された第5群土器は、前項で検討されたように、後続するSEK11窯に先行するものと考えられる。第5群土器は器種が多彩でバラエティに富み、須恵器の量が非常に多く、須恵器生産地という地理的条件を反映している。第5群土器の須恵器は、未だ窯跡は検出されておらず、同一の窯製品とは限らないが、SEK11窯に先行する資料として提示しておきたい。

#### 〔第5群土器の須恵器〕

第5群土器の須恵器には壺、高台付杯、蓋、甕、鉢がある。

壺は出土量が多く、バラエティに富んでいる。いずれも口径に比して底形が半分前後で、底部からやや外反して立ち上がり、口縁部にかけて直線的に外傾するもので、底部は回転ヘラ切り無調整のB類、底部から弱い膨みをもって立ち上がり体部以上が直線的に外傾するC類と、体部が強い丸味をもつD類、C類を小さくしたF類、さらに小形のG類がある。C類は器高が4.1cm前後のC I類、3.6cm前後のC II類があり、さらに体部から底部にかけて回転ケメリ再調整が施されるC I i、C II i類と回転系切り痕を残すC I ii、C II ii類に分けられる。D類も器高が4.1cm前後のD I類、3.6cm前後のD II類に分けられる。F類は皿状のF I類、器高の高いF II類に分けられる。中でもC類の出土量が多い。底部の切り離しは大部分が回転系切りで、ヘラ切りのものはわずかである。再調整の認められるものと認められないものの量比はほぼ半数である。法量でみると、B、C I、D I類、C II、D II類がそれぞれ同一であるから、6法量にまとめられる。

高台付杯は壺部の器高が高く、体部から口縁部が直線的に外傾するもので、体部下端から底部全面に回転ケメリ再調整が施され、低い高台が付されるB類と、壺部下半以下が残存する大きめのもので、回転系切り後底部外縁に回転ケメリ再調整され高台部が付されるC類がある。

蓋はつまみのないもので、平坦な天井部から体部、口縁部が直線的に外傾するもの(B類)である。天井部全面に回転ケメリが施されるB I類と手持ちケメリが施されるB II類に分けられる。

鉢は口縁部が「く」字状に短く屈曲し、体部は緩く内湾するA類と、いわゆる鉄鉢形のB類がある。さらにA類は大形のA I類と中形のA II類に分けられる。

甕は比較的厚手のもので(A I)、体部にタタキメと横方向のケメリが認められ、内面に横、斜め方向のナデが施されるものがある。

第5群土器の年代は、前項で述べたように、8世紀第4四半紀頃と考えられる。

## S E K11窯段階

S E K11窯段階の窯跡では、S E K11窯とS E K24窯が調査されているが、詳細な報告はなされていない。広範囲の灰原をもつS E K11窯は、豊富な遺物を出土したことから、S E K11窯を代表させてS E K11窯段階とした。

### 【S E K11窯】

#### 〔窯跡の概要〕

S E K11窯は焼成部、燃焼部からなる半地下式の窯窓である。規模は全長6.5m前後、焼成部の長さ5m前後、底面幅0.8~1.7m前後、燃焼部の長さ1.5m前後、底面幅0.8m前後である。平面形は胸張形の焼成部からくびれて燃焼部が狭くなる。床面は2面確認されている。窯跡周囲には外周溝が巡らされている。外周溝は平面「匁」形で、断面「U」形の明確なものである。窯跡の斜面下方には灰原が広がり、多数の遺物を包含していた。

#### 〔遺物の特徴〕(第88~90図)

S E K11窯からは杯、双耳杯、蓋、甕、鉢、壺が出土している。前段階とした第5群土器と比較すると、器種構成では高台付杯が消失し、高台の付く杯は双耳杯のみとなっている。また、杯の分化も減少の傾向にある。調整技法では、甕、鉢に手持ちケズリが増加し、蓋は無調整となるなど、簡素化し、全体に雑な感じを与える。底部の切り離し技法では、回転ヘラ切りが極く少なく、回転糸切り後回転ケズリ再調整の施されるものと、回転糸切り無調整のものが主体を占める。

杯は出土量が多く、バラエティに富んでいる。I類は口径15.8cm前後、底径7.5cm前後、器高6.8cm前後で、体部が極く弱い丸味をもって外傾する器高の高いもので、底部が回転ヘラ切りのIA類(1、2)、回転糸切り後体部下端から底部に回転ケズリの施されるIB類(3、4、5)がある。これは第5群上器の高台付杯B類の高台が消失したものと考えることができる。II類は口径14.5cm、底径6.9cm、器高5.2cmで、体部が極く弱い丸味をもって外傾し体部下端から底部に回転ケズリの施されるもの(6)である。III類は、口径13.2cm前後、底径6.8cm前後、器高4.2cm前後で、体部が直線的に外傾するもので、底部が回転ヘラ切りのIII A類(15)、体部下端から底部に回転ケズリの施されるIII B類(7、8)、回転糸切り無調整のIII C類(9、10)、体部が湾曲する楕形で回転糸切り無調整のIII D類(17、18)がある。IV類は、口径と底径がIII類と同じであるが器高が3.5cm前後で、器形はIII A類と同様のIV A類(16)、III B類と同様のIV B類(11、12)、III C類と同様のIV C類(13、14)、III D類と同様のIV D類(19、20)がある。V類はIII C類の法量を大きくしたもので口径14.8cm、底径7.8cm、器高4.4cmのものである。出土量比は、III B、III C、IV B、

MC類が主体占め、回転ヘラ切りのIA、IIA、IVA類は極く少ない。分類した各類の法量比は第17表に示したとおりで、特に、口径に対する底径の比は概ね、1:0.52前後である。また、III・IV類の中でも回転ヘラ切りのIIA類、IV類の口径・底径比は1:0.59~0.57で、回転糸切りのものよりも大きいことに注目したい。

双耳杯(22,23)は逆台形の杯部に厚めの高台が付されたもので、接合沈線は認められない。耳部は杏んだ状のものである。底部の切り離しは、高台付着時のクロロナデにより不明である。

蓋には、壺蓋(30)と甕蓋(33~35)がある。壺蓋は平坦な天井部から屈曲して体部が直立気味に外傾するもので、大きい宝珠形つまみがつく。器面は体部上半に軽い回転ケズリが施される。大きい宝珠形つまみは、伊治城跡S I 173住居跡の蓋I類のものに類似し、DA II 瓢やS I 173住居跡から引き繼がれるものとも考えられる。甕蓋としたものは、回転糸切りの大井から体部が直線的に外傾するもので、瓶を逆さにした形態である。つまみはつかない。皿とも考えられるが、積極的な根柢に欠けるものの、前段階である第5群上器の蓋B類に連なり、大井部の再調整が簡略化されたものと考えておきたい。

瓶(28,29)は平底の底部から直線的に外傾して立ち上がり、胴部が強く張り、口頸部が外反するものである。器面は口縁部にヨコナデ、体部外面にタタキ、クロナデ、縱方向のケズリ、内面に横と縱方向のヘラナデ、または横方向のナデとアテメが施される。28,29共、体部中位に沈線がめぐっている。

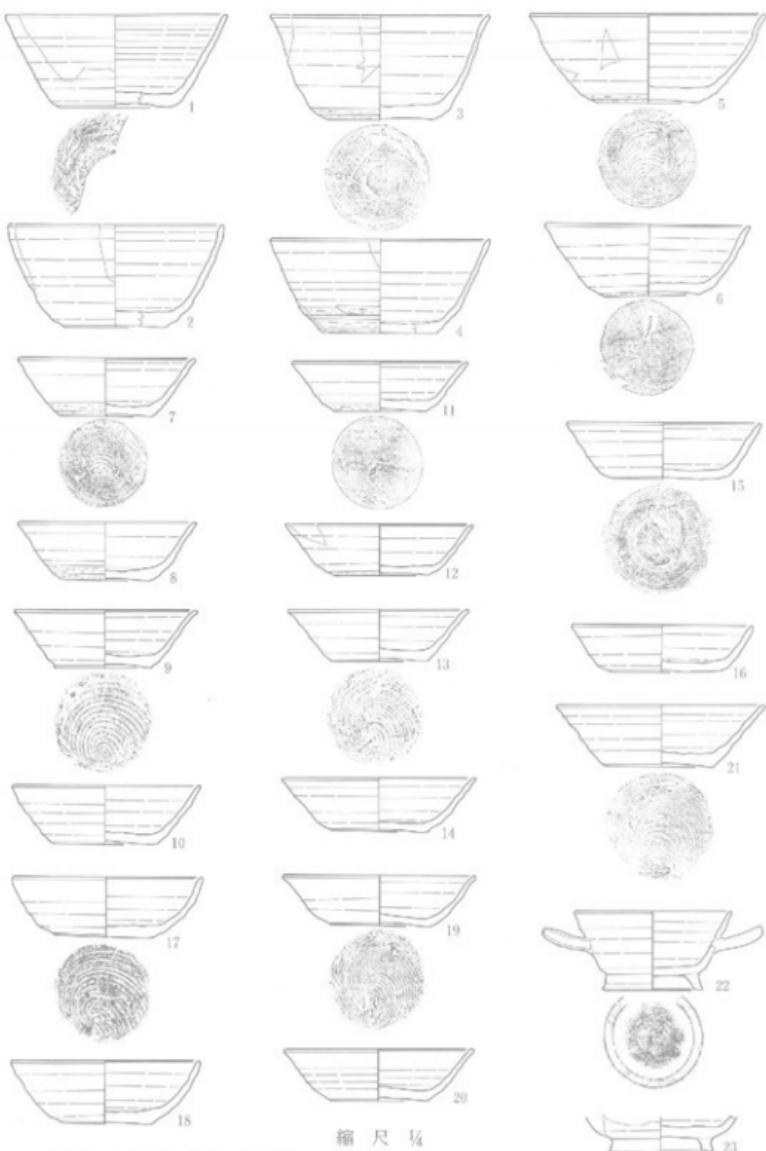
鉢は大型のもの(27)と中型のもの(24~26)がある。いずれも平底の底部から体部が内湾するもので、頸部で屈曲して短い口縁がつくものである。大型のものは体部にヨコナデ、タタキ、ケズリが施され、内面にヨコナデとヘラナデが認められる。中型のものは内外面共ヨコナデで、体部下端に回転ケズリの施されるものもある。口縁部は平坦なもの、沈線の施されたもの、丁寧に厚くつくられたものがある。大型の鉢27と類似するするものが、伊治城跡S I 173住居跡から出土しており、体部に残るタタキを除けば、口縁部形態まで全く同様のものである。

壺は長頸壺(36~38)と短頸壺(31,32)がある。長頸壺は肩の張らない球形の体部に広口状の

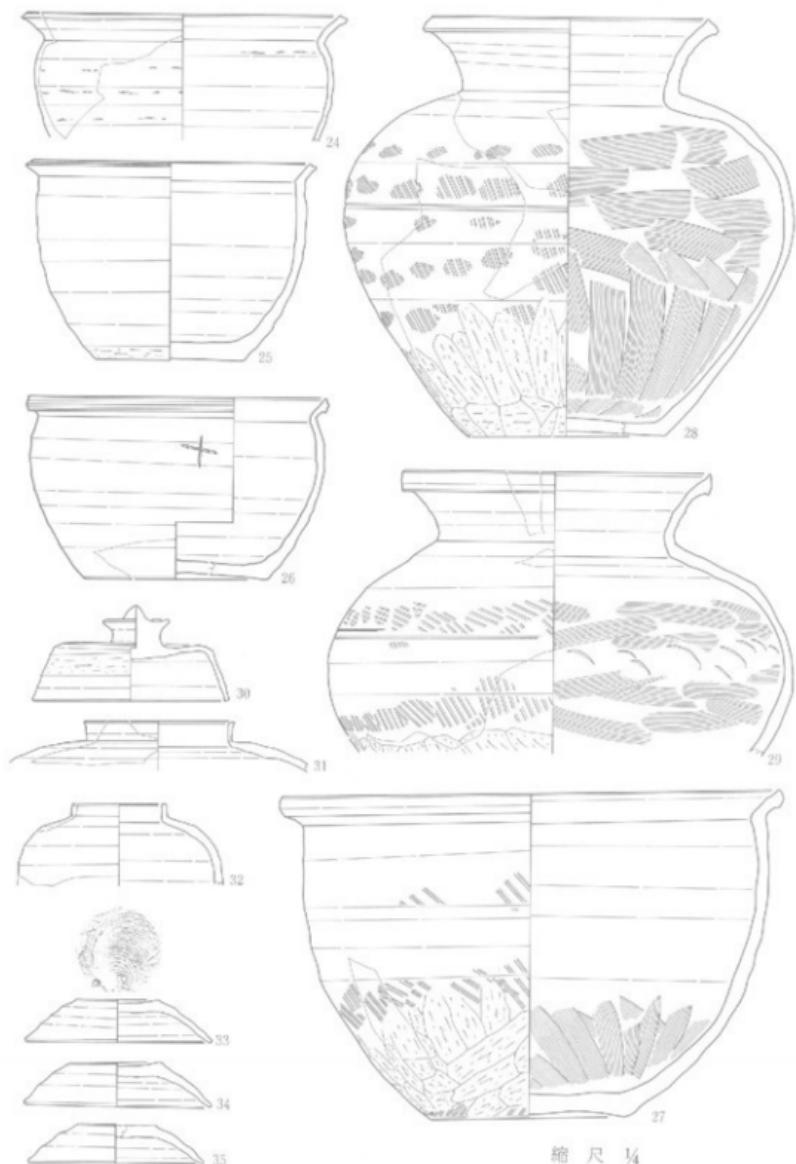
分類	基準(No.)	口径(厘米)	底径(厘米)	高さ(厘米)	口底比	底径:高さ	口底:高さ(厘米)	底面切り離しと所調割
I A・B類	1~5	15.4cm	7.5cm	6.2cm	1:0.47	1:0.53	1:0.53	ヘラ切り(A), 直面ナデ(B)
II 類	6	14.5cm	6.0cm	5.2cm	1:0.45	1:0.36	1:0.36	直面ナデ
II A 類	15	13.3cm	7.2cm	4.8cm	1:0.57	1:0.39	1:0.39	ヘラ切り
III B・C類	7~10	12.6cm	6.6cm	4.2cm	1:0.28	1:0.55	1:0.55	回転ドメキ(B), 回転ナデ(C)
III D 類	11~12	11.9cm	6.7cm	4.2cm	1:0.49	1:0.31	1:0.31	回転ナデ
IV A 類	16	12.8cm	7.6cm	3.6cm	1:0.35	1:0.27	1:0.27	ヘラ切り
IV B・C類	11~14	13.3cm	6.8cm	3.7cm	1:0.32	1:0.25	1:0.25	回転ナデ(B), 回転ナデ(C)
IV D 類	9~10	13.7cm	6.5cm	3.5cm	1:0.52	1:0.26	1:0.26	回転ナデ
V 類	21	14.2cm	7.8cm	4.4cm	1:0.53	1:0.36	1:0.36	回転糸切り

第16表 S E K11窓出土壺の法量

(測定図の平均)



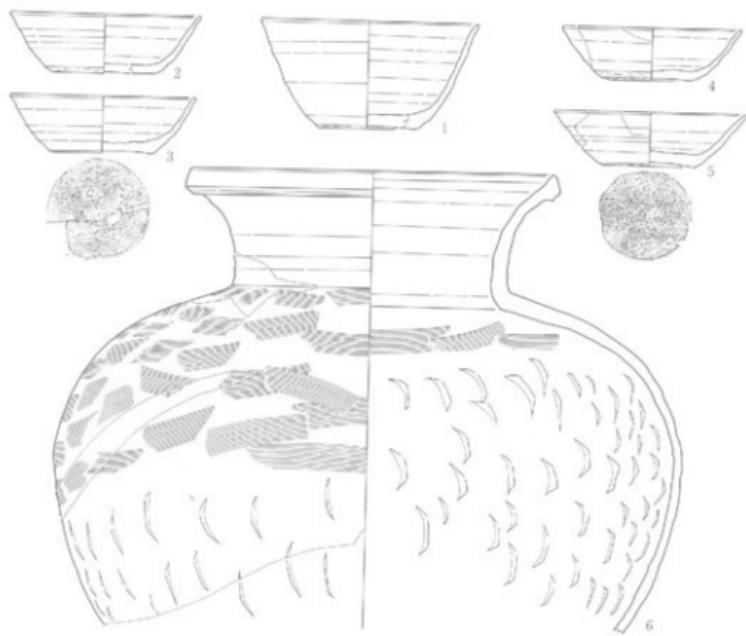
第89図 S E K11窯 出土土器 (1)



第90図 S E K11窯 出土土器 (2)



第91図 SEK 11窯 出土土器 (3)



縮 尺 1/4

第92図 SEK 24窯 出土土器

口頸部が付くもので、底部には外側にふんばる高台部が付されている。器面はロクロナデと体部下半に回転ケズリが施され、内面はロクロナデが施されている。37は頸部と体部の境にリンク状突帯がめぐるもので、接合は三段構成である。高台部に接合沈線は認められない。単頭甕は上半が残存するもので、球形の体部から屈曲して短い口縁が直立するものである。

### 【S E K24窯】

#### 〔窯跡の概要〕

S E K24窯は焼成部、燃焼部からなる半地下式の窯窯である。規模、平面形共S E K11窯に類似する。付属する外周溝も同様で、平面「ロ」形、断面「U」形の明確なものである。

#### 〔遺物の特徴〕(第91図)

S E K24窯からは坏、甕がある。資料数が少なく、全容は不明であるが、器形や器種構成はS E K11窯に類似するものと考えられる。S E K24窯の坏は全て、回転ケズリ再調整が施されるもので、S E K11窯に先行する要素も認められる。

坏は逆台形のもので、S E K11窯の1類に相当する口径15.5cm、底径7.0cm、器高7.6cmのもの(1)、ⅢB類に相当する口径13.5cm、底径7.3cm、器高4.1cm(いずれも平均)のもの(2、3)、NB類に相当する口径13.1cm、底径6.0cm、器高3.8cm(いずれも平均)のもの(4、5)がある。

甕は比較的大形で、下半部を欠くものである(6)。球形の体部に外反する口縁が付くものである。器面はロ縁部にロクロナデ、体部外面にナデとタタキメを残し、内面はヘラナデとアテメが認められる。

S E K11窯段階の実年代を知る資料はないが、類似する土器を出土した伊治城跡S T173住居跡の年代や闇ノ入遺跡第5群土器で検討したように、概ね、8世紀末葉～9世紀第1四半期を中心とする年代が考えられる。

### ■ S E K12窯段階

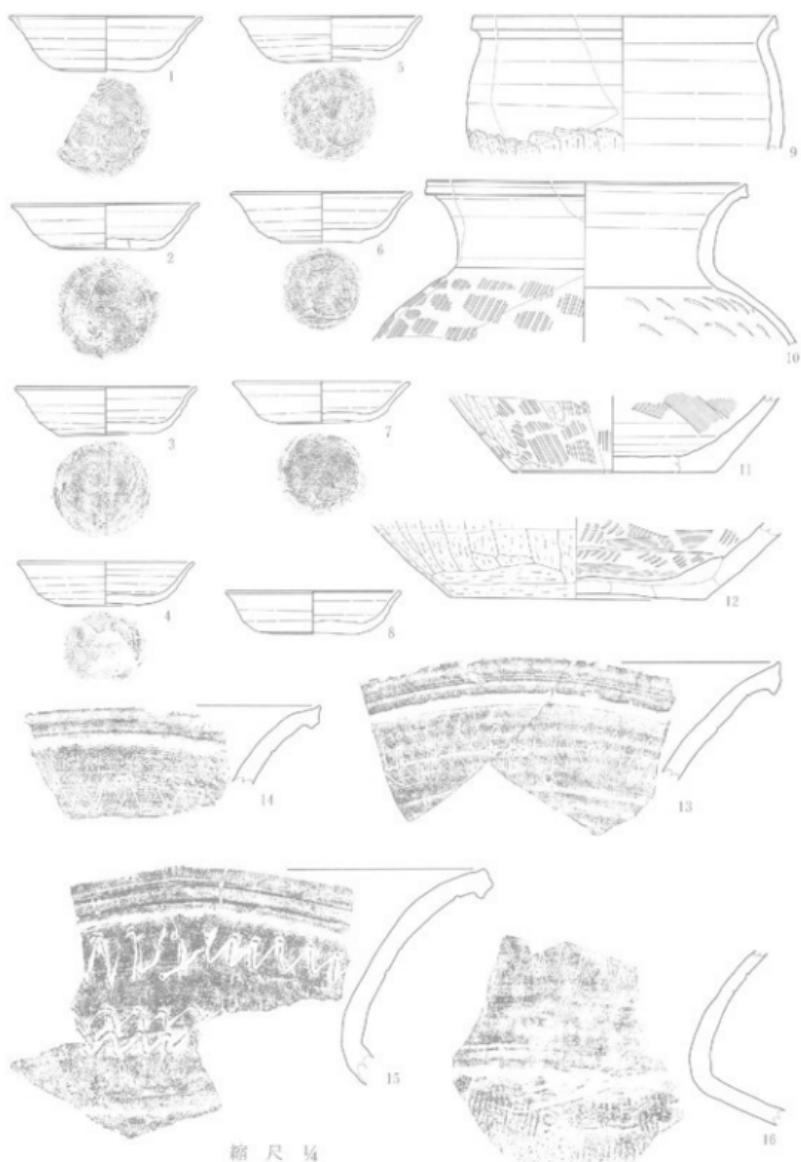
#### 〔窯跡の概要〕

S E K12窯は焼成部、燃焼部からなる半地下式窯窯である。平面形は幅の狭い短楕円形で、焼成部と燃焼部の境は不明瞭である。床面は2面確認された。外周溝は伴わないものである。詳細な報告はなされていない。

#### 〔遺物の特徴〕(第92図)

S E K12窯からは坏、甕、鉢が出土している。資料数は乏しい。

坏は回転糸切りで切り離された底部から丸味をもって立ち上がり、体部が直線的に外傾する



縮 尺 1/4

第93図 S E K12窟 出土土器

もので、法量の違いによって2種に分けられる。I類(1~4)は口径に13.3cm、底径6.8cm、器高3.8cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.51、口径に対する器高の比は平均で1:0.26である。II類(5~8)は口径12.5cm、底径5.6cm、器高3.0cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は1:0.45、口径に対する器高の比は1:0.24である。

甕(10~16)は全容のわかるものはない。底部は平底で、丸味をもった肩部から屈曲して口縁部が外反するもので、口唇部が発達している。器面は口縁部にロクロナデ、体部にタタキとケズリが施され、内面はアテメ、ヘラナデが認められる。口縁部外面にはロクロ回転を利用しない波状沈線文、あるいは連續山形文が施されるものが多い。

鉢(9)は体部上半の資料である。丸味をもった体部から短い口縁が外傾するもので、口唇部は発達している。器面はロクロナデとケズリ、内面はロクロナデが認められる。

环は全て回転糸切り無調整で、SEK11系より後出の要素をもつものと考えられるが、法量の違いから2種に分けられ、器種分化の要素を残すものである。実年代は不明であるが、概ねSEK11系に後続する9世紀第1四半紀～第2四半紀を中心とする頃を考えておきたい。

### 3. 須江窯跡群第Ⅲ期

須江窯跡群第Ⅲ期は、第Ⅱ期で移入された回転糸切り技法を継承しながら、需用に応じた器種の減少、器形の単純化・簡素化、技法の簡略化を展開し、衰退へ向う時期である。窯構造では高温度焼成を追求する、急斜面を利用した小規模な地下式窯窓を採用し、須恵器では器種・法量の單一化、調整技法の簡素化が指摘される。特に、环では1器種1法量の楕形のものへ変化し、規格品の大量生産への技術的革新としてコテ状工具の使用と底部円柱作りが採用される。

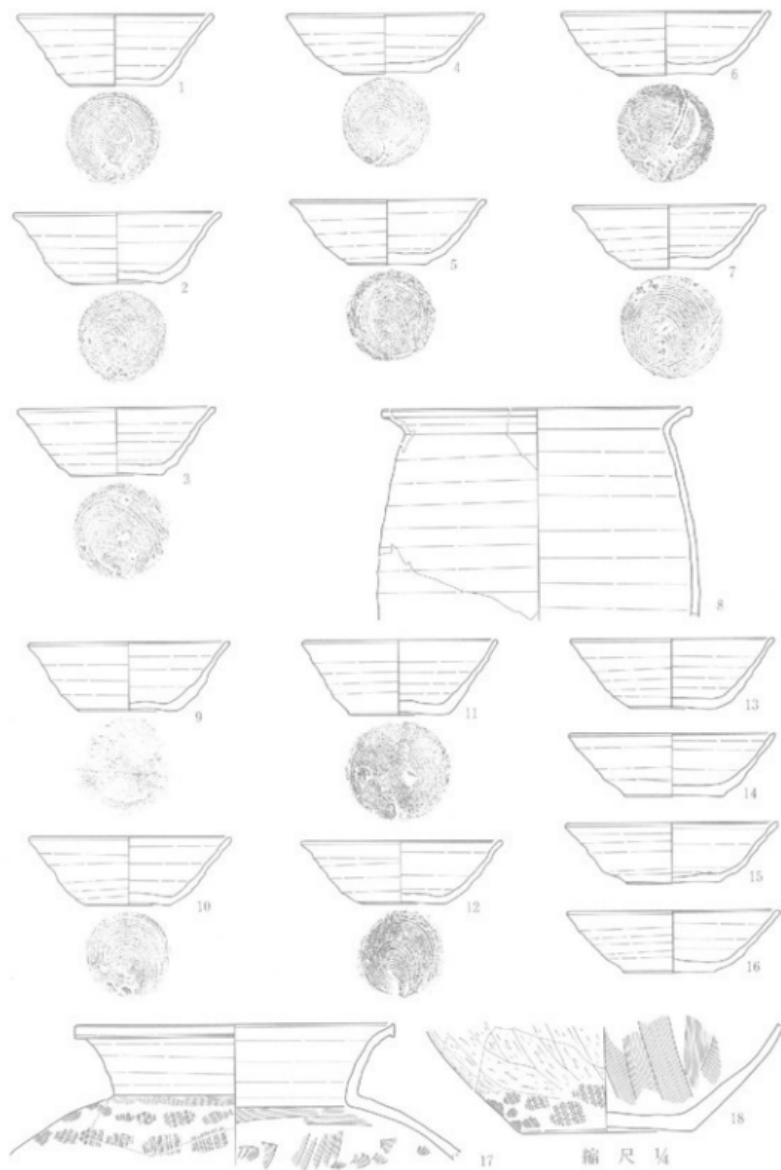
SEK 2 窗段階

SEK2窓段階の窓跡では、SEK2窓(中野・佐藤:1990, 3)とSEK10窓が調査されている。

[SEK 2 %]

### 〔実跡の概要〕

SEK2窯は煙道部、焼成部、燃料部からなる地下式の窯窯である。規模は全長5.7m、煙道部の長さ0.4m、底面幅0.3~0.4m、焼成部の長さ3.8m、底面幅0.5~1.1m、燃焼部の長さ1.5m、底面幅0.4~0.8mを計る。平面形はやや胴の膨んだ長円形で、焼成部と燃焼部の境はわずかにくびれている。床面の傾斜角は27°~42°ほどである。床面は3面確認された。焚口部周囲の側壁には天井構築材の痕跡と考えられる径2cm前後のビットが7個確認されている。环の出



第94図 SEK 2窯・SEK 10窯 出土土器

上状況は逆さまに伏せた状態で重なって出土している。重ね焼きされた最上部の杯には天井部の還元した跡が付着し、窓内に施されたものと考えられる。

#### 〔遺物の特徴〕(第93図1～8)

S E K 2 窯からは环、甕が出土している。

环は全て回転糸切り無調整のものである。体部が直線的に外傾する逆台形のもの(1～3)と、内湾する碗形のもの(4～7)の2種に分けられる。法量は2種共同様で、口径14.4cm、底径6.5cm、器高4.6cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.45、口径に対する器高の比は平均で1:0.32である。器面には粘土粗積上げ痕と火ழ痕が認められ、底部には糸起こしの痕跡も観察される。器面は内外面に指によるロクロナデが観察される。

甕(8)は長脚形のもので、短い口縁が直線的に外傾する。器面は内外面共にロクロナデが施されている。

#### 〔S E K 10 窯〕

##### 〔窯跡の概要〕

S E K 10 窯は煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式の窯窰である。規模、形態はS E K 2 窯に類似する。床面は3面確認された。杯の出土状況は、伏せた状態で重なって検出された。

#### 〔遺物の特徴〕(第93図9～18)

S E K 10 窯からは环、甕が出土している。

环は全て回転糸切り無調整のものである。体部が直線的に外傾する逆台形のもの(9～11,13)と内湾する碗形のもの(12,14～16)の2種に分けられる。法量は2種共に同様で、口径14.4cm、底径6.5cm、器高4.7cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.46、口径に対する器高の比は平均で1:0.33である。器面には粘土粗積上げ痕と火ழ痕が認められる。器面には内外面に指によるロクロナデが観察される。

甕(17～18)は全容のわかるものはない。底部は平底で、球形に近い体部から屈曲して口頭部が外反する。口縁部は単純化しつつあるものの、比較的厚く、丁寧につくられている。体部は外面にナデ、タタキ、ケズリが施され、タタキメの占める割合が多い。内面にはヘラナデ、アテメが認められる。

S E K 2 窯段階の上器は、环では逆台形のものと碗形の2種に分けられ、器種が減少しながらも、單一化されていない。2種の环は、それぞれS E K 11 窯の环Ⅲ C、Ⅲ D類から引き継がれるものと考えられる。また、器面も内外面に指によるロクロナデが認められ、後述するS E K 3 窯段階に見られる内面のコテ状工具痕は観察されない。甕も、単純化の傾向は認められる

ものの、体部のタタキ、アテメを多く残す特徴や、口縁部のつくりからも、比較的古い要素を残している。SEK2窯段階の実年代を知り得る資料はないが、SEK12窯に後続する9世紀中葉を中心とする年代を考えておきたい。

ところで、須恵器窯において、逆台形状から椀形に変化する段階の資料として、仙台市五木松窯跡(小川淳一:1987.3)がある。五木松窯は多賀城N期の復興瓦を生産した窯跡で、貞觀11年(869年)の陸奥国大地震に近い年代が考えられる。SEK2窯の年代観とは大きく異なるものである。この違いは、回転糸切り技法が早く導入され、その系統の中で変化してきたSEK2窯に対して、回転ヘラ切り技法と回転糸切り技法の変遷する五木松窯という窯跡群の系譜や地域性によるものではないかと考える。SEK2窯は実年代は与えられないという弱い面をもつが、今後、消費地などの調査によって検討されるものと思われる。

### ■ SEK3窯段階 ■ ■ ■

SEK3窯段階の窯跡はSEK3窯(中野・佐藤:1991.3)、DAI2窯(佐藤敏幸:1993.3)、SEK14窯、SEK28窯、NUK6窯(高橋・阿部:1987.3)が調査されている。

#### 【SEK3窯】

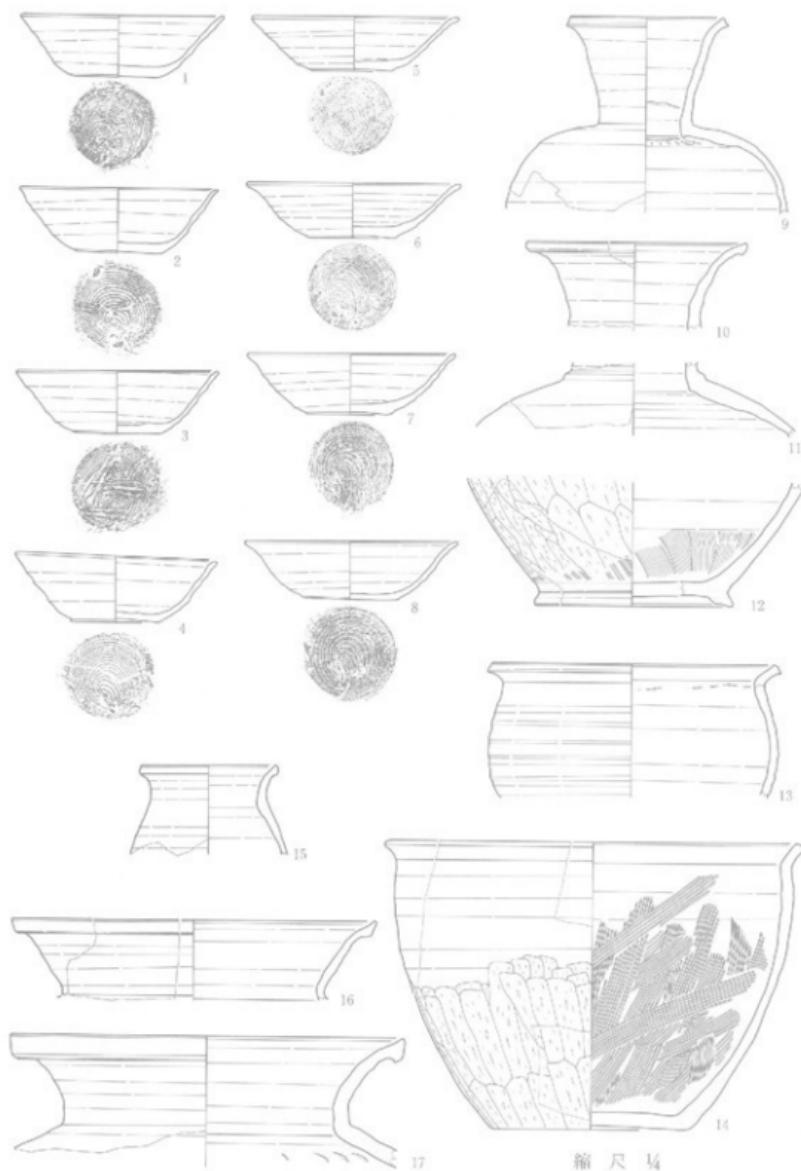
##### 〔窯跡の概要〕

SEK3窯は焼成部、燃焼部からなる地下式の窑である。規模は全長6.5m、焼成部の長さは5.2m、底面幅0.4~1.0m、燃焼部の長さ1.3m、底面幅0.8~1.0mを計る。平面形は両側壁がほぼ並行し、燃焼部との境でややくびれて狭くなる胴張形である。床面の傾斜角は20°~30°ほどで、床面は3面確認された。焚口部には側壁に石を組み、粘土で貼り付け、壁面を強化している。窯跡周囲には、断面「へ」形の外周溝がめぐらされている。焚口部から斜面下方には前庭部と広範囲に広がる灰原が検出された。出土した窯は伏せた状態で重なって検出された。

##### 〔遺物の特徴〕(第94図)

SEK3窯からは杯、甕、壺、鉢、小瓶が出土している。図化された土器は、窯が窯体内から出土した廃棄段階のもの、その他が灰原1層~4層出土のもので、ある程度の時間幅があるものと考えられる。

杯は全て回転糸切り無調整のものである。体部が直線的に外傾する逆台形状のもの(1~4)と体部が内湾して口縁部が外反する椀形のもの(5~8)があるが、SEK2窯ほど明確な違いではなく2種に分類するには曖昧なものが多い。法量はいずれも同様で、口径14.6cm、底径6.0cm、器高4.4cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.41、口径に対する器高の比は平均で1:0.31である。器面は外面に指によるロクロナデ、内面にはコテ状工具によるシャー



第95図 SEK 3塚 出土土器

縮 尺 1/4

ブなロクロ目が観察される。

壺(16~17)は口縁部のみ圓化したため、全容は不明である。口頭部が外反、または直線的に外傾するもので、口縁部はやや幅をもち、まだ装飾的な感が残る。器面はロクロナデが認められる。

壺(9~11)も全容のわかるものはない。口頭部が外反し、口縁部は幅が狭くなるものの、まだ装飾的で、丁寧なつくりである。体部との境に、いわゆるリング状突帯のめぐるものもある。底部には外側にふんばる、しっかりとした高い高台部が付される。器面は上半にロクロナデ、下半に縱方向のケズリが施され、タクキメの残るものもある。内面はロクロナデと底部にヘラナデが観察される。

鉢(13~14)は、平底の底部から緩く内湾して立ち上がり、短い口縁部が外傾するもの(14)と、球形の体部から短い口縁部が外傾するもの(13)がある。器面はロクロナデと縱方向のケズリが施され、内面にはロクロナデ、あるいはハケメが施される。

小瓶(15)は弱い丸味をもった体部から緩やかに口縁部が外反するものである。器面は内外面にロクロナデが認められる。この器形の土器は、陶邑窯では第V型式に、猿投窯ではE-I型式期に出現するものである。

## 【DA I 2 窯】

### 【窯跡の概要】

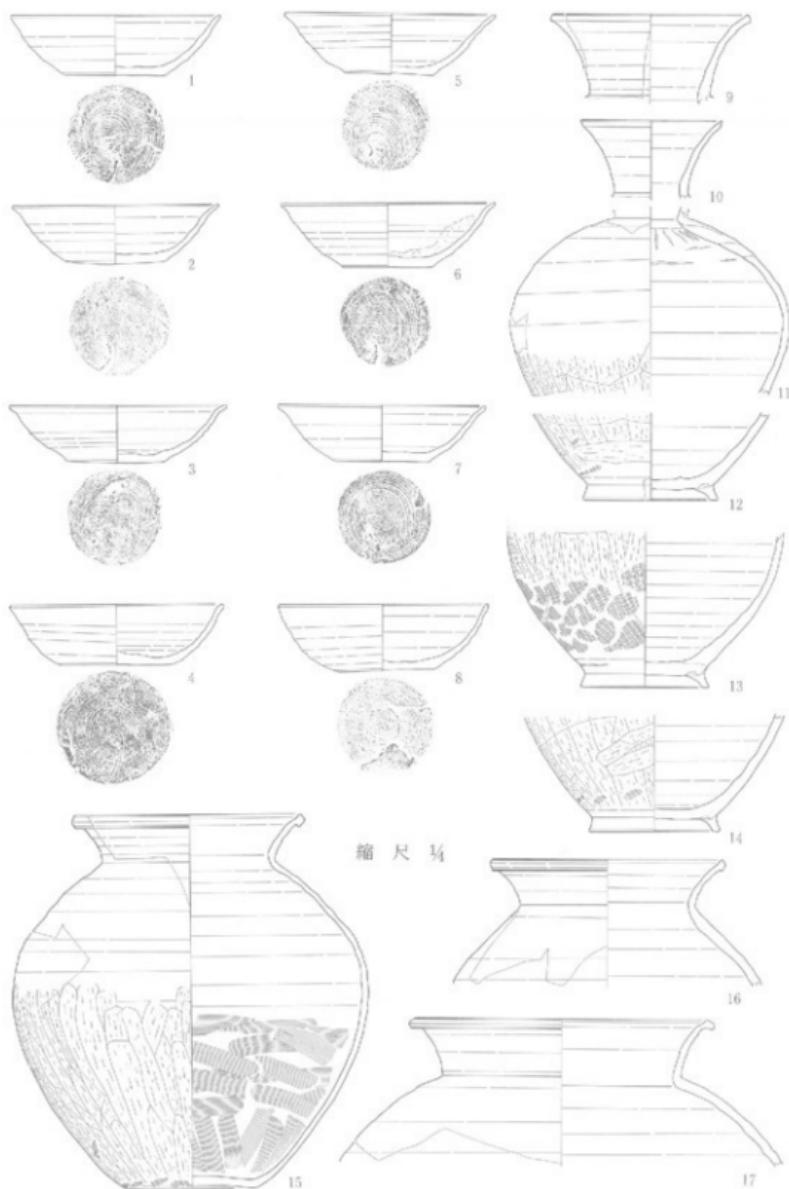
DA I 2 窯は煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式窯である。規模は全長7.10m、煙道部の長さ0.82m、底面幅0.34~0.36m、焼成部は長さ3.20m、底面幅0.36~1.22m、燃焼部は長さ1.68m、底面幅0.40~0.74mで、長さ1.40m、底面幅0.30~1.01mの前庭部が付属する。平面形は焼成部と燃焼部の境でややくびれる胴張形である。床面の傾斜角は24°~31°ほどである。床面は2面確認された。出土した灰は伏せた状態で重なって出土している。前庭部の斜面下方には半層の灰原が検出された。

### 【遺物の特徴】(第95図)

DA I 2 窯からは灰、壺、甕、壺が出土している。

甕(1~8)は全て回転糸切り無調整のものである。器形は体部が内湾する椀形で、口縁部が外反するものとしないものがあるが、前者が主体を占める。法量は口径14.9cm、底径6.7cm、器高4.4cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.45、口径に対する底径の比は平均で1:0.30である。器面は外面に指によるロクロナデ、内面にコテ状工具によるロクロナデが施される。底部には糸起こしの痕跡が観察される。

壺(15~17)は平底のもので、球形に近い丸味をもった体部に短い口縁部が直線的に外傾する。



第96図 DA 1・2窯 出土土器

機してなで肩で、口唇部は輻が狭いものの、まだ装飾的な感が残り、丁寧につくられている。器面は上半にロクロナデ、下半外面に縦方向のケズリが施され一部にタタキメを残し、内面に横方向と縦方向のナデが認められる。図化しなかったものに、口縁部外面に連続山形文を施すものもある。

壺(9~14)は全容のわかるものはない。球形の体部に口頸部が外反するもので、底部端にはしっかりととした高台部がふんばるように付されている。器面は上半にロクロナデ、下半に縦方向のケズリが施され、タタキメを残すものも多い。内面は全面にロクロナデが施されている。底部と高台部の接合面には、角柱状の棒状工具による刺突を施し、凹凸をつくり接着を強化する、接合刺突ともいべき技法が観察される。

### 【S E K14窯】

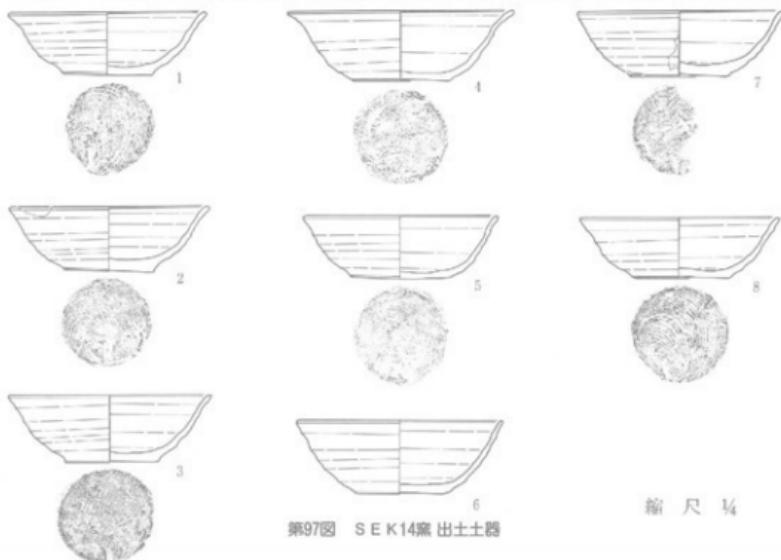
#### 〔窯跡の概要〕

S E K14窯は煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式窯窯である。規模、平面形はD A I 2 窯に類似する。床面は2面検出された。出土した壺は伏せた状態で重なって検出された。

#### 〔遺物の特徴〕(第96図)

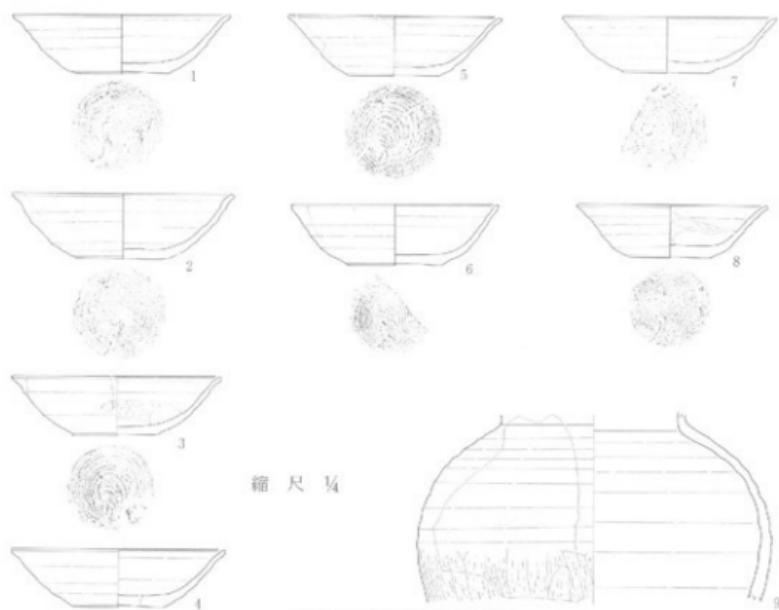
S E K14窯からは壺、甕が出土しているが、甕は図化できなかった。

壺(1~8)は全て回転糸切り無調整のものである。器形は体部が内湾する橈形のもので、口



第97図 S E K14窯 出土土器

縮 尺 1/4



第98図 S E K28窯 出土土器

縁部が外反するものとしないものがある。また、底部がやや柱状高台状に厚いものもある。法量は口径14.2cm、底径6.6cm、器高4.6(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.46、口径に対する器高の比は平均で1:0.32である。器面調整は外面に指によるロクロナデ、内面にコテ状工具によるロクロナデが認められる。

壺は体部片で、平底の底部から体部が直線的に外傾して立ち上がり、肩部が丸味をもつものである。器面は外面上半にタタキ、下半に縦方向のケズリが施される内面はアテメとヘラナデが認められるものである。

### 【S E K28窯】

#### 〔窯跡の概要〕

S E K28窯は焼成部、燃焼部からなる地下式窯跡である。規模は全長4.18m、焼成部の長さ2.64m、底面幅0.7~1.1m、燃焼部の長さ1.26m、底面幅0.7~0.8を計る。平面形は焼成部と燃焼部の境がくびれて狭くなる剝張形である。床面の傾斜角は24°~34°ほどである。床面は2面確認された。窯尻から窯跡左側に断面「ノ」形の外周溝が巡る。遺物の出土状況は、壺では逆さに伏せた状態で重なって検出されている。

## 【遺物の特徴】(第97図)

S E K 2 窯からは杯、壺が出上している。

杯(1～8)は全て回転糸切り無調整のものである。体部が丸味をもつて外傾する楕形で、口縁部がわずかに外反するもの1種類である。器厚は比較的厚めである。法量は口径14.9cm、底径6.3cm、器高4.2cm(いずれも平均)、口径に対する底径の比は平均で1:0.42、口径に対する器高の比は平均で1:0.28である。器面は外面向に指によるロクロナデ、内面にはコテ状工具によるロクロナデが施されている。

壺(9)は体部上半の破片で、全容のわかるものはない。器形はなで肩で、外面上半にロクロナデ、下半に縦方向のケズリが施され、内面はロクロナデが観察される。

## 【NUK 6 窯】

## 【窯跡の概要】

NUK 6 窯は煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式窯窓である。規模は全長6.0m、煙道部の長さ0.9m、底面幅0.4m、焼成部の長さ3.9m、底面幅0.7～1.4m、燃焼部の長さ1.2m、底面幅0.5～0.8mを計る。平面形は焼成部と燃焼部の境がくびれて狭くなる胴張形である。床面の傾斜角は20°～50°ほどである。床面は3面確認された。

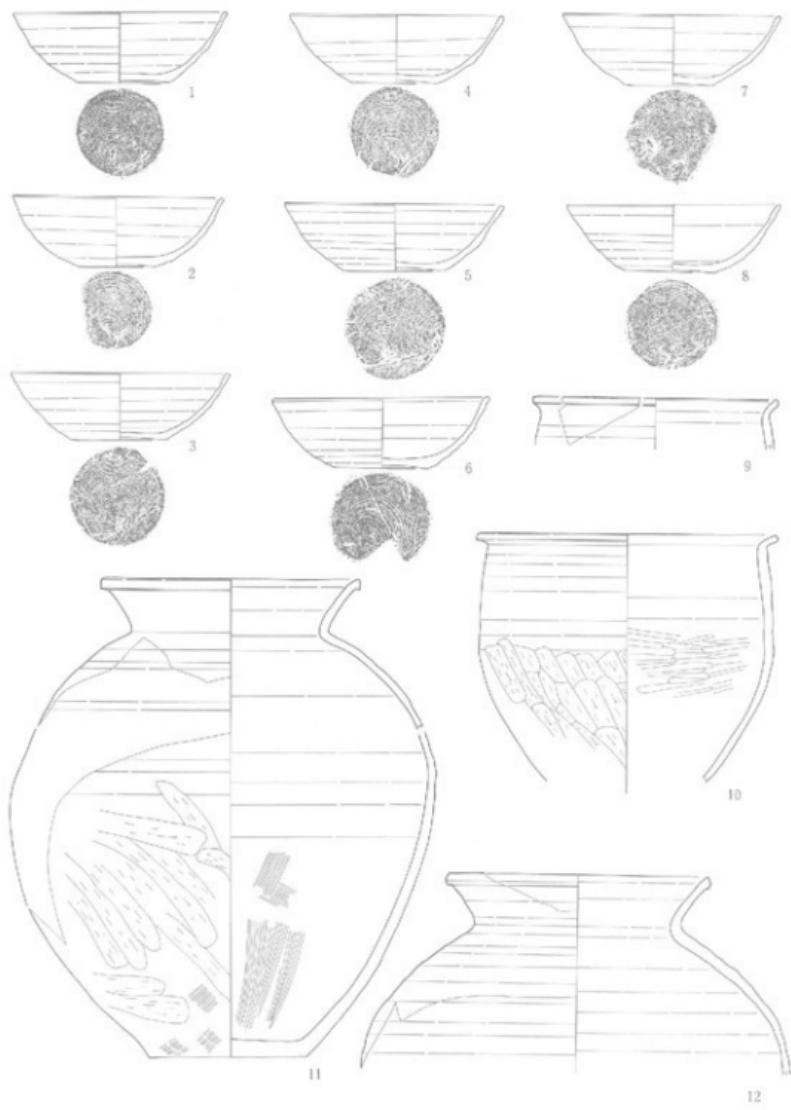
## 【遺物の特徴】(第98図)

NUK 6 窯からは杯、壺が出上している。

杯(1～8)は全て回転糸切り無調整のものである。器形は体部から口縁部へ内湾気味に外傾する楕形のもの1種である。法量は口径15.0cm、底径6.1cm、器高4.7cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.41、口径に対する器高の比は平均で1:0.31である。器面はロクロナデが施されており、内面にコテ状工具の使用されたものもある。底面には糸起こしの痕跡が観察される。

壺は体部が球形のもの(11～12)と長胴形のもの(9～10)がある。球形のものは平底で、なで肩の肩部から屈曲して頸部が外傾する。口縁部は単純化しているがらも、やや幅のあるものである。器面は外面上半にロクロナデ、下半に不規方向のケズリとタタキメが残り、内面は上半にロクロナデ、下半に縦方向のナデが施される。長胴形のものは、丸い口縁部が直線的に外傾する。器面は外面上半にロクロナデ、下半に縦方向のケズリ、内面下半に横方向のミガキが認められる。

S E K 3 窯段階の上器は、杯、壺、壺、鉢、小瓶からなる。杯は逆台形に近いものと椭形の2種から椭形の1種になり、内面へのコテ状工具使用が開始され、器厚の薄いものが多い。壺



縮尺 1/4

第99図 NUK 6窯 出土土器 (高橋・阿部: 1987.3より)

は球形のものと長胴形のものがあり、前者が多い。底部が平底で、体部はなで肩である。口頭部はやや短くなり、口縁部のつくりも単純化の傾向にあるものの、まだ丁寧につくられている。器面は上半にロクロナデ、下半に縦方向のケズリが施され、タタキメをわずかに残す。内面下半にも横と縦方向のナデまたはヘラナデが認められる。壺は球形の体部に広口状の口頭部がつくもので、口縁部は甕と同様に単純化の傾向にある。底部には外側にふんばる断面方形の高台部が付される。体部と頸部の境にはリング状突帯のめぐるものもある。高台部の接合面には柱状工具による刺突が施される、接合刺突痕が認められる。器面は上半にロクロナデ、外面下半に縦方向のケズリが施され、タタキメが残るものも多い。内面は全面にロクロナデが施されるものが多く、わずかにヘラナデの施されるものもある。鉢は球形あるいは弱い丸味をもった体部から屈曲して短い口縁部が外傾するものである。小瓶は、弱い丸味をもった体部から緩やかに口縁部が外反するものである。SEK3窯段階の年代は不明であるが、SEK2窯に後続する9世紀第3四半紀～第4四半紀を中心とする、9世紀後半頃としておきたい。壺にみられたリング状突帯は、一般に9世紀代に多いこと、小瓶の出現年代が東海猿投窯ではK-14窯式期にみられることは年代観に矛盾しない。仙台市五本松窯と比較すると、坏の单一法量化というSEK3窯段階の特徴は五本松窯より後出する要素であるが、窯跡群内へ変遷過程の違いによるものと考えられる。

### ■ SEK1窯段階

SEK1窯段階の窯跡は、SEK1窯(中野、佐藤:1991.3)、SEK29窯、SEK27窯、SEK15窯が調査されている。

#### 【SEK1窯】

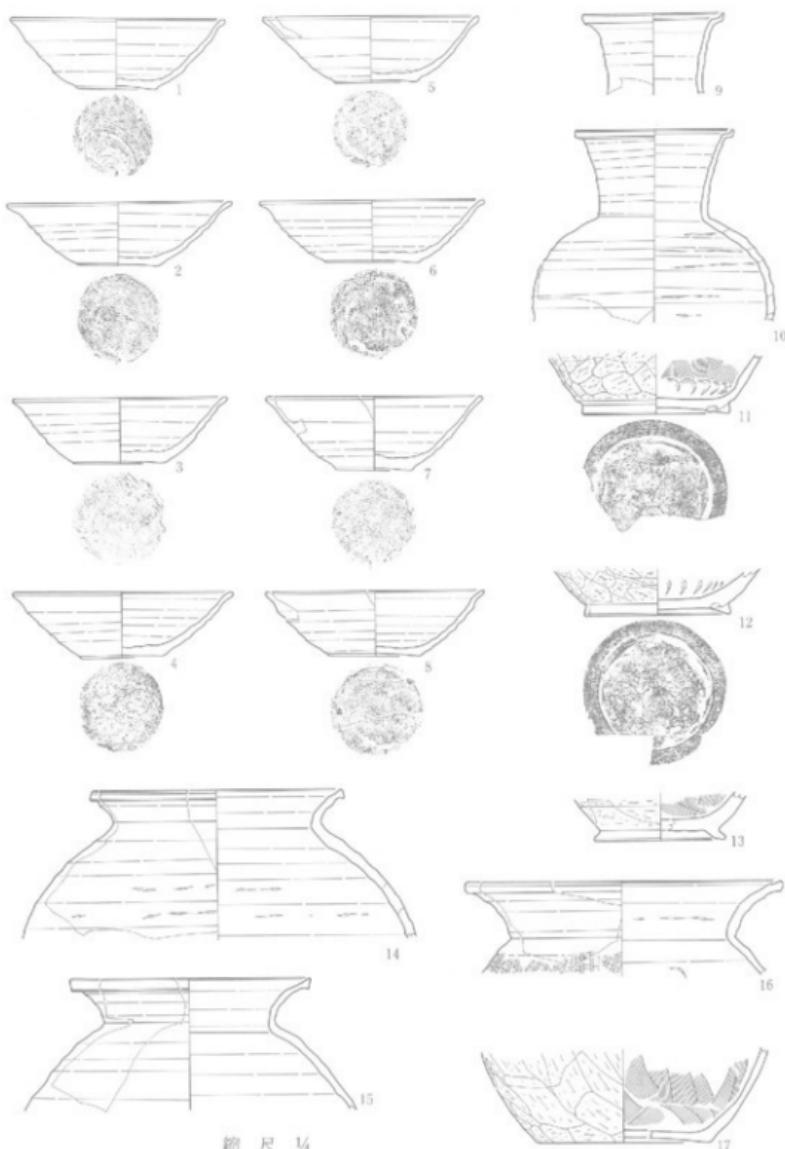
##### 【窯跡の概要】

SEK1窯は煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式窯窯である。規模は全長7.2m、煙道部の長さ0.7m、底面幅0.3～0.4m、焼成部の長さ3.2m、底面幅0.5～1.6m、燃焼部の長さ0.8m、底面幅0.5～0.7mを計る。それより下方は特別な施設のない前庭部である。平面形は焼成部と燃焼部の境がくびれて狭くなる胴張形である。床面の傾斜角は15°～45°ほどである。床面は3面確認された。前庭部から斜面下方に单層の灰原が広がっている。遺物の出土状況は窯跡内上半では坏が伏せた状況で重なって検出されている。

##### 【遺物の特徴】(第99図)

SEK1窯からは坏、甕、壺が出土している。

坏(1～8)は全て回転糸切り無調整のものである。器形は体部が弱い丸味をもち、口縁部が



第100図 SEK1窯出土土器

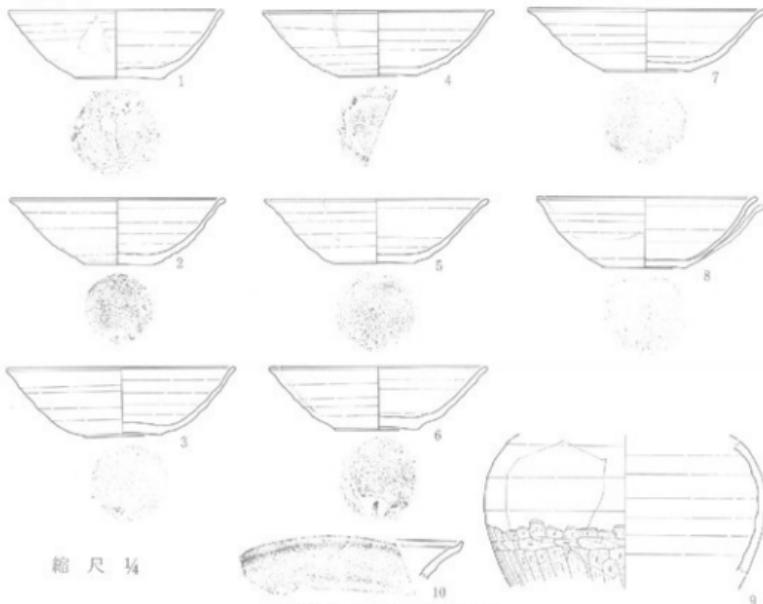
外反する楕形のもの 1 種である。法量は口径 15.7cm、底径 5.9cm、器高 4.6cm(いざれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で 1 : 0.38、口径に対する器高の比は平均が 1 : 0.30 である。器面は外面に指によるロクロナデ、内面にコテ状工具によるロクロナデが施される。

壺(14~17)は全容のわかるものはない。底部は平底である。肩部はなで肩で、口頸部はやや短く外傾する。口縁部は単純化し、幅の狭い口縁がめぐる。器面は上半にロクロナデ、下半はケズリが施される。肩部にタタキメの残るものもある。内面は上半にロクロナデ、下半に縱方向のヘラナデが施される。

壺(9~13)は広口のものである。球形の体部から屈曲して口頸部が直立気味に外反するもので、幅の狭い口縁部が受口状につくられている。底部には、外縁に断面三角形状に単純化した高台が付されている。器面は上半にロクロナデ、外面下半にケズリ、内面下半には縱方向のナデとオサエメが観察される。体部下半に回転ケズリの施されるものもある。高台部の接合面には接合刺突の痕跡が認められる。

### 【S E K29窯】

#### 〔窯跡の概要〕



第101図 S E K29窯 出土器

SEK29窯は煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式窯窯である。規模は全長5.74m、煙道部の長さ0.79m、焼成部の長さ3.40m、底面幅0.68~1.46m、燃焼部の長さ1.55m、底面幅0.68~0.80mを計る。平面形は焼成部と燃焼部の境がくびれて狭くなる胴張形である。床面の傾斜角は24°~40°ほどである。床面は2面確認された。床面上半にはステップ状の段が16個検出されている。遺物の出土状況は杯が伏せた状況で重なっていた。

#### 【遺物の特徴】(第100図)

SEK29窯からは杯、甕、壺が出土している。

杯(1~8)は全て回転糸切り無調整のものである。器形は体部が内湾し、口縁部で外反する椀形のもの1種である。法量は口径16.0cm、底径5.8cm、器高4.8cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.36、口径に対する器高の比は平均で1:0.30である。器面は外面に指によるロクロナデ、内面にコテ状工具によるロクロナデが施される。底部は、いわゆる円柱作りと考えられる痕跡が認められる。

甕(9)は口縁部の破片である。口頭部が外反し、口縁部がつまみ上げられたもので、単純化している。器面は内外面共ロクロナデが施される。

壺(10)は体部の破片である。球形の体部で、外面上半にロクロナデ、下半にケズリが施され、内面にロクロナデが認められる。

#### 【SEK27窯】

##### 【窯跡の概要】

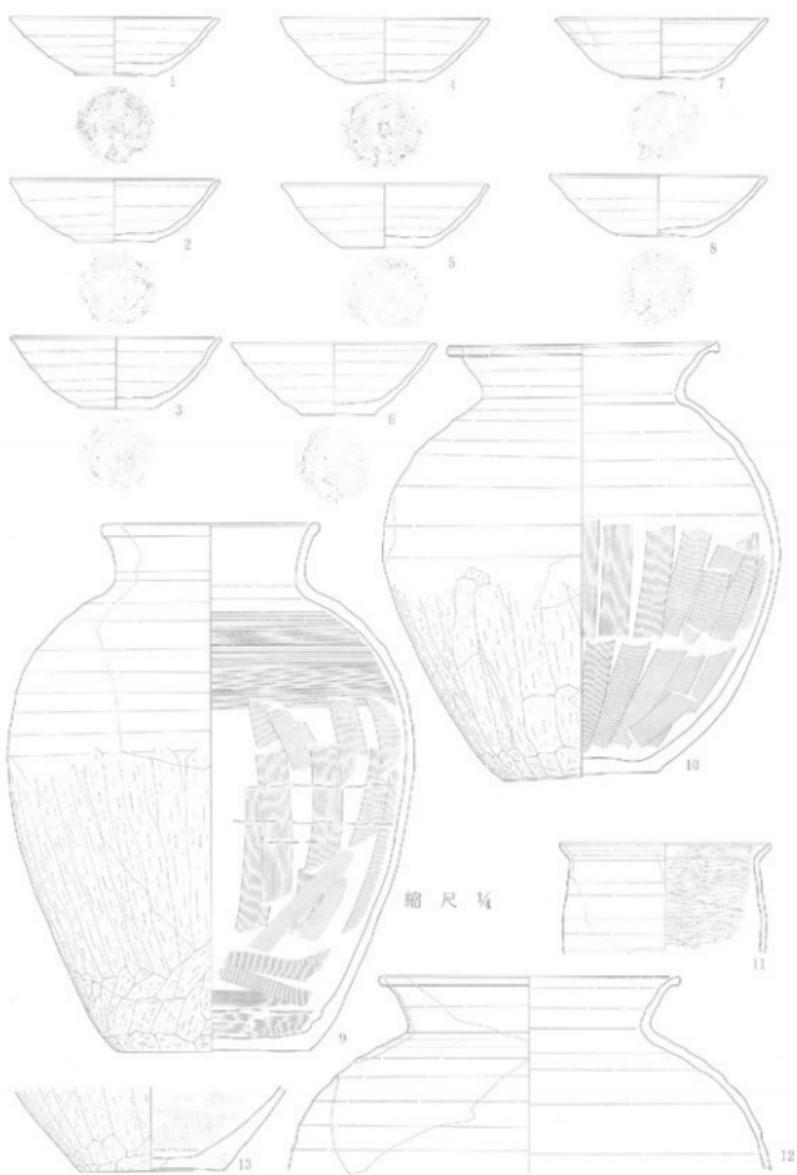
SEK27窯は煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式窯窯である。規模は全長6.84m、煙道部の長さ1.40m、焼成部の長さ3.84m、底面幅0.58~1.18m、燃焼部の長さ1.60m、底面幅0.48~0.58mを計る。平面形は焼成部と燃焼部の境がくびれて狭くなる胴張形である。床面の傾斜角は28°~37°ほどである。床面は2面確認された。床面上半にはステップ状の段が10個検出されている。遺物の出土状況は杯が伏せた状況で重なって検出されている。

#### 【遺物の特徴】(第101図)

SEK27窯からは杯、甕、壺が出土している。

杯(1~8)は全て回転糸切り無調整のものである。器形は体部が弱い丸味をもち、口縁部がやや外反気味になる椀形のもの1種である。法量は口径15.1cm、底径5.8cm、器高4.6cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.38、口径に対する器高の比は平均で1:0.30である。器面は外面に指によるロクロナデ、内面にコテ状工具によるロクロナデが施される。底部は、いわゆる円柱作りと考えられる痕跡が認められる。

甕は体部が球形のもの(10,12,13)と長胴形のもの(11)がある。球形のものは、平底で、短め



第102図 SE K27窯 出土土器

の口頸部が直線的に外傾する。口縁部は単純化し、幅が狭く丸味をもたせている。器面は外面上半にロクロナデ、下半に縦方向のケズリが施され、内面は上半にロクロナデ、下半に縦方向のヘラナデが認められる。長胴形のものは頸部で屈曲して短い口縁部が直線的に外傾するものである。器面が外面にロクロナデ、内面にミガキが施されている。

壺(9)は平底で、胴の長い体部から肩部が湾曲して、口頸部が直立気味に外反する。口縁部は単純化し丸味をもたせたものである。器面は外面上半にロクロナデ、下半に縦方向のケズリが施され、内面にはロクロナデ、回転ハケメ、縦方向のヘラナデ、ナデが認められる。

### 【S E K15窯】

#### 【窯跡の概要】

S E K15窯は焼成部、燃焼部からなる地下式窯窯である。規模、平面形はS E K1窯の隧道部を除いた形態に類似する。床面は2面検出された。遺物の出土状況は焚口部側に中形の甕が多く、窯尻側には杯が多い。杯は伏せた状態で重なって検出された。燃焼部の下方には広範囲に灰原が広がっており、多数の遺物が出土している。灰原はS E K16窯燃焼部と重複しており、S E K15窯が占い。

#### 【遺物の特徴】(第102図)

S E K15窯からは杯、壺、鉢が出土している。

杯(1~8)は全て、回転糸切り無調整のものである。器形は体部が内湾する楕円形のもので、口縁部が外反するものである。法量は口径15.1cm、底径5.5cm、器高5.0cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.36、口径に対する器高の比は平均で1:0.33である。器面調整は外面に指によるロクロナデ、内面にコテ状工具によるロクロナデが認められる。

甕(9、10、12)はいずれも体部下半を欠くものである。概してなで肩で、球形の体部から屈曲して細かめの口頸部が直線的に外傾する。口縁部は単純化し、幅が狭くわずかに膨らみをもつ。器面は内外面共にロクロナデを基調とし、器厚は薄い。体部外面にタタキ、内面に縦方向のヘラナデの認められるものもある。

鉢(11)は上半が残るもので、直立する体部から屈曲して受口状の極く短い口縁部が付くものである。

S E K1窯段階の上器は、杯、甕、壺、鉢からなる。杯は体部が内湾し、口縁部が外反する楕円形のもの1種となり、内面にはコテ状工具によるロクロナデが施される。口径に比して底径が小さくなり、その比率は1:0.38前後である。甕は球形のものと長胴形のものがあり、前者が多い。底部は平底で、肩部はなで肩である。口頸部は短く直線的に外傾し、口縁部はS E K



第103図 S E K15窯 出土土器

3 窯段階よりもさらに単純化して幅の狭いやや膨みをもったものになっている。器面はロクロナデを基調とし、外面下半に縱方向のケズリ、内面に縱方向のヘラナデ、ナデが軽く施される。器厚は極く薄い。壺は球形の体部に広口の口頸部が付くもので、口縁部は前段階に比べて、さらに単純化し、幅の狭い受口状になっている。底部外縁には、断面三角形に単純化した高台部が付されている。高台部の接合面には柱状工具による接合刺突痕が認められる。器面は上半にロクロナデ、下半に縱方向のケズリが施され、内面はロクロナデと下半に縱方向のナデ、オサエヌが認められる。器厚は極く薄い。鉢は、直立する体部から口縁が受口状になるものである。SEK1 窯段階の年代は不明であるが、SEK3 窯段階に後続する9世紀第4半紀を中心とする頃と考えておきたい。

SEK16密段階

SEK16窓段階の窓跡では、SEK16窓とNUK1窓(高橋・阿部:1987, 3)が調査されている。

【SEK16案】

### 〔審跡の概要〕

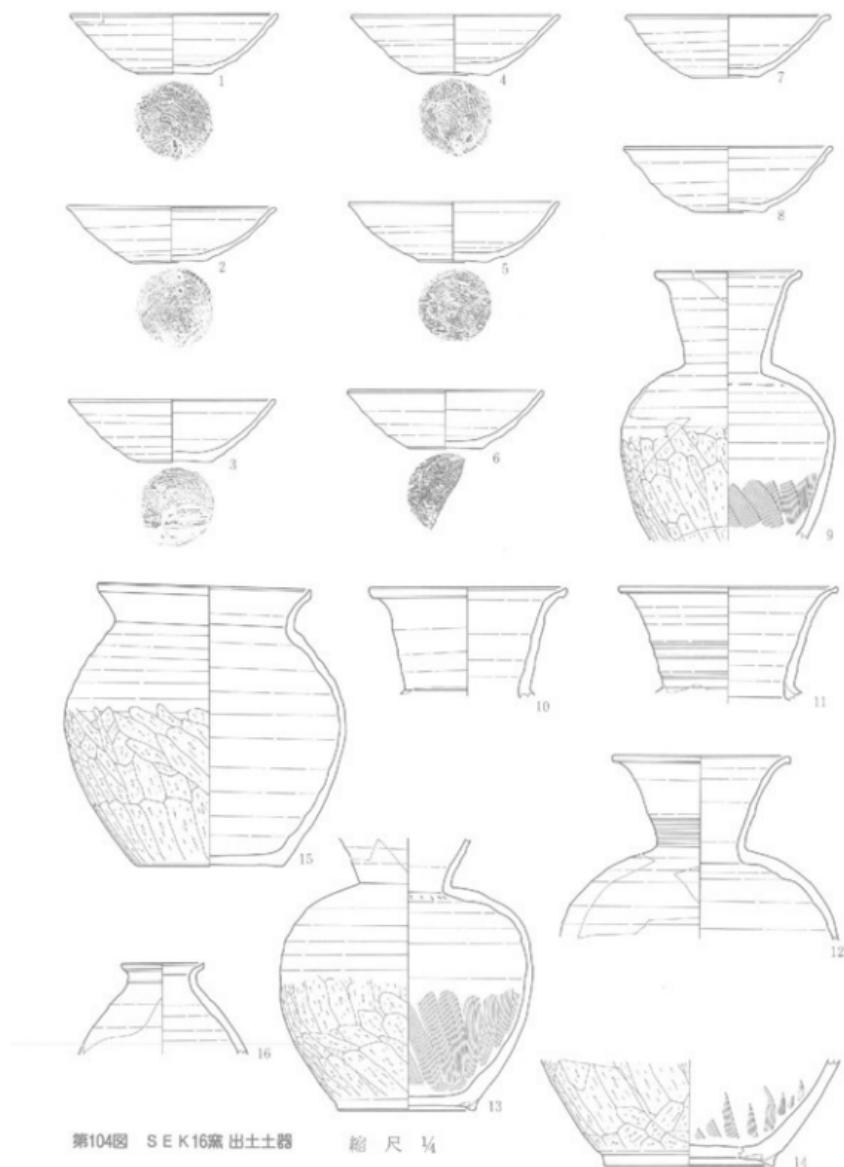
S E K16窯は焼成部、燃焼部からなる地下式の窯窯である。規模、平面形はS E K1窯の煙道部を除いた形態に類似する。床面は2面検出された。S E K16窯の燃焼部端は、S E K15窯の灰原の上に形成されていることからS E K15窯より新しい。燃焼部の下方には灰原が広がっているが、S E K15窯の灰原と重複しており、灰原どうしの分離は明確にできなかった。そのため、灰原出土の遺物の中にはS E K15窯、16窯のどちらに属するものは不明なものがあり、第104図に示した遺物の中には、S E K15窯のものが含まれている可能性もある。なお、S E K16窯燃焼部灰原直上および灰原直上層はKey層である灰白色火山灰層である。

〔遺物の特徴〕(第103図)

SEK16窯からは杯、甕、壺、小瓶が出土している。

杯(1~8)は全て、回転糸切り無調整のものである。器形は体部が弱く内湾する楕形のもので、口縁部の外反するものもある。口径に比して底径が小さく、器高も低い。法量は口径14.7cm、底径5.0cm、器高4.3cm(いずれも平均)で、口径に比して底径の比は平均で1:0.35、口径に対する器高の比は平均で1:0.29である。器面は内外面にロクロナデが施されており、内面のロクロナデには皮製の工具が使用された可能性が考えられる。

図(15)は小形品で、平底の底部から体部が内湾するものである。頸部で屈曲して細かめの口



第104図 SE K16棟出土土器

縮 尺 1/4

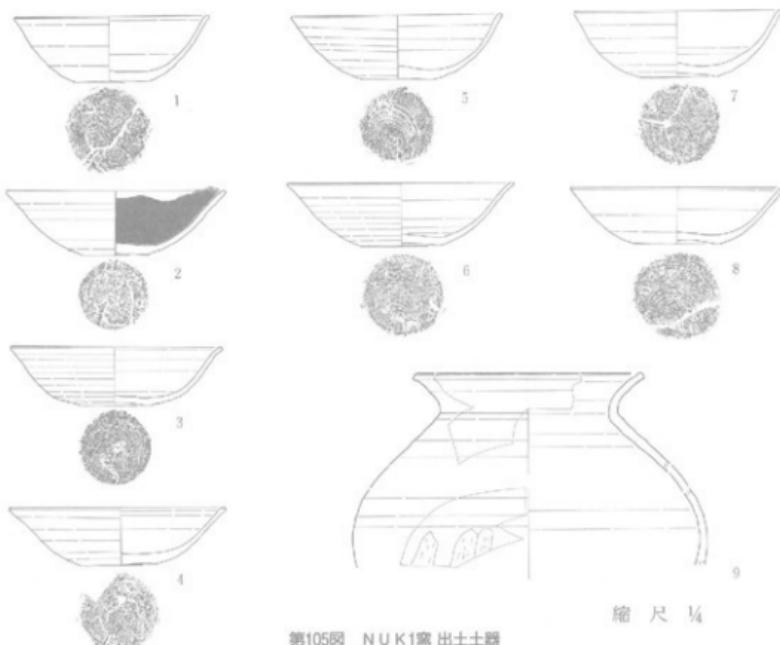
頸部が緩く外反する。口縁部は単純化し、厚みをもたず、直立気味に立ち上がる。器厚は薄い。器面は外面上半にロクロナデ、下半に縦方向のケズリ、内面にロクロナデが施される。

壺(9~14)は広口壺である。球形、あるいは縱長の球形をした体部で、概してなで肩である。口頸部は比較的短かめで、口縁部はSKET窓よりも更に単純化し、わずかに膨みをもたせて丸く仕上げたものである。平底の底部外縁にめぐらされる高台部も形式化し、断面三角形の小さなものとなり、接合刺突のさらに外側に付されている。また、大形の広口をもつもの(10、11)も出現する。器面は口頸部にロクロナデ、カキメが施され、体部上半にロクロナデ、下半に縦方向のケズリ、内面にはロクロナデと縦方向のヘラナデ、ナデが認められる。

小瓶(16)は下半を欠くもので全容はわからない。なで肩の肩部から頸部で外反し、短かい口縁となる。口縁部は直立気味につまみ上げられている。頸部に段をもつ。器面は内外面共にロクロナデである。

### 【NUK1窓】

#### 〔窓跡の概要〕



第105図 NUK1窓 出土土器

NUK 1 窯に煙道部、焼成部、燃焼部からなる半地下式の窯である。規模は全長6.0m、煙道部の長さ0.3m、底面幅0.5m、焼成部の長さ4.5m、底面幅0.7~0.8m、燃焼部の長さ1.2m、底面幅0.4~0.7mを計る。平面形は側壁がほぼ並行する矩形である。底面の傾斜角は22°ほどである。NUK 1 窯は須江跡塚遺跡第15住居跡と重複しており、さらにその前面下方に位置する第12住居跡堆積土第3層から火熱を受けたスサ入り粘土塊とともに遺物を包含し、この上の堆積土第2層がKey層である灰白色火山灰層となっている。

#### 〔遺物の特徴〕(第104図)

NUK 1 窯からは杯が、須江跡塚遺跡第12住居跡堆積土第3層からは甕が出上している。

杯(1~8)は全て回転糸切り無調整のものである。器形は体部が弱く内湾する楕円形のもので、口縁部が外反するものが多い。口径に比して底形が小さい。法量は口径14.8cm、底径5.2cm、器高4.4cm(いずれも平均)で、口径に対する底径の比は平均で1:0.35、口径に対する器高の比は平均で1:0.30である。器面は外面に指によるロクロナデ、内面にコテ状工具によるロクロナデが認められる。

甕(9)は上半が残存するもので、体部中位に最大径を持ち、なで肩で、頸部で屈曲して口縁部が外反する。口縁部は単純化し、厚みをもたない。器面は上半にロクロナデ、下半に縱方向のケズリが施される。

SEK 16窯段階の土器は、杯、甕、壺、小瓶からなる。杯は体部が弱く内湾する楕円形のもの1種である。内面にはコテ状工具痕の観察されるものもある。口径に比して底径が小さく、その比率は1:0.35前後である。また、口径に比して器高もやや高く、壺に近い器形である。甕は小形で、底部が平底、体部が球形で、肩部はなで肩である。頸部で屈曲して、短かめの口縁部が外反する。口縁部は極く単純化し、厚みをもたない。器面は上半にロクロナデ、下半に縱方向のケズリが施される。甕厚は極く薄い。壺は広口壺で、球形あるいは縦長い球形をした体部をもつ。口縁部はSEK 1 窯のものでは受口状の形態を残していたが、SEK 16窯段階では更に単純化し、わずかに膨みをもたせたものになっている。平底の底部外縁に巡らされる高台部も、断面三角形の極く小さい形式的なものとなっており、接合刺突法の外側に付され、接合刺突法も形式化している。器面は上半にロクロナデ、外面下半に縱方向のケズリ、内面下半に縱方向のヘラナデ、ナデが施されている。小瓶は上半が残存するものであるが、なで肩で、口縁部が外反し、短い口縁が外反する。SEK 16窯段階の年代は不明であるが、Key層である灰白色火山灰層以前で、灰白色火山灰層下に極く近い年代と考えられる。魏ね、10世紀初頭を中心とした年代を考えておきたい。

## ■ SEK 4 窯段階 ■

SEK 4 窯段階の窯跡では、SEK 4 窯(中野・佐藤：1991, 3)、SEK 17 窯が調査されている。いずれも出土遺物が極めて少なく、全容は不明である。SEK 4 窯段階は、Key層とした灰色白火山灰が降下した後に採集されたもので、10世紀前半の年代が与えられるものである。

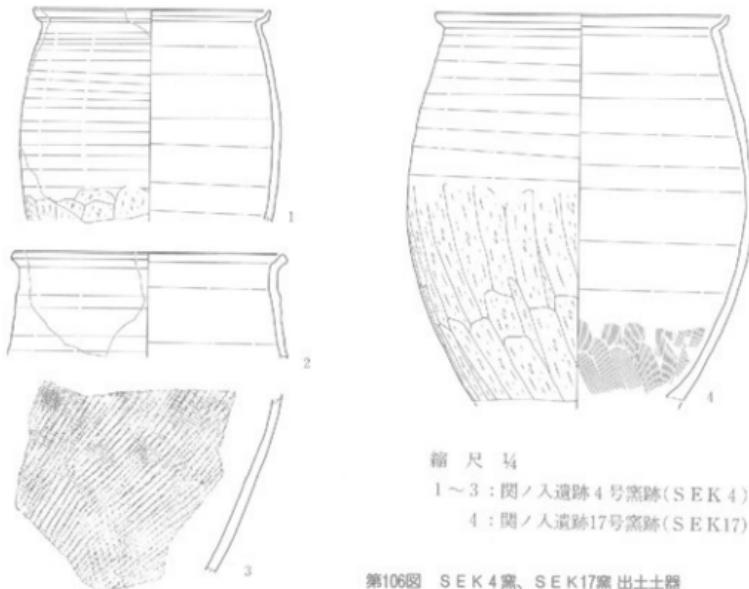
### 【SEK 4 窯】

#### 〔窯跡の概要〕

SEK 4 窯は煙道部、焼成部、燃焼部からなる地下式の窯窯である。規模は全長5.6m、煙道部の長さ0.5m、底面幅0.2~0.4m、焼成部の長さ3.3m、底面幅0.5~1.6m、燃焼部の長さ1.8m、底面幅0.5~0.6mを計る。平面形は両側壁に膨む胴張り形で、燃焼部でくびれて狭くなっている。底面の傾斜角は12°~33°ほどである。使用された床面は3面検出された。燃焼部の斜面下方からは灰原が検出され、灰原形成後に灰白色火山灰が降下し、堆積している。

#### 〔遺物の特徴〕(第105図1~3)

SEK 4 窯からは甕が出土している。遺物量が少なく器種構成は不明である。



第106図 SEK 4 窯、SEK 17 窯 出土土器

甕は長胴形のもの(1～2)と球形のもの(3)がある。長胴形のものは土師器甕と同様の器形で、長胴の体部から短い口縁部が受口状に付くもの(1)と直線的に外傾するもの(2)がある。器面は上半にロクロナデ、下半にケズリが施される。球形のもの(3)は、体部破片のため全容は不明である。外面にタタキ、内面にヘラナデが認められる。

### 【SEK17窯】

#### 【窯跡の概要】

SEK17窯は経道部、焼成部、燃焼部からなる地下式の窯窓である。規模、平面形は、SEK4窯に類似する。床面は1面検出されたが、遺物量は極めて少ない。SEK17窯の斜面下方に位置するSEK16窯燃焼部の堆積上に、SEK17窯の灰層が堆積し、その直下層が灰白色火山灰層となっていることから、SEK17窯は灰白色火山灰降下後に操業されたものと考えられる。

#### 【遺物の特徴】(第105図4)

SEK17窯からは甕が出土している。遺物量が極めて少なく、全容は不明である。甕(4)は長胴形のもので、極く短かい口縁部が受口状に付く。器面は上半にロクロナデ、外而下半にケズリ、内面下半にナデが施されている。

SEK4窯段階の遺物は出土量に乏しく、全容は不明である。出土した土器は、甕のみである。甕は長胴形のものと球形のものがある。長胴形のものは、体部中位に最大径をもつ樽形で、受口状の極く短い口縁部が付く、土師器甕を模したものである。器厚は極く薄い。器面調整も土師器甕同様、上半にロクロナデ、下半にケズリが施されている。SEK4窯段階は、それ以前の段階までに多量にみられた甕が欠落しているため、その検討はできない。その年代は、灰灰色火山灰降下後で、降下した年代に極く近い時期と考えられることから、10世紀前半を中心とするものと考えられる。なお、須江窯跡群内では、終末段階にあたる。

註1. 財團法人福島県文化センター飯村均氏の御教示による。

註2. 同 上

### 4. 各器種における変遷

須江窯跡群の須恵器について各窯跡ごとに紹介し、Ⅲ期、DAI6窯段階～SEK4窯段階の特徴を説明した。その結果をまとめて示したのが第106～109図、第18図である。ここでは各器種ごとにその変遷を整理したい。

#### ・蓋-

蓋には杯蓋、壺蓋と組み合わせの不明な蓋がある。それぞれに存続する時期が異なるが、總じ

ても第Ⅰ期初期段階から第Ⅱ期SEK11窯段階まで残存する。

杯蓋(1~3、16~20、66~69、103)は高台付杯の存続する初期段階から第Ⅱ期間ノ入遺跡第5群土器段階まで続く。宝珠形のつまみをもち、口縁端部の折れ曲がるもので、内面にかえりをもたない。宝珠形のつまみはDAI0窯段階ではバランスの良い丁寧なものであるが、伊治城跡出土土器段階前後には器径に比べて大きいものとなる。天井部は一貫して回転ケズリ調整が施されている。

壺蓋(8、145)は魁須彌の存続する初期段階から第Ⅱ期SEK11窯段階まで続く。SEK11窯段階のものはつまみが大きく、第Ⅱ期伊治城跡出土土器段階から引き離がれるものと考えられる。

その他の壺として、つまみをもたず、口縁端も折れ曲らないものがあり、第Ⅱ期間ノ入遺跡第5群土器段階に出現し、SEK11窯段階まで残存する。闕ノ入遺跡第5群土器段階のもの(104、105)は天井部に回転ケズリや、ケズリ調整が施される。SEK11窯段階になると(142~144)回転糸切り無調整である。

#### 一高台付杯

高台付杯は第Ⅰ期初期段階～第Ⅱ期間ノ入遺跡第5群土器段階までみられ、SEK11窯段階では高台の付く杯は双耳杯のみとなる。DAI0窯段階のもの(4、5)は、体部が直線的に外傾する器形で、厚みのある高台部が付される。DAI1窯段階～伊治城跡出土土器段階のもの(21~28、70~73)は、体部が湾曲する輪形の器形で、薄くシャープな高台が付される。高台の接合面にはロクロ回転を用いた接合沈線が認められる。また、DAI1窯の底部には回転ケズリ再調整が施されるが、伊治城跡出土土器の底部は回転ヘラ切り無調整である。

第Ⅱ期間ノ入遺跡第5群土器段階のもの(82、83)は底径が小さくなり、体部が直線的に外傾する器形で、厚みのある高台部が付される。第Ⅱ期初めが高台付杯の消失時期に位置付けられる。

#### 一杯

第Ⅰ期の杯は、全て回転ヘラ切りを基本としている。DAI1窯では(29~31)法量も分けられ、回転ケズリ、ケズリ再調整の施されるものもある。伊治城跡出土土器のもの(74~80)は回転ヘラ切り無調整で、底径が小さくなっている。

第Ⅱ期の杯は、回転糸切りを基本とし、回転ヘラ切りもわずかに残る。闕ノ入遺跡第5群土器段階～SEK11窯段階では(81、84~101、114~139)器種、法量もバラエティに富んでいる。底部は回転ヘラ切り無調整のもの、回転糸切り後体部下端から底部に回転ケズリ再調整の施されるもの、回転糸切り無調整のものがある。器形は逆台形状を基本としているが、体部の湾曲する輪形のものが出現する。回転糸切り無調整の輪形の杯が第Ⅱ期へ引き継がれ、1器種1法

量となるものと考えられる。口径に対する底径の比は、分類された器種毎に若干の違いはあるが、概ね1:0.55前後である。SEK12窯段階では資料数が乏しいので全容は理解し難いが、杯(158~165)は器高の低いもので、法量は2種に分かれる。底部は回転糸切り無調整である。口径に対する底径の比は、平均で1:51である。

第Ⅰ期の杯は、全て回転糸切り無調整で、1器種1法量に変化するものである。SEK2窯段階では、まだ逆台形状のものと楕円形のものがある。口径に対する底径の比は1:0.46を中心としている。SEK3窯段階では、SEK3窯が逆台形状と楕円形の2種があいまいな状況であるが、その他は楕円形の杯、1器種1法量となっている。この段階から器内面にコテ状工具の使用が開始され、また、底部円柱作り技法が認められるようになる。口径に対する底径の比は概ね1:0.42を中心としている。SEK4窯段階は楕円形の杯1器種1法量で、口径に対する底径の比は1:0.38を中心とする。器厚も薄く薄くなる。SEK16窯段階も楕円形の杯1器種1法量で、口径に対する底径の比は1:0.35~0.31で、器高もやや低くなる。

#### - 双耳杯 -

双耳杯は第Ⅱ期開ノ入追跡第5群上巣段階とSEK11窯に見られるが、量は少ない。

#### - 長頸壺 -

長頸壺は第Ⅰ期から第Ⅲ期まで見られる。第Ⅲ期には頸部高が低くなり広口壺となる。

第Ⅰ期のもの(52~55)は、体部が球形で比較的肩が張るもので、底部が平底で接合沈線の技法による高台部が付される。口縁部は長く、沈線のめぐらされるものもある。口縁部は幅のある丁寧なつくりのものである。体部下半には回転ケズリが施されている。

第Ⅱ期のもの(148~150)は、体部が球形で、平底の底部に高台が付される。長めの口縁部に幅のある口縁部が丁寧につくられている。体部と頸部の境にはリング状突起のめぐらされるものもある。体部下半には回転ケズリ調整が施されている。頸部の接合には2段構成のものと、3段構成のものがある。

第Ⅲ期のもの(232~241, 285~290, 322~327)は、いわゆる広口壺である。体部は球形で、平底の底部に高台が付される。接合面には接合刺突法が用いられている。口縁部はやや器高が低く、口縁は幅が狭く、簡素につくられている。体部下半には外側に綫方向のケズリ、内側に綫方向のヘラナデ、ナデが施されている。SEK3窯の頸部にはリング状突起のめぐらるものもある。細部についてみると、SEK3窯段階~SEK16窯段階にかけて一貫して簡略化していく。口縁部は幅が狭くなり、装飾的要素は消失し、わずかに丸味をもたせたものへ変化している。高台部は断面方形の厚くしっかりとしたものから断面三角形の厚みのないものになり、SEK16窯では形式的なものとなっている。器面調整もタタキメを残しケズリが施されたものからケズリが徐々に難になり、内面は全面クロナデの施されたものから下半に綫方向のヘラナ

デ、ナデが雜に施されるようになっている。また、SEK16窯には大型の広口壺が出現する。

#### －短頸壺－

短頸壺は第Ⅰ期～第Ⅲ期にみられる(9、146～147)。体部が球形で、短かい口縁が直立するものである。底部資料が欠失していることから、その全窯は不明であるが、平底の高台の付されるものと考えられる。壺蓋も同時期に消失している。

#### －小瓶－

小瓶は出土量が乏しい。第Ⅱ期SEK3窯段階に出現し、SEK16窯段階まで残る。

#### －壺－

壺は体部が球形状のものと長胴形のものがある。珠形のものは第Ⅰ期から第Ⅲ期まで一貫してみられる。長胴壺は第Ⅱ期SEK2窯段階、SEK4窯段階に見られる。

第Ⅰ期では比較的大型の壺が焼成されている。底部が丸底のものと平底のものがあるが、後者が多い。口縁部はロクロナデ、体部はタクキ目が残るものが多い。口縁部は幅が広く丁寧で、口頸部にはロクロ回転を利用した波状沈線文が施されるものが多い。体部下半にケズリの施されるものは縦方向の手持ちケズリである。

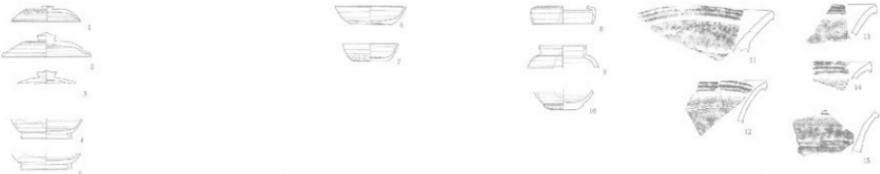
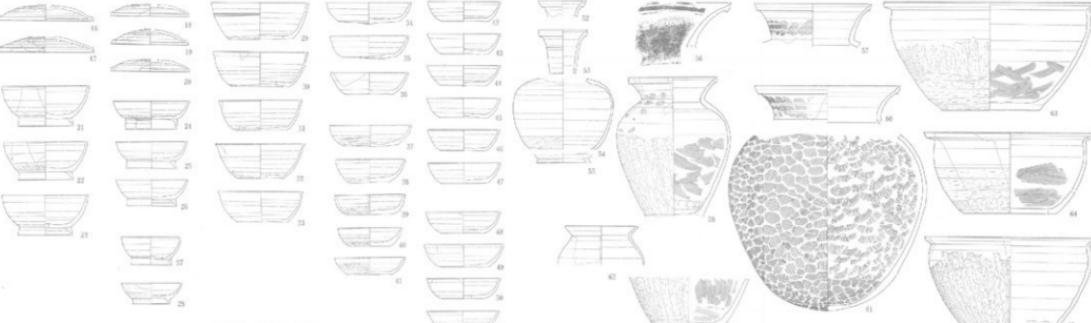
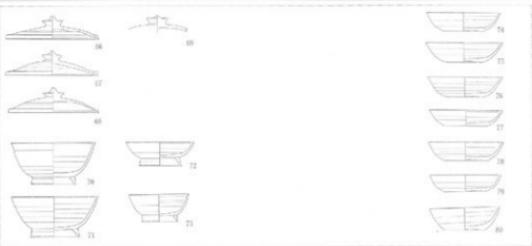
第Ⅱ期では中型品が多い。底部が平底で、体部上半にロクロナデ、下半にケズリが施される。体部中位に沈線のめぐるものが多い。口縁部は厚く丁寧につくられている。口頸部にはヘラ書きの波状沈線文、連続山形文が施されるものがある。器内面には上半に横方向のヘラナデ、下半に縦方向のヘラナデが施される。

第Ⅲ期の壺はSEK2窯段階～SEK16窯段階にかけて、器厚が薄くなり、肩部がなで肩へ変化し、また、口縁部のつくりも徐々に幅が狭くなり、単純化している。器面調整も外面のケズリが雜になり、内面のヘラナデ、ナデも下半部に施される縦方向の雜なものへ変わっている。

長胴壺は土師器壺を模したものと考えられ、器形、技法も当時期の上部器に求められるものであろう。

#### －鉢－

鉢も第Ⅰ期から第Ⅲ期までみられる。器形や技法の特徴は他の器種同様、器厚が薄くなり、単純化の傾向性が認められる。特徴なものに、第Ⅱ期闕ノ入遺跡第5群上器段階の鉄鉢形のものがある。

	D A I O 窯段階		2~5, 8~15: DAIO窯 1, 6, 7: KAW窯
第	D A I I 窯段階		16~65: DAII窯
I	伊 治 城 跡 出 土 土 器 段 階		66~80: 伊治城跡 S I 173住居跡
期			縮尺 1/5

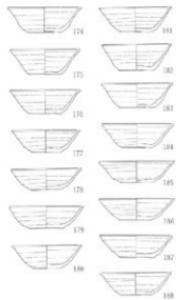
第107図 須江窯跡群の須恵器変遷(案)(1)



第108図 須江窯跡群の須恵器変遷(案)(2)

第

S E K 2 窯段階



174~180, 191 : S E K 2 窯  
181~190, : S E K 10 窯

III

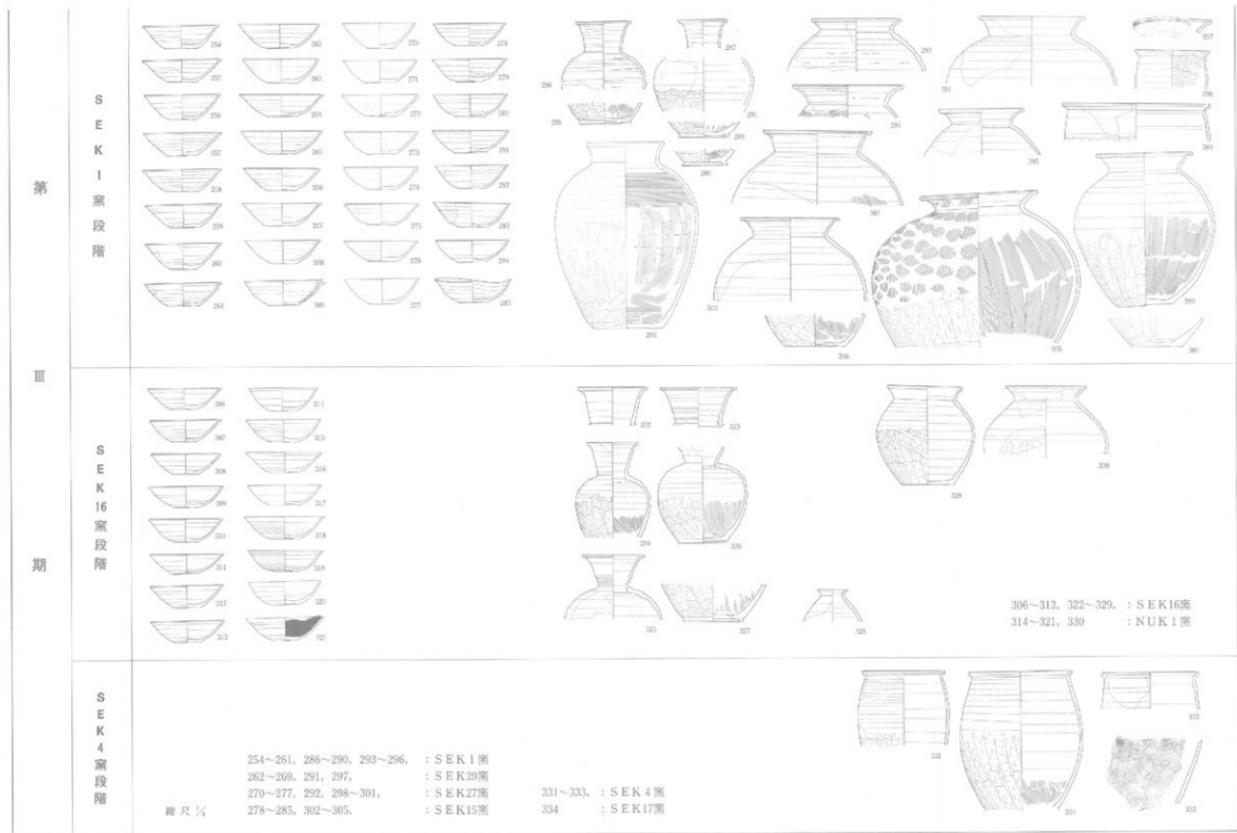
S E K 3 窯段階



192~199, 232~235, 242~244, 251~252, : S E K 3 窯  
208~207, 256~241, 245~247, : D A I 2 窯  
208~215, : S E K 14 窯  
216~223, 248, : S E K 28 窯  
224~231, 249~250, 253~254, : N U K 6 窯



第109図 須江窯跡群の須恵器変遷(3)



第110図 須江窯跡群の須毛器変遷(4)

区分	段階	基盤 構造	跡平面形	出土土器	器の特徴			年代	系名
					縁	杯 (底部)	口径:直徑		
	DAI 0 系・KAW系段階		杯 高台付杯 环形 座蓋 長頸等 須頬臺 甕 鉢						K A W 系 D A I 0 系
第Ⅰ期	D A I 1 系段階	短圓型						8 世紀	D A I 1 系
	伊治崎跡出土土器段階	—	双耳杯						
	横ノ入連跡第5带土器段階	半地下式窯窓 (+外周溝)							
第Ⅱ期	S E K 1 1 系段階	やや 制張型			台形 碗形				S E K 24 系 S E K 11 系
	S E K 1 2 系段階	短圓型			・回転ヘタ切り ・回転矢切り ・回転丸切り +回転ケズリ	1:0.53	二段編成(縁) 二段構成		S E K 12 系
	S E K 2 系段階	長圓型				1:0.50		9 世紀	S E K 10 系 S E K 2 系
	S E K 3 系段階	—				1:0.46	接合刺突(縁) コテ状工具(縁)		S E K 3 系 S E K 14 系 S E K 28 系 N U K 6 系 S E K 1 系 S E K 15 系
第Ⅲ期	S E K 1 系段階	地下式窯窓		小瓶	台形 o r 碗形 ・回転糸切り	1:0.42			S E K 29 系 S E K 27 系
	S E K 1 6 系段階	調張型			・輪形	1:0.38			S E K 16 系 N U K 1 系
	S E K 4 系段階					1:0.35		10 世紀	《灰白色火山灰灰下》 S E K 4 系 S E K 17 系

図17 琵琶湖群の須恵器変遷(表)

### ○接合沈線と接合刺突について

高台付杯や壺の付け高台、蓋のつまみの接合面には、接合の密着性を強化するために施された技法が観察されている。

接合沈線は接合面にロクロ回転を利用した2条、あるいは3条の同心円状の沈線をめぐらせたもので、第Ⅰ期DAI1窯段階～伊治城跡出土土器段階の高台付杯、壺、蓋に認められた。高台部におけるロクロ回転を利用した同心円状接合沈線の技法は、陶邑窯での須恵器定型化以後のTK208型式以後に高杯において観察されている(田辺昭三：1966.4、菱田哲郎：1992.12)。「この同心円状の接合沈線は、地方窯の製品でも見ることができ」、工人の系譜を捉える属性としてみることができる。DAI1窯製品で観察して以後、他遺跡出土の遺物についても観察するよう心がけているが、工具の違いこそあれ、少なからず他の遺跡のものにも観察することができた。しかし、宮城県内のものではDAI1窯のものほど深くて明確な接合沈線をもつものではなく、DAI1窯の特徴として捉えることができる。また、DAI1窯出土土器に近似する伊治城跡SII73住居跡須恵器杯・類、蓋<sup>1</sup>・皿類、高台付杯<sup>2</sup>・A、NA類のまとまりのうち、高台付杯の接合面にも同様の深く明確な接合沈線が施されており、器形、技法の類似性に加えて接合沈線の属性からも、両者が同一技術系譜の所産であると考えられる。須江窯跡群における接合沈線技法は第Ⅰ期のみにかぎられ、第Ⅱ期の製品には認められない。第Ⅰ期と第Ⅱ期の間は、器種構成、器形、技法共に異なり、画期として捉えることができる。接合沈線の消失も画期を補強する要素のひとつに加えられる。この画期の要因は回転糸切り技法を作り技術集団<sup>3</sup>の移入によるものと考えられる。

接合刺突は壺の付け高台接合面に認められるもので、角柱状の工具によって接合面に刺突をめぐらすものである。第Ⅱ期SEK3窯段階以降の製品に施される。秋田県、青森県などの須恵器壺の底部に観察される菊花状調整痕とは異なり、明らかに接合時の密着性を高めるための刺突が、接合前段階に施されたものである。

接合沈線や接合刺突の技法は、その属性の観察から工人の技術系譜、あるいは生産地と消費地を特定することができる指標となる可能性をもっている。

### ○コテ状工具痕について

壺の内面に観察されたコテ状工具痕は第Ⅲ期SEK3窯段階以降に認められる。宮城県内の須恵器壺無高台碗内面へのコテ状工具使用については、小川淳一氏が問題提起している(小川淳一：1987.3)。コテの使用は灰釉陶器碗、皿の内面に施された調整技法で、黒窓14号窯式に始まり、古代寺窯式まで続く(前川要：1984.3)。本窯跡群での使用開始時期の年代観も矛盾しない。コテ状工具の使用は、その当て具による器形成形に影響を及ぼし、須恵器壺の変遷過程を

捉える上で指標になる可能性をもっている。さらに、その系譜の追求によって技術・流通の社会的意義が問われることになろう。

#### ○須江窯跡群変遷案の年代的位置について

須江窯跡群を2つの時期をもとに、3期11の各段階に分けて考えた。しかしながら、その実年代を知り得る資料は無く、相対年代を軸とした。細部については多分に検討を要するものと考える。また、消費地との比較から、年代観を再検討しなければならない。

奈良時代～平安時代の須恵器窯を軸とした変遷にはいくつかの論がある。須江窯跡群の須恵器窯を含めて検討されているものに、小川淳一氏の論(前掲)、村田見一氏の論(村田見一:1992, 8)があり、本窯跡群変遷案の年代観とは若干の相違が認められる。この相違は、技術的系譜等に起因する各窯跡群変遷過程の相違によるものと考える。例えば多賀城の官窯とされる台ノ原小田原窯跡群では、杯の切り離し技法をみると、回転ヘラ切り技法が9世紀中葉～後半まで続き、五本松窯前後の時期に回転糸切り技法を伴う輪形杯が出現している。須江窯跡群では、8世紀末葉に既に回転糸切り技法が導入され、輪形杯が出現している。こういった技術的相違は器形の特徴(体部外傾度や口径・底径比等を含む)に影響し、単純に比較することを困難にすると考える。したがって、先ず、各窯跡群の変遷過程を検討し、相互に他地域のものと比較しなければならないであろう。

註1：篠原町教育委員会の御町意により実見させていただき、宮城県教育厅文化財保護課高島逸夫氏、篠原町教育委員会千葉長彦氏には有益な御教示をいただいた。

註2：DA I I 窯と伊治城S I 173件出土の須恵器杯丁類、蓋I・皿類、高台付杯I A・II A類の具体的なつながりは明確ではないが、いくつかのケースを想定することができる。ひとつは、DA I I 窯の人が、時間を越えて技法の概素化によりながら、須江窯跡群内で生産し、伊治城へ運ばれた可能性。あるいは、DA I I 窯の人が須江窯跡群を離れて他の地域で生産し、伊治城へ運ばれた可能性。または、DA I I 窯と同じ系譜の人が他の地域から来て、生産した可能性などである。いずれにせよ、その検証は、窯跡の発見を待たなければならぬであろう。

ところで、栃木県伊治城は行政区に属する須江窯跡群の北西約40kmに位置する。伊治城跡に供給されている丸や瓦器の多くは、伊治城跡に比較的近い窯跡から供給されたものと考えられるが、須江窯跡群の技術、あるいは製品が供給されたと考えると、両者の密接な関係が予想される。「統日本紀」によれば、社鹿連一族の消息氏が伊治城攻囲にも渡邉的に関与しており、また壬午1年(780)伊治城を廢帝の反乱で社鹿連大和道島大輔が攻撃していることからも伊治城と社鹿連の関係の深さを認めることができる。伊治城への須江窯跡群の製品もしくは工人(技術)の供給あるいは移入があつても不思議ではない。

なお、実見していないが、社鹿連術、あるいは社鹿連と考えられている矢本町赤井遺跡からも縦合洗線技法の認められる遺物が出土している(三宅宗廣:1973.5, 1973.8)。

註3：SE K II 窯の製品に類似する資料は、秋田県富士沢窯の中に認められる。秋田県埋蔵文化財センター・高橋学氏の御教示。実見。

## VI. 検出された遺構の検討

今回の調査で本遺跡から検出された遺構としては窯跡、住居跡、掘立柱建物跡、焼上遺構、土塁がある。ここでは各遺構ごとにその特徴や問題点について触れてみたい。

### 1. 窯跡

須恵器を焼成した窯跡は、SEK27、SEK28、SEK29窯の3基検出された。その年代はSEK28窯が須江窯跡群第Ⅲ期SEK3窯段階、SEK27・SEK29窯が第Ⅳ期SEK1窯段階で、概ね前者が9世紀後半、後者が9世紀末葉を中心とする頃と考えた。

SEK28窯は焼成部、燃焼部からなる地下式の窯窓である。焼成部は長さ2.64m、幅1.22m、傾斜角25°～34°である。平面形は胴張り形で、燃焼部の境で狭くくびれる。浅い外周溝が巡る。

SEK27・SEK29窯は爐道部、焼成部、燃焼部からなる地下式の窯窓である。焼成部は長さ3.40m前後、幅1.50m前後、傾斜角24°～40°前後である。平面形は胴張り形で、燃焼部の境で狭くくびれる。

検出された3窯とも、小規模の窯である。須江窯跡群の窯構造は、9世紀中葉のSEK2窯段階以降、地下式窯窓となる。硯沢窯跡にみられた8世紀中葉の地下式窯窓と比較すると、SEK27、SEK28、SEK29窯は、急斜面の地形を利用し、T人1人がようやく這って入る程浅く、狭く、小規模なもので、高密度、高温を求めるため、地形を利用して床面の角度を急にした窯構造の単純化、簡素化ともいえる。

SEK27、SEK28、SEK29窯は須恵器焼成および窯出し後に廃棄されたもので、窯詰の状況には詳細には不明であるが、残された遺物の出土状況から推察することができる。遺物の大半は环が占めており、甕や壺は少ない。出土位置は、原位置を保っていないものが多いが、焚口部付近に甕、壺があり、焼成部中位から窯底までは环のみが出土していることから、焚口部に近いところから中形甕、窯底に進むにつれて小形品の环が配されたものと推察される。环は、床面に口縁部を一部欠いた環を伏せた状態で突き刺し焼台とし、その上に数個の环を伏せて重ね置くという窯詰方法を行っている。この窯詰方法はSEK2窯段階以降、須江窯跡群終末段階に近いSEK16窯段階まで継続されている。なお、窯詰の具体的な状況は、関ノ入遺跡住宅跡地造成区域から検出されたSEK20窯の検出状況が理解し易い。今後刊行される報文を参照されたい。

### 2. 住居跡

今回の調査では13軒の堅穴住居跡(37号～49号住居跡)が検出された。それぞれの住居跡の所

属年代は前項で検討したように、第1群～第5群土器に分けられる。ここでは、分類された上器群を段階として捉え、各段階毎にその特徴や問題点について触れてみたい。

### 第一群上器段階(46号住居跡)

第一群土器段階の住居跡は46号住居跡1基のみである。

46号住居跡は丘陵頂部平坦面に立地する、長軸2.84m、短軸2.30mの小規模な隅九方形の住居跡である。床面は平坦で周溝をもたず、地床戸が付設されている。本遺跡周辺での発掘調査では、同時期の住居跡は須江櫛塚遺跡、石巻市田道町遺跡(芳賀・佐々木・岡:1992.3)から検出されている。須江櫛塚遺跡は本遺跡と同じ須江丘陵の北端に位置しており、丘陵頂部平坦面から7軒の住居跡が検出されている。いずれも方形を基調とするものであるが、一辺6m前後での規模で、周溝をもっており、本遺跡のものとは異なる特徴をもっている。田道町遺跡は砂堤に立地するものであるが、1辺3m前後の方形を基調とするもので、本遺跡のものに類似する。本遺跡内では資料数が乏しいことから、具体的な内容については不明とせざるをえない。

### 第二群土器・第三群土器・第四群土器段階

第二群土器段階(41号住居跡)、第三群土器段階(37号、38号、39号、44号住居跡)、第四群土器段階(43号?45号、47号?住居跡)の住居跡は、丘陵頂部平坦面から緩斜面、急斜面へと、徐々に移動している。その規模も第二群土器段階では5.50m前後、第三群土器段階では4m前後、第四群土器段階では3m前後と、徐々に規模が縮少する傾向にある。カマドはいずれも北壁に付設されている。また、明確な主柱穴が検出されたのは第二群土器段階の41号住居跡のみで、その他の住居跡からは、帖床除去後も検出されなかった。なお、41号住居跡から外周溝が、38号、39号、43号、44号、45号住居跡から外延溝が検出されている。

### 第五群土器段階

第五群上器段階(40号、42号、48号、49号住居跡)の住居跡は丘陵急斜面に立地する。規模は1辺4~5m前後の方形である。いずれも周溝、カマドをもつものである。カマドは北壁に付設されたもの(49号住居跡)、東壁に付設されたもの(42号住居跡)、西壁に付設されたもの(40号、48号住居跡)があり、統一されていない。42号、48号住居跡の斜面下方側は、山表上の土に土盛りし、敷地して壁をつくっている。なお、40号、48号、49号住居跡からは外周溝が、40号住居跡からは外延溝が検出されている。また、出土遺物では須恵器の量が極めて多く、須江窯跡群第Ⅰ期の須恵器工人との関係がうかがえる。さらに須恵器蓋の天井部に認められた「佛」の墨書き文字や、土師器多口瓶(壺)、須恵器鉢などの遺物から、一概集落というよりは、仏器の出土

から考えると、村落と寺院の嫌な、寺院關係の築造の可能性が考えられる。今後、周辺の調査による検証が必要であろう。

#### ○外縫溝、外周溝について

今回の調査では35号、39号、40号、43号、44号、45号住居跡から外縫溝が検出されている。本遺跡の過去でも5号、10号、12号住居跡から検出されており、計9軒にのぼる。同様な施設をもつ住居跡は、宮城県内に42、柴崎町大塙山遺跡(阿部・赤沢: 1983.3)、岩石1遺跡(三宅・佐藤ほか: 1977.3)、下藤沢1遺跡(阿部・赤沢・佐藤: 1988.3)、長者原1遺跡(柴崎町教育委員会: 1986.12)、古川市藤原1遺跡(加藤・佐藤: 1980.3)、宮沢遺跡(斎藤・藤原: 1985.3)、免成町佐野遺跡(平沢・手塚: 1990.3)、田尻町天狗堂遺跡(佐藤・手塚: 1978.3)、八幡遺跡(小村田進也: 1991.3)、金輪神遺跡(小村田・琵琶: 1992.3)、松山町次浜塚跡(渡邊・山田ほか: 1983.3)、大和町中塩1遺跡(菊地次夫: 1988.3)、河南町猪江1遺跡(高橋・阿部: 1987.3)、代官山遺跡(伏見猛幸: 1993.3)、松島町山下遺跡(菊地次夫: 1982.3)、利府町八幡町B遺跡(尾子教: 1988.3)、鹿央遺跡(菊地次夫: 1990.3)、多賀城市多賀城跡(宮城県多賀城跡調査研究所: 1974.3、1992.3)、仙台市猪江1遺跡(渡邊・船越ほか: 1986.3)、上手内遺跡(熊谷裕男: 1989.12)、七ヶ所町小柴川遺跡(新庄里・眞山: 1985.3)、喜連町宮前遺跡(丹羽茂: 1983.3)、元十三間堂遺跡(佐藤則之: 1988.3)、山元町合意原遺跡(伊見和添: 1991.3)などで検出されており、近年、その調査例も増加している。その機能については大塙山遺跡報告文で検討されているとおり、直面に堆積している砂や鉢脚の髪跡、さらには住居内の周溝に接続していることから、「住居内に浸透してきた自然水を貯蔵、および排水を経て住居外に導き出す排水施設」(阿部・赤沢: 前掲)と考えられる。

また、43号、41号、48号、49号住居跡から外周溝が検出されている。本遺跡の過去の調査でも12号住居跡から検出されており、計3軒にのぼる。同様な施設をもつ住居跡は、宮城県内では巣崎町入塙山遺跡、古川市宮沢遺跡、松島町山下遺跡などから検出されている。外周溝の機能・性格についても大塙山遺跡報告文で検討されており、「住居よりも標高の高い所にめぐらされていることを考えると、むしろ高所から住居跡に向って流れ落ちてくる雨水等の水分をこれで受け止め、かつ住居跡の両側に水分を導いた上で溜し落とすといった防水効果を意図したものではあるまいか」(阿部・赤沢: 前掲)と考えている。外縫溝および外周溝の具体的比較は、馬の瀬丘に集成したいと考えている。

### 3. 掘立柱建物跡

掘立柱建物は丘陵頂部から1棟検出された。1号掘立柱建物跡は3間(7.5m)×2間(3.7m)の建物跡である。柱の掘り方は25cm前後の隅丸方形である。年代については、遺物が出土しなかったため特定できないが、遺物跡の周辺および今回の調査範囲からは、中世・近世の遺物は全く出土しなかったことから、古代・第2群～第6群土器段階に所属するものであるという可能性が考えられる。

### 4. 壁穴遺構

壁穴遺構は3号、4号、5号、6号、7号壁穴遺構の5基検出された。いずれも斜面下部が削平されており、全容は不明である。一辺5～12m前後の壁穴に4つのピットが一列に並ぶものである。この壁穴遺構は、本遺跡の位置する須江蒸跡群内から検出されている。須江蒸跡遺跡(高橋・阿部：1987.3)では第1、第2、第3壁穴遺構が検出されているが、年代、性格共に不明である。代官山遺跡(佐藤敏幸：1993.3)では1号、2号壁穴遺構が検出されており、堆積土上に10世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰が認められ、概ね古代のものと考えられる。また、その性格は不明である。本遺跡で検出されている壁穴遺構も、堆積土から古代のものと考えられるが、その性格は不明といわざるをえない。年代の限定できるものは、7号壁穴遺構で、第5群土器段階に属するものである。隣接する48号、49号住居跡と同時期のものであることから、両住居に關係する施設と思われるが、具体的には言及できない。作業場、あるいは工房的な性格をもつ可能性を想定しておきたい。

### 5. 燃土遺構・土壤

焼上遺構は、86号、87号、88号、89号、90号、91号、92号、93号、94号、95号、96号、97号、98号燃土遺構の計13基検出されている。平面形は大部分、隅丸の正方形、または長方形を基本とするものである。燃土はいずれも自然流入土であるが、その初期堆積土には炭化物や焼土が含まれている。この種の遺構は宮城県内の多くの遺構から検出されている。とりわけ、本遺跡の過去の調査では85基、隣接する代官山遺跡では7基、須江蒸跡遺跡では1基の焼上遺構が検出されているものの、その性格については未だに明確ではない。堆積土に灰白色火山灰を含むものが多くみられることから、その多くは古代に属するものであろう。

上塙は、5基検出されている。これらの大半は燃土遺構同様、その性格については不明なものである。

## VII. まとめ

### 1. 須江窯跡群について

1. 須江窯跡群は、石巻海岸平野に位置する独立丘陵、通称須江丘陵に位置している。須江丘陵は、南北約4.5km、東西約1.3kmの規模で、各地から瓦・須恵器の窯跡が発見されており、丘陵全体を窯跡群として捉えることができ、これを須江窯跡群と称する。
2. 須江窯跡群では、現まで40基の須恵器窯が発見されているが、そのほとんどが発掘調査によって検出されたもので、群衆な分布調査を実施すれば、その数は100基を超えるものと考えられる。東北地方でも屈指の、とりわけ陸奥海道地方では最大の窯跡群といえる。
3. これまでの調査によって、須恵器窯30基をはじめ、粘土採掘坑跡、土礫、工人集落などの須恵器生産に関する多款の遺構が検出され、粘土採掘から焼成までの須恵器生産体制を総合的に捉えられられてきている。
4. 須江窯跡群は8世紀中葉～10世紀前半にかけて操業されたもので、3期11段階に分けられた。
5. 須江窯跡群は、位置と生産された瓦の供給関係から、奈良時代には古代牡鹿郡に属していたものと考えられる。古代牡鹿郡は現在の石巻市、桃生郡、牡鹿郡を中心とした地域と考えられている。「続日本紀」によれば、牡鹿郡では天平勝定5（753）年、牡鹿郡人丸子牛麻呂、豊島、鶴足ら25人が牡鹿城の姓を賜わったのが牡鹿郡の初見であるが、天平14（742）年、黒川以北の一十郡にも含まれると考えられることから、8世紀前半には郡都されていたものと思われる。牡鹿郡はそれよりも先、天平9（737年）、多賀幡らとともに記載されている。桃生郡は天平宝字2（758）年頃、牡鹿郡から分けて郡都されたもので、もともと牡鹿郡域であった。牡鹿連鶴足は上京し、藤原仲麻呂のもとで武人として名を得、天平宝字8（764）年、仲麻呂が反乱をはかった時、鶴足は仲麻呂追討軍に加わって功をあげ、牡鹿宿禰の姓を与えられ、間もなく道嶋宿禰となつた。陸奥国では道嶋宿禰三山が実力を發揮し、伊治城造営を推進して功をあげており、神護景雲1（767）年、道嶋宿禰鶴足が陸奥國大内造、三山が國造になっている。宝亀11（780）年伊治公若麻呂の乱により、紀広鏡と牡鹿郡大領道嶋大膳が殺害されている。その後、延暦8（789）年以後、道嶋御権が陸奥鎮守府軍監、陸奥國大内造、征夷副將軍、陸奥鎮守府副將軍となり、驛置する。
- 須江窯跡群が操業を開始した8世紀中葉は、丸子氏が牡鹿連の姓を賜わった前後頃である。ほどなく牡鹿郡から分かれて桃生城が造営されるが、須江窯跡群で生産された瓦は桃生城へは供給されていないことから、桃生郡が郡都されてもなお、須江窯跡群は牡鹿郡に

属していたものと考える。また、須江窯跡群第Ⅰ期DAI1窯の製品に近似する土器が、本窯跡群の北西約40km離れた栗原郡篠鶴町に所在する伊治城跡から出土している（伊治城跡出土上器段階）ことは、伊治城造営の中心人物が道嶋宿禰三山であることからも密接な関係を認めることができよう。伊治城への須江窯跡群の製品もしくは工人（技術）の供給あるいは移人があっても不思議ではない。須江窯跡群第Ⅱ期は、伊治公啓麻呂の乱後頃に当たり、道嶋足平去（780年）後、三島御権の躍進する頃であろう。

須江窯跡群の製品は、現在のところ牡鹿郡衙あるいは牡鹿柵に擬定されている矢本町赤井遺跡に供給されていることが判明しているが、その他について周辺の遺跡の調査が進んでいないこともあり、不明なところが多い。須江瓦山窯跡で生産された瓦は、国府多賀城や近隣の桃生城には供給されていないことから考えると、律令制のもと、牡鹿郡を中心に供給することを目的とした、一郡一窯的な位置付けを想定させる。その生産の背景には道嶋氏の存在が考えられ、米、塩、鉄などと共に道嶋氏の経済的基盤のひとつになった可能性も考えられる。

6. 今後、調査がすすむと、地方の須恵器生産体制の具体的様相が捉えられ、技術的系譜、製品の流通を通して古代牡鹿郡や陸奥国の歴史が明らかにされていくものと考える。

## 2. 関ノ入遺跡について

1. 関ノ入遺跡は、石巻海岸平野に位置する独立丘陵、通称須江丘陵の南部東端に位置している。須江丘陵は、丘陵の各地から丸・須恵器の窯跡が発見されており、全体を窯跡群として捉えることができ、これを須江窯跡群と称する。関ノ入遺跡はこの須江窯跡群内に所在している。今回の調査では、平安時代の窯跡3基、古墳時代の住居跡1軒、奈良時代～平安時代の住居跡12軒、古代の掘立柱建物跡1棟、竪穴遺構5基、焼土遺構13基、土壙3基の各遺構と多数の遺物が出土した。

2. 須恵器窯は急斜面に構築された小規模な地下式窯窯である。製品には壺、甕、壺があり、壺が主体を占める。その年代は、SEK28窯が須江窯跡群第Ⅱ期SEK3窯段階の9世紀後半頃、SEK27、SEK29窯は同第Ⅲ期SEK1窯段階の9世紀末葉の年代が考えられる。

3. 住居跡は古墳時代前期塙釜式期のもの1軒と奈良～平安時代の圓分寺下層式～表杉入式期のもの12軒が検出されている。

塙釜式期の住居跡は、1辺が2.5m前後の方形を基調とする小規模なものである。丘陵頂部平坦面に位置し、床面には地床炉が付設されている。

圓分寺下層式～表杉ノ入式期の住居跡は、丘陵頂部付近の緩斜面から徐々に急斜面に移

動している。その規模も、1辺5.5mの方形を基調とするものから、1辺4m四方、1辺3m四方のものへ縮少されている。カマドも、古い段階では北側に付設されていたものが、第5群土器段階では不定方向に変化している。その他の付属施設に、外周溝と外堀溝がある。いずれも排水施設と考えられている。

4. 第5群土器段階の遺物は須恵器が多く、須江窯跡群内に位置するという地理的条件を反映している。また、遺物の中には、「佛」の墨書き土器や鉄鉢形須恵器、土師器多口瓶などの仏器が出上している。これらの遺物から推察すると、第5群土器段階の住居跡は一般集落というよりは寺院に関係する集落である可能性が考えられる。今回の調査区に隣接する長者館跡は、1辺80m前後四方の方形の区画を土壙状の遺構と溝状の遺構がめぐらしている。溝状遺構は断面逆台形状、上端幅2.5m程度の大規模な区画溝で、堆積土には10世紀に降下したと考えられる灰白色火山灰が検出されており、概ね古代のものと考えられる。今後、須江窯跡群や関ノ入遺跡と長者館跡との関係の解明が期待される。
5. 今後、関ノ入遺跡ばかりでなく、須江丘陵全体を通じた総合的な調査研究が必要となるであろう。

## 引用文献

- 阿部・赤沢（1983.3）：「人境山遺跡」『鶴峰町文化財調査報告書』第4集 鶴峰町教育委員会
- 阿部・赤沢・佐藤（1988.3）：「下藤沢II遺跡」『瀬鉢村文化財調査報告書』第6集 瀬鉢村教育委員会
- 柏原淳一（1986.3）：「小梁川遺跡遺物包含層土器編」『宮城県文化財調査報告書』第117集 宮城県教育委員会
- 伊東信雄（1957.3）：「古代史」『宮城県史』第1巻 宮城県
- 石川俊英（1990.3）：「市川横遺跡・平成元年度発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第21集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
- 岩見・佐藤（1991.3）：「合戦原遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第140集 宮城県教育委員会
- 氏家和典（1957.3）：「東北上面器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- （1961.3）：「土器」『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』 宮城県教育委員会
- （1967.9）：「陸奥国分寺跡出土の九底杯をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
- 岡田茂弘ほか（1970.3）：「日の出山跡群一帯文化財緊急調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第22集 宮城県教育委員会
- 小川厚一（1987.3）：「五木松塗跡 都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第99集 仙台市教育委員会
- 小野寺洋一郎（1979.8）：「五輪C遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第61集 宮城県教育委員会
- 小山・竹原（1987.1）『新版摩耶土色帖』日本古色研究事業株式会社
- 角田市教育委員会（1979.3）：「角田市の文化財遺跡・遺物」第9集 角田市教育委員会
- 加藤・阿部（1980.9）：「綾音沢遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第72集 宮城県教育委員会
- 加藤・佐藤（1980.3）：「藤星雲遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第63集 宮城県教育委員会
- 加藤孝（1954.7）：「塩釜市表杉ノ人貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』V 宮城学院女子大学
- （1956.3）：「陸前高太松原貝塚の研究」その（一）、その（二）『宮城学院女子大学研究論文集』9、10 宮城学院女子大学
- 菊地逸夫（1982.10）：「山下遺跡・松島有料道路関連調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第287集 宮城県教育委員会
- （1985.3）：「中峠A遺跡－中峠遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第108集 宮城県教育委員会
- （1990.3）：「利府町葛原遺跡II」『宮城県文化財調査報告書』第134集 利府町文化財調査報告書 第5集 宮城県教育委員会、利府町教育委員会
- （1991.3）：「伊治城跡」『築館町文化財調査報告書』第4集 築館町教育委員会
- 熊谷幹男（1989.12）：「土手内遺跡－平成元年度宮城県内発掘調査成果発表要旨」
- 小川川和夫（1981.3）：「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第78集 宮城県教育委員会
- 小井川・手塚（1978.3）：「櫻塚遺跡－宮城県文化財緊急調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第53集 宮城県教育委員会
- 小村田達也（1991.3）：「八幡遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第140集 宮城県教育委員会

- 小村田・窪田（1992.3）：「須勢神遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第150集 宮城県教育委員会
- 佐藤・伏見（1965.3）：「古川市宮代遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第105集 宮城県教育委員会
- 佐藤敏幸（1991.2）：「須江室跡群の概要」「第17回古代城柵官衙遺跡検討会資料」 古代城柵官衙遺跡検討会  
（1991.3）：「御邊殿遺跡－発掘調査報告書－」「河南町文化財調査報告書」第5集 河南町教育委員会
- （1992.2）：「須江室跡群闇ノ入遺跡、代官山遺跡」「第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料」 古代城柵官衙遺跡検討会  
（1993.3）：「須江室跡群代官山遺跡－奈良、平安時代の須恵器生産地－」「河南町文化財調査報告書」第6集 河南町教育委員会
- 佐藤・手塚（1978.3）：「天狗堂遺跡」「由尻町文化財調査報告書」第1集 由尻町教育委員会
- 佐藤信行（1973.3）：「榮町屋嘉倉貝塚調査報告」
- 佐藤則之（1988.3）：「三十二間堂遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第127集 宮城県教育委員会
- 佐藤延一（1986.11）：「六板碑」「わがまち河南の文化財」 河南町教育委員会
- 志間・桑月（1991.11）：「宝ヶ峯」「財団法人齊藤報恩会編」「財団法人齊藤報恩会
- 清水東四郎（1924.12）：「中山櫛塚（津景山）（桃生郡史跡）」「宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書」2
- 庄子教（1988.3）：「八幡崎B遺跡」「利府町文化財調査報告書」第4集 利府町教育委員会
- 庄司忠一（1991.3）：「御監護守齊藤家文書について」「河南町文化財調査報告書」第5集 河南町教育委員会
- 白鳥良一（1980.3）：「多賀城跡出土上野の変遷」「研究紀要」VI P. 1~35 宮城県多賀城跡調査研究所
- 新庄景・真山（1985.3）：「小梁川遺跡一七」「宮城県文化財調査報告書」「宮城県文化財調査報告書」第107集 宮城県教育委員会
- 鈴木省三（1924.12）：「中山櫛」「宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書」1
- 鶴峰町教育委員会（1988.12）：「長者原II遺跡－昭和63年度宮城県内発掘調査成果発表会発表要旨」
- 外山政子（1987.3）：「瓶について－平安時代の瓶を中心にして－」「研究紀要」4 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高食・施（1983.3）：「市川横須賀調査報告書」「多賀城市文化財調査報告書」第4集 多賀城市教育委員会
- 高橋・阿部（1987.3）：「須江櫛塚遺跡」「河南町文化財調査報告書」第1集 河南町教育委員会
- 瀧沢・神戸・久保田（1984.3）：「石巻地域の地質」「地域地質研究報告」通商産業省工業技術院地質調査所  
印辺昭三（1966.4）：「陶邑古窯址群」「研究論集」第10号 平安学園
- 東北学院大学考古学研究部（1976.7）：「安東寺中岡瓦窯跡発掘調査報告」「墨故」特集号
- 仲田茂司（1993.3）：「東田古代の後物－土器における土器との補完関係」「考古学研究」第39卷第1号  
考古学研究会
- 中野・佐藤（1990.3）：「須江闇ノ入遺跡－工業団地造成に伴う発掘調査報告－」「河南町文化財調査報告書」  
第4集 河南町教育委員会
- 猪崎・森川・斎藤（1978.3）：「愛知県日進町折戸80号窑発掘調査報告書」日進町教育委員会
- 西弘壽（1982.3）：「土器様式の成立とその背景」「考古学論叢」小林行雄博士古希記念論文集
- 丹羽義（1983.3）：「宮前遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第96集 宮城県教育委員会  
（1985.3）：「今宿野遺跡」「宮城県文化財調査報告書」第104集 宮城県教育委員会

- 丹羽・阿部・小野寺（1982.3）：「勝負沢遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ－」『宮城県文化財調査報告書』第83集 宮城県教育委員会
- 丹羽・小野寺・阿部（1981.3）：「清水沢跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書V－」『宮城県文化財調査報告書』第77集 宮城県教育委員会
- 丹羽・柳田・阿部（1974.3）：「西野田遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書I－」『宮城県文化財調査報告書』第35集 宮城県教育委員会
- 芳賀・佐々木・岡（1992.3）：「田道町遺跡－A地点発掘調査概報」『石巻市文化財調査報告書』第4集 石巻市教育委員会
- 桑田哲郎（1992.12）：「須恵器生産の歴史と工人の動向」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会
- 平沢・土原（1990.3）：「佐野遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書II－」『宮城県文化財調査報告書』第63集 宮城県教育委員会
- 藤沼・小井川はか（1989.3）：「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25 東北歴史資料館
- 前川要（1984.3）：「猿田彦における灰陶器生産最末期の諸様相－仙台市古代守窯出土遺物を中心として－」『研究紀要』Ⅱ 仙台市歴史民俗資料館
- 松本彦七郎（1919.5）：「陸前国宝ヶ半遺跡の分層的小堀塚成積」『人類学雑誌』34の5
- 松真山悟はか（1987.3）：「鏡沢・大沢跡はか」『宮城県文化財調査報告書』第116集 宮城県教育委員会
- 宮城県教育委員会（1988.1）：「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第125集 宮城県教育委員会
- 宮城県多賀城跡調査研究所（1971.3）：「多賀城跡－昭和45年度発掘調査概報－」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』
- 三宅宗謙（1970.3）：「奈良時代の牡鹿郡に関する予察－牡鹿郡と郡域をめぐって」『宮城県石巻工業高等学校研究集録』第1集
- （1973.5）：「第二編古代」『矢本町史』第1巻 矢本町
- （1973.8）：「矢本町赤井字星場出土のへら書き土器」『石巻地方の歴史と民俗－宮城県石巻工業高等学校創立10周年記念論集』
- 二宅・佐藤はか（1977.3）：「がんげ跡－平安時代の堅穴遺構－」『御峰町文化財調査報告書』第1集 鶴ヶ峰町教育委員会
- 三宅・進藤・辰木（1987.3）：「赤井遺跡第1次発掘調査報告」『矢本町文化財調査報告書』第1集 矢本町教育委員会
- 村田亮一（1988.3）：「宮城県黒川郡人衝墓跡群」『東北歴史資料館研究紀要』第14巻 東北歴史資料館
- （1992.8）：「多賀城周辺の奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会
- 森貢吉（1982.1）：「水入遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第84集 宮城県教育委員会
- 八木・千田（1979.3）：「太田方八丁遺跡」盛岡市教育委員会
- 山野・牛江（1989.3）：「史跡豊日守跡IV」磐梯町教育委員会
- 結城慎一（1981.3）：「陸奥国宮室跡群IV－仙台市安養寺下築跡の検討」『研究報告書』第6号 古築跡研究会
- 渡邊泰伸（1992.3）：「仙台市安養寺下築跡－第5・6次調査概報－」『仙台育英学園高等学校研究紀要』7 仙台育英学園高等学校
- 渡邊・山田はか（1983.3）：「宮城県志田郡松山町次橋原惠器窯跡発掘調査報告」『松山町文化財報告書』第1集 松山教育委員会
- 渡邊・結城はか（1980.3）：「折江遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告』第18集 仙台市教育委員会

# 写 真 図 版





図版1

関ノ入遺跡遠景



関ノ入遺跡近景（住居跡）

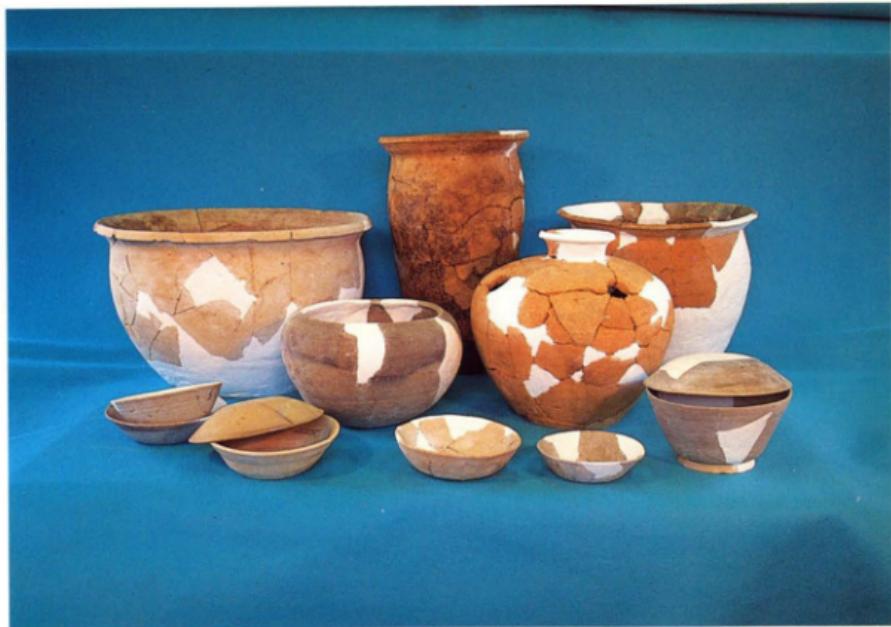


図版 2

関ノ入遺跡近景（住居跡）



関ノ入遺跡（窯跡）



図版 3

第5群土器

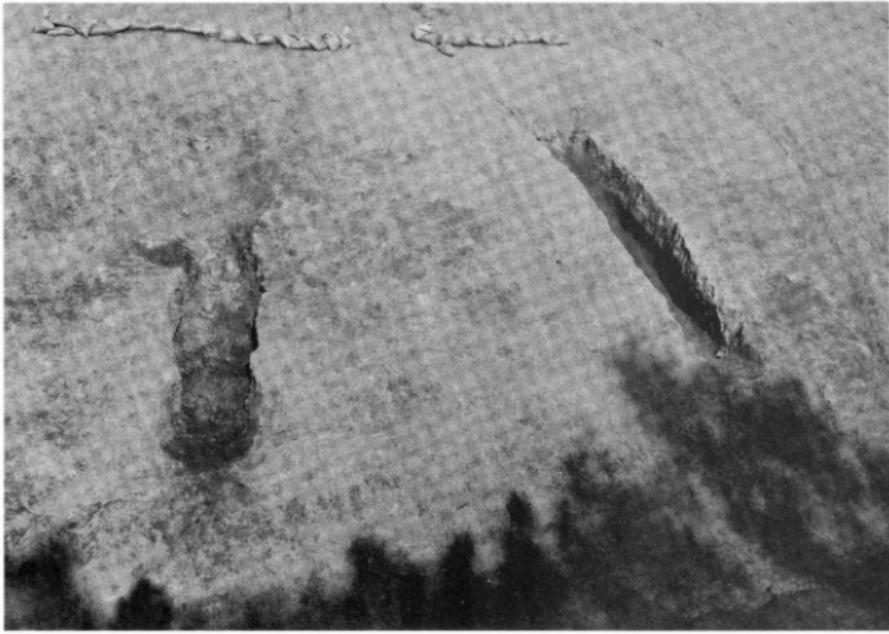


調査区の表土除去

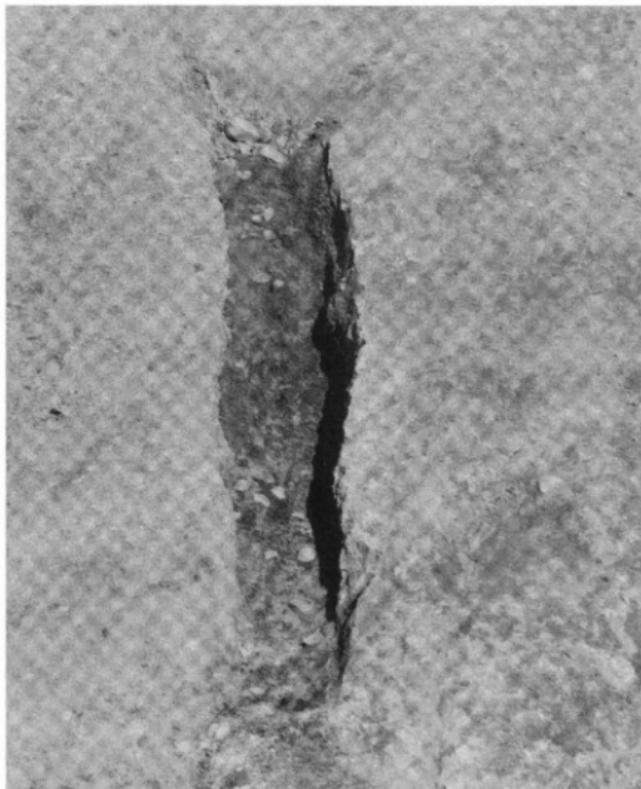


図版4

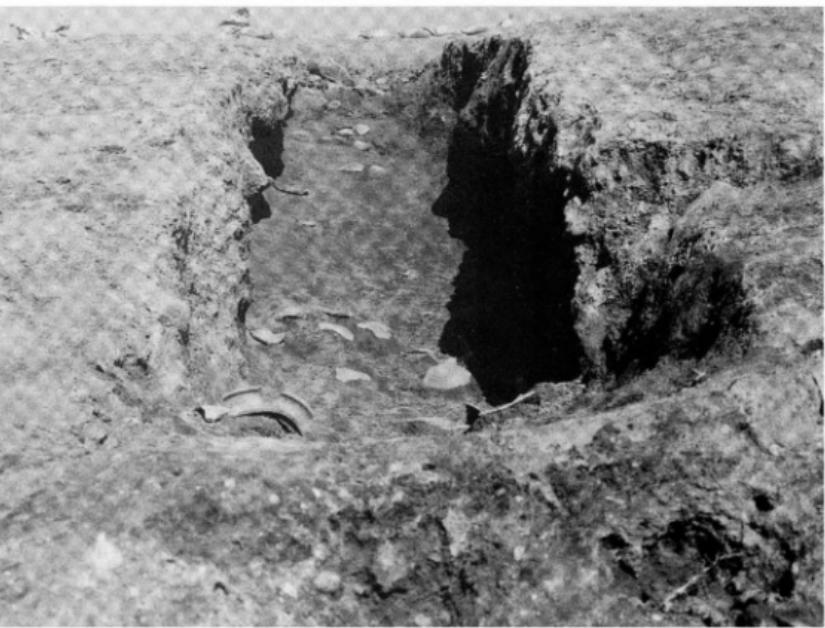
調査区の精査



27号窯跡(右)と28号窯跡(左)



27号窯跡



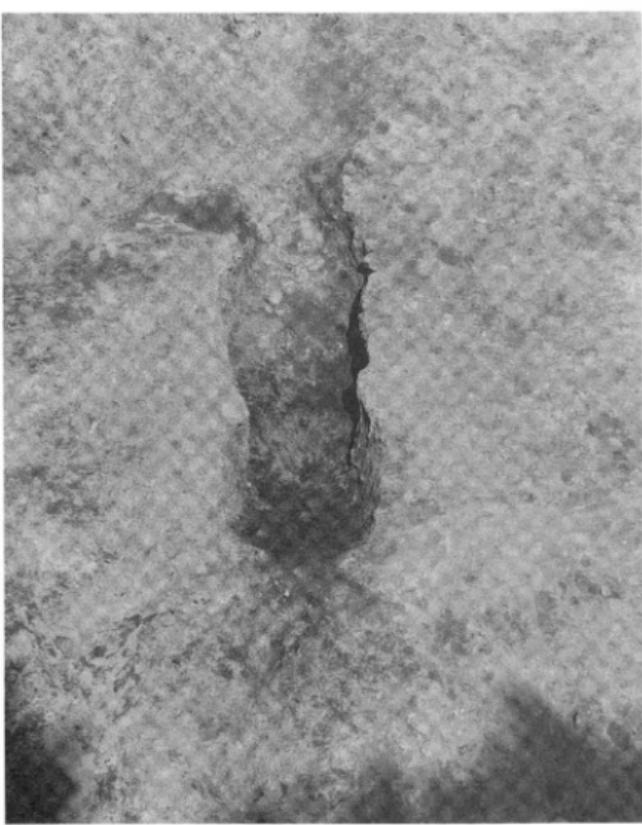
27号窯跡



図版 6

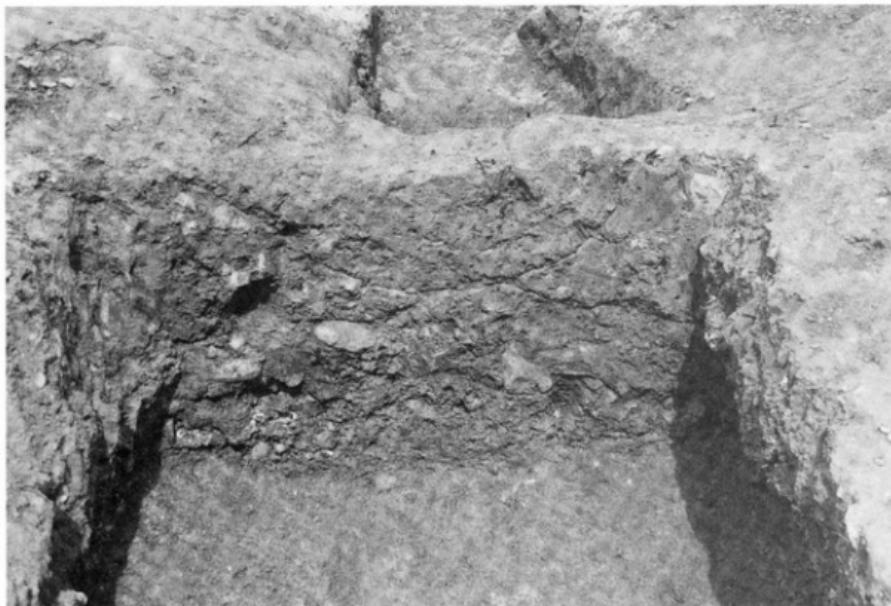
27号窯跡側壁工具痕

28号窯跡

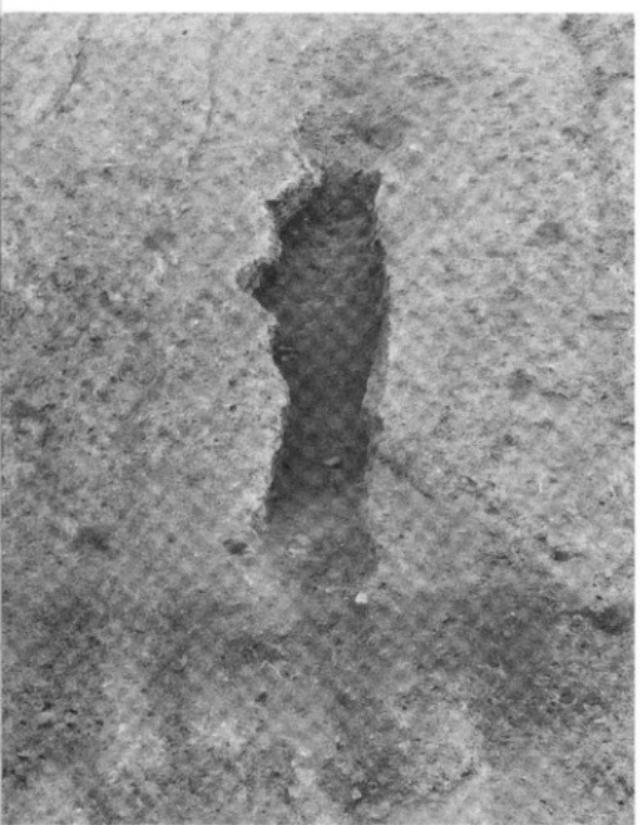


図版 7

28号窯跡堆積土



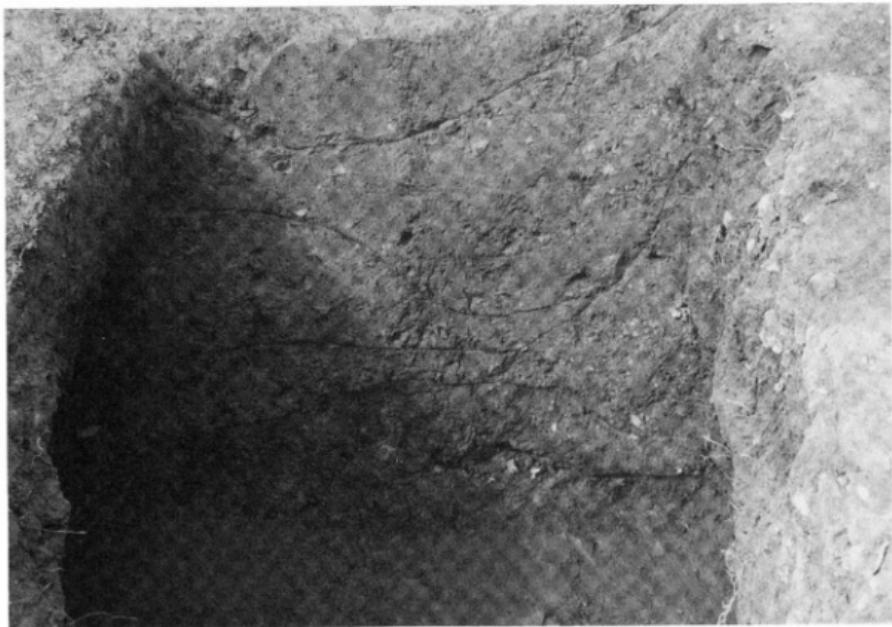
29号窯跡



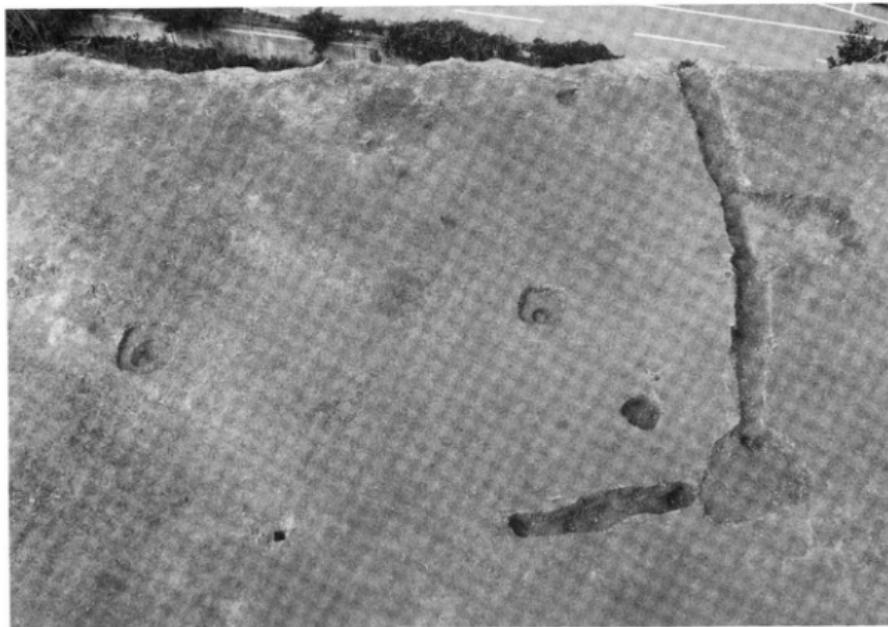
図版 8

29号窯跡



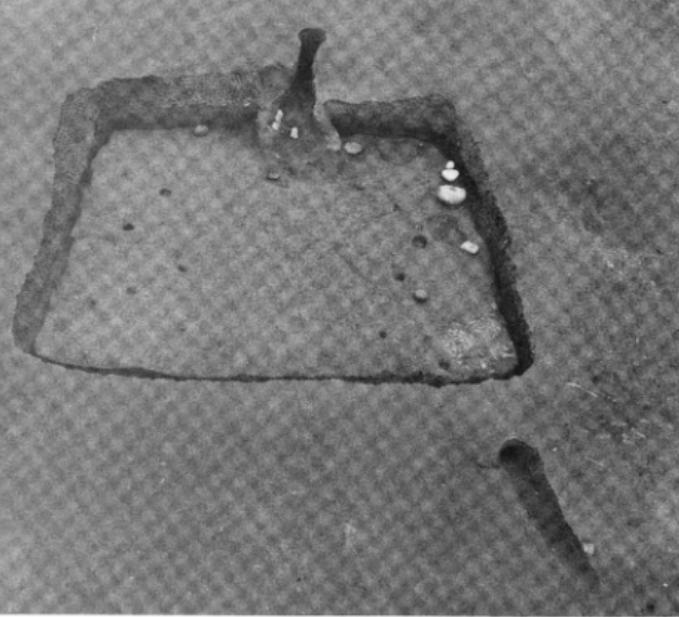


29号窯跡堆積土

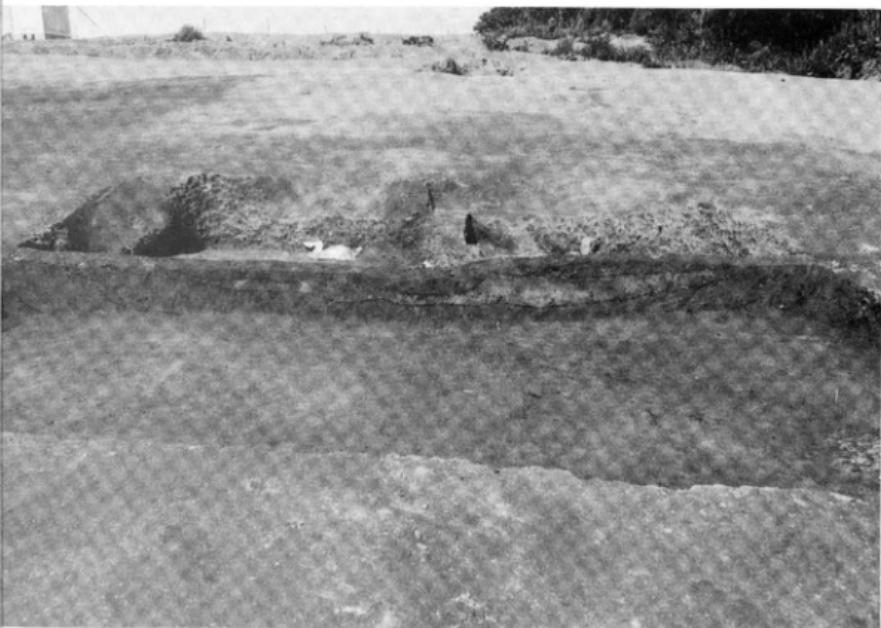


図版 9

37号住居跡

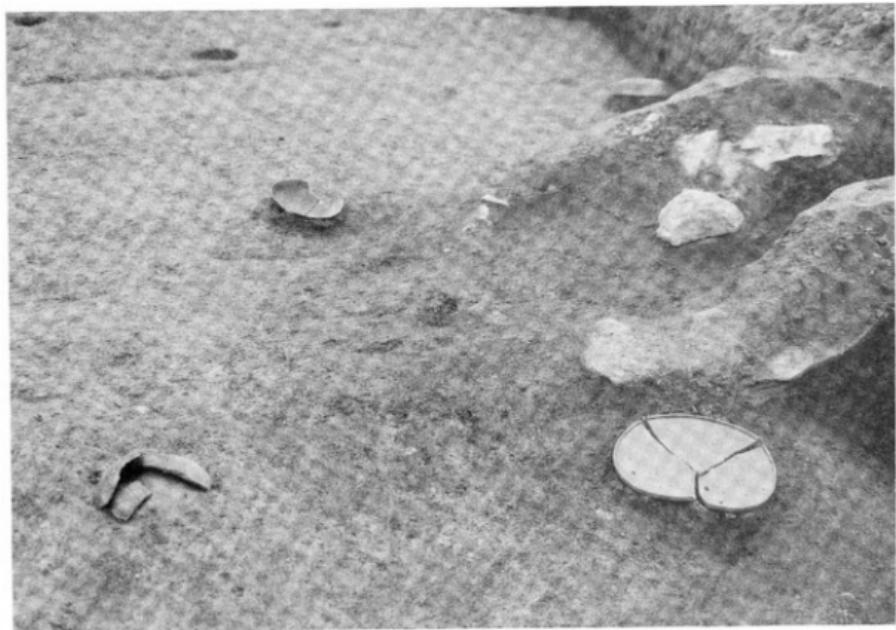


38号住居跡

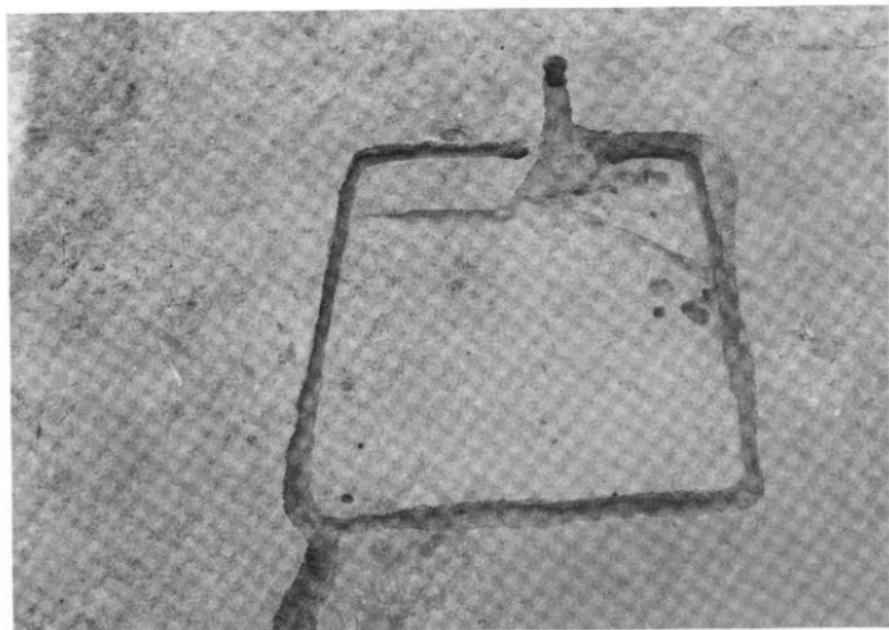


図版10

38号住居跡堆積土



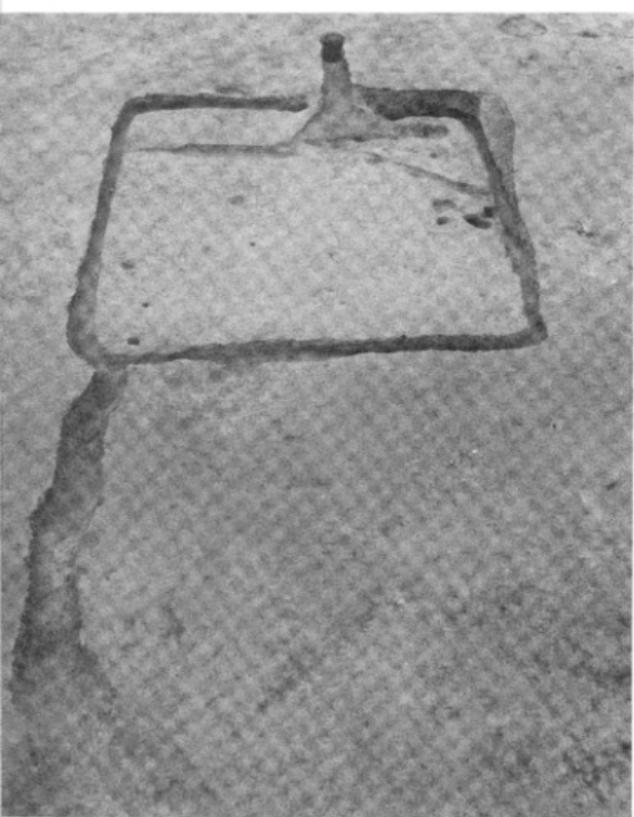
38号住居跡



図版11

39号住居跡

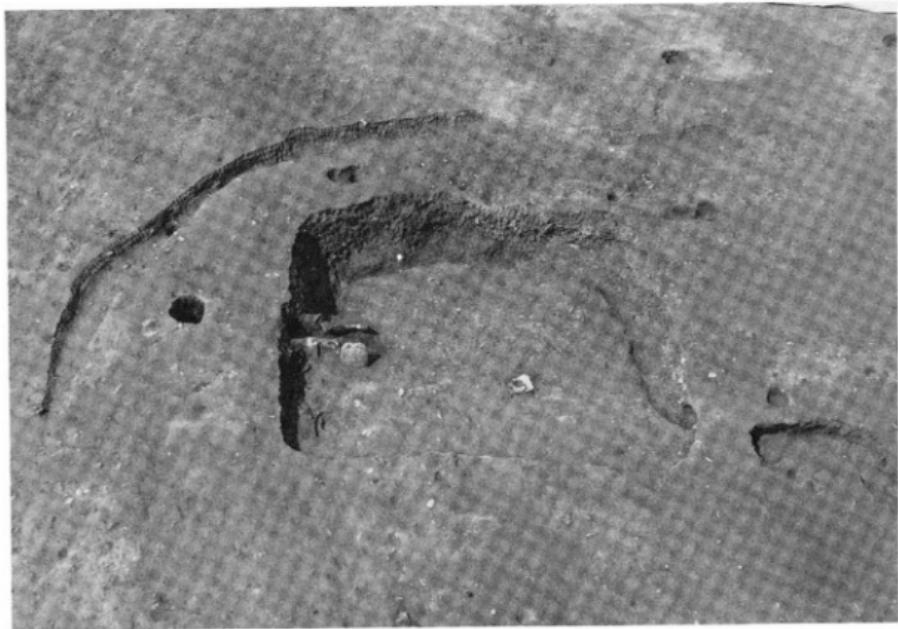
39号住居跡



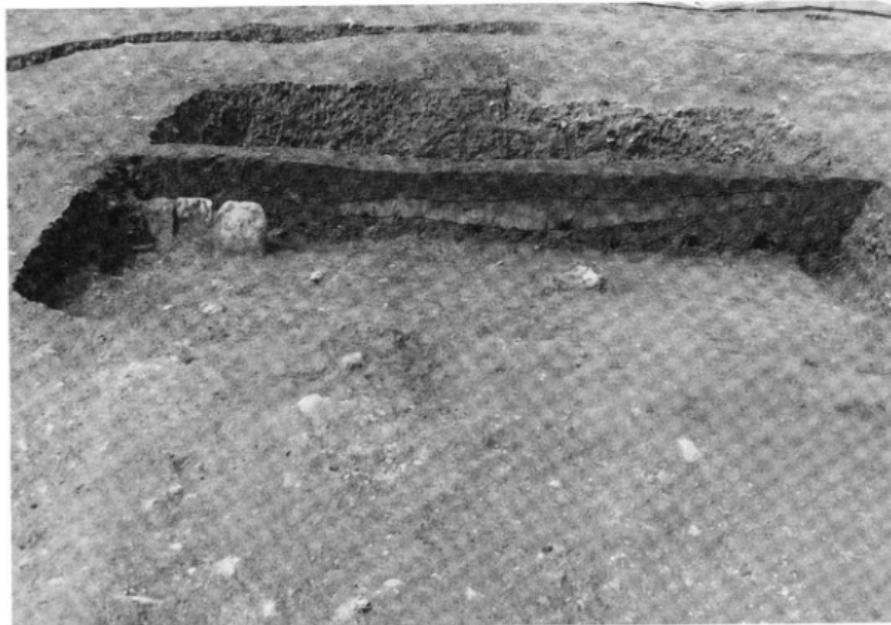
図版12

39号住居跡外延溝堆積土



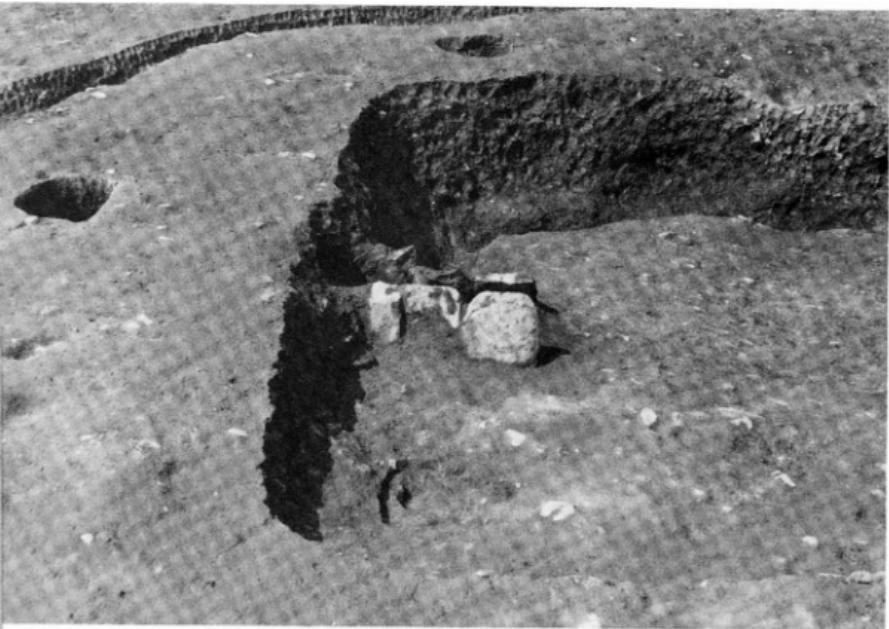


40号住居跡



図版13

40号住居跡堆積土

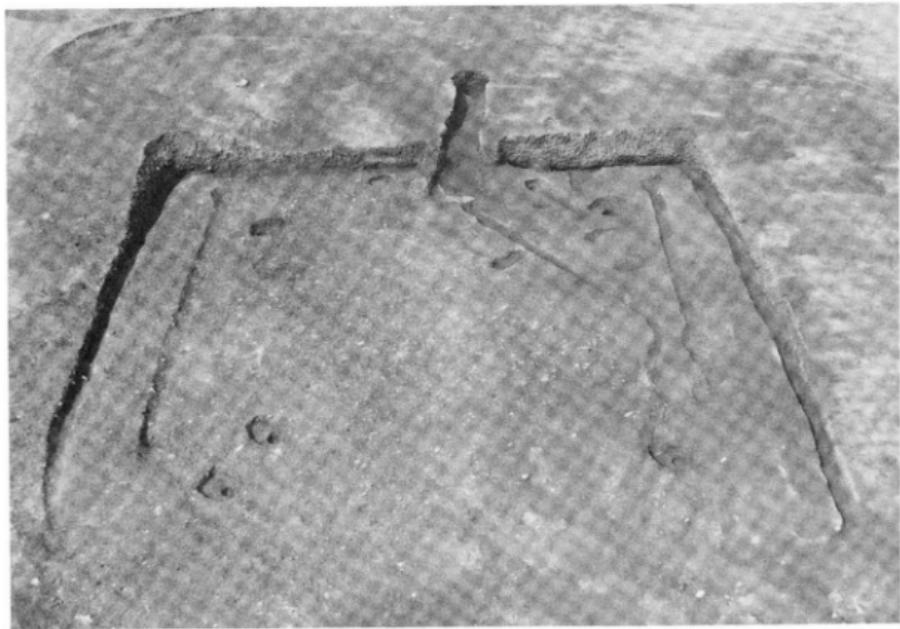


40号住居跡

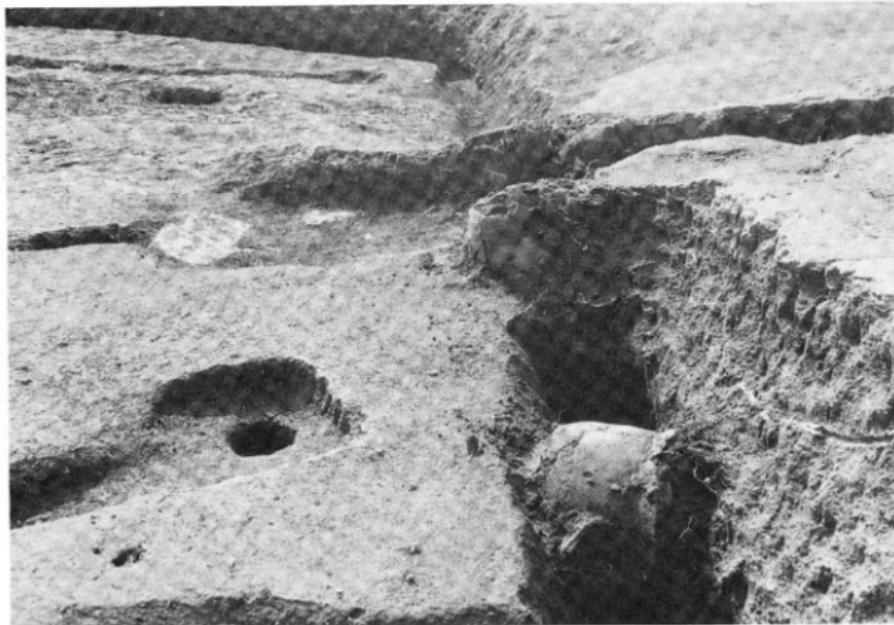


図版14

40号住居跡



41号住居跡

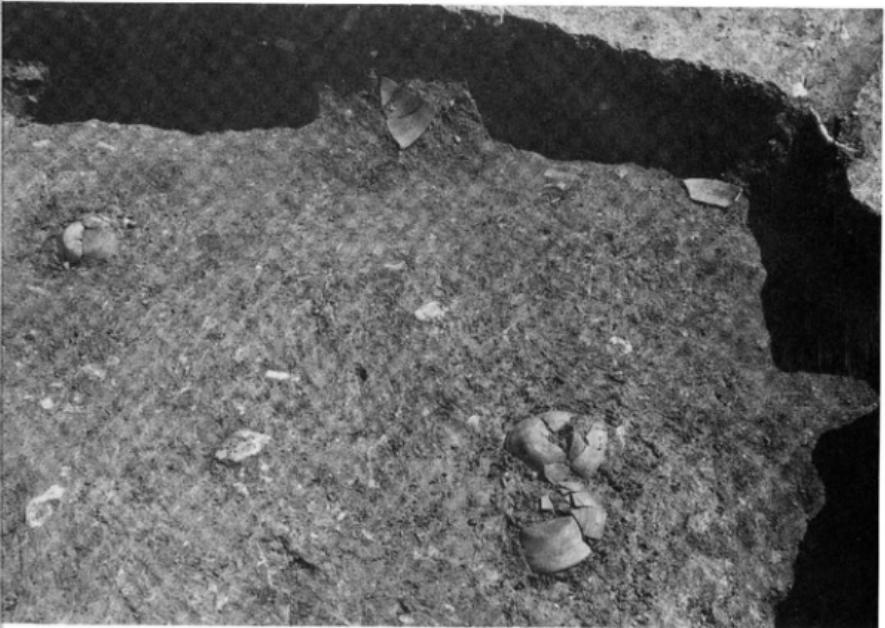


図版15

41号住居跡

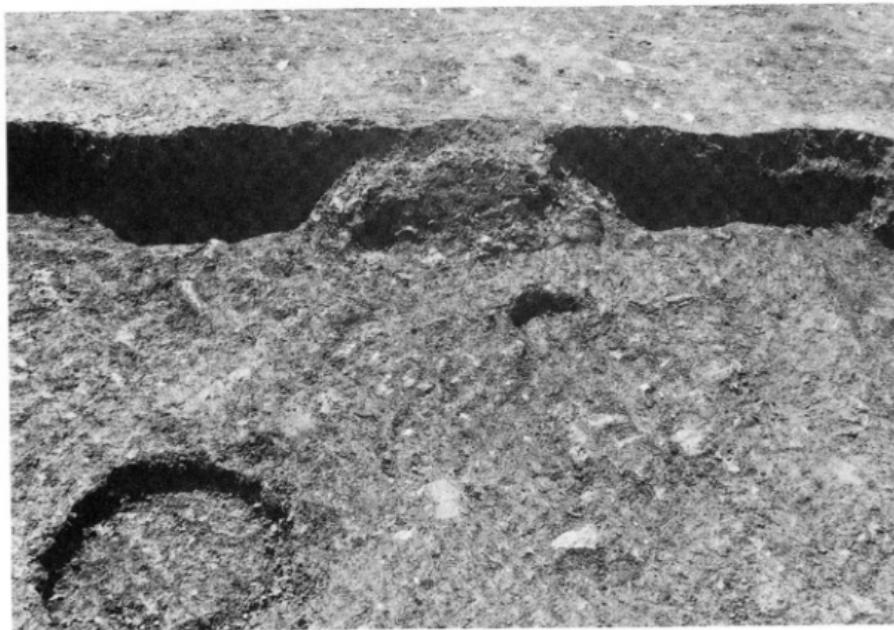


42号住居跡



図版16

42号住居跡

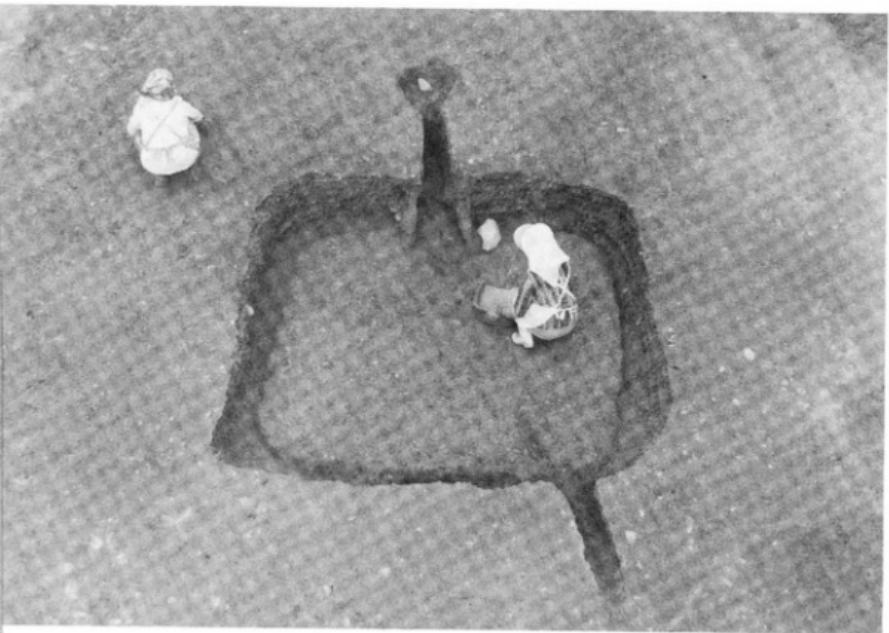


42号住居跡白色粘土

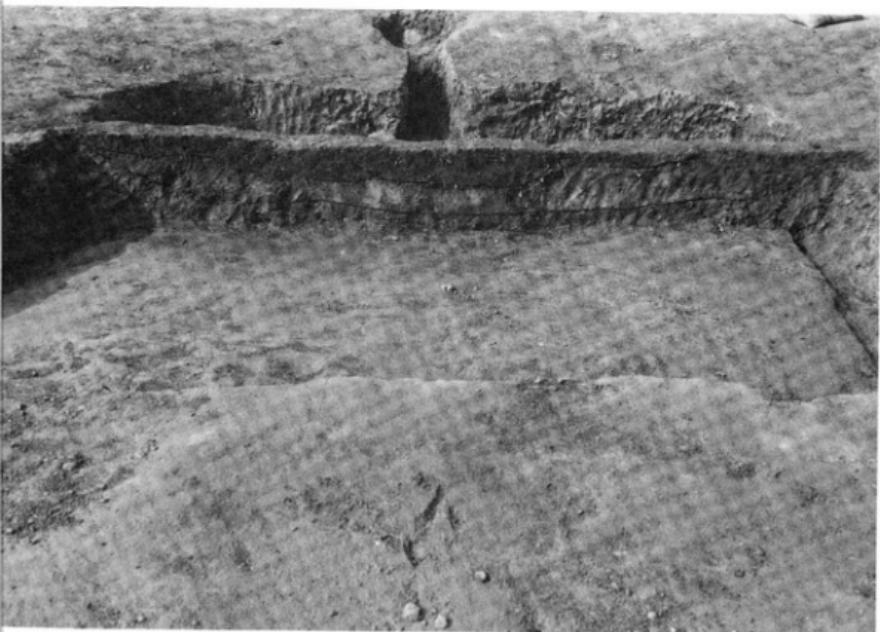


図版17

42号住居跡クロビット

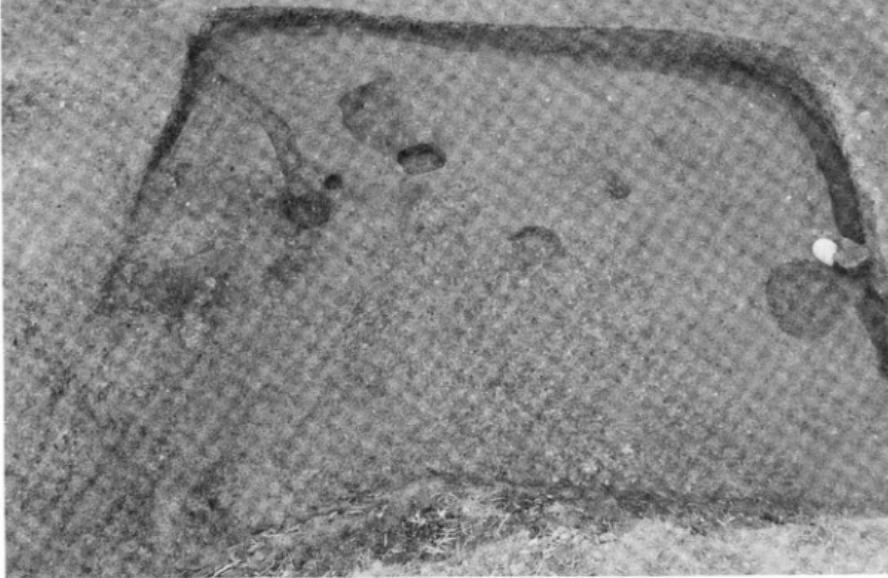


43号住居跡

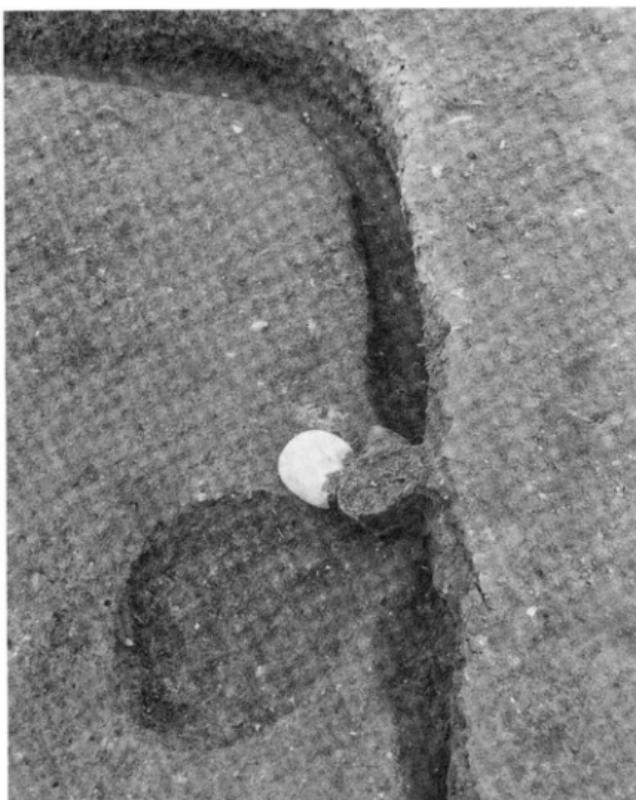


図版18

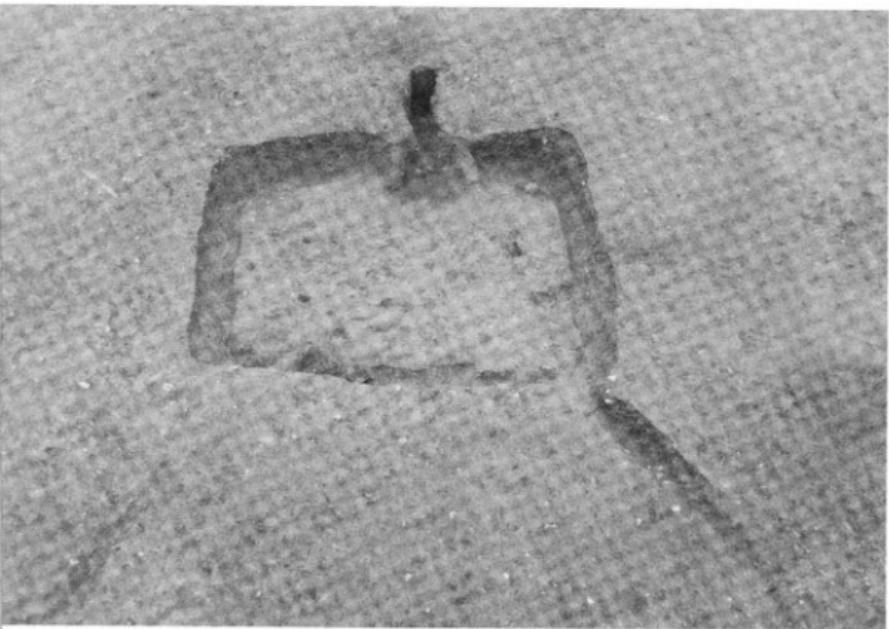
43号住居跡堆積土



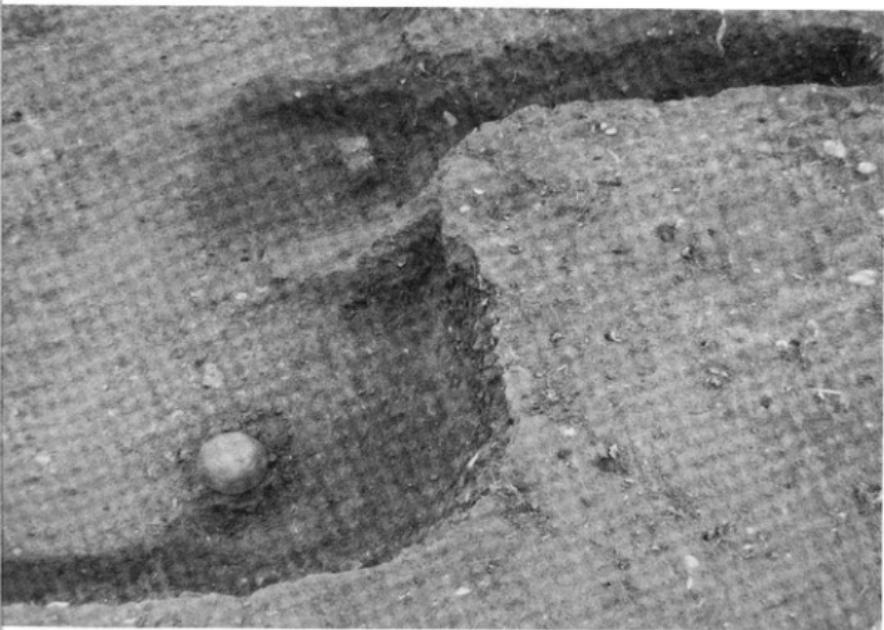
44号住居跡



44号住居跡



45号住居跡



図版20

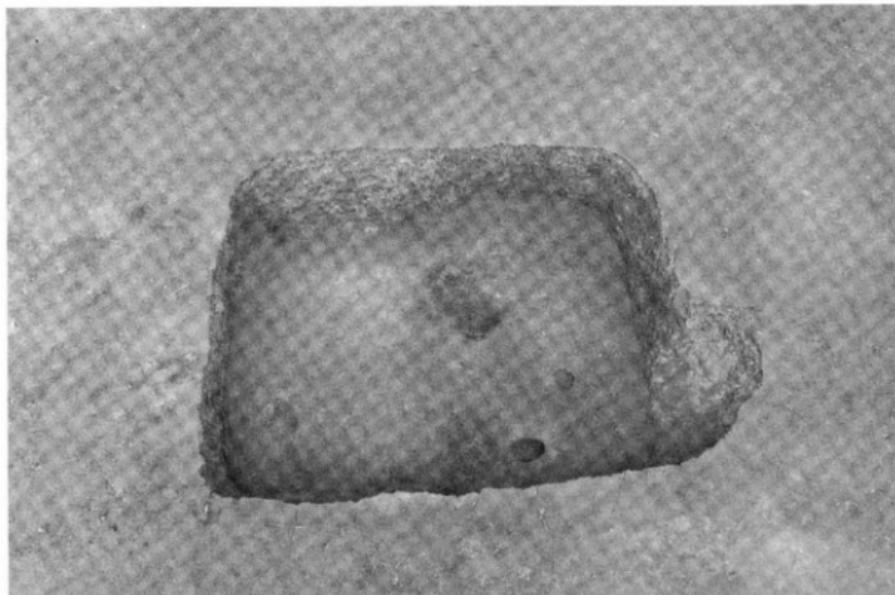
45号住居跡

45号住居跡



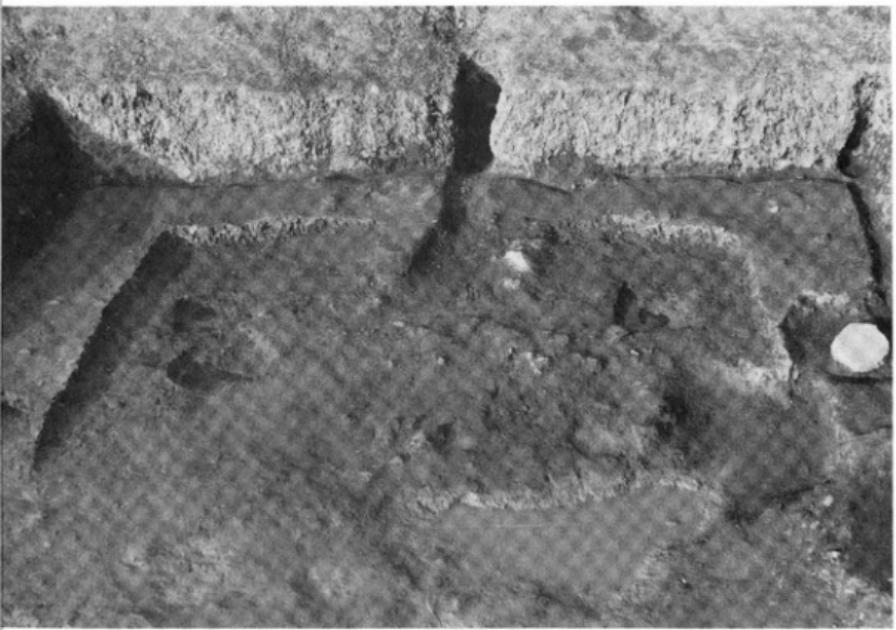
図版21

46号住居跡



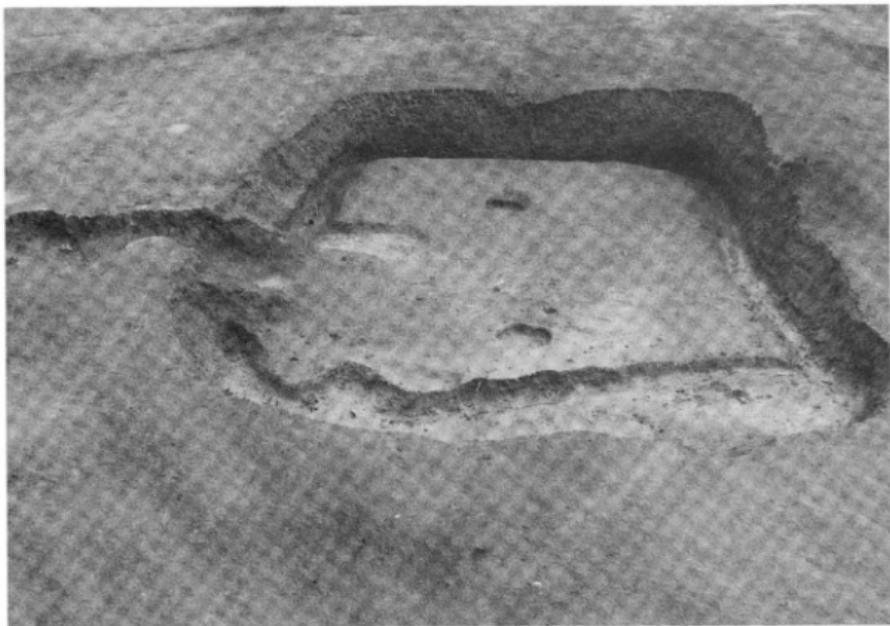


46号住居跡

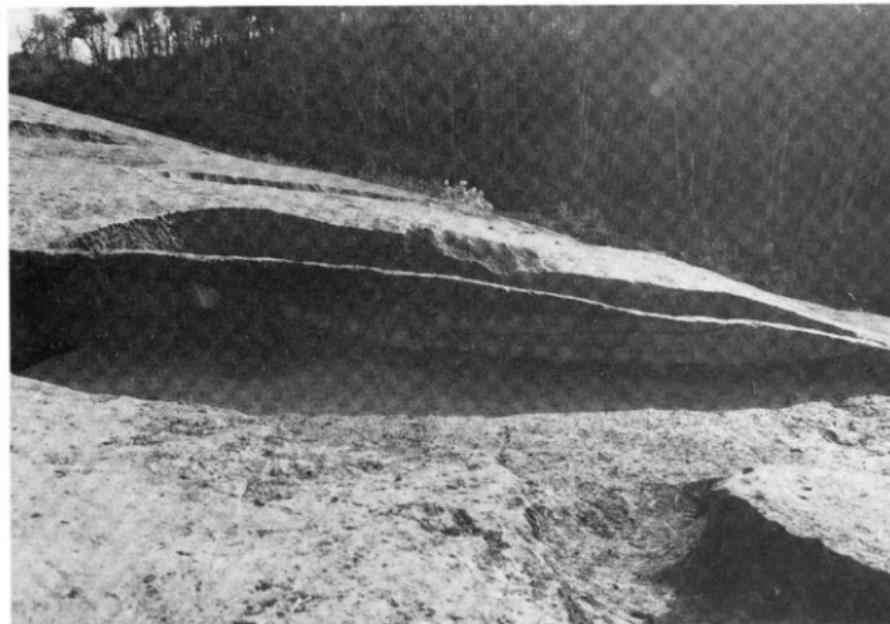


図版22

47号住居跡

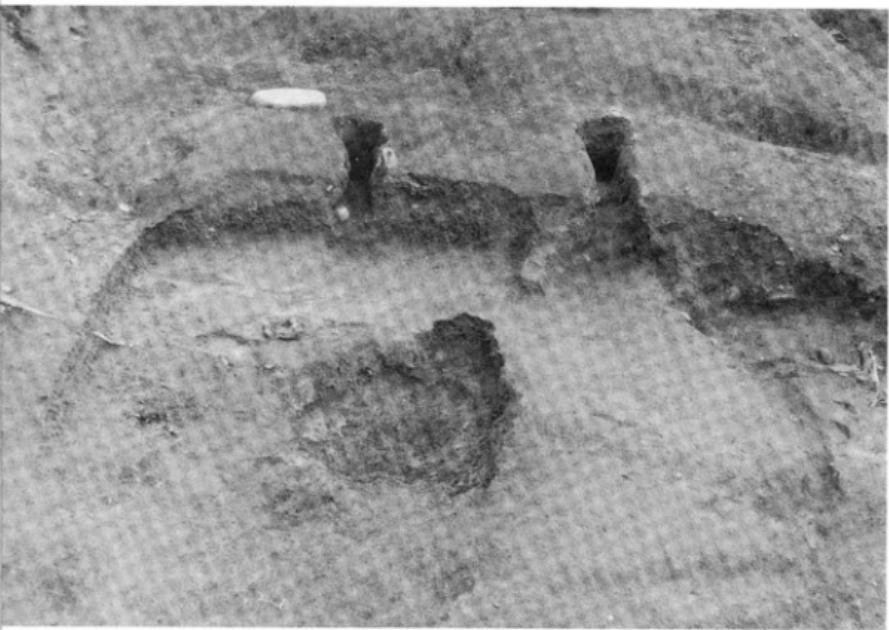


48号住居跡

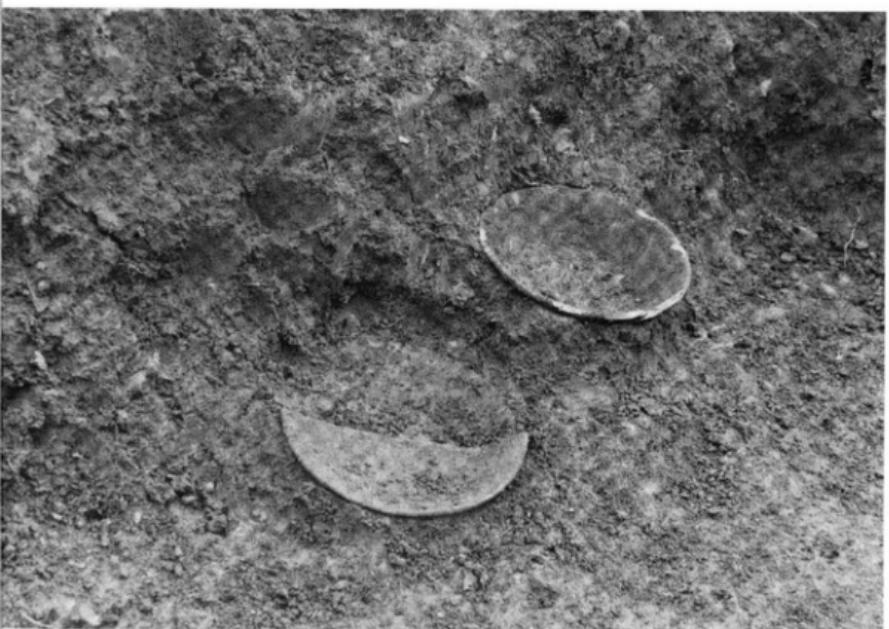


図版23

48号住居跡堆積土

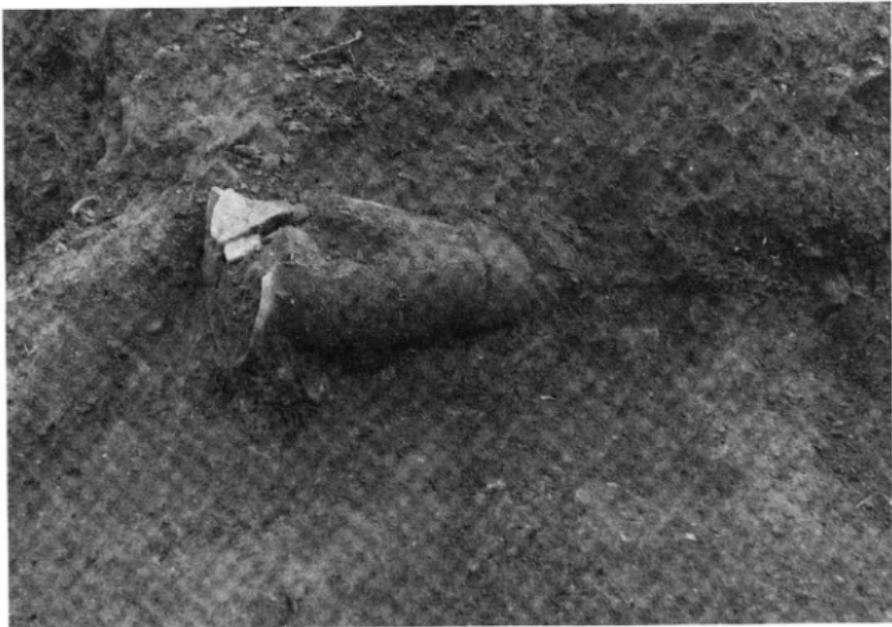


49号住居跡

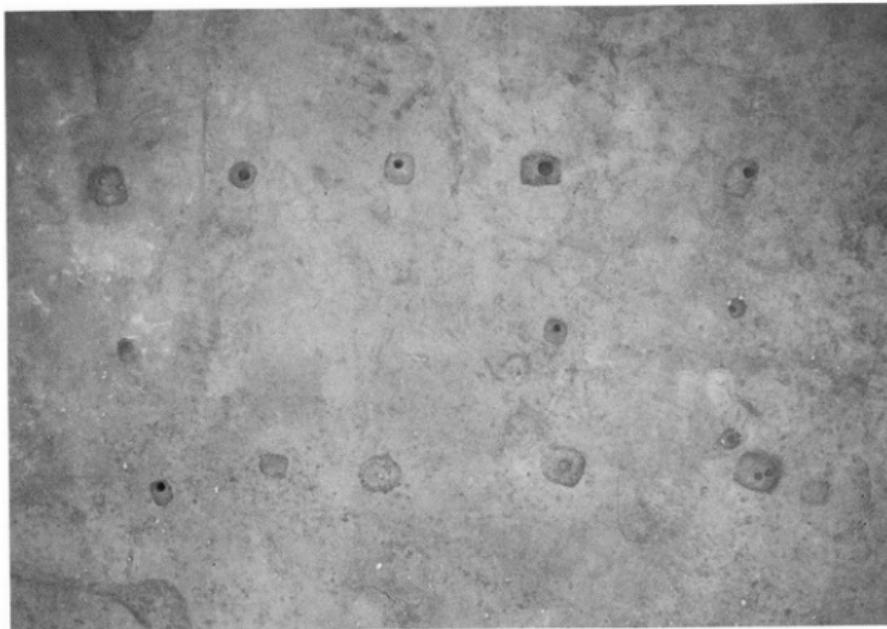


図版24

49号住居跡

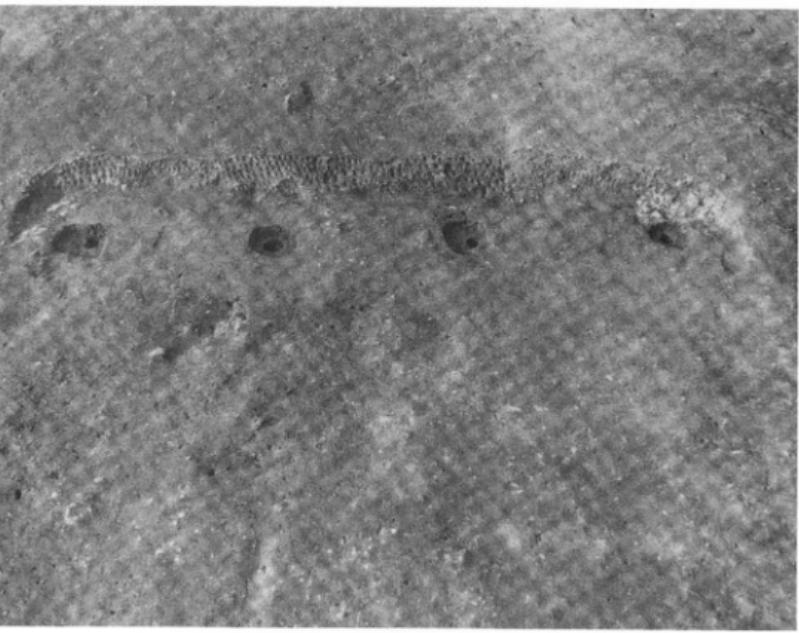


49号住居跡

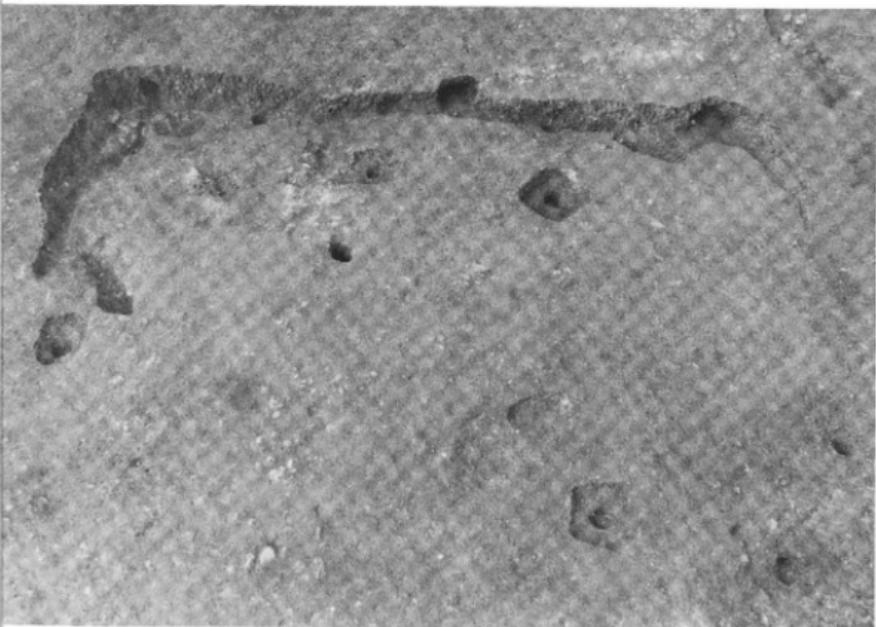


図版25

6号掘立柱建物跡

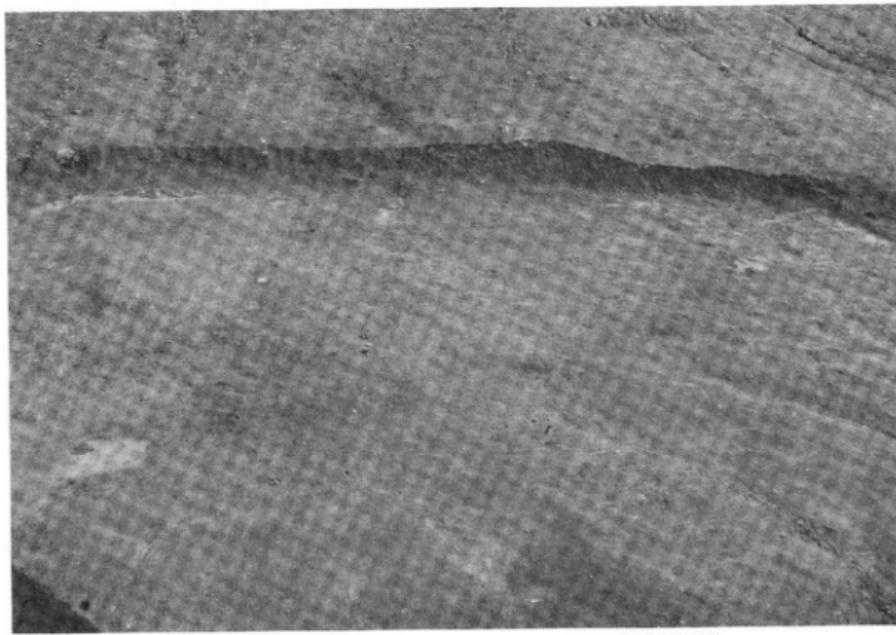


3号竖穴遺構

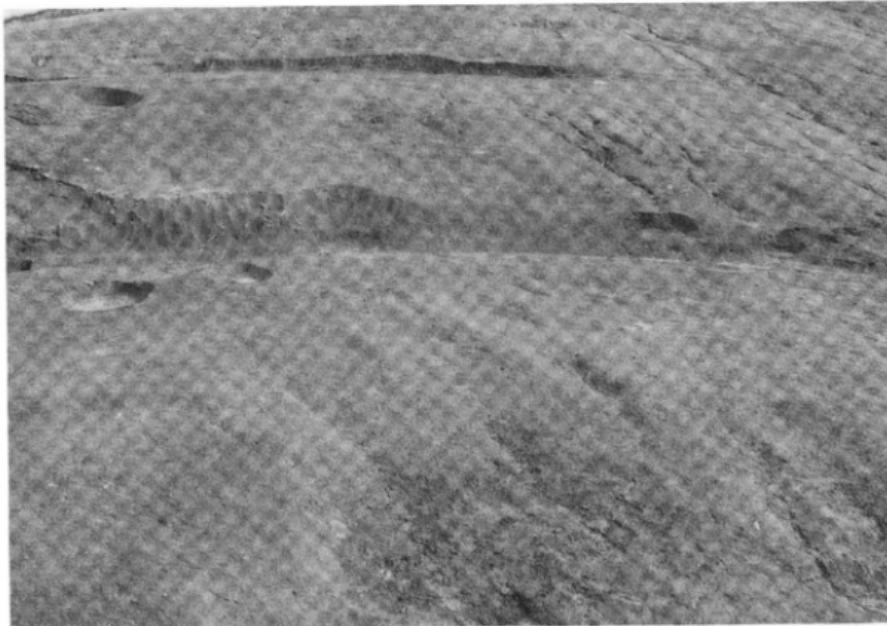


図版26

4号竖穴遺構

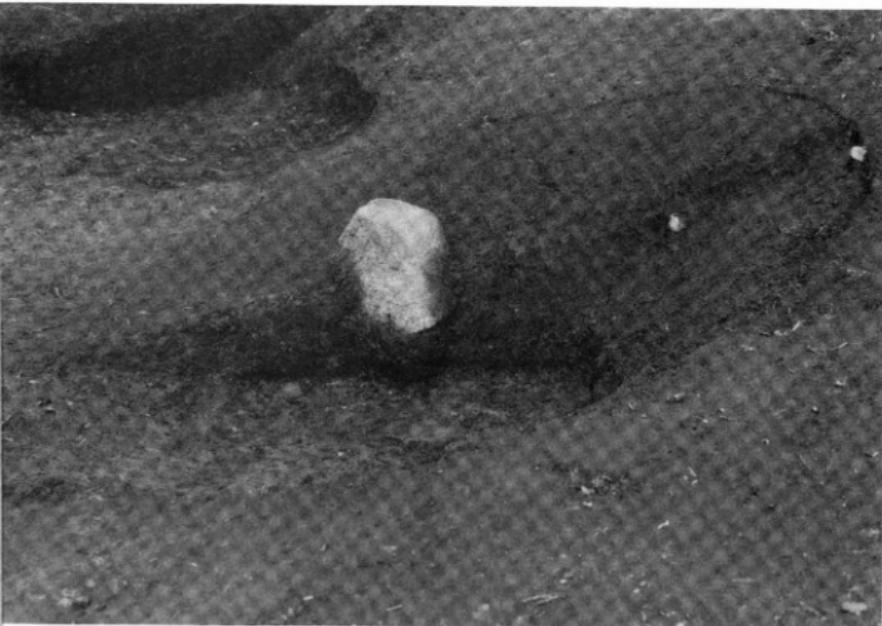


5号竪穴遺構

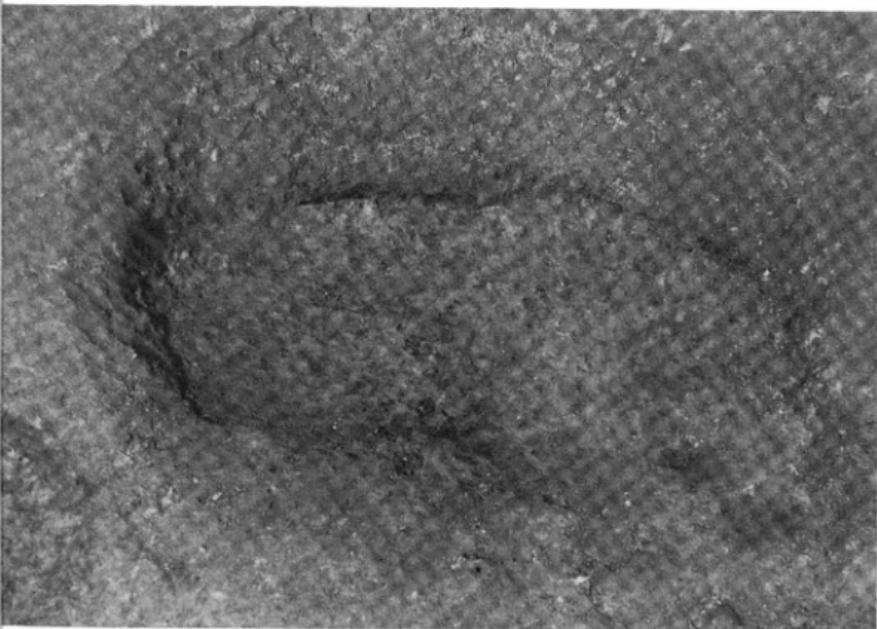


図版27

7号竪穴遺構

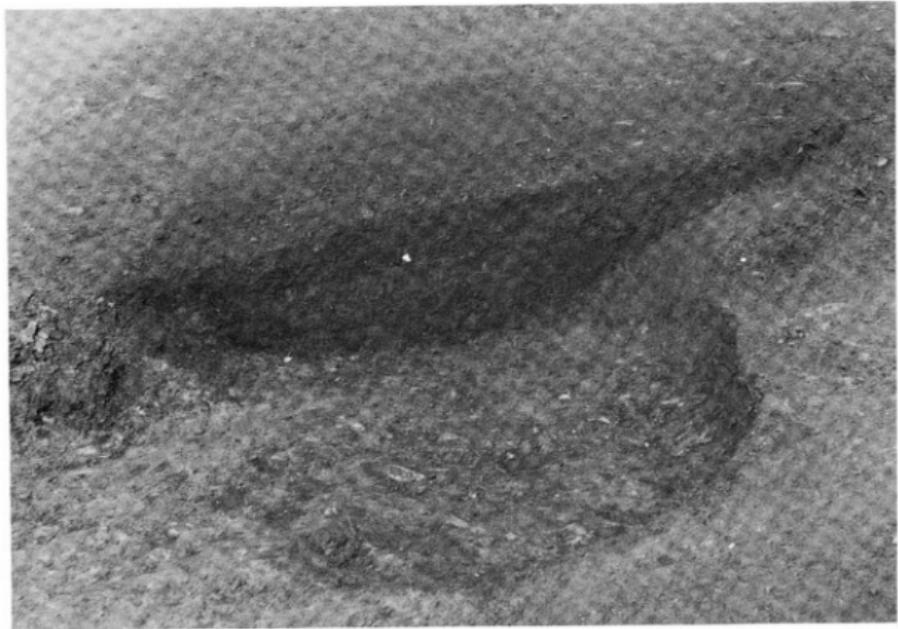


96号焼土遺構堆積土

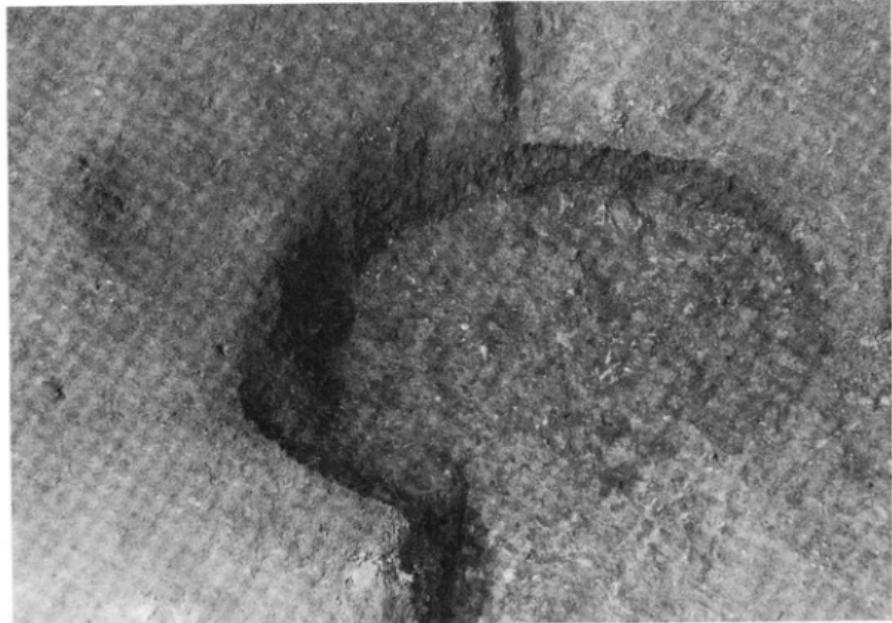


図版28

96号焼土遺構

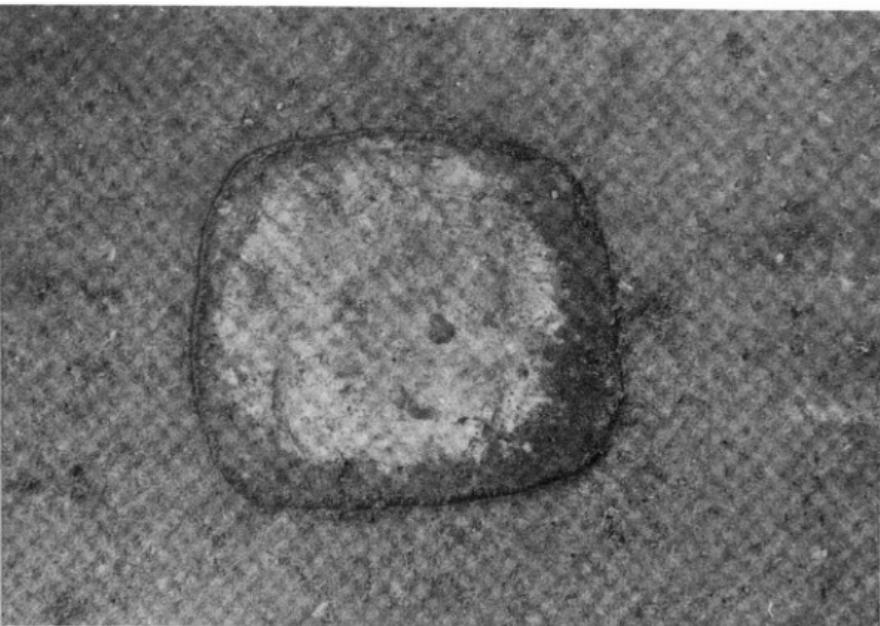


97号焼土遺構堆積土

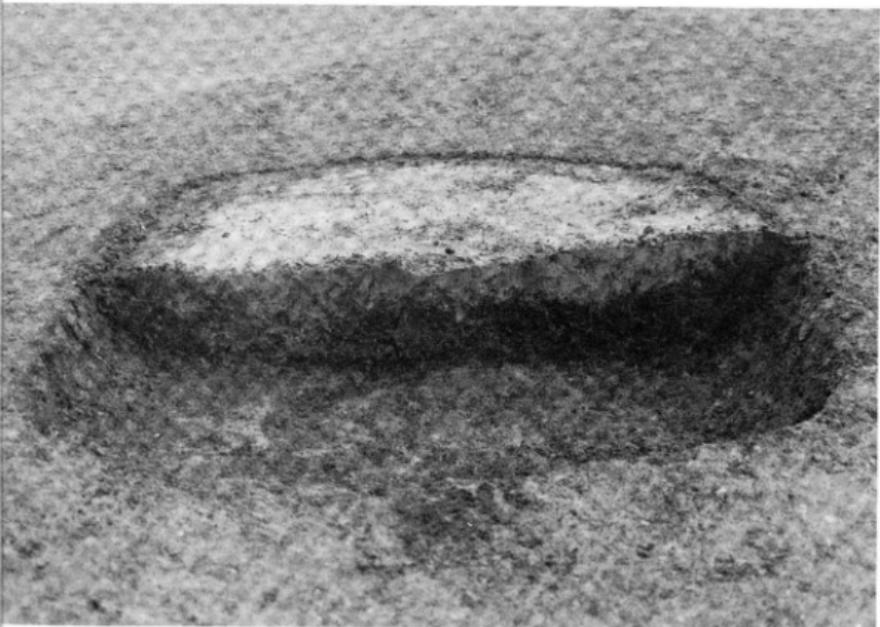


図版29

97号焼土遺構

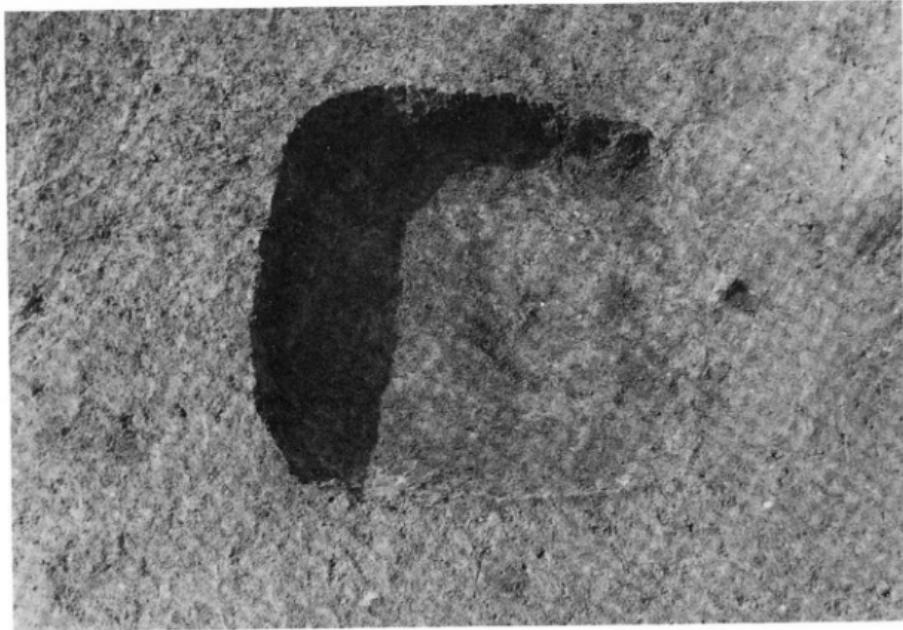


92号焼土遺構確認

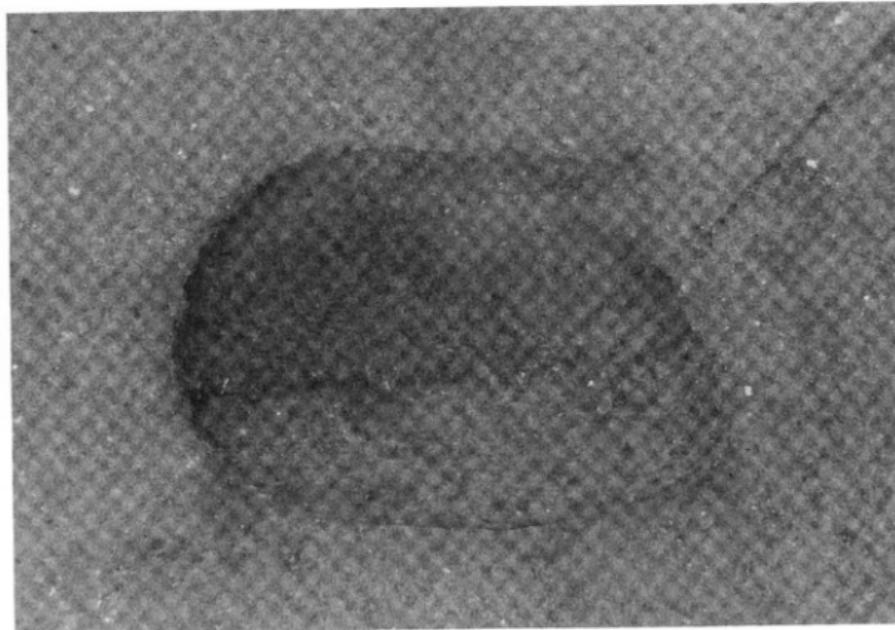


図版30

92号焼土遺構堆積土

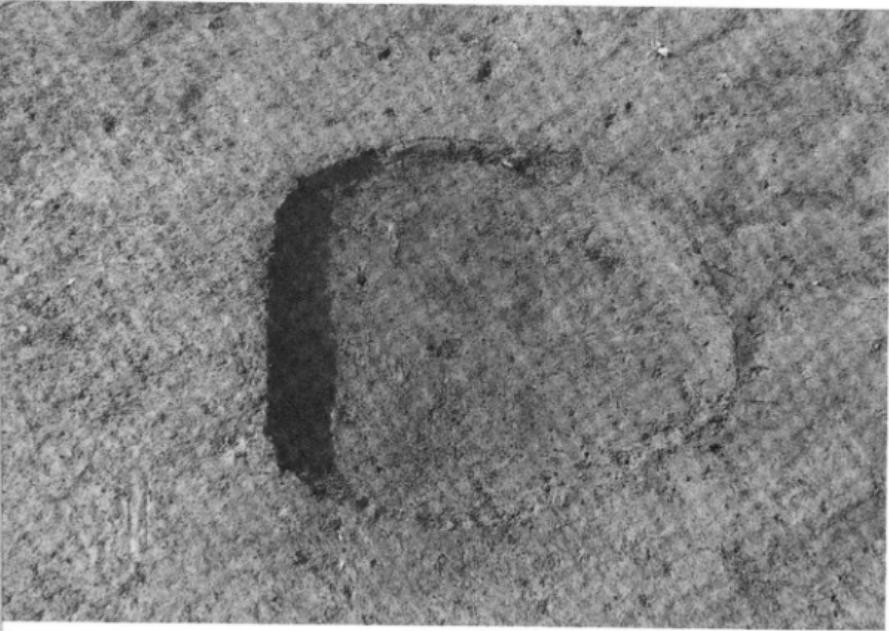


92号焼土遺構

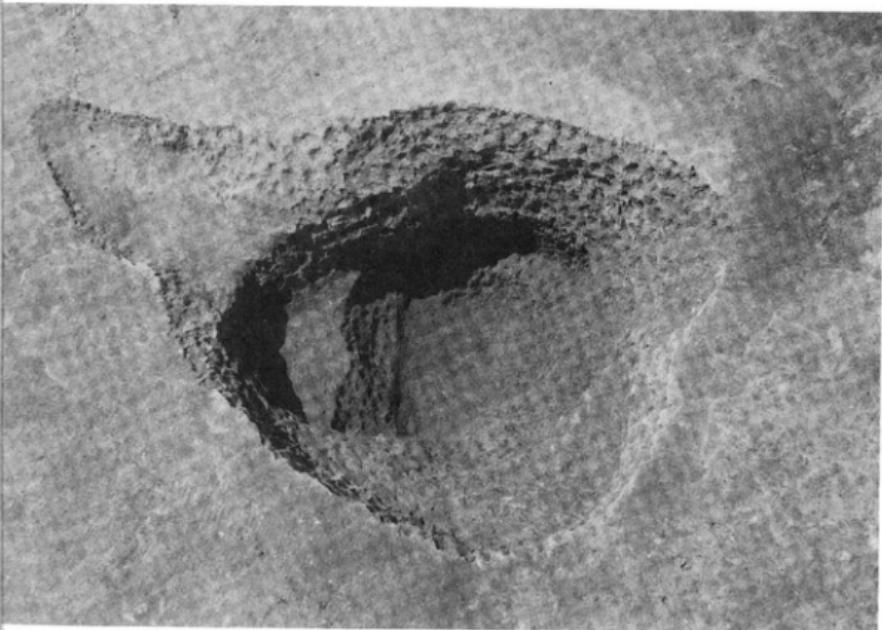


図版31

90号焼土遺構

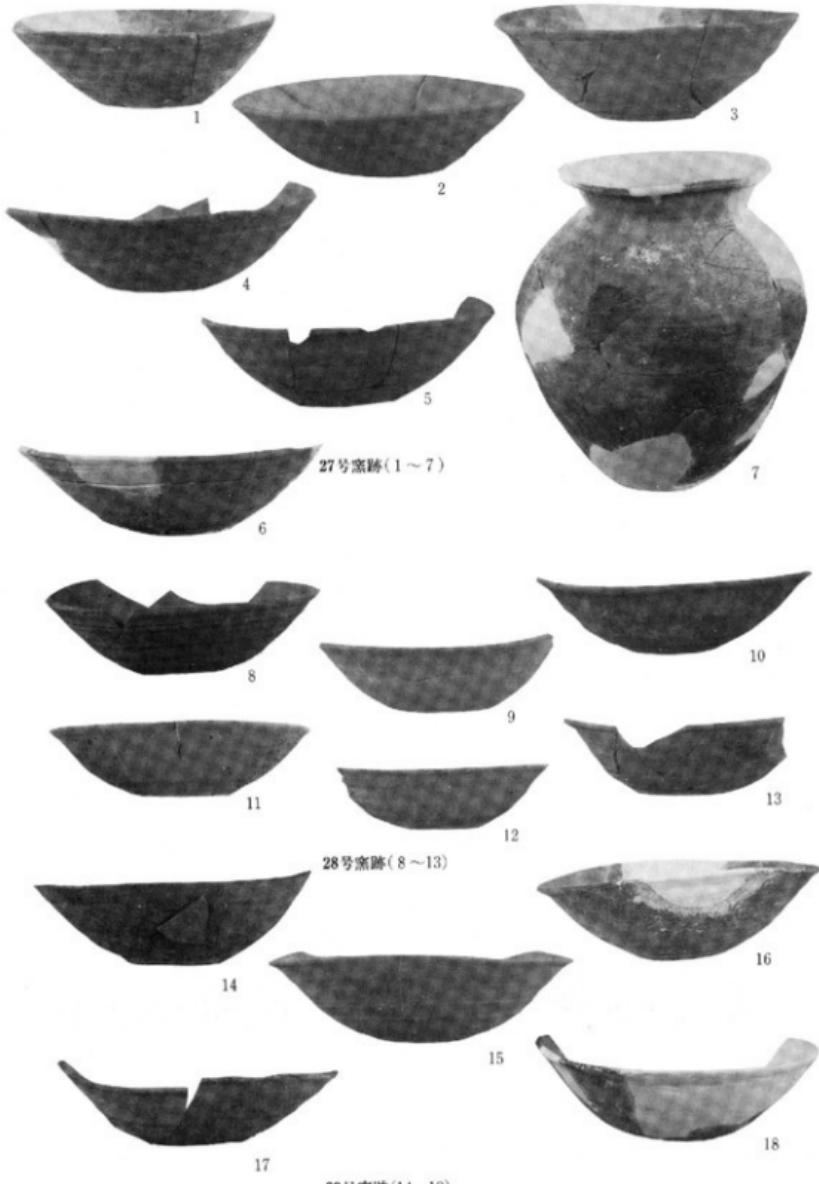


91号焼土遺構



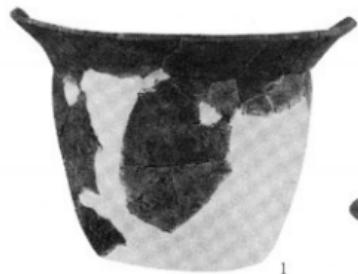
図版32

89号土 壤



窑跡出土遺物

图版33



37号住居跡(1)



2



3



4



5

38号住居跡(2～6)

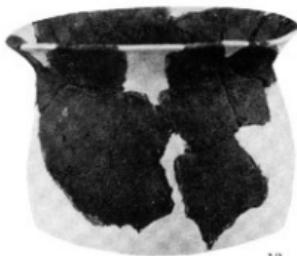
6



7



11



13



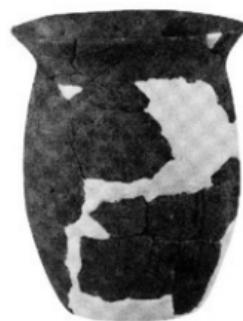
8



12



10

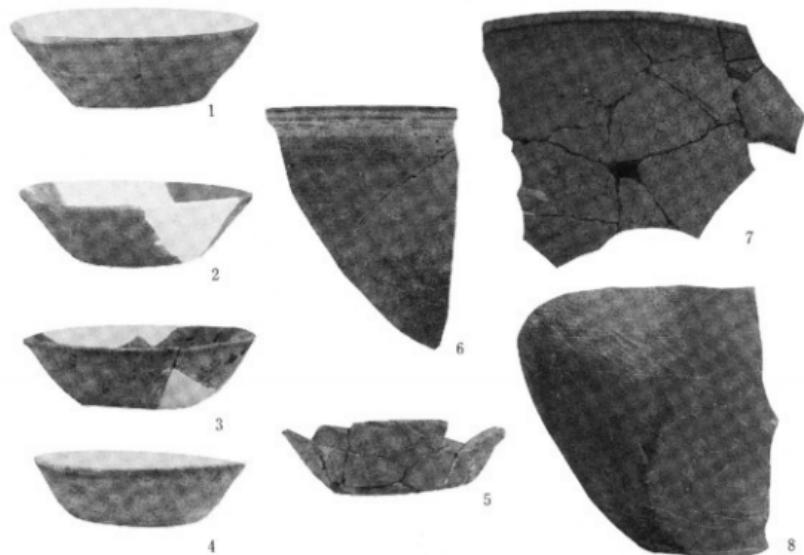


14

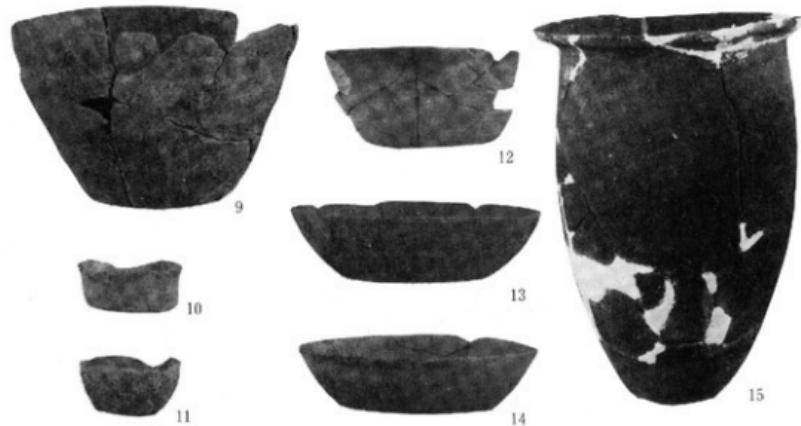
41号住居跡(7～14)

住居跡出土遺物

図版34



42号住居跡(1~8)

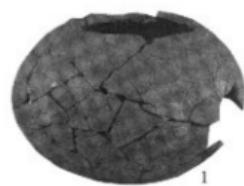


44号住居跡(9~11)

45号住居跡(12~15)

住居跡出土遺物

図版35



1



2



3

47号住居跡(3)

46号住居跡(1～2)



4



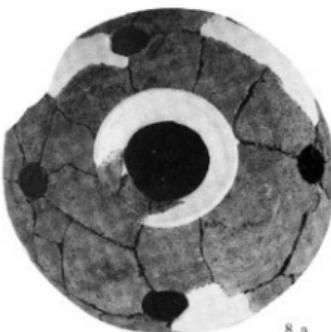
6



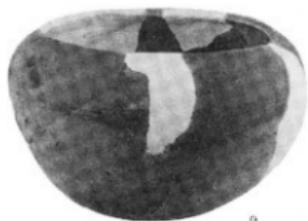
5



7



8 a



9

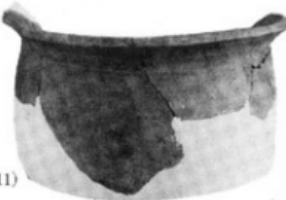


8 b



10

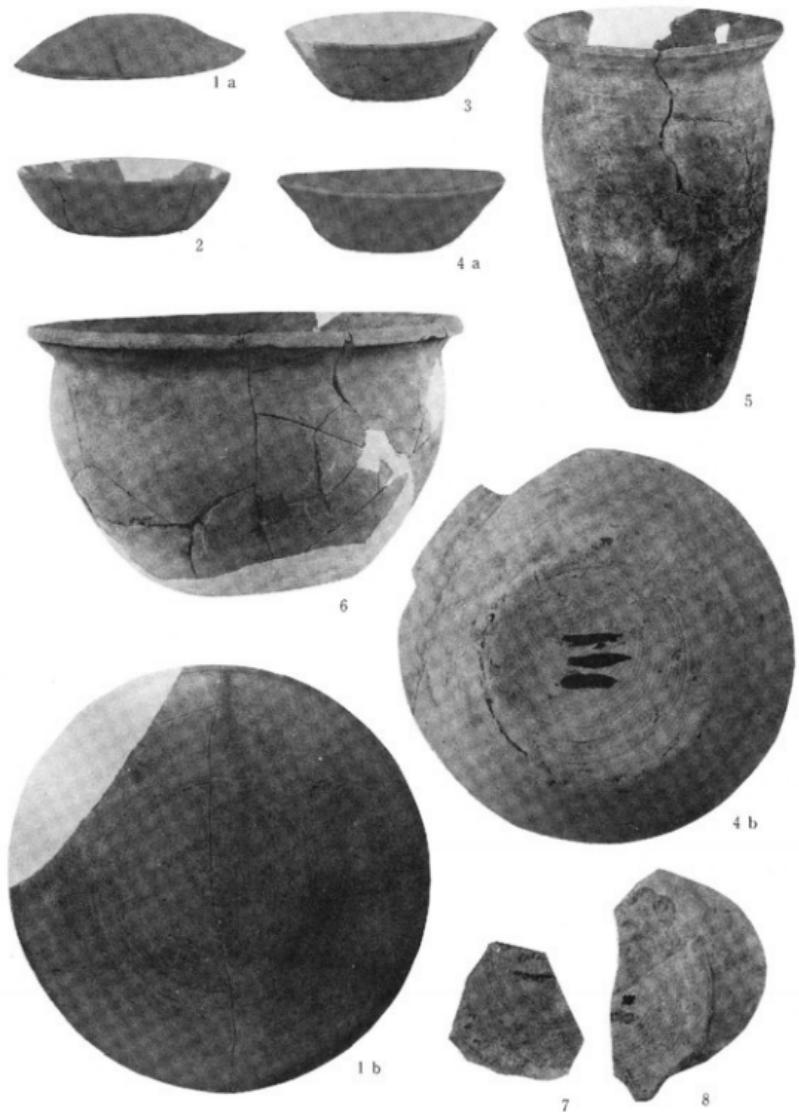
48号住居跡(4～11)



11

住居跡出土遺物

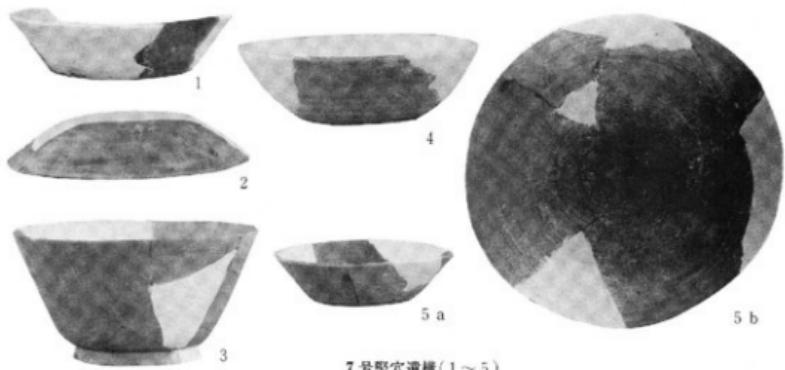
図版36



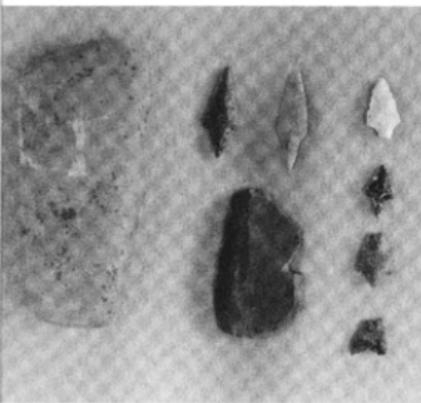
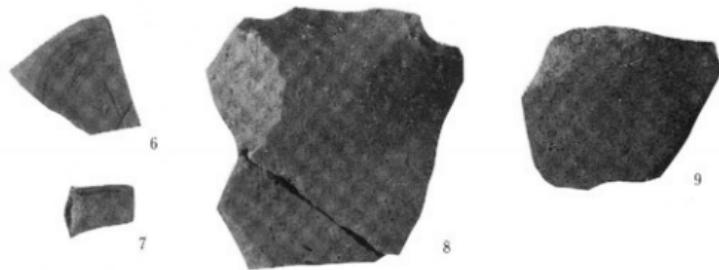
住居跡出土遺物

図版37

49号住居跡(1~8)



7号竪穴遺構(1~5)



竪穴遺構・I層出土遺物

図版38

II層出土遺物(6~10)



現地説明会風景



図版39

調査参加者

## 河南町文化財関係出版物

『おが立ち河南の文化財』昭和61年1月 P.1~201

『河南町文化財調査報告書』第1集「須江跡群遺跡」昭和62年3月 P.1~110

『河南町文化財調査報告書』第2集「須江開ノ入道跡詳細分布調査報告書」昭和63年3月 P.1~27

『河南町文化財調査報告書』第3集「須江開ノ入道跡詳細分布調査II」平成元年3月 P.1~25

『河南町文化財調査報告書』第4集「須江開ノ入道跡...工業用地造成に伴う発掘調査報告」平成2年3月 P.1~67

『河南町文化財調査報告書』第5集「御塙廬跡群一発掘調査報告書』平成3年3月 P.1~21

『河南町文化財調査報告書』第6集「須江窯跡群 代官山遺跡」平成5年3月 P.1~108

『河南町文化財調査報告書』第7集「須江窯跡群 開ノ入道跡」平成5年3月 P.1~230

---

### 河南町文化財調査報告書 第7集

## 須江窯跡群 開ノ入道跡

～薩奥海道地方最大の須恵器生産地～

### 発掘調査報告書

平成5年3月18日 印刷

平成5年3月19日 発刊

発行 河南町教育委員会

〒987-11 宮城県栗原市河南町前谷地字高沢前7

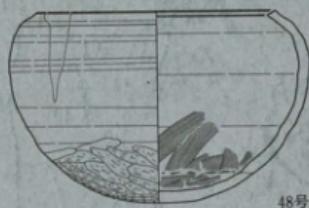
TEL 0225(2)2111

印刷 株式会社 松 弘 堂

〒986 宮城県石巻市門脇字本里閣2番16

TEL 0225(96)555500

---



48号住居跡出土